昭和七年七月十日印刷
昭和七年七月十五日發行

不許複製

國譯一切經 論集部五

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者　渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所　大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十番
振替東京一九四七一番
電話芝（二一一一六番
　　　（三〇四〇番

製本所　　兩角製本所

索　　　引

（頁數は通頁を表す）

—論集部五索引終—

生老病死及び無常は　續々として未だ悉く何ものよりも來らず。

勝軍化世百喩伽他經（終）

破壞は生れて憂愁の實を得、
彼若し眞如の行を修せずんば、
智者恒に此の世間を觀ずるに、
戯言・伎唱皆た實無し。
命を損じ堅からざること幻夢の如し。
但だ是所作の罪に非ずとなす。
世間何んぞ彼の心愚暗にして
懷くところの善惡心中の事
心若し此を思惟する能はざれば
緣に隨つて坐住受用の具
此假りに緣を助けて善利を行ふ。
莊嚴宮殿等を觀ると雖も、
足るを知れば自然に心喜樂し
須らく世上有爲の財を知るべし。
是の如く他世の福を欲求し、
工商農の種子を論議して
應さに知るべし、此事合して然るが如く、
若し善を作し不善を作せば、
並びに是れ自身の業の造る所。
是の如く一切所作の業

智者若し有を求むるも何の利かあらむ。
生死を輪廻して幾時か休まん。
都て幻化を成ずるは愚癡の力なり。
貪欲追求するは疥瘡に喩ふ。
何ぞ佛法の身心を用ゆるが如くならむ。
並びに皆平等に其身を壞す。
解して罪惡の生ずるを思惟せざる。
世の天人を護つて並せて總じて知る。
何れの時にか意地、諸罪を消さん。
稍ゝ身依つて暫時を得べし。
其餘の資具は人の煩惱なり。
唯だ便ち麁惡なる床臥具たり。
醜女を觀るも、天女に勝ぐるゝが如し。
水火盜賊倶に奪ふべし。
此等堅からざる財を求むるなかれ。
法則に依らずんば行ずるを須ゆる勿れ。
福を離れて自然に成就せず。
應に是れ別餘の人にあらずと知るべし。
是れに由つて衆生は一切を得る。
若し能く後有あるも復た生ぜず。

寂靜の野林は適悅するに堪へたり。
山に居て他の門戸を見ず、
彼の心中所得の利に住し、
我今汝等を敎化し已つて
一切の法藏は眞に安樂なり。
汝、善は一人身に報ゆるを知る。
得し後愚癡にして福を作さずんば
水は地上に滴りて久しく住すべからず。
三種の無礙は誰れか能く作さん。
是の如く彼れ若し其の力に隨はゞ
喩へば野鴿の自身を觀ずるが如し。
無常の生死誰の人か愛さん。
此の身住すと雖も終に久しきなし。
是の如く[二六]焰魔人盡く見る。
老死は安樂の處を侵すなし。
無常の情物應さに皆定まるべし。
前路憑るなく、光影速かなり。
父母妻子朋友等
正法の親眷此れ依るに堪たり。
多く求むれば生れて煩惱の寶を得、

何んぞ聚落の人を要求するを須たん。
自在にして快樂行に拘るなし。
根識を降伏して命長しへに生く。
合掌して心意を調柔して聽け。
須らく樂を忻んで一心に求むべし。
若し要するも剎那にして得べからず。
依つて前んで自[二五]賺し自ら沈倫す。
人の生命の堅からざるに喩ふべし。
若し是れ知者ならば方に能く行はん。
作意の三種少しく分知す。
孔雀の莊嚴は我れに勝るゝにあらず。
智慧何ぞ曾つて五根を觀ん。
彼の虛生は世間に在りと說く。
衆生、苦を受け幾人か逃れん。
云何ぞ汝等能く行ぜざる。
唯だ務めて生を貪つて並びに知らず。
何に緣つて兀々思惟せざる。
和合せるも虛幻暫時の間なり。
能く無常生死の苦を去る。
身を護れば生れて怖畏の寶を得。

【二五】賺、だます、すかす、詐り買はしむ、重ねて價を支拂はしむ。

【二六】焰魔(yama)、前出。

不淨何れの處にてか馨香あらむ。
憎愛の人何ぞ德あらむ。
快樂何れの人か知足を解せん。
婬女は[二三]囂浮にして厚信なく、
富貴漸く榮えて誰れか久しきを得ん。
婆羅門は食を得て歡喜し、
善人は他を救護して歡喜し、
愚迷は愛樂して鬪諍を行ひ、
賢人は彼れの善言詞を聞くこと
有德の人は德に是親しみ、
賤使の人は賤に是れ苦しむ。
何ぞ巡門を憚つて鉢を持つて化せん。
終に身は我見に著せず、
底心愛なく、人我なし。
是の富豪及び尊貴とに住し、
妄りに諸の快樂に緣るを棄捨せよ。
活命の性は鵝鴨の
王城聚落に人居止す。
悲は清淨機嫌の耻を羞ぢ、
連山雜澗巖穴の窟に

惡人何れの處にてか恩義あらん。
寃家何れの處にてか善人あらむ。
壽命何れの人か久長を得ん。
癡人は愚鈍にして分別無し。
業因決定すれば破壞し難し。
[二四]孔雀は雷聲を聞いて歡喜す。
愚迷は破壞する時歡喜す。
貧の寶を得て心歡喜する如し。
蜂の彼の花香の氣を聞くが如し。
有過の人は過を是れ寃(うら)む。
知足の人は足るを是れ樂しむ。
豈に力役を辭して他方に在らん。
恒に心行を調へて善く柔和なり。
鹿の家なくして野林に住するが如し。
應に少事も他求に向ふなかるべし。
都て繫礙なければ自由にして閑たり。
長く清淨水中に於て行ずるに同じ。
八德多く一二存するなし。
法を無我快樂の力を知る。
菓を食し皮衣にて五根を伏す。

【二三】囂浮、前出。

【二四】孔雀（mayūra）が雷鳴を聞いて歡喜して鳴くことは、多くの印度文獻に現れてゐる。

知り難き理上、知る所あり。
一心細意眞行を修し、
我慢の惡人は闘諍を興し、
愚癡の心内に顚倒を懐く。
此の豪强の諸過失を以て
出家勝道を心に重ずるなく、
師教に未だ曾つて供養を申さず、
天邊の圓月は終に須しく缺くべし。
人世の無常は何ぞ此に異ならん。
女人の本性は終に實なし。
〔二〕阿末羅菓は其核あり。
法師を尊重して聖跡に參じ、
是の如き五種の世間の事
若しも人あり、法を知つて恒に善を行へば、
喩へば砂内に眞金を揀るが如し。
愚劣なるは同じく行いて自由ならず。
設ひ復た出家するも必ず麤惡ならば。
何を以つて朋友を信ぜざるや。
何を以つて方便を行ぜざるや。
慳人何れの處にてか布施を解せん。

是の婆羅門の莊嚴を說く
過失は恒時に受行せず、
是の如き色德は我有するに非らず。
慈忍全くして凶猛の多きなく、
執つて自德は他人に勝れたりとなす。
善友を全然敬親せず。
唯だ闘諍大愚癡に親しむ。
山下の花は芳かなるも久しからずして凋む。
須らく人我何の爲めを擬するかを諍ふべし。
障礙の人は善業の因を修す。
此は是れ世間三種の過なり。
心行じ足るを知つて悲智を懐ふ。
若し作し難しと言ふも亦作し易し。
復た能く善朋友を尋訪すれば、
一切有情皆な知つて重ず。
自然に德なければ知りて重ずるなし。
〔三〕縱然たる活命は善名なし。
何を以て天人を知らざるや。
何を以つて自ら學び難しと作すや。
流砂何れの處にてか水あらむ。

【二】阿末羅菓（Āmra）、菴婆羅、菴羅と書く。果の名。小さい時は青く、就すれば黄となり、桃に似、その味美味であるといふ。

【三】縱然、ほしいまゝなる貌。

愛塵に向つて染住するが如きは、
修行して勤苦を憚る勿れ。
意に是れ善言・眞利益にして、
一切の事行多く明了なり。
若し是れを合せ行ずれば彼れも行ずべし。
若し人前程の事を修作せば、
後時を決定して過咎なし。
若し善業を修して増長せしむれば、
寃家に煩惱の病あるが如し。
惡口兩舌は心下劣にして
豈に孔雀の色は嚴德なるを知りて、
愚癡は正解なきを呵責して
我れ說く、人有り此の行を行じ
自在の法音同じく歌ひ樂み、
汝等有情若し棄背すれば、
利を爲して利に非らず都て悟らず。
是の如く冥然として了別なく、
賢善と愚癡とを分たずんば、
並びに勝劣なく一般に看るは
自聖を言はず愚癡ならず、

何れの時にか出離して菩提を得ん。
彼れ後ち還つて安樂の身を招かん。
服行すること妙良藥に喩ふべし。
過失・危亡盡く知るべし。
善事云何ぞ蓋覆あらん。
先づ邪亂を除いて正思惟せよ。
自然安隱にして苦み生ぜず。
一心寂靜にして[一八]浮囂を離る。
自然に除捨して愚癡を絕つ。
愚人意を縱にして情に任して行ず。
狼狗烏鵲の噪に喩ふべけんや。
精進戒施の門を讃揚す。
福を集め身を安じ、而して最上なり。
心に忻樂なくして更に何にか憑らむ。
是れ[一九]傍生となり、是れ人とならん。
是れ實と無實と倶に知らず。
人形を具すと雖も畜生に同じ。
豈に[二〇]野干と師子とを辯ぜんや。
智者暫時も共に住する勿れ。
兩舌を作さず我慢ならず、

【一八】浮囂。囂は、かまびすし。わづらはし。さわがし。

【一九】傍生(tiryag-yoni)、又畜生といふ。五道又は六道の一。

【二〇】野干、梵語(śṛgāla)の譯。豺(ぬくて)の一種。

假使法を知るも法を知らざるも
禁戒を堅持して清淨ならしめ、
法の如く善業を熏修して圓かならば、
持戒の法利安樂を獲るも
德命は刹那にして卽ち便ち滅す。
彼れ或は飲酒すれば愚劣を彰はす。
忽然として地に倒るは無常に喩ふ
然りと雖も親眷同じく歡飲し、
是の如き過失は刹那の間にして
罪を得ること多く婬欲の行による。
一切の欲情は善益なし。
若し自の妻を樂んで適悅を求め、
他の妻妾に於て妄りに追求すれば、
血肉筋髓皮膚の蓋
自身の妻子は猶ほ非分の如し。
若し人、志を潔ふして婬欲なくんば、
是の故に女人を遠離し、
女人は實に適悅となすべし。
親眷共同して愛戀を生ずるも
愚人一向に貪愛を増し、
若し善逝を求むれば須しく戒を持すべし。
恒に須しく善知識に親近すべし。
一切の功德皆集聚す。
若し意愚迷ならば毀傷あり。
智者何に緣つてか酒を飲まん。
究竟して無善の名にあらずとなす。
〔一七〕染汚身に盈ちて不淨を成す。
醉了して相違ふて便ち命を害す。
是の酒毒毒藥に勝るを說く。
直ちに命を捨てゝ倘ほ心を牽くが如し。
何ぞ癡迷を用ひて女人を慕らんや。
常に貪愛に由つて宜しきに合すべし。
當に孤單心は怖畏を感ずべし。
內外都て不淨の身に來り
他人の婦女豈に合せて貪らんや。
此の和合は幻夢の如きを知らん。
而して心安らかなるを得て迷妄を離れよ。
富貴憍奢も亦復た然り。
命當さに久しからず、卽ち無常なり。
智者は總て是れ虛なりと思惟す。

【一七】染汚、煩惱に名く。煩惱は眞性を染汚するもの。

此の人心硬く語言慳なり。
此の人慳鄙にして癡迷重く
財帛を藏貯するとも終に散壞するも、
一人是の如く多財を護れば
苦を受くるは寧ろ虚妄の慳なるを知る。
使はず用ひず、人に與へず、
金銀は積聚され屋中に滿つるも
貧窮にして施を行ずるは眞の檀度なり。
富貴にして微かに少財帛を捨つるは
若し人法に依つて行じて乏しからざれば、
若し餘財を施して行ずること間續すれば
清淨の心田をもつて法王に事へ
慈心柔軟にして [一一]閨女の如く、
聖境に禮參して [一二]檀施を行じ、
[一三]軌則ち若し斷くれば戒行なく、
今の時名稱を人重んずるを知り、
福壽遠延にして恒に快樂あり。
常に極苦の [一四]三塗の獄を聞き、
壽盡きて生に浮んで命を捨つる時
[一六]城隍と聚落と林間と

利を捨つるは命を捨つるに如かず。
[八]拯救して檀を行じ總て知らず。
若し惠施を行ずれば永く堅牢なり。
愚迷轉厚して思慮なし。
多くの人は物を獲て苦み平等なり。
殊に此の好善事を知るなく。
坑に不淨を盛ると何の別有らん。
彼を說いて名けて最上人となす。
河の[九]涓(ケン)滴の如く誰れか解せざる。
施を好むは女色を好むと同じきが如し。
[一〇]感果の斷盈も亦是の如し。
少年の戒德は花香に喩ふ。
適悅せる莊嚴大行芳(かん)ばし。
精進多聞にして苦辛を受く。
前(す)んで多善を修して並びに功を捐つ。
來世に天に生れるは衆の欽ぶ所。
皆な持戒に從つて功を成すを得る。
恒に威儀を守つて戒德圓かたり。
[一五]焔魔の惡趣も我怖るゝなし。
或は愚迷あり、或は智慧あり。

【八】 拯救、拯すくふ、たすく。
【九】 涓、小さき水、ながれ小。水。
【一〇】 感果、作せる業因に由て或る結果を招くこと。餘分の財を施し、斷續すると、果の現れることも間斷があるといふこと。
【一一】 閨女、閨卽ち婦女のゐる部屋に於ける女。
【一二】 檀施。檀は梵語の(dāna)施はその譯である。同意義の語を並列したに過ぎず。
【一三】 軌則、のり、てほん。
【一四】 三塗、四解脫經の說。塗は途の義。一に火途、地獄趣の猛火に燒かるる處。二に血途、畜生趣の互に相食む處。三に刀途、餓鬼趣の刀劍杖を以て逼迫せらるる處。
【一五】 焔魔、(Yama-rājan)又炎摩、琰摩、閻摩など。譯、縛、罪人を縛する義。又、雙世、彼が世中、常に苦樂の二報を受くる義。又雙王、兄妹二人並び王たる義。又平等王。平等に罪を治する義。地獄の總司である。
【一六】 城隍、城池の水なきもの。からぼり。

審慧は善く危惡の事を觀じ、
崖に落ち火に入るは大危嶮なり。
若し人惡趣の中に墮入すれば、
大水洪波漂ふ可からず。
强惡の群賊も奪ふべからず。
[五]下劣の人は恃んで財を有ち、
中人は財を見て略ゝ心を悅ばし、
一切種族・形色・德
一一何れの所より來るを知らず。
富者の妄言は人實となし、
諂誑時に順じて眞行なく、
財有り豪貴にして德無し。
財無く貧下にして德行全きを稱讃するが如し。
勇猛の德行有りて無きが如し。
財を離れ、道に安んじて淸貧に處り、
屠兒の富貴は眞實と讃じ、
親眷朋友は世情に順じ
衆は惡趣の沈淪喩にして
乞ふ者往來して濟給を希ふも、
乞人其の情を遂逆せされば、

深行信善疑謗なし。
或は身存するあるも復た起ちて行く。
惡趣は深泉にして出づるべからず。
大火熾焰にして燒く可らず。
是は彼の世間最上の賊なり。
中品の人は恃む所なし。
劣人は財を恃むこと世に最上なり。
同行の親眷と朋友と
唯だ貪愚を務めて財利を好む。
貧人の實語は却つて非と爲す。
賢善の人愧じ聞いて耻づ。
喩へば有德の人
愚者知なくして却つて謗毀す。
是れ彼の善人眞覺の觀なり。
親眷は貧を輕んじて實を妄と作し、
上人の無財は下劣となす。
屠酤に[六]祇奉し善惡なし。
受罪の中間の苦百般なるを知つて、
全く[七]輟惠なく固より情に違ふ。
忿意瞋を含んで嘆じて恨む所あり。

【五】人を上品中品下品に別つのは、佛教の普通のことである。之に從つて、その性行を論じてゐる。

【六】祇、つゝしむ。酤、うる、酒を賣る。

【七】輟惠、輟、やむこと、とどめること。

力を竭して人情の不二を爲す。
布施忍辱及び明力
是を聖者の眞莊嚴となす。
世間未だ曾て一物ありて
唯だ有無を寂靜の德となす。
善いかな、形色身端正にして
譬へば明月あつて當に空にあり。
富貴、檀[三]を一切の人に行じ、
勇力にして劣弱の者を救護す。
德者德を重んじ、愍んで德なし。
智は紅日の炎光を放つが如く、
賢人能く身の諸過を護り、
少にして若し心を縱にして一過を犯さば、
惡人遠く戒德を離れ、
淸涼なる功德の池を捨て、
油を身上に塗つて垢を除くを要め、
譬へば事を作すは成功を要むるが如く、
惡人恒に惡なるは[四]黑蛇に喩ふ。
善人怖畏して心傷痛し、
大火、天に亘りて便ち滅し難く

此中の活命を正命と名づく。
諸根を調伏して語言善なる
金寶の莊嚴は重きを擔ふが如し。
無常を被つて空に破壞せられずんばあらず。
劫を經て凝然常住を得る。
具さに德行の光を崇修する。
淸淨の光明樓閣を照らすが如し。
識心無邊の法を成就す。
善いかな、此の德眞に良善なり。
愚者德を輕んじて捨て去る。
愚は星光に似て耀くを掩ふ。
一向に德行を修崇して高し。
多くの德を積集するも亦皆失ふ。
常に不善の人に親近せんと欲す。
稠濁不淨の水に入るが如し。
垢を除いて復た油を洗去すべし。
若し功なるを得て所作を捨つ。
惡人の迷逸は醉象の如く、
惡人顚倒して情忻悅す。
深崖底なくして能く知るなし。

の願により、ヴイチイトラ・ヴイールヤの二人の妻を迎へ、二人の子ドクタラーシュートラ（Dhṛtarāṣṭra）とパーンヅ（Pāṇḍu）を生み、この二人の間に摩訶婆羅多の大戰爭が行はれた。普通ヴイヤーサとは吠陀ヴイヤーサを言ふ。

【二】伽陀（Gāthā）、偈のこと。文學中にて韻文を持つて書かれた短小の詩句を言ふ。佛敎文學中にては散文の間に現れ、前迄の意を概要するが如く、又然らざることもあり、全文偈にて書かれることもある。言語は偈文方言（gāthādialect）と呼ばれる特別の佛敎梵語（Buddhist Sanskrit）である。

【三】檀、檀那（dāna）と同じ。布施のこと。波羅蜜（Pāramitā）の一。前出。

【四】黑蛇。劇毒の蛇。煩惱の毒に譬へる。

勝軍化世百喩伽他經

西天中印度惹爛駄羅國密林寺三藏明教
大師賜沙門臣天息災、詔を奉じて譯す

過去仙人[一]毘娑等　典籍章句説かざるなし。
我今自ら詠じて愚懷を悅ぶ。　[二]伽陀を略誦して百喩となす。
行恩・行義・行賢德　無我無慢無怯弱
眞實の慈悲にて師を重すべし　上人出離の行を作すに堪へたり。
然りと雖も貧下剛志を存す。　設ひ身は富貴なるも亦柔和なるも、
若し强敵に遇はゞ勇力あり。　此を卽ち名けて大人の相となす。
少年にして善を行ずる人は希有なり。　人來つて求むるものあらば歡喜して與ふ。
若し人我を稱讃すれば羞ぢて聞く。　彼等の人亦得難し。
美稱を求めんと欲せば先づ法を求めよ。　法上精心、德自ら生ず。
一切の戒行を堅持すること密なり。　彼人、世間に甚だ希有なり。
天然の性善に、言亦善に　善人惡人各〻盡く知る。
他或は過と藏蓋とあり。　此等の智人世に得難し。
火性暖なるは本と自然にして　月性清涼なるは亦復た然り。
刹帝利族は名けて上と稱す。　彼等下族何ぞ怪しむを得ん。
親眷屬の難危は須らく救濟すべし。　他人難あるも亦復然り。

【一】毘娑(Vyāsa)、「配列者」の意。この稱號は古代著作者並に編纂者に共通に用ひられるが、特に吠陀(Veda)の配列者であるヴエーダ・ヴイヤーサ(Veda-vyāsa)に用ひられ、その者の不滅の爲にサースヴアタ(Sāsvata)「不死者」と呼ばれる。この名は摩訶婆羅多(Mahābhārata)の編纂者、吠檀多(Vedānta)哲學の創始者、富羅那(Purāṇa)の配列者にも與へられる。これらの人は皆ヴエーダ・ヴイヤーサに同じだと言はれるが、之は之に權威を與へる爲か、「配列者」との同じ意味から言はれたのであらう。ヴエーダ・ヴイヤーサはパラーシヤラ(Parāśara)とサトヤヴアティー(Satyavatī)の私生兒で、黑色であつて、ヤムナー(Yamunā)の島で生れた。私生兒なので、カーニーナ(Kānīna)とも呼ばれる。容貌が黑いので、クリシユナ(Kṛṣṇa)とも呼ばれ、生所から、ドウアイパーヤナ(Dvaipāyana)とも言はれる。彼の母はサーンタヌ王(Śāntanu)と結婚し、二人の子があつた。長子は戰で死に、弟はヴイチイトラ・ヴイールヤと名け、子なくして死んだ。クリシユナ・ドヴアイパーヤナは宗敎生活に入り、法律と母

勝軍化世百喩伽他經解題

勝軍化世百喩伽他經は偈文を以て書かれた中篇の經典である。

一、原著者・漢譯者並に製作年代

勝軍化世百喩伽他經の原著者は不明である。

漢譯者は印度の天息災である。天息災は北印度の惹爛駄囉 (Jalandhara) 又は北印度の迦濕彌羅(Kāśmīra)の沙門で、紀元九八〇年支那 (北宋九六〇―一一二七) に到達し、二十年間譯經に從つた。紀元九八二年に彼は明教大師の稱號を受け、紀元一〇〇〇年に死んだ。彼の追號は慧辯法師である。三藏中に彼の譯に歸せられる著作が十八部ある。その內には聖觀自在菩薩一百八名經・佛說十號經・菩提行經・法集要頌經等を含んでゐる。

勝軍化世百喩伽他經の製作年代は漢譯年代紀元九八〇―一〇〇〇年以前であるといふより外確定的なことは言ひ得ない。

二、結構と內容

勝軍化世百喩伽他經は昔の毘婆 (Vyāsa) 仙等に倣つて伽陀 (Gāthā) 百頌を以て自らの愚懷を詠じたものである。勝軍 (Jayasena) は或ひは作者の名であるかも知れない。

勝軍化世百喩伽他經に語られてゐる思想は體系的なものではない。美稱を求めんと欲せば法を求むべく、布施・忍辱・明力・諸根調伏・語言善は聖者の眞莊嚴であつて、一過を犯せば衆德も失ふものであり、布施を賞揚し、財は人に施す可く、戒を持せば三塗も恐れなく、婬欲・愛戀は久しからず無常であり、愚癡を捨離し、惡口兩舌を避け、出家勝道を熏じ、法師を供養し、知足を樂しむべきである。父母兄弟朋友の和合も暫時の間であつて、無常生死の苦がある、戲言・伎唱皆無實であつて、資具は自らを辨ずれば足る、財を決して求むべきではない、其は水火盜賊に奪はれるものであると說いてゐる。

思想的に何等顯著のものなく、小乘的な佛教修道觀を說いてゐるのであるが、涅槃正覺四諦十二因緣八正道等の佛教の根本思想に觸れず、不徹底を免れない。

但し文體は明快簡潔にして緊縮し、相當の名文であつて、原本は韻律の美と相待つて、諷誦するに足るものであつたらう。比喩亦巧みである。佛教文學中にて偈文々學の一に屬するものである。

昭和七年六月十五日

譯者　平等通昭　識

復た次に女人懷孕して第八月に至り、胎藏安かならざれば、當に[18]三稭識藥・蓮花靑憂鉢羅花・蒺藜草を用ひて、各〻等分に冷水を以て相和し、研して極細ならしむ。後乳汁及び糖蜜等を入れて同煎し、冷ゆるを候つて、之を服すべし。此の藥能く胎藏を安んじ、疼痛を止息す。患者之を服すれば、安樂を得。

復た次に女人懷孕して第九月に至り、胎藏安かならざれば、當に蓖麻根・迦俱腺藥・[19]舍羅鉢被尼藥・沒哩賀底藥を用ひて、各等分に冷水を用ひて相和し、研して極細ならしむ。乳汁を入れて同煎し、冷ゆるを候つて之を服すべし。此の藥は能く胎藏を安んじ、疼痛を止息す。患者之を服すれば、安樂を得。

復た次に女人懷孕して第十月に至り、胎藏安かならざれば、當に菉豆・憂鉢羅華を用ひて、等分に水を以て相和し、研して極細ならしむ。復た乳糖及び蜜幷に乳汁を入れて同煎し、冷ゆるを候つて之を服すべし。此の藥は能く胎藏を安んじ、疼痛を止息す。患者之を服すれば、安樂を得。

復た次に女人懷孕すること延胎して十一月に至つて、胎藏安かならざれば、當に靑憂鉢羅花・娑路剛藥・蓮華幷びに莖を用ひて、等分に冷水を以て相和し、研して極細ならしめ、後乳汁・乳糖を入れて同煎し、冷ゆるを候つて、之を服すべし。此の藥は能く胎藏を安んじ、疼痛を止息す。患者之を服すれば、安樂を得。復た次に女人懷孕して延びて第十二月に至つて、胎藏安かならざれば、當に迦俱腺藥・叱囉迦俱腺藥・甘草・憂鉢羅華を用ひて、各〻等分に擣篩して細ならしめ、水を以て同じく研し、後、乳汁に入れて相和して煎熟す。冷ゆるを候つて之を服すべし。此の藥は能く胎藏を安んじ、疼痛を止息す。患者之を服すれば安樂を得。

爾の時𠸪嚩迦仙人師の是の女人の懷孕保養の法を說くを聞き已つて、歡喜信受し、禮を作して退く

迦葉仙人說醫女人經（終）

【一八】三稭識藥、不明。

【一九】舍羅鉢被尼藥、不明。舍羅は（Śalākā）譯、籌。舍羅はもと草の名。之を以て籌となし、今は多く竹木を以て之を作る。比丘の數を知らん爲に之を行ふのである。沒哩賀底藥、不明。

用ひて冷えるを候つて之を服せば、此の藥能く胎藏をして損せず、疼痛止息し、晝夜安隱ならしむ。」

復次に女人懷孕して第三月に至り、胎藏安からざる者は、當に[一一]迦俱嚕藥・叱囉迦俱嚕藥及び[一二]萉麻根等の諸藥を用ひて、等分に水を用ひて相和し、研いて極細ならしむ。又乳汁を入れて同煎して熟せしめ、後乳糖及び蜜を入れて相和して冷服せしむ。此の藥は能く胎藏を安んじ疼痛を止息す。若し患者有つて之を服すれば、安樂なり。

復た次に女人懷孕して第四月に至つて、胎藏安からざれば、當に[一三]蒺藜の草根幷びに枝葉等・憂鉢羅華幷びに莖幹を用ひて等分してこれを用ひ、水を以て相和し、研して極細ならしむ。復た乳汁を用ひて同煎して熟せしめ、冷えるを候つて之を服せしむべし。此の藥は能く胎藏を安んじ、疼痛を止息す。患ふる者之を服すれば、安樂を得。

復た次に女人懷孕して第五月に至つて、胎藏安からならざれば、當に[一四]瓠子根及び憂鉢羅華を用ひて、各を等分に用ひて擣篩して細ならしめ、後に蒲萄汁・乳汁・乳糖を入れて、同煎して冷ゆるを候つて之を服すべし。此の藥は能く胎藏を安んじ、疼痛を止息す。患者之を服すれば、安樂を得。

復た次に女人懷孕して第六月に至つて胎藏安かならざれば當に[一五]閉阿羅藥・子摩地迦羅惹藥・訖多嚩藥を用ひて、各々等分に用ひ、水を以て相和し、研して極細ならしむ。復た乳汁を入れて同煎して、後乳糖及び蜜を入れて冷ゆるを候つて之を服すべし。此の藥は能く胎藏を安んじ、疼痛を止息す。患者之を服すれば、安樂を得。

復た次に女人懷孕して第七月に至り、胎藏安かならざれば、當に蒺藜草枝葉幷びに根を用ひて擣篩して粖となし、乳糖及び蜜を用ひて丸と爲し、肉汁を用ひて之を服す。復た肉汁の[一六]飡飯を以て之を食し、或ひは[一七]菉豆の粥飯を食ふべし。此の藥及び飯は能く胎藏を安んず。患者食を服すれば、安樂を得。

【一一】迦俱嚕藥、叱囉迦俱嚕藥、不明。
【一二】萉、葉は大麻に似た一種の草、からえ、其れより印肉の油を作る。
【一三】蒺藜。蒺藜は一種の藥草。はまびし。いばら。薊。蒺藜は刺ある一種の草。はまびし。
【一四】瓠、二義の瓜、ひさご、ゆふがほ。
【一五】閉阿羅藥・子摩地迦羅惹藥・訖多嚩藥、不明。
【一六】飡、餐の俗字。飯にのみものを沃ぐこと。しるかけ、ちやづけ。
【一七】菉、一種の草。王芻、かりやす。

迦葉仙人說醫女人經

西天譯經三藏朝散大夫試光祿卿
明教大師臣法賢、詔を奉じて譯す

爾の時[一]吩嚩迦仙人、忽ち是の念を作す。世間の衆生は皆女人より其の身を生ず。彼の女人は初めて懷孕してより滿十月に亘る。或ひは復た延胎するも十二月に至つて方に始めて產出す。或ひは中間に於て其の病患有り、病患の時に於て極めて苦痛を受く。我今方便して師に請問す。[二]方藥稟受して救療を與作されん。是の念を作し已つて、即ち師[三]迦葉仙人に詣で、師資の禮を伸べて問を作して言く。『大師迦葉は是れ大智者なり。我今問ふ所有らんと欲す。願くは聽許を垂れられよ。』迦葉仙言く、『汝の所問を恣にせよ。』時に吩嚩迦仙人、白して言はく、『女人懷孕の期十月或ひは十二月に當つて、日滿ちて方に生ず。云何ぞ中間に諸の病患有り、遂に胎藏轉動して安からざるを致す。或ひは損者有つて、苦惱無量なり。我が師大智、願くば宣說して是の如き病苦の方藥を宣說して、救療されんことを。』是の問を作し已つて、聽受して住す。

爾の時、迦葉仙人は吩嚩迦仙に告げて言はく、『女人懷孕して保護を知らず。遂に胎藏をして安隱ならざるを得しむ。我今汝の爲に隨月保護の藥を略說せん。懷孕の人第一月の內に胎藏安からざる者は、當に[四]梅檀香・蓮華[五]優鉢羅華を用ひて水に入れ、同じく[六]研して後乳汁・乳糖を入れて同煎すべし。溫めて此の藥を服せば、能く初めて懷孕する者をして、諸の損惱無く、安樂を得しむ。』

復次に吩嚩迦仙に告げて言はく、『女人懷孕して第二月に於て胎藏安からざれば、當に青色憂鉢羅華・[七]俱母那華根・[八]蔆角仁羯細嚕迦等の藥を用ひて、諸藥等分し、[九]擣篩して[一〇]秣となし、乳汁の煎を

【一】吩嚩迦、不明。

【二】稟受。稟、うける(受)。

【三】迦葉(Kāśyapa)、迦葉は印度ではいゝ姓で、婆羅門にてこの姓のものが多い。何れの迦葉か不明。

【四】梅檀香、梅檀(Candana)は印度產香木であつて、その粉末は身に塗り、冷しく、又燒香に用ふ。

【五】優鉢羅(utphala)。譯、青蓮華。

【六】研、くだく、みがく。

【七】俱母那華、不明。

【八】蔆角仁羯細嚕迦、不明。蔆、蔆の誤か。又一本、菱。ひしのこと。

【九】擣篩。擣、うつ、たたく、きづく。

【一〇】秣、末と同じ。

迦葉仙人說醫女人經解題

迦葉仙人說醫女人經の原作者は不明である。漢譯者は法賢である。

法賢に就いては金剛針論其他の諸經の譯者として既に度々記したので、今は之を略述することとする。初め法天（Dharmadeva ?）と言ひ、後に法賢と改め、中印度摩伽陀國の那爛陀（Nālanda）寺の沙門で、紀元九七三―一〇〇一年間に多くの經を譯した。紀元九八二年に宋の太宗（九七六―九九七）から傳教大師の稱號を贈られた。同年に彼は法賢と名を改へたので、その何れかの名が譯經に署名されてゐるかによつて、譯經の年代が二期に分かたれる。彼は一〇〇一年に死に玄覺禪師の追號が贈られた。現存三藏中に彼に歸される譯經が百拾八あり、その內金剛針論外四十五經が法天の名の下に爲された初期の譯經である。而して法賢の名の下に爲された後期の譯經（九八二―一〇〇一）は迦葉仙人說醫女人經外七十一經である。

この經の製作年代は漢譯年代紀元九八二―一〇〇一年以前であるといふより確定的なことは言へない。

この經の譯文は平易で、解り易い。

迦葉仙人說醫女人經は[illegible]嚩迦仙人が師の迦葉仙人に女人が懷娠中の病苦の方藥を問ふたのに對し、說明を與へる形式になり、懷娠各月に對する藥種の調合法と服用法を記してゐる。その藥用木草は多く原名性質を知ることを得ない。この經は恐らく印度醫書アーユル吠陀（Āyurveda）スシュルタ（Suśruta）・遮羅迦本典（Caraka-saṃhitā）等の諸典と何等かの關係連絡があるであらうが、調査考證する暇がなかつた。

迦葉仙人說醫女人經には佛教思想は勿論、何等佛教的分子・色彩を有しない。この經を何故に三藏中に編入したか、その理由を見出すに困難を感ずる。恐らく單に譯者が法賢なる理由に基く理由のみからであらう。

昭和七年六月十二日

譯者　平等通昭　識

在を得。世間の人は身心勞苦して、歸依する處なし。衆苦の逼る所、輕疾なること電の如し。是れ憂愁すべし。應愛著すべからず。大王よ、今我王に語る。言は麁惡なりと雖も、實は是れ利益あり。』と。王、是の語を聞きて、衣毛皆竪つ。悲喜交集り、涕泣涙を流して、即ち起つて合掌し、五體を地に投じ、尊者に白して言はく、『我の嬰愚たる、智慧あるなし。我の下濺なる、斯の狂言をなす。我に懺悔するを聽せ。』尊者言く、『我今に於て、忍を以つて出家す。忍受せざるなし。我が心清淨にして、猶ほ秋月の淨くして雲翳なきが如し。王よ、今懺悔せよ。願くは大王をして猶ほ天帝の道跡を見るを得るが如くならしめん』と。王、大ひに歡喜し、諸の眷屬とともに、禮を作して宮に還れり。

賓頭盧突羅闍爲優陀延王說法經（終）

けれども、其の中最も堅性の增盛なのを地と名け、乃至動性の最も增盛なのを風と名ける。之を要するに實の四大は能造にして、假の四大は所造に屬する。（織田）。

『無常にして堅固ならず。
芭蕉の水沫の如し。
亦浮雲の散ずる如し。
天王は尊勝位なるも、
危脆なること、亦是の如し。
人帝應當に知るべし。
貪利極めて速駛にして、
水の深谷に澍ぐが如し。
嗜欲は極めて輕疾にして、
動轉して掉索の如し。
愚癡は染つて欲の爲に、覺へず隨落を致す。

尊者言く、『大王よ、我今王の爲に譬喩を略說せん。諸有の死生は、著味の過患なり。王よ至心に聽け。[五〇]昔日人あり。行て曠路に在り。大惡象に逢ひ、象の逐ふ所と爲る。狂懼して走突す。依怙する所なく、一丘井を見る。卽ち樹根を尋ねて、井中に入つて藏る。白黑の鼠あり、牙にて樹根を齧む。此の井の四邊に四毒蛇あり、其の人を螫さんとす。而して此井の下には大毒龍あり、傍らに四蛇を畏れ、下には毒龍を畏る。攀つる所の樹は其の根動搖す。樹上に蜜あり、三滴して其の口中に墮つ。時に樹を動かして蜂[五一]窠を[五二]摽壞す。衆蜂散飛し、唼つて其の人を螫す。野火起るあり。復た來つて樹を燒く。大王よ、當に知るべし、彼の人の苦惱は稱計すべからず。王、愁憂厭惡して言はく、『彼の人、味を得ること甚だ少なく、苦患甚だ多し。其の味ふ所は、牛跡の水の如く、其の苦患する所は猶ほ大海の如し。味は芥子の如く、苦は須彌の如し。味は螢火の如く、苦は日月の如し。藕根の乳を大虛に比するが如く、亦蚊子を金翅鳥に比するが如く、其の味の苦惱の多少は是の如し。尊者言く、『大王よ、曠野とは、生死に喩ふ、彼の男子とは凡夫に喩ふ。象は無常に喩ふ。丘井は人身に喩ふ。樹根は人命に喩ふ。白黑鼠とは晝夜に喩ふ。樹根を齧むとは念々滅に喩ふ。四毒蛇は[五三]四大に喩ふ。蜜とは五欲に喩ふ。衆蜂は惡覺の觀に喩ふ。野火燒くとは老に喩ふ。下の毒龍とは死に喩ふ。是の故に知るべし。欲味は甚だ少なく、苦患は甚だ多し。生老病死は一切の人に於て、皆自

開の折は花多き印度にても、之と比すべきものなしと。

【四九】縷絕。ほそいと、いとすぢ。いとすぢの如く細長なるものの稱。

【五〇】この寓話は有名なものであつて、トルストイも之をその童話集の中に印度說話より改作として出す。

【五一】窠、穴中のすみか。す。穴中を窠と言ひ、樹上を巢といふ。

【五二】摽壞、摽は擣と同じ。さゝふ。

【五三】四大(bhūta)。世界を形成する四の要素—地水火風である。倶舍論によれば、四大に假實の二種がある。實の四を四界又は四大界と稱し、假の四を單に四大と言ふのである。實の四大とは一に地大、堅を性とし、物を支持す、二に水大、濕を性とし、物を攝す。三に火大、煖を性とし、物を調熟す。四に風大、動を性とし、物を生長す。此の四は一切の色法を造作するので、能造の四大と言ふ。其の四大の體は觸處所攝にして唯身根所得である。身根諸色と觸れて堅濕煖動を覺知するからである。假の四大とは世間の言ふ地水火風である。此の四大は其の實、地水火風及び色聲香味觸の九法の假和合である

上妙の財寶を捨てゝ、　而も大富想を生ず。
善く方便を解さず、　横に智慧の想を生ず。
衆の煩惱の患の爲に、　横に無病の想を生ず。
未だ生死の胎を脫せず　横に無畏の想を生ず。
〔四七〕十二刺林に處りて　横に無刺の想を生ず。
欲賊、諸根を劫して　横に無賊の想を生ず。

大王にして此の身は必ず敗壞に歸す。尊豪榮貴にして、必ず衰滅あり。財寶庫藏、必ず散失あり。大王よ、佛の言ふが如し。曰く「榮位は夢の如し。恩愛は暫くあり。汝、五欲に於て、希有難遭の想を生ず。賢德は此に於て、豈に能く善く觀察をなすと名くるを得んや。何を以ての故に。榮位恩愛は必ず別離あり。衆の飛鳥は夜に一樹に栖むも、晨になれば則ち四散する如し。又客舍には夕には則ち賓を聚め、明くれば各ゝ路を異にするが如し。亦船に乘るに異人同じく載せて、既に岸に至り已つて、各自道を殊にする如し。亦駛流の衆木を漂集し、須臾の間に、流に隨つて分散するが如し。猶ほ浮雲の須臾にして散滅するが如し。音樂處を作し、男女聚集して樂を作し已つて後、各自散去し、宮人綵女端正美妙にして、無常にして理會し、會ひ歸つて捨棄す。譬へば華樹の蜂の其の上に集るが如し。花凋落し盡せば、諸蜂遠く離る。花池枯涸すれば牸象の入らざるが如し。大池水には鵠樂んで遊居し、及び其の乾竭すれば更らに復た近かざる如し。福盡くるの家は榮利近からず。密雲聚集して、電光暫く現じ、風雲を吹き、電光現ぜざるが如し。彼、汝を捨てざるも、汝必ず之を捨つ。夏盡くれば孔雀の羽毛悉く自ら落つるが如し。寒既に至れば、鴻鵠池に遠ざかるが如し。

〔四八〕阿輸伽樹の花葉盛なる時は、人の愛樂する所となり、及び枯悴して花葉あるなければ、人顧視せず。猶ほ花幢は、貴者は愛敬し、華萎んで縷絕すれば、便ち之を棄つるが如し。卽ち偈を說いて言く、

【四二】甄叔迦(Kiṃśuka)、堅叔迦、緊祝迦、寶石の名。譯赤寶。又樹名にて、其の花赤色にて形大きく手の如くであると。赤寶とは之に因んで名けた。

【四三】幻櫥。櫥、くひ、きりかぶ。

【四四】井底をのぞき、自らの姿の寫るのを見て、之と爭ふを言ふ。

【四五】揵闥婆(gandharva)城、譯、蜃氣樓、樂人を乾闥婆と名け、彼の樂人巧みに樓閣を幻作して人に觀せしめるのを、乾闥婆城と稱する。而て彼の空中に現ずる蜃氣樓の樣が之に類するので、亦稱して乾闥婆城と言ふ。物の幻有實無に喩へる。

【四六】噏、吸に同じ。すふ。

【四七】十二刺林、十二因緣の異名。五句章句經に「一切衆生は常に長獄に在り、十二重城に有り。之を圍むに三重の棘籬を以てし、之を籬とす」とあり、妙玄二本に「亦十二重城と名け、亦十二棘園と名く」とあるより、言ふ。

【四八】阿輸伽樹(Aśoka)、無憂樹と譯す。赤い花を咲く澀木にて、甚だ美し、この花滿

む。若し幻撥を抜けば、色像卽ち滅す。猶ほ畫匠及び機關師の如く、狗、井に吠へて自から形影を見るが如し。眼を怒らし、毛を竪て、[四四]井底の影を謂ふて己と共に闘はんと欲し、横に瞋恚を生じ、井に投じて死す。大王宜しく善く觀察すべし。何ぞ五欲あつて常なるを得る者ぞ。何ぞ王位ありて久しく停るを得んや。尊豪の威勢は住するを得るもの無し。何ぞ國界有つて遷壞せざる。何の珍寶有りて散失せざる。何の欲樂ありて常恒にして變ぜざる。苦の封受必ず衰滅を受けん。何ぞ合會あつて別離せざる。一切の五欲、體性實苦、皆な妄想より樂を生ず。何ぞ諸行は芭蕉・[四五]揵闥婆城に似ざる。大王よ、云何ぞ生老病死の衰禍に處りて逼迫の中に恐怖するや。云何ぞ能く國土の少樂の爲、愛樂の想を生ずるや。林中の鹿、四邊に火起るが如し。鳥の籠に在るが如く、魚の網に處るが如く、龜の鈎を呑むが如く、師子の毒箭、心に入るが如く、龍の呪場に處るが如く、人の屋中に在りて四邊に火起るが如く、危朽の華堂に處りて、速疾に崩墜するが如く、好華の池に水羅刹有りて人を[四六]噉食するが如し。』重ねて偈を說いて言く、

『生老病死の患は　中に於て未だ解脫せず。
無明愛の毒箭は　猶ほ未だ、拔出すを得ず。
人帝よ、汝云何にして　樂著の想を生ずるや。
象の林中に處り、　四邊に大火起るが如し。
此の急難の處に處り、　云何ぞ歡喜あらん。
大王應當に知るべし。　榮位は須臾の間なり。
智者は深く觀察して　此の事に應ぜず。
而も希有の想を生ず。　汝、何故に錯解するや。
實に是れ愛の奴僕にして　而も高貴の想を生ず

の祖先で、前者の子孫はカウラヴア(Kauravа)と言ふ。彌絺羅檀特伽王種。彌絺羅 Mithila はヴイデーハ(Videha)即ち北ビハール(Bihar)の都で、ガンダキー(Gandaki)とコージイー Kosi との間の今のテイルハツト(Tirhut)フラニヤ(Purariya)に相應する。又婆羅門の五種の北方族の一の名でもある。ヂヤナカ(Janaka)の王國で、その首府の名で、北方に於けるヂヤナカプール(Janakpoor)として殘つてゐる。此の個所に出づる神話の人物名、調査の手係りなし。

【三二】攢、あつまる。

【三三】抓爴。抓、かく、つまむ。

【三四】癰、一種の惡瘡、

【三五】菴婆(Āmrā, amba)、桃に似たる美味なる果實の名。前出。されど、食後菴婆は身體爛るることなきが如し。

【三六】寄越王、不明。

【三七】槃趙王、不明。

【三八】提頭頼吒、不明。

【三九】羂弶。羂、わな。わなにかけ捕らふ。弶、網を張る、罟を設く。鳥獸をわなにかく。

【四〇】洄、水流に逆ひてよる。水の流る貌。湖の名。

【四一】野干(śṛgāla)、狼の一種、

捨てされば自から燒く。　渇して鹹水を飲むが如し。
飽足する時あるなし。　十頭羅刹の如し。
城郭及び眷屬は　欲の因緣の爲の故に
滅壞して餘り有るなし。　又[三六]寄越王は
兄弟、百人あり。　欲の因緣の爲の故に、
亦皆な盡く敗滅するが如し。　日種の[三七]槃趙王
及び[三八]提頭賴吒、　是の如き諸王等は
盡く欲の滅す所となる。

當に知るべし、國土は猶ほ羅網の如し。亦[三九]羂弶の如く、深淤泥の如く、亦[四〇]洄波の如く、又海浪の如く、林の燒かれるが如く、又危岸の如く、猶ほ地獄の如し。何ぞ智有る者、貪著を樂むべき。是の如きは大苦なり。何ぞ智有る者、當に樂想を生ずべき。是の如く大王よ、嗚呼、怪しい哉、欺むかるるは乃ち爾なり。欺むかるるは乃ち爾なり。猶ほ空拳の小兒を誑すが如し。速疾に停めず。猶ほ幻化の如し。五欲の欺誑も亦復た是の如し。猶ほ猿猴の高山の頂に在りて、雲の彌布するを見て、以つて堅實となして、是は地なりと謂ひ、便ち身を以つて百丈の巖に投墮するが如し。其の身命を喪ひ、一切は碎滅す。亦[四一]野干の[四二]甄叔迦樹の、其の果肉に似るを見て、地に落つるを見る時、便ち往いて食せんと欲す。其の肉に非るを知つて、更に復た念を生ず「今此れ肉に非らず。彼の樹上なるは、必ず是れ肉なるべし」。遂に便ち之を守る。其の困する所の五欲の王を誑かすところと爲るも、亦復た是の如し。又嬰愚の味を嗜み、歡喜丸を貪るが如し。人、泥團を以て、來つて之を誑かせば、謂ふて眞實となし、走り逐ふて疲れ、苦しみ、乃ち泥團を得るが如し。熱する時焰は渇せる愚夫を誑かすが如く、猶ほ衆人の前んで[四三]幻撅を豎つるが如く、能く時衆をして種々の事を見せし

行から因陀羅を破り、神々を降し、三界に於ける權威を廣めた。神々は保護をヴイシュヌに祈へ、彼はバリを束縛する爲に一寸法師アヴアターラ(Avatāra)を遣した。一寸法師はバリから地を三步にて步む恩惠を受けて。天と地を二步で步んだ。バリの親切と自分の孫プララーダの德に引かされ、短時間止つて、他に移つた。

【二一】婆勒、不明。

【二二】苦婆羅王種八純提王、不明。

【二三】鼻多羅阿修羅、不明。

【二四】羅漫、不明。

【二五】因陀羅(Indra)、前出。

【二六】多摩羅質種族、不明。

【二七】迦帝毘王、不明。

【二八】闍摩尼婆羅門、不明。

【二九】毘那悉部、不明。

【三〇】提頭賴吒、不明。

【三一】弶匿安毒多羅蹈伽王種、不明。俱羅王種、クル(Kuru)族のことか。クルは月種族の太子にて、サンヴアラナ(Saṃvaraṇa)と白の娘タパティー(Tapatī)との子、現在のデーリー地方である印度北西部を支配した。クル族は印度のその部分であるクル地方を支配した。ドリタラーシュトラ王(Dhṛtarāṣṭra)とパーンヅ王(Pāṇḍu)

譬へば妙華林に　金蛇睡つて中に在るが如し。
愚人は珍寶と謂ひ、　裹に盛り齎して家に歸る。
蛇覺めて毒火を縱にし　其の屋宅を焚燒す。
王位は華林の如し。　災患は金蛇の如し。
愚人は以つて貴しと爲すも、　智者の樂まざる所。
譬へば［三二］揣肉を以て　四衢道頭に置くが如し。
狐狼鳥鷹等　競ひ來つて諍ふて之を食ふ。
王位も亦是の如し。　衆共に諍ふて之を取る。
鳥獸は嘴爪を以て　［三三］抓齪して共に鬪諍す。
王者は刀矛を以て　相害して榮位を諍ふ。
亦彼の鳥獸の如く　愚癡等しくして異なるなし。
我寧ろ灰土を食して　草菜以つて自ら存す。
此の身、［三四］癰瘡の如く、　會歸して當さに潰爛すべし。
云何ぞ此の爲の故に　衆惡業を造作す。
［三五］菴婆果を食ふが如し。　香味悉く具足す。
及び其の果消する時　身體盡く爛壞す。
王位は彼の果の如し。　滅を失して苦惱を生ず。
譬へば萬土に　災疫行はれ、疾病あるが如し。
有智の諸勝人は　宜く應さに速かに遠離すべし。
若し遠離せざれば、　逆風の炬を執るが如し。

ひ、又衆生を繫縛して解脫せしめぬので、結と云ふ。即ち生死の因となるもの。
【一七】 儜弱、因弱す。くるしみよわる。もてあます。
【一八】 四取。一に欲取、色聲香味觸等、五塵の境に於て貪欲取着するを云ふ。二に見取、五蘊の法に於て我見邊見等を妄計取着するを言ふ。三に戒取、外道の狗戒手戒の如き非理の戒禁を取着修行するを言ふ。四に我語取、我語とは我見我慢等の我見より發する取說の法に名く。此の我見我慢に取着するを我語取と云ふ。
【一九】 婆須(Vasu)、婆須は神格の階級で、八人あり、インドラの侍者である。吠陀では自然現象の神格化とされてゐる。その名はアーパ(Āpa, 水)、ヅルヴァ(Dhruva, 北極星)、ソーマ(Soma, 月)、ダラ(Dhara 地)、アニラ(Anila, 風)、アナラ(Anala, 火)、プラバーサ(Prabhāsa, 曉)、プラトューシャ(Pratyūsa, 光)とである。ラーマーヤナ Rāmāyaṇa に從へば、彼等はアディティ Aditi の子である。
【二〇】 婆利阿修羅。バリ Bali か？バリは善良有德なダイトヤ(Daitya)王。ヴィローチャナ Virocana プララーダ(Pralāda) の子で、信奉と苦

羅質種族を滅し、[二七]迦帝毘王は[二八]閻摩屠婆羅門の殺す所となる。[二九]毘那悉那は[三〇]提頭賴吒の眷屬を害し、五子を斑細し、十八億人を殺し、[三一]阿匿安毒多羅蹭伽王種・俱羅王種・彌絺羅檀特伽王種を匿ひ、是等の人王は皆欲の爲の故に、更に相殘滅す。卽ち偈を說いて言く。

『王位は尊嚴なりと雖も、　代謝して暫くも停まらず。
輕疾なること電光の如く、　須臾にして磨滅に歸す。
王位は極めて富逸にして　愚者の情は樂を愛す。
衰滅して死する時至らば、　苦劇しくして下濺に過ぐ。
王者は高位に居して　名聞四方に滿ちて、
端正甚だ愛すべく、　種々に自ら身を嚴かにす。
譬へば死に臨む者の　花鬘瓔珞を著くるが如し。
餘命未だ幾ばくならざる時　王位も亦是の如し。
王者は譬へば鳥の　常に諸の恐怖を懷くが如し。
行住及び坐臥　乃至一切時
其の親疎の中に於て　恒に疑懼の心あり。
臣民宮妃の后　象馬及び珍寶
國土の諸の所有は　一切是れ王物なり。
諸王命を捨つる時、　皆な棄てゝ隨ふ者なし。
人王及び天王　阿修羅王等の
威力は人民に逼り、　斧鉞は相殘害するも
無常の苦を識らず　横に貪疾の惱を增す。

取と言ふ。三に邪淫、自らの妻妾でないものと欲を行ずるもの。四に妄語、新に虚誑語と言ふ。五に兩舌、新に離間語と云ふ。六に惡口、新に麁惡語と云ふ。七に倚語、新に雜穢語と云ふ。語に婬意を含むもの。八に貪欲、九に瞋恚、十に邪見、正因果を撥して僻信禍を求めるもの。此の十並に理に乖て起る故に惡と名け、又此十惡は苦報の業因であるから、十惡業又は十不善業と云ひ、又此十業能く苦報に通ずるを以て十不善道又は十惡業道と云ふ。次に十善とは不殺生乃至不邪見である。此の十能く理に順ずる故に善と名け、十善業又は十善道又は十善業道と云ふ。上に準ずる。

【一四】國師(Purohita)、宮廷僧とも譯す。多くの王廷には波羅門出身の經驗識見ある者を軍政行政の顧問に任じ、之に下問して王は政治軍事を行ふ慣である。

【一五】色聲香味觸の五境、卽ち眼等の五根に對するもの。是れ人の欲心を起すものであるので、欲と名く。是れ眞理を汚すものであるので、塵と名く。

【一六】結、結集の義。繫縛の義。煩惱の異名。煩惱因となつて生死を結集すれば結と云

戴き、瓔珞盛服にして、婇女侍衞して、天帝釋の如し。汝今、獨處し、頗る我を羨やむや不や。尊者答へて曰く、『我羨む心なし。』王復た問つて言く『何故に我に於て羨むを願はざる。』尊者答へて言く、『我今日に於て泥已に乾かんと欲す。諸の有の結縛を今已に解脱す。乃至帝釋諸妙天女も尙ほ羨みを生ぜず。況んや汝人間鄙穢なる者に於てをや。誰れか智者ありて、靡縛を離れ、生死の岸を渡り、淨慧の眼を得、無明の闇を壞し、而かも王を羨まんや。』何の明眼有りて、盲者を羨まん。何ぞ强健ありて、病患者を羨やまん。何ぞ無罪にして獄囚を羨やまん。何ぞ巨富にして貧窮を羨やむもの有らん。何ぞ高貴にして奴僕を羨やむものあらん。何ぞ智者にして愚癡を羨むものあらん。何ぞ勇健にして[一七]儜弱を羨やむものあらん。』と。王、是を聞き已つて、心に懊惱を懷き、而して是言を作す。汝方さに喩を作す。一に何ぞ苦劇しくして我、寧ろ困劣なること乃ち是の如きや。』尊者答へて言く、『王、慧眼なし。煩惱の病ます所、[一八]四取駛流の漂沒する所、勇健を失して、精勤する能はず。斯の如き嬰愚は眞諦を識らず、苦海に沈淪す。是れ王の分なり。五欲の中に於て、希有の想を生ず。此の如きの想は實に淨行に違ふ。王復た問ふて言く、『何等の過有りて違失と言ふや。』尊者答へて言く、『此の五欲とは、衆苦の本にして、衆生の、所有の善根を害す。雹の苗を害するが如し。螫して衆生を惱ますこと、毒蛇よりも甚だし。亦熾火の如く能く功德を燒く。亦野馬の如く、凡夫を誑惑す。亦幻化の如く、惑ふ者を迷亂す。欲は親善を詐ること、怨家に過ぐ。欲は老牛の汚泥に沒溺するが如く、欲は大網の三界を纏裹するが如く、欲は劍道の履踐すべきこと難きが如く、欲は能く衆生を繫閉殺害す。一切の過患は皆欲より起る。往古の時の如し。[一九]婆須天あり、欲の因緣によりて[二〇]婆利阿修羅の繫縛する所となり、沸湯中に擲たる。[二一]婆勒天は阿修羅城塢を壞ちて、其の民を殄滅す。[二二]苦婆羅王䄷八純提王及び彼の百子を惱觸し、悉く皆な誅滅す。[二三]鼻多羅阿修羅は、千眼の羅摩を害し、十頭羅刹及び數千億羅刹の衆を害し、[二四]羅漫は[二五]因陀羅且翼叉王・摩羅支王を害し、[二六]多摩

その內、國土の邪敵に犯され、正法地を拂ふを見、且妻私陀(Sītā)が敵王ラヴアナ(Rāvaṇa)に奪はれ、セイロン島にあるを知り、猿王ハヌマット(Hanumat)の助けによつて之を征伐し、私陀姬を奪ひ返した。羅摩は英雄の鑑、私陀は貞女の鑑として今も印度に崇拜されてゐる。

【一一】 阿純、アルジュナ Arjuna か。アルジュナは摩訶婆羅多詩の說話中に出でる英雄で、パーンヅ Pāṇḍu 王子の第三番目である。アルジュナの父はインドラ(Indra)で、勇敢な戰士で、武藝に長じ、寬大で公平で立派であつた。自選式に於てドラウパディー(Draupadī)を得、ユディシュトラ(Yudhiṣṭhira)が賭博に破れて廿年間流浪した時は、行を共にして、薄伽梵歌(Bhagavadgītā)に現れカウラヴア(Kaurava)黨との大戰爭にはクリシュナ(Kṛṣṇa)の助を得てビーシュマ(Bhīṣma)等多くの敵の勇士を仆した。戰に勝つてユヂイシュトラが即位した後はよく之を助けた。後彼は雪山に引退した。

【一二】 賓頭盧突羅闍(Piṇḍola Bhāradvāja)、前出。

【一三】 十善。先づ十惡とは一に殺生、二に偸盜、新に不與

二

ること是の如し。王の威德に隣國畏伏し、道化光被し、聲、天下に聞ゆ。時に輔相子を賓頭盧突羅闍と名く。姿容豐美に、世の希有とする所にして、聰明にして智慧あり、博聞にして廣識に、仁慈汎愛なり。志、苦を濟ふに存す。國民を勸化し、盡く[13]十善を修せしむ。三寶を信樂して、出家して道を學び、果を具足するを得たり。遊行教化して拘舍彌城に還り、親黨を度せんと欲し、遍行乞食す。乞食し訖つて、林樹の下に於て結跏趺坐し、思惟して定に入る。時一人有り、賓頭盧を識る。來つて王に白して言はく、『昔の輔相子賓頭盧は、今近く此の林中の樹下にあり、』と。王聞いて歡喜し、心に欽仰を懷き、便ち敕して駕を嚴かにして、諸の宮人・眷屬・僕從を將いて、尊者の所に至る。問訊し既に竟り、王に坐に就くを命ず。王即ち思惟し、所有の疑事、今當さに之を問ふべし。而して是の言を作す。『賓頭盧よ今、我と汝とは少小の知舊にして、汝の祖先は世に輔相と爲り、聰明智達にして常に[14]國師となる。今既に相造つて疑事を問はんと欲す。相ひ惱觸するに非らずや。我が爲めに說くや不や。』尊者答へて言く、『爾の問ふ所を恣にせよ。我れ當に王の爲に分別解說すべし』王、偈を以て問ふて曰く、

『一切の世人は　[15]五欲に貪著し、　情を縱にして放逸し、
自の娛樂を以てす。　汝の如きは、　今空閑に獨り處り
恩愛を捨離す。何の榮樂かある』

尊者答へて言く『我、因緣を觀ずるに、皆悉く無情なり。是の故に出家して、以て情愛を割き、林藪を樂しむ。猶ほ野鹿の如し。專心に勤修して、永く煩惱を斷つ。智慧の斧を以て、愛の樹枝を破り、心に戀著なし。毒菓は消滅し、[16]諸結の駛流・生死の瀑河、我已に渡るを得て、更に憂患なし。譬へば飛鳥の羅網を免るを得るが如し。陵虛しく遠く逝く。名けて解脫と曰ふ。』と。王、斯の語を聞き、賓頭盧に語る。今我が勢力は能く諸國を伏し、威德暐赫して、盛日の如きあり。首に天冠を

イラーサ Kailāsa の意か。然らば雪山中の高峯にて、富神クヴェーラの宮殿あり、

【五】　帝釋所居喜見城。忉利天（三十三天）の帝釋天の住する城の名。須彌山の頂に在り。善見城とも言ふ。城七重、九百九十九門あり、一一の門邊に皆十六の青衣大力の鬼神あり、城中を守護す。

【六】　宮商、五音の中の宮と商との二音、又音の調子の義に言ふ。

【七】　六十二蟄、六十二見を言ふか。六十二見とは印度古代に行はれた六十二の外道の學說を言ふ。經論の諸譯は不同であるが、多く依用するのは三種である。一は十四難を開いて六十二見と爲した。二は天台、嘉祥等の諸師二十種の我見に於て六十二見の一譯を成す。三は本劫本見末劫末見に就いて六十二見を立てる。詳しくは看織田、佛教大辭典、一八三一。

【八】　哲王、什奢、不明。

【九】　殷、おほし（多）、さかんなり（盛）。

【一〇】　羅摩延。羅摩（Rāma）か。羅摩は羅摩耶奈（Rāmāyaṇa）他羅摩說話の主人公で、十車王の子、勇武人にすぐれたが、繼母の讒言により太子の位を追はれ、流刑に處された。

賓頭盧突羅闍爲優陀延王說法經

宋天竺三藏求那跋陀羅譯

欲樂は味甚だ少く、憂苦は患ひ甚だ多し。是を以て智者は應に方便を修め、速かに衆欲を離れ、勤めて淨行を行ずべし。我昔曾て聞く。[一]千福王子、優陀延と名く。父王の位を紹ぎ、[二]拘舍彌城に住す。其の城殊妙にして、寛博なる嚴淨、晃爛たる宮觀、映飾綺麗にして、窓牖通疎にして、珠網を交絡し、樓觀千萬あり、此の城を莊挍し、街巷相當り、阡陌齊整し、市肆充盈し、諸の珍寶多し。其の城を周匝して好林苑あり、樹木翠蔚して花果茂盛せり。泉流淸潔にして衆の蓮華を生ぜり。青黃赤白の文色相映じ、鴻・鴈・鴛鴦・孔雀・鸚鵡・[三]迦陵頻伽(カラヴインカ)・命命之鳥、其の聲相和し、猶ほ樂音の如し。壯麗の盛なる、[四]奇羅婆山王の如く、崇巖峻岳にして自ら莊嚴す。[五]帝釋所居の喜見城を像る。優陀延王は形貌端正にして咸相具足す。總明黠慧、武勇絕倫にして、才伎兼ね備はる。知らざる所なし。善く能く象を呪し、諸の山象をして、咸な來りて赴集せしめ、又能く控御し、皆調順せしむ。又能く琴を彈じ、和雅中節にして[六]宮商相應し、鳥獸率ひて舞ふ。衆香合して丸め、用ひて怨敵を降す。香氣の及ぶ所、盡く來りて歸順す。善く能く刻畫し、曲(つぶ)さに相貌を得。其の圖する所の像は眞形にして異るなし。[七]六十二藝悉く皆備具す。衣服飲食は倘ほ豐奢ならず、窮を矜(あはれ)み、老を敬し、民庶を存恤し、正法もて國を治め、日夕倦むを忘れ、禮儀・法律は一に古曲に依る。昔の[八]哲王・[九]什奢之れ等の如し。國富み、民殷く藏庫盈溢し、福德の人は其の國に集生し、王の風化を受けて、咸な皆な善を修む。博通經學にして、明かに諸論を解し、世間の典籍は綜練せざるなし。勇健雄武にして[一〇]羅摩延・[一一]阿純之等の如し」王の先身たる辟支佛の種うる所の諸善根に由つて、報を獲

【一】千福王子、轉輪聖王の子を言ふか。優陀延(Udayana)、拘睒彌國王である。

【二】拘舍彌(Kauśāmbī)、又拘睒彌、拘剡彌、等に作る。拘睒彌國は中印度に在て周り六千餘里、土地沃穣、氣序熱し、都城の宮内に大精舍あり、高さ六十餘尺、内に刻檀の佛像あり、是れ優顛王の作る所、諸國の君主來つて之を移さんと欲するけれども能はず、遂に圖して供養し、倶に眞を得たと言ふ。城東遠からず、故塼室あり、世親菩薩此に於て唯識論を作る。其東菴沒羅林の中に故基あり、無着菩薩此に顯揚論を作る、其より東北七百餘里殑伽河の邊に迦奢富羅城あり、護法菩薩、此に外道を降伏した。

【三】迦陵頻伽(Kalaviṅka)、鳥の名。譯、好聲、和雅。雀燕の一種にて、聲美しいので名がある。命命之鳥。梵語者婆者婆迦(Jīvañjīvaka)の譯。法華涅槃經等には命命鳥と言ひ、勝天王般若經には生生鳥と云ひ、雜寶藏經には共命鳥と云ひ、阿彌陀經には共命之鳥と云ふ。鷓鴣の類。鳴聲より名ける。者婆は命或ひは生の意であるので、共命鳥であると云ふ。一身二頭の禽鳥であると。

【四】奇羅婆山王、不明。カ

で飢をしのぎ、衆蜂に螫され、野火起る如きであると說いてゐる。

文中多く出づる、五欲に身を亡した天神王侯の事跡は調査の手がかりが無い。

二　思想は特異のもののない、全く小乘系統に屬する經典である。

昭和七年六月十日

譯者　平等通昭　識

賓頭盧突羅闍爲優陀延王說法經解題

賓頭盧突羅闍爲優陀延王說法經、即ち賓頭盧突羅闍（Piṇḍolabharadvāja）の優陀延（Udaya）王の爲說法するの經は欲樂の害を說いた中大の平明な經である。

一、原作者と漢譯者

原著者は不明である。

漢譯者は宋(紀元四二〇―四七九)の求那跋陀羅(Guṇabhadra)である。彼は中印度の沙門であつて、階級は婆羅門族で、大乘に通じてゐたが故に「大乘」"Mahāyāna" の渾名があつた。紀元四三五年に支那に到達し、紀元四百四十三年迄譯經に從事し、紀元四百六十八年に七十五歲で死んだ。七十八部百六十一又は二百六十一卷を譯出したとも、或ひは五十二部百三十四卷を譯し、內紀元七三〇年に二十六部百卷が現存したとも言つてゐる。現在三藏中に二十八部存在してゐる。その內に楞伽阿跋多羅寶經・央掘魔羅經等を含んでゐる。

本經は紀元四百三十五―四百四十三年間に譯された。平明な文體である。

製作年代は漢譯年代四三五―四四三年以前であるといふより確定的なことは言ひ得ない。

二、結構と內容

賓頭盧突羅闍爲優陀延王說法經は拘舍彌城(Kauśāmbī)主優陀延(Udaya)に賓頭盧突羅闍(Piṇḍolabharadvāja)が『欲樂は味甚だ少く、憂苦は患甚だ多く、智者は方便を修め、速かに衆欲を離れ、勤めて淨行を行ず可き』を說法する形式になつてゐる。全體は散文の形となり、處々に韻文を引用してゐる。文體は簡明であつて、唯引用の神話人物が判然しない外は、平易である。文中多く巧みな比喩が現れてゐる。

思想は獨特のものを有するのでなく、欲望は害甚しく、諸天・諸の神話的人物・王侯が之の爲身を亡したことを記し、煩惱を斷ち智慧を以て愛を破し、無明の闇を壞するを勸め、五欲は善根を害するとなし、王位は尊嚴富逸高位であるが、須臾にして衰滅早く、恐怖が多く、命が危い、と巧みた譬喩を以て說破してゐる。財寶に散失あり、榮位は夢の如く、恩愛に別離がある、宮人婇女は端正美妙であつても無常にして會捨極りない、人生は生老病苦の苦に繫縛されてゐる。人あつて大象に追はれ、一井に樹根により下れば、白黑の鼠、根を嚙み、四邊に毒蛇、井底に大毒龍あり、僅かに樹上の蜜三滴

に會ふ。我皆な請を受くるも、汝自ら奴をして門中遮するを見せしむ。我、年老ひたるを以て衣服弊壊せり。是れにて擯[五]せらると謂ふ。賴提沙門前を見るを肯んぜず。我汝の請ふを以て强ひて入らんと欲す。汝の奴、杖を以て我を打つ。頭の額の右角の瘡を破る。是の第二會亦來る。復た前を見ず。我又强ひて入らむと欲す。復た頭の額中の瘡を打つ。是の第三會にも亦來る。前に打たれしが如く、頭の額左角瘡を打つ。是れ皆な汝自ら之を爲す。何の懊惋する所ぞ』と。言已つて現れず。長者乃ち是の賓頭盧なるを知り、爾より以來、福を設けて皆な敢へて門を遮せず。若し賓頭盧を得ば、其の座華、卽ち萎まず。若し新たに房舍床榻[六]を立てゝ、賓頭盧を請ぜんと欲する時、皆當に香湯を地に灑ぐべし。燃香油燈新床新褥、綿を奮ふて足を敷き、白[七]練を以て綿上を覆ひ、初夜にて法の如く之を請ぜよ。還た房戸を閉ぢ、愼んで輕慢に闚[八]看する勿れ。皆各至心に信ずれば、其れ必ず來る。精誠感徹して、至らざるなきなり。來らば則ち褥上に現れて臥處あり。浴室も亦現に湯水の處を用ゆ。大會を受けて請ずる時、或は上坐に在り、或は中坐に在り、或は下坐に在り、現に處に隨つて僧形を作し、人、其の異を求むれば、終に得べからず。去りし後坐處を見れば、華萎まず。乃ち之を知る。

請賓頭盧法（終）

【五】擯、すつ、しりぞく。賴提沙門、不明。

【六】狹長なる牀、こしかけ、ねだい、ゆか。

【七】練、ねりたる白絹、しろのねりぎぬ。

【八】闚看、闚、少しく視る、竊かに視る、うかがふ、のぞく。

請賓頭盧法

宋の沙門釋慧簡譯す

天竺の國に優婆塞國王長者有り。若し一切會を設くれば、常に[一]賓頭盧頗羅墮誓阿羅漢を請ず。賓頭盧とは字なり。頗羅墮誓とは姓なり。其の人樹提長者の爲に神足を現ずるが故に、佛、之を擯して涅槃を聽さず。勅して末法[二]四部衆の爲に福田と作らしむ。時に靜處に請じて燒香禮拜し、天竺摩梨山に向つて至心に稱名して言く、「大德賓頭盧頗羅墮誓は、佛の敎勅を受けて、末法の人の爲に福田と作る。願くは我の請を受けよ。此の處に食せよ。」若し新たに屋舍を作れば、亦應に請ふべきの言、願くは我が請を受けて、此の舍の床敷に於て止宿せよ。若し普く衆僧を請ふて澡浴の時、亦應に言を請ふべし。願くは我請を受けて、此に洗浴せよ。及び未明前に香湯・淨水・澡豆揚枝を具して、香油にて冷暖を調和し、人の浴法の如く、戶を開いて請ひ入れ、然る後戶を閉ぢ、人の浴し訖る項の如く、衆僧乃ち入る。凡そ會食澡浴に要て須く一切の請僧、至心に解脫を求むべし。疑はず、昧からず、信心淸淨にして、然る後屈すべし。近世一長者有り、賓頭盧阿羅漢は佛の敎敕を受けて末法人の爲に福田を作ると聞說し、卽ち法施して大會を設くるが如く、至心に賓頭盧を請ず。[三]氍氀の下遍く華を布きて、以て之を驗せんと欲す。大衆食し訖つて氍氀の華を發すれば皆萎む。懊惱して自ら責む。過の從つて來る所を知らず、更に復精竭して、審かに經師に問ふて、重ねて大會を設く。前華の如く、亦復た皆な萎む。復た更らに傾して家の財産を竭盡す。復た大會を作る。猶ほ亦前の如し。懊惱し、自ら責む。更らに百餘の法師を請じ、請ふて失ふ所を求め、罪過を懺謝す。始め上座の一人の年老ひたるに向ふて、四布して其の[四]愆咎を悔ゆ。上座、之に告ぐ、「汝、三我を請ずる

【一】賓頭盧頗羅墮誓(Piṇḍola bharadvaja)、略して賓頭盧、又は賓頭と云ふ。十六羅漢中の第一賓頭盧尊者である。永く世に住して白頭長眉の相を現じ、名は賓頭盧、姓は頗羅墮である。又賓頭盧突羅闍と云ひ、賓度羅跋羅惰闍と云ふ。賓頭盧は不動と譯し、頗羅墮は棲、疾、利根、重瞳など譯す。婆羅門十八姓中の一である。此人もと拘舍彌城優陀延王(又優塡王)の臣である。王は其の精勤なのに由て出家せしめ、阿羅漢果を證す。而して白衣に對して妄に神通を弄したので、佛の呵責を蒙り、閻浮提に住するを得ず、從ふて、西瞿耶尼洲を化せしめた。後閻浮の四衆を見んことを想ふて佛に白す、佛還るを聽し て涅槃に入るを聽さず、永く南天の摩耶山に住して滅後の衆生を度せしめた。

【二】四部衆。四衆又四部弟子とも云ふ。比丘(bhikṣu)、比丘尼(bhikṣuṇī)優婆塞(upāsaka)、優婆夷(upāsikā)である。

【三】氍氀、氍、けおりのしきもの、まうせん。氀、けおり。

【四】愆咎。愆、あやまち。

請賓頭盧法解題

請賓頭盧法は極めて少さな經典であつて、原作者は不明である。漢譯は宋の釋慧簡が爲した。

宋（四二〇—四七九）の慧簡（又は惠簡と記す）は沙門であつて、その生處は知られない。紀元四五七年に十又は十五作を譯出し、その內七作七卷のみ紀元七三〇年に存在した。三藏中に六作が現存してゐる。請賓頭盧法はその一である。

請賓頭盧法の製作年代は漢譯年代四五七年以前の成立であると言ふより確定的なことは言ひ得ない。

請賓頭盧法は天竺の一優婆塞長者が賓頭盧頗羅墮誓阿羅漢（Piṇḍolabharadvāja-arahat）と外諸僧を供養に招待した。席上華萎むこと再三なので、長者憂えてその理由を僧に問ふと、弊衣の老僧が賓頭盧て、門を入る時弊衣なる爲め門を遮され、强いて入らんとすれば、額の右角の瘡を杖を以て打つた、その罪の故華萎むと告げた。長者は門を閉じ、輕慢の心を抱くを禁じ、供養の席を設けた。その時華は萎ばなかつた。

この小經は一の賓頭盧の逸話を記すもので、特別な佛教思想は記してゐない。行文平明である。

昭和七年六月十日

譯者　平等通昭識

師子宮	Siṁha	太陽位	（日）	太陽分
女宮	Kanyā	辰星位	（水）	
秤宮	Tulā	太白位	（金）	
蝎宮	Voikāś	熒惑位	（火）	
弓宮	Dhanus	歲星位	（木）	
摩竭宮	Makara	鎭星位	（土）	
寶瓶宮	Kumbha	鎭星位	（土）	太陽分
雙魚宮	Mīna	歲星位	（木）	

七曜とは日月と火水木金土の五星である。宿曜經下によつて、胡國波斯語天竺語を擧ぐれば、

	胡名	波斯	天竺
日曜太陽	蜜 Mihr	曜森勿 Yok sumbad	阿儞底耶 Āditya
月曜太陰	莫 Māh	婁禍森勿 Douhsumbad	蘇摩 Soma
火曜熒惑	雲漢 Vāhrām	勢森勿 Seh sumbad	盎哦囉迦 Aṅgāraka
水曜辰星	咥 Tīr	掣森勿 Chehar sumbad	部陀 Budha
木曜歲星	鶻勿 Hur muzd	本森勿 Ponj sumbad	勿哩訶娑跛底 Bṛhaspati
金曜太白	那歇 Nāhid	數森勿 Shosh sumbad	戍羯羅 Śukra
土曜鎭星	枳院 Kovān	翕森勿 Haft sumbad	賖乃以室折羅 Śanaiścara

【八六】　五綵。綵、あやぎぬ、彩文の繒。あや、もやう、いろ。五色のあやぎぬを言ふ。

【八七】　毘盧遮那心印。毘盧遮那(vairocana)。又毘盧舍那、等に作る。佛の眞身の尊稱である。之を解するに諸家一準でない。先づ天台は毘盧舍那と盧舍那と釋迦とを次第の如く法報應の三身に配し、毘盧舍那を徧一切處と譯し、盧舍那を淨滿と譯す。華嚴はこの二を梵名の具略として報身佛の稱號とし、光明遍照或ひは單に遍照と譯す。其の故は舊經には盧舍那と說き、新經には毘盧遮那と說くからである。密家は毘盧舍那を理智不二の法身佛の稱號とし、或ひは大日、或ひは遍照、或は最高顯廣眼藏と譯す。

【八八】　提攜。互に率き行く義。相扶くる義。

【八九】　泯。ほろぶ、つく。ひろし、くらし。

【九〇】　雞足山。梵kukkuṭapāda 迦葉尊者入定の山、摩竭國に在り。又狼跡山と言ふ。

【九一】　以下。佛陀の涅槃、分舍利起塔等を記す。

【九二】　毳。地質細く厚くして紬に似たる織物。裁縫を用ひずして織りて成したる大衣。

棺、棺の外郭、即ち棺を納むるむつぎ、くはひつぎ。

【九三】　拘尸羅城。Kuśinagara 又、俱尸那。拘夷那竭等。城の名。譯、角城、茅城など。世尊入滅の處。

【九四】　頭陀(Dhūta)。又杜荼、杜多。譯抖擻、料揀、淘洗など。衣服飮食住處の三種の貪着を抖擻ふ行法を言ふ。

【九五】　舍利(Śarīrāḥ)。復數の場合は特に佛陀の遺骨をいふ。此處に分舍利起塔の事を記す。

【九六】　彌勒(Maitreya)。釋迦佛の次に出る未來佛。詳しくは前出。

密跡力士大權神王經偈頌（終）

各廣五百由旬毎に八天あり。凡て三十三天となす。

【七五】 優鉢。優曇鉢(Udumbara)。又優曇波羅、烏曇跋羅等。譯、靈瑞、瑞應。花の名。又無花果の如き果の名。

【七六】 闡。ひらく、あく、あらはる、あらはす。

【七七】 十地思想。こゝでは大乘菩薩の十地を言ふ。

初果。一、歡喜地、菩薩既に初阿僧祇劫の行を滿じて初めて聖性を得て見惑を破し、二、空の理を證し、大歡喜を生ずる位であるので、歡喜地と言ふ。

法雲地。智波羅蜜を成就し、亦修惑を斷じて無邊の功德を具足して無邊の功德水を出生すること、大雲の虛空を覆ふて清淨の衆水を出す如くである故に法雲地と云ふ。

【七八】 正像末、前出。

【七九】 靠。相違ふ。たがふ、よる、つく。相連なる、つらなる、竪、たつ、なほし。

【八〇】 爍。光明を發す、ひかる、てる、かゞやく。瓏、躐に同じ。足を高く舉ぐ。あぐ。

【八一】 貝葉、前出。

【八二】 垢膩。あかつき、油しむ。あか。

【八三】 蘸硃印。蘸、物を水に投ず、いる、ひたす。

【八四】 羊の具。羊の氣、羊の脂、にほひ、あぶら。

【八五】 星宿。又宿曜と稱し、印度の天文法である。この內二十八宿 Nakṣatra 十二宮、Rāśi 七曜 Graha の別あり。人界天界の一切の事實は恒に相反影して、吉凶の相は宿曜に現はれ、且つ星宿の運行によつて人界の個人の運命が豫定せられるものと信じたのである。

これ日月の運行を區劃する爲に平常目に見る處の群星を以て標據とし、天の分野となしたものであつて、その數を二十八舉げた所以は白月一日より黑月の終に至るまでの分野を一日一宿に割したものの如くである。今宿の名目を示せば次の如くである。

	宿	梵名	主	神	被主物
西方の七宿	奎	Revatī	Pūṣā	甫沙神	行船人
	婁	Aśvayujau	Gandharva	乾闥婆神	商人
	胃	Āpabharaṇī	Yama	焔摩神	婆樓迦羅國
	昴	Kṛttikā	Agni	火神	水牛
	畢	Rohiṇī	Prajāpati	生主神	一切衆生
	觜	Invakā	Soma	月神	霸提訶國
	參	Bāhū	Rudra	荒神	刹利
南方の七宿	井	Punarvasū	Aditi	日神	金師
	鬼	Tiṣya	Bṛhaspati	祈禱主神	國王大臣
	柳	Āśleṣā	Sarpā	蛇神	雪山龍
	星	Maghā	Bhaga	薄伽神	巨富者
	張	Pūrve-Phalgunī	Vasu	婆藪神	盜賊
	翼	Uttare Phalgunī	Āryamāpitā	阿利耶摩神	貴人
	軫	Hastā	Savitā	娑毘怛利神	須羅吒國
東方の七宿	角	Citrā	Tvaṣṭā	惡宰利神	衆島
	亢	Niṣṭyā	Vāyu	風神	出家求道
	氐	Viśākhe	Indra-Agni	因陀羅祇尼	水・衆生
	房	Anūrādhā	Mitra	密多羅神	行車求利
	心	Rohiṇī Jyeṣṭhaghnī	Indra	因陀羅	女人衆
	尾	Mūlabarhaṇī	Nirṛti	儞律神	洲渚衆
	箕	Pūrva Āṣāḍhā	Āpa	水神	陶師
北方の七宿	斗	Uttara Āṣāḍhā	Viśve-Devā	毘說神	說部沙國
	牛	Abhijit	Brahmā	梵天	刹利・安多・鉢羯那國
	女	Śravaṇā	Viṣṇu	毘紐神	鴦伽摩伽陀羅國
	虛	Śraviṣṭhā	Vasava	婆娑婆神	那遮羅國
	危	Śatabhiṣaka	Varuṇa	婆樓拏	葦華冠
	室	Pūrve Proṣṭhapadā	Ahi Budhniya	阿醯多陀鞞難神	乾陀羅國輪盧那國及龍蛇
	壁	Uttare Proṣṭhapadā	Nidrā	尼陀羅神	乾闥婆諸樂

十二宮、これも天文占星の法に供したものであつて、他國から印度に傳承して來たものであると。この名目と形像は胎藏界曼荼羅外金剛院にある。曼荼羅の名と宿曜經の名とは少し異るが、大體同じである。卽ち十二宮に於ても二十宮八宿に於けるが如く、各分掌の主事物があつて吉凶を判斷するのである。卽ち太陽分の六宮は次第の如く軍旅、宮房、庫藏、病患、將相、刑殺のことを掌り、太陰分の六宮は學事、吏職、廚膳、馬廄、戶鑰、獄訟の事を掌る。

宮	梵名	七曜配位		
白羊宮	Meṣa	熒惑位	(火)	太陰分
金牛宮	Vṛṣa	太白位	(金)	
雙女宮	Mithuna	辰星位	(水)	
蟹宮	Karkaṭa	太陰位	(月)	

我が佛の慈悲して曬屬善利を得る。

力士告げて言ふ『螺髻菩薩よ、聽け。秘章流布して直至つて地に退かず。聽法の大衆右遶して神王立つ。白して大聖に言ひ、今日方に跡を見る。』

螺髻は如來の寂滅を示すを白言し、左化の神王頂光如來出づ。我が佛、呪を說いて力士經義を談じ、守護流布して敢へて佛勅に違せず。

螺髻發願して如來の印證知り、末法の衆生天魔外道欺く。分身百億の閻浮提に遍滿す。妖精を掃して衆生は災滯なし。

時に大神王、是の經呪を說き已つて、八臂の器仗頂光如來 [八九]泯す。紫金光聚漸々に金軀に近き、光明の身相盡く如來の體に入る。

明空寂樂妙有にして眞空虛にして、迦葉は佛を離れて [九〇]雞足山中に住す。顚倒を觀行して徒弟晨朝に議す、必ず是れ如來早晚滅に入りて去る、と。（纏縛、空寂に歸して舍利を示現す。）

[九一・九二]氈を付くること千疋にて善逝の體を纒裹し、金棺銀槨自然に空中より起る。[九三]拘尸羅城四門都遊履し、[九四]頭陀薪を執つて三昧の火自ら起る。

八萬四千分身眞 [九五]舍利は依して情界に散じて寶塔此より起る。天上の龍王先づ二つを分つて停去し、[九六]彌勒出世して迦葉は身體を焚く。

信受奉行して經の流通の頌に依り、諸佛慈愍して我が差錯の過を赦し、誓願四生し同じく唯心の座を證す。眞實に八識蓮宮の理を悟るなし。

多生の障翳方さに良藥餌に逢ひ、今慶幸を生じて省み得て消息たし。群生を味覺して自省して出離を求め、根本圓明にして那裏帝自在なり。余佛の功德法界の內を利濟し、情器二處十方無窮の類、耳に佛聲を聞いて頓に三惡趣を絕ち、各請ふて當元來を承く。本是れ爾り。

大乘の涅槃には具さに四德を具へ、小乘の涅槃は四義不淨である。小に據つて小を說けば、小乘の涅槃には常樂淨の三あつて、唯我の一なし。何となれば、涅槃は無爲にして、四相に遷されざれば說いて常となし、又所斷の惑體永く滅して起らなければ常と名け、寂滅の體永く安きが故に樂と名け、垢染を離るるが故に淨と稱す。而かも、かの涅槃の中には身智倶に滅して自在の大用なきが故に我と名くべきがない。次に我に據て小を說けば、或る時に全く四德を奪つて、悉く無しとす。或る時には樂淨の二を與へて、我常の二を許さず。全く之を奪ふは彼尙變易生死を有するからである。淨樂の二を許すは分段生死を離るる上に就て、一分淨樂の義があるからである。（織田）

【七三】誂。とふ、おほし、和ぎ集る貌。衆人言ふいふ。

【七四】叨利、忉利天（Trāyas-triṃśa）。譯、三十三天。欲界六天中の第二。須彌山の頂、閻浮提の上、八萬由旬の處にある。この天の有情、身長一由旬、衣の重き六銖、壽一千歲である。城廓八萬由旬、喜見城と名ける。帝釋がこゝに居住する。嶺の四方に峯あり、

大權忿怒して化王の知を告示す。善い哉、大慈、汝能く此の事を作す。普く衆生を滿して大惠恩を均霑し、大行願力、衆生利益を得る。（本體神王、次王を讚嘆す。）
次の二神王の所作の能事畢り、寶印靈符、衆に對して親しく付囑す。螺髻極めて梵夾靈文を授けて禮あり。『爾成佛して威本神王の力を支へよ。慈善根力大衆賢聖の力、諸佛菩薩加へて威神力を被る。累功專心して持誦し廣く流布せよ。末法の衆生をして大害に遭はしむる勿れ。』
次王は頂光如來の說を告示し、大滿呪王手指結印起る。五種の寶印は四十二を列宿し、各〻神用禁制を存して汝の意に由らん。』
本呪の功能之を說くも盡すべからず。精嚴加持して諸神異を詔示す。水泙き波動いて寶杵横まに飛轉し、像儀の光出でて言語端的に奉ず。
夢中禪定に親しく釋迦尊を見、法報化身大權神王の像、妙音撫でて凡有の求禱する所を須ゆ。神交はり氣合し[八六]五綵法物隱る。（次二神王隱る。）
次の二化王、大光明を放つて出づ。本體の神王の光明、頂より起る。二王交灌して變化王を融して隱れ、本體の神王八寶依然として擧ぐ。
化王既に力士神王の說を隱し、適〻來つて所化の忿怒明王出づ。我が三頭八臂を畫き、及び右を按じ、威儀進止實印靈符秘あり。（圖明無相）
釋迦智佛左心に力士起り、大權の所化次王、空より至り、虛空法界無量の諸如來、皆[八七]毘盧遮那心印より出づ。
螺髻鞠恭合掌して頭面に禮す。多く[八八]提撕を蒙つて攝受して正路に歸す。自前の惡念今月盡く斷除して、自ら眞如と佛と同一體なるを悟る。
化佛授記して螺髻疑慮なく、證果成就して冷煖自ら知るを得。一行部衆同じく菩提の記を受け、

【六五】芯芻(Bhikṣu)。又比丘。佛教僧侶のこと。
【六六】瓮。もとひ、かめ、缸、かめ、もたひ。
【六七】娑竭羅龍。娑伽羅龍とも書く。娑竭羅は梵音(Sāgara)海の名。鹹海所在の海に依つて名を得た。或ひは國によつて名を得たと。
【六八】錯。かざる、ちらばむ、まじる。といし、やすり。
【六九】魍魎。水の神、又山の精。一說に木石の怪、よく人の聲をまねて人をまよはすといふすだま。
【七〇】蟲。腹中の蟲。骷、かいがねぼね。髏。髑髏は皮肉の脫落した頭顱、あたまのほね。蝸。木の中に生じて內より木を食らふ蟲。きくひむし、くはむし。すくもむし。蜈蚣、むかで。蠊。
【七一】狰䂕、丹砂、あかずな。
【七二】闡提。一闡提の略。不成佛の義である。此に二種あり、一に斷善闡提、大邪見を起して一切の善根を斷ずるもの。二に大悲闡提、菩薩大悲心ありて一切衆生を度し盡して成佛せんと欲し衆生盡きざる故に已れに畢竟成佛の期なきもの。
【七三】常樂我淨。涅槃の功德である。涅槃を常樂我淨の四德について大小を分別すれば、

第二隱蔽無見の自在の印は、香木一寸七分之を刻んで用ゆ。是の如く國家の方法は前に照らして同じ。無爲空寂にして如來の論に擬するに堪ゆ。

三顯騰空自在無礙印は香木一寸五分是の如く空し。髻中の衣物遍篋印呪の文、塵中に周遊して方に菩薩の行を省る。

神氣交合自在密呪印は一寸二分深直文篆定る。[六三]蘸硃印は心人非人等敬す。空に達する能はず、自ら省みて比論し難し。

次王畫く所の四大寶印已は衆と會し遠く四十二を畫くに堪へたり。梵夾の靈文具多葉上に成じ、一一分明に梵字體を離れず。

次に神王畫く所の符印を化し訖つて、大衆悲喜し次王合掌して禮す。啓して本體に白す。『我が神王を化して知る。並びに大衆我れ端的を說くを聽く。』

五濁惡世は淫欲を根本となす。生熟二臟腹內に生理を作す。髮毛爪齒涕唾及び膿血・筋骨髓腦盡く是れ腥[六四]羶物なり。

[六五]日月風には旋轉を持して晝夜を爲し、金木水火土居方隅に重し。羅睺計都月孛三宿動き、四斗分界七星・北斗を拱す。

角亢を首となし二十八尊將、烈虧變怪人間、禍福を主る。天罡河魁紫氣は人の美を照らす。一四天下帝釋を主宰と爲す。

根本智佛所化の大千界、百億の日月五星、諸宿を列す。主持方隅災福氣候等、衆生の逆境皆な是れ爾ち自ら修す。

末法の善人は須らく惡黨類に從ふべし。促命短壽我が慈門偈を捨つ。闡提の心損害を發す。茲甸の意、呪印緊切にして依然として佛は世に在り。

六十七年に及ぶ。初め鎬京に都し、後河南に遷る。又郭威漢に代り、天子の位に即き、三世恭帝に至り、趙匡胤に滅さる。三世合して十年、即ち五代の周である。又六朝の時、宇文泰、西魏の後を受けて、天子の位に即き、國號を周と改めた。傳へて五世闡に至り、隋に滅された。年を歷ること僅かに二十五年、所謂後周である。この周は初めの周でない都は長安。五五七―五八一年。魏。北魏は元姓の王朝で、都は恒安又は中山、(四九三年まで)、と洛陽であつた。紀元三八六―五三四年迄。曹姓の魏は都は洛陽、紀元二二〇―二六五年である。唐。王朝の名。唐分李淵が隋に代つて帝位に即いた時の國號。代を重ねること、二十年を閱すること二百九十年、終に權臣朱全忠に滅さる。六一八―九〇七年。之等は凡て支那の年號故、大體この經は支那撰述と言ふことが出來る。

【六三】　差役。差、つかふこと。役、つとめ。

【六四】　阿鼻輪。阿鼻(Avici)。譯して無間地獄之である。無間とは苦を受けること間斷なき義である。八大地獄の一。最苦處。極惡の人之墮す。

次の二神は空に乘りて忽然として至り、手に貝多白氎數丈餘、魚膠蔡粉諸般顏色聚を操げ、筆を擧げて纔かに動せば像は嚴として二異なし。

次の二神王來りて金棺の軀を遶り、啼哭作禮白言して智佛知る。螺髻の殃害、本佛直際に歸し、左心所化の本體神王出づ。

本體の神王は螺髻を調伏して歸り、我が分身小王を化して末世に流す。福通變化惟如來の知るを願ふ。放光の印證、凡世に表記す。

次に化神王・神王を圍遶して禮し、白言す。『聖者大聖化して我出づ。衆と施設して假を以つて眞實を存す。願くは王、光を放つて眞實語を照察せよ。』

寂光如來の毫光棺中より出で、本體の神王百寶光明輝く。寶光二滴灌いで化王の頂にあり、諸佛の印證、凡世に流傳す。寂光如來光を放つ。本體神王、光を放つて王頂を灌化す。

化王即時に右手に筆を引きて起り、聖像端嚴にして三頭及び八臂あり。九目閃[六〇]爍して索を執りて都べて圓滿に、頂光如來合掌して端嚴にして啓す。

左に寶石を踏んで右印、足を蹺げて立ち、八龍は臂に纏ふて一切神變異る。本體の神王一一都べて異なるなく、大衆瞻仰して即時に光明出づ。

[六一]貝葉の畫く所の宿命の功德智、智印香木一寸八分に刻み、篆文深直分明に細膩硃あり。印は素帛に在りて永遠に災滯なし。

宿命智印印し已つて呑服し竟り、即ち三昧を獲て分つ、變易を證る。凡夫の幻體は總持の門を證し難く、[六二]垢膩の行頓みに淨妙心を證す。

宿命の功德は現世の果を感得し、手足心中塔上は意寶の如し。未だ最上を成せずして智辯の才を獲て、心眼靈明にして諸法自然に成す。

初の人である。奇生の胎卵濕は共に現見することを得る。其の化生は龍と揭路荼(Gändh……)鳥との如くである。次に鬼趣は胎化の二種である。胎は餓鬼母の四夜所生の五子を食ふと云ふ如く、次に一切の地獄と天人と中有とは皆唯化生である。

【五二】 慄毒。慄、うれふ。

【五三】 耆婆(Jivaka)。又耆域時縛迦、譯して固活、能活。王舍城の名醫で、國王と佛陀僧團の侍醫であつた。

【五四】 伽陀(Gāthā)。前出。

【五五】 貝多葉。或は貝多羅。(pattra)葉但し傳說には貝は葉の義。多羅(tāla)樹の葉を貝多羅といふ。古くは三藏の經典、皆、之に記した。多羅樹の形は棕櫚の如く葉亦相似てゐる。

【五六】 瘥。病、小疫。

【五七】 斲。きる、たつ、のぞく。

【五八】 瘥瘥。瘥、いゆ、なほる。病除く。瘥、いゆ、いゆる。

【五九】 五星。不明。

【六〇】 措。おく、もちふ、すておく。

【六一】 五路。不明。

【六二】 周、武王、殷を滅して之に代り、王位について以後の國號、赧王に至つて亡ぶ。代を改むること三十七、八百

利を了するを失ふ。螺髻を調伏して勞あるも如來出でられよ。我今所頭身相は威儀を現し、根本智佛の左心、化現して出ず。大滿神呪頂光の化佛宣す。所作の功德は呪法の儀式を誦す。本體神王結印儀式都攝寶印は左右無名指を屈して掌中二指に向つて相（ちやかうしゆ）龕豎す。中指は左上右下して同じく指頭を捻じ、指直大拇の中節底に豎つ。

手印は呪を世間所有の事に加ふ。惡人邪鬼皆な呪師に向つて禮す。惡逆心を捨て、尊命によりて驅使を聽き、敢へて誓願堅固力に違逆せず。

禁山の寶印右手に名曲なく、四指平直に、進退各〻七步にて、一呪一印左右上下に顧み、其の呪印を散じて自然に惡心止む。

無雷の寶印は惡風雹雷震ひ、暴雨霖久しく、中指・無名・小、頭指直豎し、大拇は中節を捻じ、左手印呪に雲散じ、日光出づ。

頓病の寶印は右手を莊嚴に啓し、頭指・中指屈して掌中の裏に向ふ。二指並直にして五勢七傷無く、一呪一印一百八遍奇なり。

五路の寶印は左右の無名指を曲げて掌中に向けて八指皆な直立す。卒かに死せる生人、印を心上に散じて高聲に誦呪すれば魂魄は殼體に還る。

惡人鬼神は持呪主を犯せんと欲せば、出入詳かならざるとも逃亡の體を追補す。晝夜賊は牛馬猪羊の類を盜むも、飛禽走獸情識して捨て去らず。

神王は衆會の善智識に示教す、五大寶印信受して奉行し已り、四枚の正印四十二道の秘、末法に伸援して展轉流通し去る。

大權別化して忿怒の次王出で、威儀進止本元と異るなし。本體の神王は寂然として定に入つて住す。物を執つて動かず、此より像儀を留む。本體神王は次王に化現して、忽然として虛空に於て至る。

す。是れ無量壽の忿怒身にして觀音を以て自性身とし、馬を以て頭に置けば馬頭觀音とも言ひ、馬頭大士とも云ひ、大忿怒威猛摧伏の形であるので、馬頭明王と稱する。五部の明王中蓮華部の明王である。馬を載くのは、轉輪聖王の寶馬が四方を馳驅して之を威伏する大威勢力大精進力を表するのである。又無明の重障を噉食する意である。

【五二】　胎卵出生。梵語（Caturyoni）印度にて生物の出生を四種に分つ。一に胎生（Jarāyuja）、普通の人類の如し、母胎に在て體を形して後出生するもの。二に卵生（Aṇḍaja）鳥の如く卵殼に在て體を形して後出生するもの。三に濕生（Saṃsvedaja）虫の如く濕に依つて形を受くるもの。四に化生（Upapāduka）依託する所なく、唯業力に依つて忽ち起るもの。諸天と地獄及び劫初の衆生が皆是である。之を五道に分別するのに、人趣と畜生趣とは各四種を具す。人の胎生は今の世人の如くで、人の卵生は世羅と鄔波世羅と鶴卵より生じ、鹿母所生の三十二子の如くである。人の濕生に曼馱多と遮羅と鄔波遮盧と鴿鬘と菴羅衞等の如くである。人の化生とは唯劫

劫修行して證して如來の地に入る。

螺髻清淨光佛を證得し、調御丈夫の十號皆具足す。佛壽二萬天人法音を聽き、廣宣流布するに應に雜類の身を以つてすべし。

二乘聲聞緣覺の侶を示現し、卽ち佛身一乘至理の趣を現して、胎卵濕化、上つて菩薩乘に至るまで蠢動含靈皆な光明音を聽く。

[47]初果を證得し直ちに辟支位に至り、遠く法雲を行じて十地滿心して住す。無上佛果大菩提を成就し、[48]正像末法佛壽二萬歲なり。

光明如來は入滅寂滅し已つて、次第に一尊に授與して菩薩繼ぎ、今日所歸の大臣眷屬類、次第光明如來の體を證する所なり。

其の佛國土皆無垢世と名づく。天龍八部四衆盡く歸依す。今宣ぶる所の清淨光明佛と並びに差別なく、同じく無垢世に住す。

無垢世界の菩薩二乘人、八部の威靈四衆は法音を聽き、光明如來今の化佛と同じく、大滿神呪四十二道の聖を宣ぶ。

清淨如來緣畢つて涅槃し已つて、三昧の智火身を焚いて舍利を收む。寶塔を建立して高く梵天所に至り、天人四衆は供養して福處をなす。

爾の時螺髻は諸同來者と化を崇つて、如來授與の菩提の記し、歡喜勇銳して卽ち無量乘を獲たり。

一時の間大いに佛事の起るを作す。

大權神王諦かに化佛の說を聽き、心中踊躍歡喜し、讚嘆し禮す。淸衆螺髻の諸上人に告示し、宿業所感、大善利喜を得。

神王は再び宣す。[50]『本師釋迦佛よ、入滅して汝末法の世を愍むことを示現し、有情の包識、功德の

集あり、平平色に對する中に陰あり、集あり、一根に六あり、六根合して三十六あり、之を心意識の三世に配して百八あり、之を百八煩惱となし、經中五十法に就て一一に此の百八煩惱を擧ぐ。

【四六】 塵勞、煩惱の異名。貪瞋等の煩惱は眞性を坌穢し、身心を勞亂すれば、塵勞と言ふ。

【四七】 百惑、迷妄の心。所對の境に迷ひて事理を顚倒するを惑と云ふ。貪瞋等の煩惱の總力である。

【四八】 些兒。些、すこし、すくなし。

【四九】 四魔、一に煩惱魔、貪等の魔惱能く、身心惱害すれば、魔と名く。二に陰魔、又五衆魔云ひ、新譯に蘊魔と云ふ、色等の五陰能く種々の苦惱を生ずれば魔と名く。四に他化自在天子魔、新譯に自在天魔と云ふ。欲界の第六天卽ち他化自在天の魔王能く人の善事を害すれば魔と名く。此の第四を以つて魔の本法とし、他の三魔は類從して皆魔と稱す。

【五〇】 馬頭觀音。梵名、阿耶揭梨婆(Hayagrīva)、胎藏界觀音院の一尊。六觀音の一とす。止觀所說六觀音の師子無畏觀音に配し、畜生道の敎主とな

臭氣遠く蒸して化して[十五]優鉢果を成ず。

根本智の佛、千百億を示現し、常に不滅に住して佛は佛滅に住して去る。衆生祈禱して大誓願を立てゝ持し、處に坐し幻化の法身軀に安養す。

堅持の苾蒭、坐して多寶塔に住し、精嚴頓みに釋迦牟尼尊を證す。誓願驅使して持呪の人に奉承し、六神通を獲て大解脫門を得。

神王の誓を說いて人の疑忌を生ずるを恐る。惟願はくは如來眞實際を照察し、證明を作さん爲めに諸衆生の疑を破り、疑怖を懷かず再[十六]聞して雷音起らんことを。

爾の時如來般涅槃に寂すと雖も、左心示現して百寶光明出づ。十方諸佛、光を放つて金體を灌ぎ、菩薩聲聞四衆生、希奇なり。

螺髻の我慢臣左眷屬の類、同聲讚嘆して心中に十分喜ぶ。道眼・照徹して空眞如の理に達し、塵沙佛國等妙覺地を覺る。

頂光化佛熙怡として微少起り、神王大衆に告示して宣語を聽く。根本智佛釋迦牟尼陀、失照して作業の螺髻鬼を降伏す。

化佛は根本智佛滅を宣說し、螺髻の惡逆左心より出ず。人天驚疑し魔天を收攝して歸る。佛に代りて事を行ひ、眞如慈悲出づ。

天魔手を拱いて智佛を望著して禮し、臣屬部衆、緣熟して當さに受記すべし。會に在る淸信、各ゝ菩提の意を發し、永く退轉なく、堅固に誓願を持す。

放光如來手を舒べて螺頂を摩し、善い哉、善く學んで邪を捨てゝ正路に歸す。授記を蒙むるを得て、眞如の性を領悟し、改むる故に新勇猛精進力を重さぬ。螺髻王、授記を蒙むるを得て、名けて淸淨光明佛と曰ふ。

梵王は記を得て同來の善智識たり。六十億劫諸菩薩の位を修す。十方に廣く恒沙佛を供養す。果

脫せしめるので結と云ふ。卽ち生死の因となるもの。九結とは一、愛結、貪愛である。二に恚結、瞋恚である。三に慢結、憍慢である。四に癡結、事理を了解しない無明である。五に疑結、三寶を疑惑するのである。六に見結、身見邊見邪見の三である。七に取結、見取見、戒禁取見の二種の取着である。八に慳結、己が身命財寶を慳惜するのである。九に嫉結、他の榮富を嫉妬するのである。十纏、十纏の妄惑あり、衆を羅縛して生死を出でしめず、涅槃を證しめないので、十纏を名ける。一に無慚、二に無愧、三に嫉、四に慳、五に悔、六に睡眠、七に掉擧、八に昏沈、九に瞋恚、十に覆である。

二十五有、三界を開いて二十五有となす。欲界の十四有あり。四惡趣四州六欲天である。色界に七有がある。四禪天及び初禪中の大梵天、並びに第四禪中の淨居天と無想天とである。無色界に四有あり、四空處が是である。三界を通じて二十五の果報があり、二十五有と名ける。

百八煩惱。百八結業に同じ。又五十校計經に眼根の好色に對する中に陰果あり、集因あり、惡色に對する中に陰あり、

素子息なく秘呪都て攝錄し、百病の婦女、鬼貽年を延びて滯る。祖宗禍を見て男女孝義を行ひ、鬼怪山魈も印を呪すれば卽ち平覆す。

染勞傳尸邪鬼夢に交ゝ感じ、鼻口四肢巨富去つて寶を採る。若し官に遭ふて訟囚せらるれば禁使ち免かるゝを得る。敵に臨みて鋒を交れば逆賊自然に息む。

佛地を求めて成就せざる者なく、佛滅して天魔及び[七二]闍提を降伏す。一切世事種々遂げざるなく、寶王密語し、光を放つて如來說く。

常樂我淨にして心猿意を繫縛し、所願果して善逝は皆虛語ならず。眞語實語にして如來に誑語無し。阿耨多羅三藐三菩提なり。

伽陀靈驗諸佛菩薩の說なり。聲聞天仙印符畫像を設く。宿昔の大願禪那精進力なり。梵志外道聰明にして黑漆の如し。

寶杵の神王、如何ぞ敢へて自から[七三]詵し、頂上の化佛神呪の語を宣說し、忿怒して身を騰らして八臂執る所の物、普く無量百寶の光明を放つて出だす。頂光化佛は亦大人相を放つ。合掌當坐して口に無量光を放つ。互に相照映して幻術の災を散壞す。穢跡を消滅して螺髻鬼を調伏す。

三界の諸天・四王・[七四]忉利等、六道の脩羅住世の梵王の衆、地主恭敬して大衆跪膝して禮す。神通を宣說して密呪の音を圓滿す。

爾の時神王頂光化佛說く。大方廣大圓滿神通力、正しく遍く智覺して法を聽く。天人衆、淨法眼を得て各ゝ三昧の證を獲たり。

螺髻を提携して先づ二部を遣はして歸り、前後圍遶して同じく涅槃所に到る。化佛神王遍く十方を歷て去り、化佛は說法して衆生を利濟するの主なり。

大權神王宣諭して四衆聽き、適ま來りて我が佛神呪音を宣說す。魔宮城塹盡く倒れて留存せず。

となすのである。

【四四】六塵。色聲香味觸法の六境を言ふ。此の六境眼等の六根を有して身に入り、以て淨心を坌汚すれば塵と名く。七漏。漏、梵語(Āśrava)、煩惱の異名である。漏は流注漏泄の義。三界の有情は眼耳等の六瘡門から日夜に煩惱現行して心をして連注流散せしめて絕へないので、漏と名ける。八垢。垢、妄惑心性を垢がせば、垢と名ける。煩惱の異名である。六垢、惱・害・恨・諂・誑・憍の六法。能く淨心を汚穢するので、名けて垢と云ふ。七垢。一に欲垢、他をして自己の德を知らしめようとするを云ふ。二に見垢。自己の功德に於て執着分別の見を生ずると云ふ。二に疑垢、自己の功德に於て疑惑を生ずるに云ふ。四に慢垢、自己の功德に於て他と校量して他を輕ずる心を生ずるを云ふ。五に憍垢、己の功德に於て貢高欣喜の心を生ずるを云ふ。六に隨眼垢、自己の功德を他の諸煩惱に蓋覆せらるゝを云ふ。七に慳垢、自己の功德に於て慳惜の心を生ずるを云ふ。

【四五】九結、結縛の義。繫縛の義、煩惱の異名。煩惱が因となつて生死を結果するので結と云ひ、又衆生を繫縛して解

像動きて空中雷震を鳴らす。
牟尼の火大權神王を化して佛となり、三種の名號及び佛世尊を誦すれば、大いに潤して甘雨は遍く閻浮提に灑ぐ。久雨物を損すれば、雷を止め晴霽を得る。
象馬蛇牛禽獸調制し難く、時に疾病を行へば、但だ神呪の水を飮む。蛇鼠惡蟲は他の諸般の物を損す。水を屋地に灑げば自然に他に跡なし。
所有の禁制は一一說いて盡きず。慇懃仔細に請ふて正經を看て去る。超凡入聖皆是れ爾の自心なり。眞如に達せず、[六八]錯を枉去して心を用ゆ。
夜叉・惡鬼山精並びに地靈、水府巖穴樹石一切の廟に[六九]魍魎邪魔久しく住して人間に反し、家國を侵犯す。都て攝して際遣し了る。
金蠶・蛇・[七〇]蠱・蛞・蜋・金銀蝎・蜈蚣・蝦蟆一切の蠱神衆は飮食中下、良人の命を殺壞す。寶印雲符を佩帶して損ずる所なし。
狼心狗[七一]猝・人面の畜生類、生年日月乳名達して知り得。彼の名を硃書して脚心實地を踏み、大手都攝悔責して頭面に禮す。
心智頑鈍にして分曉を知る所なく、智慧を欲求して都攝して伽陀に用ゆ。呪印を呑服し、默して大辯才を與ふ。總持多聞博雅にして究竟すること多し。貧窮し苦を受くるも誦念すれば孤富を給し、長生不死戒定と菩提と衆生に惠施して大いに貴富なり。神丹を學習して紫磨黃金勝る。
分段身形變易して常に壞せず。定めて分段神通に入りて長く自在なり。鳥は空に飛びて往來して罣礙なきに似たり。頂上火を出して脚下水海を出す。
變易礙なく聖凡測度し難く、像前禁山に誦念して前の如くなす。住居水乏しければ穿鑿して香しき甜水あり。衆生の病證即時に消散し去る。

舊に阿梨耶と云ふ。無沒と譯す。無沒は不失の義。藏と同意である(賢首)。又生死に在れども失沒しないので、無沒と名ける(淨影)。

【四一】　泥梨(Niraya)。又泥梨耶。譯、地獄。不樂、可厭、苦臭、苦器、無有など譯す。其の依處地下に在るを以て地獄と云ふ。

【四二】　六情。舊譯の經論多く六根を謂つて六情と爲す。根に情識を有するからである。是れ意の一は當體の名である。意根は心法であるからである。他の五は情識を生ずるので、所生の果に從つて情と名くるのである。

【四三】　八十八使。使、煩惱の異名である。喩へて煩惱に名ける。世の公使が罪人に隨逐して之を繫縛する如く、煩惱亦行人に隨逐して三界に繫縛して出離せしめず、故に使と名ける。又使は駈役の義。煩惱能く人を駈役すれば使と名ける。八十八とは一切の煩惱中に於て貪・瞋・癡・慢・疑・身見・邊見・邪見・見取見・禁戒取見の十惑を本惑と名け、餘を悉く隨惑と名ける。此中小乘は貪瞋癡慢の四は見修二斷に通じ、疑と五見とは唯見斷である。此見斷の十惑を所迷の諦理に就て差別して八十八使

書の秘呪、永遠に[56]瘥を除き去る。

呪師を誦念するに虔誠に水を加持し、方印四十二道の秘を朱書し、[57]翦つて疊に摺んで封護して身上に帶び、撚つて丸兒と爲して口に到れば、百病を除く。

人無く寶印靈應の符に書寫し、香木を雕つて蘸に就き砂を紙に印すれば、前の如く丸に翦ずれば、靈驗二あるなし。頂光の化佛、大毫光を放ちて起つ。

首題過去現在及び未來、諸佛同音に宣して根本の呪を說く。成道涅槃に此の音を宣べざるなく、情界の四生・天龍六部誦す。

淨信の男女專心に秘音を稱し、佛果を求めんと欲して世間諸事就く。如來薩埵の慈悲は大憫を生じ、光を放つて地を動かして大神變を顯して用ゆ。

呪師は夢中に其の所求の事を現じ、都攝して先づ一切呪を王祖に結す。古往の帝王儲君幷びに大臣の身心の病疾、持念して應ぜざるなし。

都攝し頓みに水誦を除けば、藥光出で、服下すれば、百病を[58]痤瘥し生超し難し。日月薄く蝕して風雨依らざる時、[59]五星度を失つて衆生の苦を逼迫す。

人災・國凶・歲儉・逆賊起り、君臣、[60]措を失して[61]五路都て攝錄す。虛空を仰視して立ち、期して呪を誦して起てば、國を保ちて安寧に永へに災禍起るなし。

[62]魏周唐武は佛法僧を毀滅し、出家して行を脩して眞性を明かにするを聽さず。僧尼を驅逼して還俗せしめて[63]差役重し。宗乘を毀滅して定めて[64]阿鼻輪に入る。

但だ寶王結前都攝の印を誦し、[65]苾芻困苦して轉じて惡王所に與ふ。彼自ら悔責懺悔して心に歸依し、塔廟依然として精舍伽藍起る。

金銀銅鐵香篆龍形像・[66]瓮缸水滿ちて像を水際に投ずれば、[67]娑濕羅龍手の印都攝して錄す。水湧き、

を成就する。二、離垢地。三、發光地、四、焰慧地。五、極難勝地。六、現前地。七、遠行地。八、不動地。九、善慧地。十、法雲地、智波羅蜜を成就し、亦修惑を斷じて無邊の功德を具足して無邊の功德水を出生すること、大雲の虛空を覆ふて、清淨の衆水を出だす如くなる故に法雲地と言ふ。こゝの初果、如來地は三乘共十地を指すらしい。三賢、大乘の十住十行十回向の菩薩を言ふ。

【三七】四無量を言ふ。

【三八】兢兢、恐れをののく。

【三九】誐、よぶ、さけぶ、

【四〇】八識、眼耳鼻舌身意の六識と末那識(Manas)と第八識である。末那は意である。意は思量の義。無始以來間斷なく第八識を了別して我癡我見我慢我愛を思量するが故に意識と名く。此の識は識體意なる故意識と名け、前の第六識は此の意を所依とするが故に意識と名く。依て二識を別たん爲に梵名を存するのである。是れ一切衆生妄惑の根本である。第八識は阿賴耶識である。藏と譯す。一切諸法の種子を含藏するからである。是れ有漏無漏一切有爲法の根本である。恒に種子五根器界の三境を了識するが故に識と名ける。

我が呪王を誦すること、旱に甘雨に逢ひ、相撃つて戰敗れ、再び大將の至るに逢ひ、孤露の人、路に父母の聚に逢ひ、膏肓の老病方に[五三]耆婆の醫に逢ふが如し。

呪師を誦念すれば、疑惑を生ずるを得るなく、神王欽遵駈使して爾の用に隨ふ。天・人・脩羅・地獄・餓鬼の趣、耳に呪音を聞いて盡く解脫を得て去る。

惡心を持念するも尙ほ殊勝の果を獲。精嚴專注して心口相應して和すれば、其の餘の功能は[五四]伽陀の力に如かず。善男信女持念して利益を得る。此の呪を即ち絹・紙・[五五]貝多葉・寶綱衣縵華鬘寶篋の上に書して、其の儀する所に隨つて諸天龍神護り、寶蓋頂を覆ふて古佛宴然として坐す。

若し一微塵だも呪を物上に題し、風は微塵を吹いて墮ちて衆生の身に在れば、所得の果報は恒河數の如く、彩畫・頂像は阿鼻獄を除却す。

沈箋檀木を工巧して折羅を鈹み、寶杵執持せる杵像曼拏の心、香華燈塗果蓏飲食を奉じ、釋迦を供養し、大神尊を忿怒す。

香水を泥に和して慈悲の像を雕塑して百種に莊嚴せる美器もて杵像を安じ、虔誠に結印して十萬遍を動かさず。杵搖けば水涌いて、那時に方に明證す。

杵像は言語及び神變に光を放つ。大覺慈悲尊左心に化現して出づ。靈瑞萬端、心に大歡喜を生ず。果は願力に乘じ、再び三十萬を誦す。

神王の靈感は持誦して法語を得。設へば一盆器に淸淨水を滿盛し、我が秘章を誦して晝夜聲を斷たされば、水涌き杵動きて光明神通證す。

行住坐臥、心口常に持誦すれば、果熟三昧通達して神交を用ゆ。所行祠廟神祇皆供奉し、隨ひ逐つて捨てず、敢へて尊命に違はず。

四百四病及び諸の妖精怪、蠱毒陰崇、他の衆生の命を害す。患人の宿業多く寃債の病を生じ、朱

を海に譬ふ。

【三五】阿耨多羅證、(anuttara-samyak-sambodhi)の表音と譯。無上の覺の意。

【三六】十地。菩薩が正覺を得る迄に踏む十の階段。種々の類がある。一は三乘共一地で、智度論七十八の所說、聲聞・緣覺・菩薩の三乘を共通して立てた十地である。一乾慧地、此は外凡の位であつて、藏教の五停心別總念處總相念處の三賢の位に當る。乾は乾燥の義である。此の位には未だ法性の理水を得ない智慧であるので乾慧地と云ふ。又有漏の智慧は法性の理水を以て潤されないので乾慧と言ふ。二に性地。三、八人地。四、見地。五、薄地。六、離欲地。七、已辨地。八、支佛地。九、菩薩地。十、佛地。是れ菩薩の最後身であつて、餘殘の習氣を斷じ、七寶樹下に天衣を座とし成就し、乃至入滅する位である。但し之れ通教の佛に就て言ふ。若し藏教の佛ならば菩提樹の下に吉祥草を座として成道するのである。大乘菩薩の十地は一、歡喜地。菩薩既に初阿僧祇劫の行を滿じて初めて聖性を得て見惑を破し、二空の理を證し、大歡喜を生ずる位なので歡喜地と云ふ。菩薩この位に於檀波羅蜜

種種の妄想は彼の無明に出つて起る、諸の幻魔王を造作して眷屬と爲す。如來指教して魔黨の趣に入らす、宗を扶け教を立て永遠に改むる意なし。

黃金は鑛より出でて、無明は覆翳する所となる。油は麪中に在りて永遠に拔出し難し。鑛油は分別し、麪は白く、黃金は赤し。邪を捨て、正に歸し、黃白二種なし。

法界を通じて三界四生の類を化し、唯心一起つて別處にありて覓めず。初めて明師に遇ふて邪曲の道に入らず。今大覺に逢つて輪回の獄に入るを免る。

黃金を打つて眼耳鼻舌身に就けば、金性は盆盤釵釧等に變り無し。萬品千差本性甚だ分明に、金性を鎔して定めて眞空自在に用ゆ。

[四九]四魔は礙を作し、如來の慈悲起る。麻訶葛剌大權忿怒して出づ。[五〇]觀音大智馬項獄帝主は門により て來つて、衆生の苦を救ふを捨てず。

悲心の門は開き、救世無爲の智、慈雲普く[五一]胎卵濕化に布いて覆ふ。[五二]悍毒の邪見は菩提の路に入らず。權貴相登りて盡く究竟處に歸す。

神王、偈を聞きて八臂搖つて撼動し、九目顧眄して右を按して蹺足して立つ。方圓智火紫金棺中より出で、幻術を散壞して螺髻鬼を消滅す。秘章の功能く普く末法の世に施し、十善初めて惡口臭穢に入りて誦し、十方諸佛神呪を誦する音を聞きて、一記當來して直ちに無說地に至る。

文珠・普賢・觀音・金剛藏菩提薩埵の舍利空しく悟を生ず。目連迦葉四果應眞の侶、『善い哉』を讃言して香華供養して慶す。

三界の諸天は忿怒し、金剛衆は此の呪音を聞きて身を屈して侍衞して立つ。凡そ所願有るものにして果遂せざる有るなく、未だ能く理に達して速かに菩提の路を獲す。本呪を誦し、靈驗畫符印香木雕杆を驗を試みるに、百病一切等の事を治す。

入流預流は同一義にて、凡夫を去つて初めて聖道の法流に入るを云ひ、逆流とは聖位に入つて生死の暴流に逆ふを云ふ。即ち三界の見惑を斷じ盡した位である。二に斯陀含果、一來と云ふ。人欲界九地の思惑、中前の六品を斷じて尚後の三品を殘すのである。其の後三品の思惑の爲に欲界の人間と天界とに一度受生すべきであるので一來と云ふ。一來とは一度往來の義である。三に阿那含果、舊に不來と譯し、新には不還と云ふ。欲惑後三品の殘餘を斷じ盡して再び欲界に還來せざる位である。爾後、生を受ければ必ず色界無色界である。四に阿羅漢果、刹賊、應供、不生と譯す。上、非想處に至る一切の思惑を斷じ盡した聲聞乘の極果である。一切見思二惑を斷じ盡せば、殺賊と云ひ、既に極果を得て人天の供養を受くべき身なれば應供と言ひ、一世の果報盡きれば永く涅槃に入つて再び三界に生じ來らざれば不生と言ふ。

【三三】囑果流通、經典の流布傳承を賴んで永く流通せしむること。大乘經典には卷末に必ずこの品がある。

【三四】海會、聖衆會合の座を言ふ。德の深つて數の多いの

意識顯はれず、五根常に宛轉し、[四四]六塵色法七漏八垢動く[四五]九結十纒十二被牽縛し、二十五有百八煩惱生ず。

八萬の[四六]塵勞は回心して卽ち時に轉ず。八識便ち轉じて直ちに解脫の道に至る。不動の五蘊は便ち法王身を證し、[四七]百惑顚倒して頓みに百法を除きて證す。

百二十惡轉じて功德の果をなし、八萬四千轉じて光明の相を爲す。皆な汝の心、非を造つて外處より來る。靑天に物なく黑雲鼓して扇起する如し。

忽然雲收つて日月開明に鑒し、靉靆晻晦くして外處より覓めず。是れ汝一心にして本自ら圓かに正に迷ふ。悟る時の當體、[四八]此兒の理を損ぜず。

汝の惡念を回して便ち歸つて正路に登り、寶雨の宮殿華鬘等を奉獻せよ。法界如來菩薩四果の僧・天龍施主盡く無爲の洲に入る。

螺髻梵王、便ち大神に向つて禮し、兩眼淚滴りて五體を地に投じて啓す。從前の作過・不正理を懺悔して、俱に發聲して『南無釋迦』と言ふて禮す。（螺髻王は二仙處に於て懺悔を求む。）

二部の呪仙は各々神通力に還り、儼然として故の如く神王を衛遶して立つ。螺髻の帥衆、發露して懺除を求め、白ふして聖者と言ふて懇念して疑を生ずるを休む。

螺髻啓し告ぐ『善く來る、大仙よ。知れ。我昔習學して惡業因緣至り、剛强にして物を凌ぎ、他の衆生の軀を損す。今宣化に逢ふて我今頭面にて禮す。』と。

魔王の宮殿大いに佛事を作し起す。天地晴霽して日月は光輝を增す。飛走し忻歡して來つて余棺の體を遶る。雙樹、白鞠に變じて恭々しく足に接して禮す。

大權神王諸導髻鬼を領し、大臣徒黨二仙同じく瞻禮す。佛、四衆八部諸天仙を會して、各恭敬啓をして同聲に偈を說いて禮す。

喜捨の四德を言ふ。與樂の心を慈となし、拔苦の心を悲となし、衆生の苦を離れ、樂を獲るを喜ぶ心を喜となし、一切衆生に於て怨親の念を捨て平等一如なるを捨となす。無量の衆生を救じて此の心を起すので無量と言ふ。又、四等とし、四梵行とも言ふ。

【三七】 枚、口に橫にふくみて緖にて項にむすび、聲を發するを防ぐもの。

【三八】 吽、ॐ hūṃ 又許。諸天の總種子にして[illegible]の四字の合成である。

【三九】 南無、梵語(Namas)の表音。譯、歸命。稽首する意にて、歸依を意味する。

【三〇】 毫、白毫を言ふ。三十二相の一。眉間に白き柔き毛あり、說法等の折光を發つ。

【三一】 四衆、佛教徒の四種の分類を言ふ。比丘、比丘尼、優婆塞(信士)、優婆夷(信女)である。

【三二】 四果。普通聲聞乘の差別である。舊譯家は梵名を以て須陀洹果(Srotāpanna-phala)斯陀含果巴Sotāpanna-phala(Sakṛdāgāmi-)阿那含果(Anāgāmi-)阿羅漢果(Arhat-)と言ひ、新譯家は前三果に梵名を以て預流果、一來果、不還果、阿羅漢果と言ふ。一に須陀洹果、舊に入流又は逆流と譯す、

諸天四衆は心中に十分に喜び、魔王の宮殿は盡く倒れて崩摧に及ぶ。魔屬兇黨は戰戰兢兢[三八]として倒る。或ひは是の二仙の神通は依然として起る。

魔王は如來の再出世を商議し、或ひは是の二仙、我が境界を壞ち去る。已れの神力を忖つて能く達して知るを得る能はず。兩腿に涙下りて早晩に禍ひ生ず。頂光化佛、口中に伽陀を誦し、光明は微塵世界の虛を照耀す。三界の魔王の宮殿は墨漆の如く、敢へて違逆せずして衆生を攝取して去る。

螺髻を[三九]誂び得て、[四〇]。八識は體にあらず。大臣・徒黨は地上漸漸に起る。穢跡を消滅して魔類は盡く歸依す。「惟願くは慈悲して我が殘生の軀を留めよ。」と。

悶絕して醒めず、逃生するに走路なく、魂飛び、膽散じて、口を開きて說くも得ず。二部の呪仙は各〻神通力を還し、大神を瞻仰して今日還歸するを得たり。

大神呪責す。『咄なる哉、螺髻鬼。甚大なる愚癡あり、我慢にして欒欲に耽る。毒心改犯して慈悲の主に著せず。汝速かに悔いて邪を捨てゝ正理に歸すべし。汝の心悔いざれば、早早懺除を求め、全爾の性命涅槃を瞻禮し去れ。爾、前世に於て强いて慧を衆生に施し、福盡き樂足りて墮して[四一]泥犁に入り去る。

心業不善にして、罪を造くること山獄の如く、百千の徒黨聚集して一處に居る。百千萬人每日災殃を受く。一人自ら八識有り、四蛇隨ふ。

[四二]六情の對執念を擧げて悲惡なく、群生を招誘して[四三]八十八使逼る。百惱相牽ひて又二十惡を添ふ。十二時中殃を受くるは此より起る。

兇惡の徒黨は天魔を眷屬と爲し、衆生を拘引して魔黨の聚に羂入す。動もすれば以て萬人殃に遭ふて大誅を受け、獨り四大五蘊大根の主を存す。

ふさがる、むせぶ。

【三二】慣、貫と同じに用ふ。

【三三】綵、あやぎぬ、彩文の綃。裙、もすそ、すそ。

【三四】加持。梵語、地瑟姹曩衣(Adhisthāna)。佛力を軟弱の衆生に加附して其の衆生を任持すること。又佛の加ふる三密の力を衆生の三業にて任持すること。又祈禱は佛力を信者に加附し、信者をして其の佛力を受授せしむる爲ならば、祈禱を直ちに加持と云ふ。

【三五】陀羅尼(Dhāraṇī)、又陀羅那、譯、總持、持。善法を持して散ぜしめず、惡法を持して起らしめざる力用に名く。之を四種に分つ。一は法陀羅尼、佛の敎法に於て聞持して忘れざるを言ふ。又聞陀羅尼と名く。二に義陀羅尼、諸法の義に於て總持して忘れざるを云ふ。三に咒陀羅尼、禪定に依て祕密語を發し、不測の神驗を有するを呪と言ふ。呪に於て總持して失せざるを云ふ。四に忍陀羅尼、法の實相に於て安住するを忍と云ふ。忍を持するを忍陀羅尼と名く。聞義呪忍の四は所持の法である。能持の體から云へば、法義の二は念と慧とを體とし、呪は定を體とし、忍は無分別智を以て體とす。

【三六】四無量、佛菩薩の慈悲

示して諸天疑ふ。[三三]囑累流通して經文到る處に立つ。濁世を化して淨土と爲す。凡質を轉じて佛身と作す。[三四]海會の菩薩聲聞緣覺の侶、八部の天龍晝夜常に守護す。戒定慧を修し、諸事莊嚴に就き、菩提先づ[三五]阿耨多羅の證を發す。

法身は相無く生滅を如何ぞ說く、愚癡暗昧にして邪見あり、忿怒して諍ふ。婬欲に昏迷し、火宅疑城起り、眞如に參透して那時(いづれのとき)にか方さに到るを得ん。

頂光の化佛、神呪を宣說して起り、初果を求めて直ちに如來地に至る。五根五力菩提八聖諦あり、日月四洲豈に晝夜の理あらん。

慈悲喜捨・八度の萬行起り、覺怛淸虛にして頓に佛の骨髓を證す。[三六]十地三賢成就して體を離れず、衆生の根漸く盡く。是れ成佛の器なり。

如來の智日は法界の際に周遍し、光明は朗として衆生の貪瞋癡を耀かす。生ある者は常を見、死者は斷絕を見る。無常無斷は第一の眞消息なり。救世梵王は諸梵天衆を領し、金棺を施遶して禮拜して大神に向ふ。我自ら佛に隨つて十方中を遊歷し、寶杵金剛未だ大聖尊らず。

[三七]神王宣諭して、救世梵王聽く。『我れ正遍後智より化現して出づ。名けて密跡力士大神王と曰ふ。螺髻を調伏して後の衆生に顯示す。

寶印鎭心靈文四十二、妖怪を掃除して盡く東方世に歸す。螺髻貢高にして佛入滅し去ると道ふ。生滅無相にして緣畢つて寂定に順ず。

善逝の智力は我と比並し難し。菩薩羅漢の神力は爪土の如く、世尊の不思は却つて大地の土に似たり。魔王私かに念じて神通を第一と爲す。

如來緣畢つて滅の相を示現す。魔鬼は憍慢して如來を禮敬せず。其の窟宅を破つて、彼の二部を取つて歸る。神を還らしめて天人を觀じて懊惱を休ましむ。

---

mmara)非人と譯し、新に歌神と譯す。人に似て頭上に角あれば、人非人と言ひ、帝釋天の樂神であるので、歌神と云ふ。帝釋に二種の樂神があり、初の乾闥婆は俗樂を奏するもの、此は法樂を奏する天神である。八に摩睺羅迦(Mahoraga)大蟒神、大腹行など譯す。地龍である。

八部鬼衆とは一は乾闥婆(Gandharva)香陰と譯す。酒肉を食はず、唯香を以て陰身を資く。二に毘舍闍(Piśāca)噉精氣と譯す。人及び五穀の精氣を食ふ惡鬼である。三に鳩槃荼(Kumbhāṇḍa)甕形と譯す。其陰莖甕形に似たる厭魅鬼である。四に薜荔多(Preta)、餓鬼と譯す。常に飢渴に逼まれる陰鬼である。五に諸龍(Nāga)、水屬の王である。六に富單那(Pūtana)臭餓鬼と譯す。是れ主熱の病鬼である。七に夜叉(Yakṣa)、勇健鬼と譯す。地行夜叉・虛空夜叉天・夜叉の三種がある。八に羅剎(Rākṣasa)捷疾鬼と譯す。夜陰人畜を襲ふて、血を吸ふ。

本經の八部は前者を言ふ。

【三〇】 趺、あやまつ、たがふ、たふる、つまづく、疾行す。

【三一】 哽、涙にむせぶ、咽喉ふさがりて聲出でず。しぶる、ふさがる、むせぶ、噎、咽喉

滿陀羅尼を聽說す。（前呪の內、九字を闕く。呪句續いて添入す。）

唵引咈吼喔吽　摩訶般囉　嘛那嚧　吻只吻　醯摩尼　徽吉徽　摩那栖　唵撈割囉　嗚深暮㖦吽

唅唅　吽吽　發發薩訶。（今、呪句唵撈割囉醯摩尼吽吽發）

無念に觀定して三寶に歸依し竟つて、次に菩提を發して人天の果を求めず。願くは諸の衆生、同じく無上乘を證し、情器空に變じ、自ら魔を敎へて淨ならしめんことを。

[二六]四無量起心月輪中の吽は、光虛空に昇りて無量の諸佛至る。鏡像影は滅し、本體の神王出で、髮硃の光嚴かにして化身端嚴に處る。

三枚九[二七]眸、手に六件の寶を執り、刧火熾然安詳として忿怒の勢あり、[二八]吽光再び召して智佛一念に至り、灌漱して足を濯ひ、五種の香華備ふ。

撈の吽啝和して智句不二一なり。靑心喉頂十方諸佛赴く。甘露を灌頂して光明の器に注滿し、身口意淨くして究竟して、我、佛を誦す。

[二九]南無本師釋迦牟尼佛、南無化身釋迦牟尼佛、南無大權神王佛（各十聲を念ず）秘章を念誦して心口相應じて和し、十萬百萬して、定めて涅槃を證するの道なり。

左心所化の大權神王出で、威嚴顯赫として非天非人禮す。眉に[三〇]毫光を放つて十方世界知り、華鬘寶蓋あり、諸天奏樂して起つ。（住世梵王啓請し流通す）

時に梵王あり、名けて救世主と曰ふ。梵衆を統領して來つて金棺の軀を禮す。仰いで大神不壞金剛の體に告ぐ『[三一]衆生危險にして如來の慈悲出づ。』

大神告げて言く『救世梵王よ、聽け。成金棺より一七日を示現し、天人哀請して螺吉の鬼を降伏し、義を起して不善來つて慈悲の主を犯す。

世尊我れに敇して宣諭して[三二]四衆知る。小事を謂はず、忽ち出塵の世に生れ、如來は滅・[三三]四果を

---

vati)と異る。

【一九】八部、天龍等の八部衆又は乾闥婆等の八部鬼神である。

八部衆とは、二說あり、一は舍利弗問經等の說にして通常之を用ひる。一に天衆（Deva）、欲界の六天、色界の四禪天、無色界の四空處天である。身に光明を具するので、天と名ける。又自然の果報殊妙なので、天と名ける。二に龍衆（Nāga）畜類にて水屬の王である。法華經の聽衆に八大龍王を列ねる。三に夜叉（Yakṣa）、新に藥叉と云ふ。空中を飛行する鬼神である。四に乾闥婆（Gandharva）、香陰と譯す。陰は五陰の色身である。彼の五陰は唯香臭を嗅いで長養するので、香陰と名ける。帝釋天の樂神である。法華經聽衆に四人の乾闥婆を列ねる。五に阿修羅（Asura）、舊に無酒、新に非天、無端正と譯す。その果報天に類するけれども、天部でないので、非天と言ひ、又容貌が醜惡なので、無端正と言ひ、彼の果報として美女あり、酒なれば、無酒と言ふ。常に帝釋と戰鬪を爲す神である。六に迦樓羅（Garuḍa）金翅鳥と譯す。兩翅相去ること三百三十六萬里あり、龍を取つて食となす。七に緊那羅（Ki-

けざるなし。羅漢應眞眞諦の理を曉らず。菩提薩埵は其の化理に趣に達し、無常を了悟して安禪すること、虛空の如し。不生不滅留惑潤生の裏、十二緣生の葉落ちて、方に跡を見る。

蠢動する含靈、本成佛の性あり。三界の諸天前んで涅槃に赴いて供す。諸大帝王は哀戀して如來を慕ひ、螺髻輕蔑し、商量差仙取る。

諸天便ち差し、大力呪仙取る。各〻寶杵を執つて魔王を收攝し去る。纔かに穢氣を嗅いで鎖して禁中に在りて圍む。無法に取歸す。諸天は前んで來りて禮す。

『願くば佛の慈悲をもつて慈悲して哀んで納受せよ。魔鬼の災害は一方に生命を食し、室女を劫奪して樂を欲して快活を受く。骨を積んで山の如く。願くは佛よ、化して歸順せしめよ。』

諸王は如來寂滅の後を動哭し、貢高我慢の惡鬼は敬信せず。諸天差仙は七日還歸せず。愁悶し、涙を滴らして來りて全棺の軀を禮す。

能仁なる慈父は人に順じて寂滅に歸す。衆生の造罪を感得し、魔王出で、螺髻の苦害、衆生の閃を食噉す。願くは佛の慈悲をもつて邪を去り、衆生の主たれ。根本智佛は常に寂光を樂み已り、後智は三頭八臂を化現して立つ。都攝寶印・火輪・金剛揮・罥索・鈴音にて八龍は身臂に纒ふ。一右手は開山印、二手は金剛杵、三手は寶鈴、四手は寶印戟、左一手は都攝印、二手火輪、三手罥索、四手寶劍なり。九月三面利劍寶印の戟、青黑藍澱髮赤く上に竪起す。次佛は呪を宣して大いに光明を現して輝く。無量の魔王は盡く赴いて恭敬して禮す。

腕は寶錠を[22]慣き、足は閻浮界を按じ、右足の印空にして[23]綵褶繚遶して起る。智火洞然として虛空の中に塞滿し、讀誦受持して定めて無生位に至る。

[24]加持本呪四十三字母　頂光如來親しく伽陀を說いて啓す。法界は世主及び無數を含識す。[25]梵音圓

漸く訛替して眞正の法儀、行儀行はれず、隨つて證果の者なく、但教あり、行あつて像似の佛法が行はれる時を像法と云ふ。三に末法、末とは微である。轉た微末にして但教ありて行なく、證果なき時を末法時となす。

【一四】大華嚴、大方廣華嚴經の略名、大方廣に所證の法、佛は能證の人。大方廣の理を證得せる佛である。華嚴の二字は此の佛を喩へたもの。因位の萬行は華の如くである。此の華を以て果地を莊嚴するので、華嚴と言ふ。又佛の果地の萬德は華の如くである。此の華を以て法身を莊嚴すれば、華嚴と云ふ。

【一五】華嚴經の五十三善知識の第六。

【一六】三寶印、佛法僧寶の四箇の篆字を刻せしもの。道場疏に押す。

【一七】甘蔗(Ikṣvāku)、釋尊の種族であつて、日種(Arkabandhu)に屬する。刹帝(Kṣatriya)は印度四階級の内第二の武士(天族)の階級で、釋尊は之に屬する。

【一八】跋提、河の名。涅槃林の側である尸賴拏拔提(Hiraṇyavatī)の拔提のみを取つて支那にて河の名とす。舍衞城の側である阿夷羅拔提(Ajira-

[13]正像末法の時に　類に隨つて一體に出す。
本智は後智を化し　化佛は密語を宣ぶ。
大權化次王　次王の慈悲の書
願くは經中の義を得て、　一切衆生を悟らむ。
曉暮勤めて參禮し　念々長へに息まず。
[14]大華嚴を看閲して　其の理を推すあるなし。
[15]海幢比丘の問ひ　方さに能仁の意を省す。
佛は最上乘を開く。　諸人盡く入るべし。
印經を諸方に施すに　大いに覺り本語なし。
念念隨類に資し、　身語及び意業
厭怠の時有るなし。　拙口鈍詞の舌
能く敢へて筆を下すなし。　眞如の理に昧からず。
末法は一萬年なり。
[16]三寶印證して增滅なし。
八部の威嚴は常に護を加ふ。

苗裔[17]甘蔗、刹帝淸淨種にして、大因緣の爲に末法能く傳授す。[18]跋提河邊の雙樹に寂滅定す。[19]八部は懊惱し、世主は號哭して倒る。
諸國の帝王は同時に佛會に來り、胸を槌ち、脚を[20]跌して[21]哽噎啼哭して禮す。聲は三界を動かし、日月の光明暗し。愁雲慘霧、山崩れ、地裂け吼ゆ。
飛鳥悲鳴し、草木は枯れて乾萎す。源泉涸竭して海水騰り、波起り、凡そ物像あらば、孝衣を掛

の所造でないものはなく（俱舍）、四大の和合でないものはない。（成實）。依て稱して大と言ふのである。或は之を二種に分ち、正報の人身を内の四大と稱し、或ひは有識の四大と稱する。依報の諸色を外の四大と云ひ、或は無識の四大と言ふ。
【五】鋟梓、鋟、きざむ。
【六】梵書、普通、梵書はブラフマナのことで、印度哲學の聖典であるがこゝでは梵語の意か。
【七】遐邇、遠きと近きと、
【八】覺皇、覺王と云ふ如し。佛を言ふ。
【九】㝠。盛なる貌。
【一〇】誅、きづつく、うつ。殺すこと。
【一一】擊毬獄、不明。
【一二】四十二道、
【一三】正像末。一佛が出世すれば、其の佛を本として正法、像法、末法の三時を立てる。然るに諸經は皆正像の二時を說き、大悲經獨り正像末三世を說く。又雜阿含、俱舍論の如きは唯正法の一時を說く。一に正法、正とは證である。佛、世を去るといへども法儀未だ改らず、敎あり、行あり、正しく證果を得るもの有るを正法時となす。二に像法、像とは似である。訛替である。道化

初生より涅槃に至る
天人四人衆は啼く。
寔にして一國を宰立し、
我が佛又出世す。
手に八物の〔一〇〕誅を執り、
衆生遭迹を免る。
惡魔に記を授與し、
累劫清淨陀
權化して實に忿怒し、
永く惡念の起るなし。
持念空しからず。
已に眞如の際を見、
果なく意に隨はず。
虛しく勞して遂ぐるを得難し。
是れ誑言語にあらず。
願くは〔一二〕犂毯獄に入らん。
四大寶篆の文
六印指爪の上
我れ今經意を詳にし、
秋を護り、君主を護る。

金棺銀掛の裏
螺髻の惡神王は
衆生、噉食せられる。
青黑の八臂の王は
此の魔便ち歸依す。
等覺は慈悲に勝れ、
臣佐眷屬の類
海會して省悟を得。
誅に遭ふ。蓮藏界
是れ佛の慈悲門なり。
經に依つて修行に達す。
但だ世間の事を求む。
愚蠢にして高智を勸む。
若し志誠ならずんば、
若し眞實ならずんば、
〔一三〕四十二道の秘
大權金剛の毫
得て之を亂曲するなし。
末法定めて世に在り、
當に來るべき彌勒の世

二

香を衣に薫ずるに譬ふ。修は修行。德を身に薫じ、(Bhāv-ana)行を修すること。

【四】四大。物質の要素であつて、地水火風の四である。倶舍論に依るに假實の二種がある。實の四を四界又は四大界と稱し、假の四を單に四大と云ふ。實の四大とは一に地大、堅を性とし、物を支持す。二に水大、濕を性とし、物を攝す。三に火大、煖を性とし、物を調熟す。四に風大、動を性とし、物を生長す。此四以て一切の色法を造作すれば、能造の四大と云ふ。其の四大の體は觸處所攝にして唯耳根所得である。身根諸色と偏れて堅濕煖動を覺知するのである。假の四大とは世間稱する所の地水火風である。此四大は其實地水火風及び色聲香味觸の九法の假和合であるけれども、其中最も堅性の增盛なのを地と名け、乃至動性の最も增盛なのを風と名ける。之を要するに、實の四大は能造にして假の四大は所造に屬する。然るに成實論に依れば、實の四大なく、唯假の四大のみ、色香味觸の四塵を以て一切色法の能造となし、四塵和合して方に四大を成ずと立つ。故に四大は唯假法である。要する一切有形有質の物で四大

密跡力士大權神王經偈頌

元廣福大師僧錄管主八撰

[一]最上乘に歸命す。
經に依つて流通に入る。
願くは諸の衆生と共に、
同じく光明の中に證し、
廣福の心は慮なく、
幻身、[二]四生より出づ。
小にして經書を習學し、
眞如の理を忘却す。
心を留むること經典に在り。
早晩經旨に參す。
心昏くして未だ曉居せず。
念々[三]熏修に資す。
間斷の期あることなし。
若し究竟を訪はずんば、
光明は[四]四大に歸し、
何れの時か再び出で遇はん。
今大覺尊に逢ふて
廣く方便の門を開く。
[五]鋟梓して[六]梵書に施し、
遍布するも全壁ならず。
未だ逡巡の間に至らず。
[七]遐邇八分足る。
皆是正遍祈にして
[八]覺皇の慈悲の力なり。
眞空の理を省みると雖も、
萬行未だ會つて畢らず。
三世諸佛の說は
如來の一大事にして、
皆衆生より起る。
衆生は貪嗔なくんば
諸佛何に因つてか說かん。
彼を權行實化し

【一】歸敬文。
【二】四生。梵語。(Caturyoni)一に胎生。(Jarāyuja) 常人類の如くである。母胎に在て體を形して後出生するもの。二に卵生 (Aṇḍaja)。鳥の如く卵殼に在て體を形して後出生するもの。三に濕生(Saṃsvedaja)蟲の如く濕に依て形を受くるもの。四に化生(Upapāduka)依託する所なく、唯業力に依て忽ち起るもの、諸天と地獄及び劫初の衆生は皆是である。之を五道に分ければ、人類と畜生趣は各四種を具す。人の胎生は今の世の如く、人の卵生は世羅と鄔波世羅と鶴卵より生じ、鹿母所生の三十二子と般遮羅王(Pañcala)の五百子の如くである。人の濕生は曇駄多と遮盧と鄔波遮盧と鴿鬘と菴羅衛等の如くである。人の化生とは唯劫初の人である。畜生の胎卵濕は共に現に見ることを得る。其の化生は龍と揭路荼(Garuḍa)鳥との如くである。次に鬼趣は胎化の二種である。胎生は餓鬼の日夜所生の五子を食ふと言ふ如くである。次に一切の地獄と天人と中有とは皆唯化生である。然し、この考へ方は親化科學の立場からは必ずしも正鵠を得てゐない。
【三】熏習、熏は薫習なり、

聖人の壽を祝す。

願くば、佛日重ねて輝き、法輪常に轉ぜんことを。

にて、諸の毛孔より火焰を流出し、四臂具足する。右の手に劍を持を、下の手は四絹索を把り、左の手に棒を持し、次の手は三股叉を把る。一一の器杖皆火焰起る。

【五】 螺髻梵王。梵天王の頂髻、螺形を作すので、螺髻梵王と云ふ。維摩會上に舍利弗と問答す。

【六】 四大寶印。四印のことか(?)然らば四智印と同じ、金剛界五智如來の中に大日如來の法界體性智を除き、餘の阿閦如來の大圓鏡智、寶生如來の平等性智、無量壽如來の妙觀察智、不空成就如來の成所作智の四智を言ふ。

【七】 茶毘(Jhāpita)、又闍毘、闍維、闍鼻多、耶維耶旬、譯。焚燒、茶火に造るのは俗字である。人體を死後火葬にすること。

【八】 舍利(Śarirāḥ)、前出。

密跡力士大權神王經偈頌序

蓋し聞く[一]瞿曇教を演べて普く含生を利す。歷代の諸師三分して經を科す。謂く[二]序分正宗分流通分なり。穢跡金剛說神通大滿陀羅尼法術靈要門經は、北天竺國三藏沙門無能勝と三智藏沙門[三]阿質達霰と同じく二經を譯す。同卷は流通分を闕く。已に大藏經伊字函第一卷中に入る。是の故に如來涅槃臺の左脇に於て、[四]穢跡明王三頭八臂を化現し、[五]螺髻梵王を降伏して、呪を說いて[六]四大寶印書符・四十二道結・五指印契を劃して、普く有情を利す。歷代以來、呪行の法を持する者僧俗甚だ多くして、未だ先二師の同譯を信受奉行するに達せず。後宋の會稽沙門智彬、此の經を將つて重さねて校勘を行ふて治定し、闕を補つて流通せしめ、題して佛入涅槃現身神王頂光化佛說大方廣大圓滿大正遍知神通道力陀羅尼經と曰ふ。今此經中大權神王、螺髻梵王を降伏するを說く。復次に住世梵王啓請し、復化して三頭八臂忿怒の相を現出して、器杖を執持すること前と異なるなし。本王は寂定にして、次に王と化して三頭八臂を畫出し、頂上は化佛の相儀にして、四大寶印書・四十二靈符の指結・五印契を劃して悉く皆な付與して螺髻梵王受持奉行す。爾の時化佛は螺髻梵王に魔頂授記を與へ、清淨光明如來と號す。已にして是に於て王と化し、復た隱れて本王の身中に入り、本王の紫金光聚隱れて金棺に入る。[七]荼毘の後各々[八]舍利を分つて頂戴奉行す。所說の呪符印五指の印契、已に前の伊字函二經の內に在り。今此經中重ねて前說を述べず。本呪の內九字呪を闕く。句續いて次に添入す。今廣福大師僧錄管主八、三寶に歸命し獨り內典に心ざし、偈頌を集成し、闕を補つて流通し、亦た密跡力士大權神王經と曰ふ。廣く行はれ遍く布く。後ち呪を持ち法を持する者有り、前後の經旨を　明にし、詳かにして行持せば、自利利他の福報窮りなし。此の功勳を集め、上佛息に答へ、

【一】瞿曇教、瞿曇（Gauta-ma）は佛陀の生家の姓である。佛教と言ふに同じ。

【二】序正流通三分。凡そ經論を釋するに序正流通の三に分つを法とする。一に序分。先づ初に其の經の起る理由因緣即ち緣起を叙ぶる部分である。二に正宗分。次に正しく其の緣起に應じて法門を說く部分である。三に流通分。終に所說の法門を弟子或ひは國王等に付囑して遐代の流通せしむることを說く部分である。是れ秦の道安創始に係り、以て萬世の洪範となる。（織田）。

【三】阿質達霰（Ajitasena）、印度沙門の名。枳橘集一に貞元錄に依れば、阿質達霧は無能勝と言ふ、天竺三藏の名なり、と言つてゐる。之によれば、無能勝と阿質達霰とは別人ではない。

【四】穢跡金剛、穢迹金剛、穢迹金剛に作る。穢積金剛烏芻澁摩明王（Ucchuṣma）である、不淨處を司る執金剛である、經軌には穢迹に作り、秘藏記には穢積に作る。烏芻澁摩、又烏芻沙摩、烏樞沙摩、烏澁瑟摩、烏素沙摩に作る。譯、不淨潔。穢迹、火頭など。能く不淨を轉じて清淨ならしめる德を有する。依て廁中に此明王を祭る。尊形は忿怒形

ある。

思想は勿論密教系統のものである。即ち佛涅槃を廻つて眞言の諸呪印を説明したものである。先づ歸敬文を出し、如來涅槃臺の左脇に於て大權神王は螺髻梵王を降伏し、救世梵王は如來の金棺を禮拜守護した。大權神王が三頭八臂忿努の相を現出し、器杖を執持し、螺髻魔王を降伏すれば、魔王は釋迦佛に歸依し、神王は魔衆を領した。之れ神呪を誦するの功能であるとする。次に呪師を念誦するの各能の功德を記す。化佛は四大寶印書・四十二靈符の指結・五印契を付與し、螺髻梵王は受持奉行した。その時化佛は螺髻梵王に魔頂授記を與へ、淸淨光明如來と號した。淸淨如來緣畢つて涅槃に入れば、荼毘し、舍利寶塔を建てた。小化神王が神王を圍遶して禮拜した時、寂光如來の毫光は金棺中より出でて照した。以下には各種の印を擧げて説明する。即ち都攝法印・禁山寶印・無雷法印・頓病寶印・五路寶印・更に宿命智印・隱蔽無見自在印・三顯膽空自在無礙印・神氣交合自在密呪印の四大寶印等、之である。最後に諸化王・力士・天神の禮拜讃嘆を記して、釋迦如來の荼毘・分舍利を記し、この經の流通を勸めてゐる。

思想は明かに眞言密教系のものであつて、穢跡金剛説神通大滿陀羅尼法術靈要門經・佛の涅槃現身神王頂光化佛説大方廣大圓滿大正遍知神通道力陀羅尼經等の增補である故か、記述が前後重複してゐる場合が多い。呪文の方法・功德を多く説くものであつて、佛教の眞髓乃至眞面目から遠いものである。

昭和七年六月十日

譯者　平等通昭　識

密跡力士大權神王經偈頌解題

一、撰者管主八

密跡力士大權神王經偈頌は元（紀元一二八〇—一三六八）の管主八の撰述である。管主八は沙門であつて、紀元一三〇〇年頃二著述を編纂し、その一は密跡力士大權神王經偈頌で、他は大藏聖教法寶標目である。この大藏聖教法寶標目は北宋又は南宋（九六〇—一二八〇）居士王古によつて大部分編纂され、その業が管主八によつて元（一二八〇—一三六八）の紀元一三〇六年に經續された。十卷であつて、この目錄は至元法寶勘同總錄に全く立脚し、之に簡單な解説を附け加へたものである。

二、製作年代と製作過程

密跡力士大權神王經偈頌は紀元一三一四—一三二〇年に撰述された。

密跡力士大權神王經偈頌の序によると、以前穢跡金剛説神通大滿陀羅尼法術靈要門經と名くる經があり、北天竺國三藏沙門無能勝と三藏沙門阿質達霰とが之を譯出した。然しながら、經の三分—序分・正宗分・流通分中、この經は流通分を缺いてゐる。古來呪行の法を持する者が僧俗に多かつたが、未だこの二譯經家の譯經を信受奉行するに至らなかつた。後宋の會稽沙門智彬は此の經を校勘して、流通分の闕を補ひ、佛入涅槃現身神王項光化佛說大方廣大圓滿大王遍知神通道力陀羅尼經と言つた。唯此の經中には重ねて前説を述べず、本呪の內九字呪を闕いた。今廣福大師僧錄管主八が偈頌を集成し、流通分の闕を補ひ、密跡力士大權神王經と名けたと記してゐる。之の序の記述を事實とすれば、最初穢跡金剛説神通大滿陀羅尼法術靈要門經なる經があり、それ缺を增補しつゝ佛入涅槃現身神王項光化佛說大方廣大圓滿大正遍知神通道力陀羅尼經・密跡力士大權神王經偈頌が成立したのである。

恐らく當時（元朝）に於ては、序文にも伺はれる通り、かゝる密敎的の呪文が僧俗から歡迎され、その要求に基いて成立したのであらう。

三、結構文體內容

密跡力士大權神王經偈頌は序と本文とよりなる。序は本頌成立の由來を說明し、散文である。本文は五字一句より成る偈頌よりなり、中大の經で、文體は極めて難解簡枯で、凡流麗滋味より緣遠いものであり、所謂グロテスクなもので

四〇 當に師をして歡喜し、
當に勤めて之を行ふべし。
彼の四一金剛如來は
及び餘の教に明かす所、
若し弟子清淨にして
設使命終らんとするも、
及び秘密教を授けて
若し現相に誦持すれば、
若し能く師の行學に隨順すれば、
我が諸集の斯かる善因を以て

諸の煩惱の事を離れしめよ。
繁を怖るるが故に述べず、
親しく是の如く宣說す。
師に依つて成就するを獲たり。
能く三寶に歸依すれば、
亦爲に法要を宣べ、
正法の器と作さしむ。
當に根本罪を獲べし。
則ち一切諸功德を成ず。
願くば衆生とともに成佛せん。

【二七】翹、あぐ、おこる、おこす、かく、かしる、
【二八】投、うつ、たゝく、こぶしをくはふ、拳を以て物に加ふ。
【二九】よりかゝること、
【三〇】嗽、せく、しはぶく、呿、いびき、ねいき。あく、口を張る。
【三一】師の名を稱擧すべからず。
【三二】事有つて啓聞する時は躬を曲げて輭語すべし。
【三三】在家の女人來つて法を聽けば、威儀を具へ、憍慢を捨離すべし。
【三四】常に師の德を慕ひ、小過をも窺ふ可からず。
【三五】師と同じく居る時に、旨なくして說法すべからず、弟子を度すべからず。
【三六】護摩(Homa)、又護麼、呼麼に作る。譯、燒。もと事火婆羅門火を燒いて天を祀る。彼、火を以て天の口となし、供物を火に燒けば、天之を食して福を人に與ふと謂ふ。我が密教に其の法を取り、火爐を設け、乳木を燒き、智慧の火を以て煩惱の薪を燒き、眞理の性火を以て魔害を盡すの標幟とす。
【三七】說法によつて得る所あらば、悉く以て其の師に奉じ、與へらるるに隨つて用ふべし。師前にには奉事禮敬を受けず。

況んや牀坐臥具をせや。
【三三】騎蔫。蔫、のる(騎)、こゆ(超)。
【三四】師の教誨する所、歡喜して聽受すべし、
【三五】師の財物を守護すること、己が身命の如くせよ。
【三六】師の前に於て頂を覆ひ、乘り御し、足を翹げ手を以て腰をうち、安然として坐臥すべからず。また雙足を舒ぶべからず。師の前に於て隣近と語笑する勿れ。歌舞する勿れ。又疲勞の相を現はし、指節を屈して聲を作し、柱壁に倚るべからず。笑嗽伸欠する時には、手を以て口を遮れよ。師の前に於ては常に諸の威儀具へよ、
【三八】物を二手に持つて奉獻すべし。
【三八】若し師の教勅する所、病にて果さざれば、作禮咨陳すべし。
【三九】咨。物事を他に相談する。善良の人士にたづぬ。とふ、はかる、なげく。
【四〇】常に師をして歡喜せしめ、諸の煩惱の事を離れしむべし。
【四一】金剛如來、不明。

事師法五十頌(終)

若し[三三]在家の女人
合掌して威儀を具へ、
聞き已つて當に奉持し、
常に初適の嫁の如く、
彼の嚴身具に於ては
善と相應するに非ざれば、
[三四]常に師の德を慕うて
隨順して成就するを獲、
[三五]說法して弟子を度し、
城邑を同して師に居れば、
[三七]或は說法して得る所の
悉く以て其の師に奉じ、
同學及び法裔は
亦師前に於て
若し物を以て師に上れば、
師或は所施あれば、
自ら專ら正行を修して
他或は律儀に非ざれば、
[三八]若し師の敎勅する所、
當に作禮[三九]咨陳すべし。

淨心にして來つて法を聽けば、
專ら師の面を視て、
憍慢を捨離すべし。
低顏して甚だ慚愧す。
復た愛樂を生ずるなかれ。
皆思惟して遠離せよ。
應に小過を窺ふべからず。
過を求むれば當に自ら損ずべし。
[三六]曼拏羅(マントラ)・護摩するも、
旨無くして作すべからず。
淨施の諸財物も
得るに隨つて用ふべし。
應に弟子と爲すべからず。
承事禮敬を受けず。
二手に持つて奉獻せよ。
恭敬して頂受すべし。
常に憶持して忘れず。
愛語を以て相敎示せよ。
或は病緣によつて作さざれば、
斯くすれば其の咎なし。

鬼神の名。卽ち歡喜天である。又、大聖歡喜天。大聖天、聖天と言ふ。夫婦二身相抱の象頭人身の形を本尊とする。男天は大自在天の長子にて世界に暴害を爲す大荒神である。女天は觀音の化現にして彼に抱着して其の歡心を得、以て彼が暴を鎭むるもの。依て歡喜天となす。梵名誐那鉢底(Gaṇapati)其の形に就て毘那夜迦(Vināyaka)、象鼻天と言ふ。

【二八】阿闍梨(Ācārya)、敎師の意、梵語を音譯したもの。「師をして少分も煩惱を生ぜしむる勿れ」。

【二九】阿鼻獄(Avīci-naraka)、又阿鼻旨、譯、無間。無間地獄が之である。苦を受けること間斷なき義である。八大地獄の一。最苦處。極惡の人が之に墮ちる。無間に二あり、身無間、受苦無間である。身無間とは常に死せずして苦命を保つを言ふ。阿鼻は地下の牢獄であるので地獄といふ。此の地下の最底にあり、他の大地獄は其上に重疊する。

【三〇】「師に於て輕毀を生ずる勿れ」、

【三一】樂んで喜捨を行ひ、己が身をも惜むべからず。況んや財物をや。

【三二】師の影を踏む可らず。

二六 師前に於て
足を二七 翹げて手は腰を二八 扠つて、
頂を覆ひ及び乘御し、
安然として坐臥すべからず。

或は二九 事緣によつて坐せしめ、
雙足を舒るなかれ。
常に諸の威儀を共して
師起たば、速かに當に起つべし。

若しくは經行處に於て
應に隨つて擧步すべからず。
端謹にして傍に立つて
涕唾を棄つる勿れ。

亦師前に於て
私竊に言說し、
及び隣近語笑し
謳舞作唱等をする勿れ。

或は坐せしめ、或は起ち、
各安徐して禮敬せよ。
若しくは險路の中に於ては
白し已つて前導を作せ。

又應に前に於て
身は疲勞の相を現じ、
指節を屈して聲を作し、
倚柱及び墻壁に倚るべからず。

或は浣衣・濯足
及び澡浴等のことは
先づ師に白して知らしめ、
所作見せしむるなかれ。

又復た師の名に於て
輙ち稱擧すべからず。
設へ固く問ふ者有るも、
當に之に一字を示すべし。

師或ひは幹をして集めしめば、
其の遣使に伺ふべし。
彼の所作の事に於て
憶持して常に忘れず、

或ひは三〇 笑嗽し伸呿すれば、
三一 則ち手を以て口を遮れ。
若し事有つて啓聞すれば、
當に躬を曲げ輭語すべし。

四

増減眞如、此の眞如は増減の執を離れ、淨染に隨つて増減あるに非ざるが故に不増減と名く。卽ち又相土自在所依眞如と名ける。若し此の眞如を證得し已れば身相を現じ、國土を現ずること自在なるが故である。九に智自在所依眞如、若し此の眞如を證得し已れば無礙解に於て自在を得るが故に名ける。十に業自在等所依眞如、若し此の眞如を證得し已れば普く一切神通の作業陀羅尼定門に於て皆自在を得るが故に名く。眞如の性實に差別なきも勝德に隨つて十種を假立する。菩薩初地中に已に一切に達して能く證行するも猶未だ圓滿ならざるが故に圓滿ならしめん爲に後に之を建立す(唯識論十)。

【二三】 増上慢癡。増上慢ならば、我は増上の法を得たりと言つて、慢心を起すを言ふ。未だ聖道を得ないのに已に得たと謂ふ如きである。

【二四】 惡曜、不明。惡しき星廻りの意か。

【二五】 螫、さす、蟲の毒を致すこと。

【二六】 非人(amanusya) 人に非らざるもの。六趣の內、天を除いた凡てのものを言ふ。乞食の意にあらず。

【二七】 頻那夜迦(Vināyaka)、

又復た師所に於て
己身を希はず、
無量億劫に於て
今始めて菩提を證す。
善く其の深誓を護つて
阿闍黎を恭敬すること

二二 若し己の所有の
無盡の菩提を求めて
佛・阿闍黎に施せば、
是れ最勝の福田なり。
是の如き求法者は
師を虛誑せず

二三 若し足、師影を踏めば、
床坐資具に於て

二四 若し師の教誨する所あれば、
自己或は能はざれば、
師に依止するに由るが故に、
現樂及び生天も

二五 師の財物を守護すること
彼の執持人に於ては

樂んで喜捨を行へ。
何ぞ況んや財物をや。
勇猛にして勤めて修習し、
斯くて極めて稀有と爲す。
諸の如來を供養し、
一切佛に等同にす。
最上の諸珍玩に於て
誠心にして奉獻して
念念常に增長す。
速かに菩提の果を得
戒忍の功德を具し、
當に金剛智を獲べし。
罪を獲ること塔を破るが如し。

二三 驕驀の罪、是に過ぐ。
歡喜して當に聽受すべし。
則ち善言を以つて啓白せよ。
所作皆成就す。
何ぞ敢へて其の命に違はんや。
猶ほ己の身命の若し。
親の如く常に敬奉せよ。

は誠實不虛の語がある。不異とは決定不二の語である。此の二は凡夫の虛語兩舌に對する。

【二一】 曼怛羅(Mantra)、眞言と同じ、看前。

【二二】 十眞如、梵音、(部多多他多—眞如性)。眞とは眞實の義、如とは如常の義。諸法の體性虛妄を離れて眞實なれば眞と云ひ、常住にて不變不改ならば如と言ふ。十眞如とは菩薩十地所得の十眞如である。一に遍行眞如、此の眞如は我法二空の所顯である。一法として在らざる所なき故に遍行と名ける。二に最勝眞如、此の眞如は無邊の德を具足し、一切法に於て最勝たるが故に最勝と名ける。三に勝流眞如此の眞如所流の敎法極めて殊勝なるが故に勝流と名く。四に無攝受眞如、此の眞如は繋屬する所なく、我執等の依つて取る所に非ざるが故に無攝受と名ける。五に無別眞如、此の眞如は差別の類なく、眼等の異類ある如くでないが故に無別と名ける。大に無染淨眞如、此の眞如は本性無染にして後に方に淨なりと說く可らざる故に無染と名ける。七に法無別眞如、此の眞如は多數法種々に安立し、別異なきが故に法無別と名くる。八に不

具戒・忍・悲・智　尊重にして諂曲なし。
秘密儀範を了して　博く諸論議を〔九〕閑ひ（ならう）
善く〔一〇〕眞言の相　〔一二〕曼拏羅（マンドラ）の事業に達し、
〔一一〕十眞如を契證して　諸根悉く清淨なり。
若し彼、法を求むる者は　師に於て輕毀を生ずれば、
則ち諸如來を謗つて　常に諸の苦惱を受く。
〔一三〕増上愚癡に由つて　現報を獲、
〔一四〕惡曜の爲めに執持されて、　重病相纏縛し、
王法の逼切する所　及び毒蛇〔一五〕傷螫（しやうせき）
寇賊水火の難あり、　〔一六〕非人其の便を得。
彼の〔一七〕頻那夜迦（ビナーヤカ）　常に諸の障礙を作す。
此に從つて命終れば、　卽ち惡趣に墮す。
〔一八〕阿闍黎（アーチャルヤ）をして　少分して煩惱を生ぜしむる勿れ。
無智にして相違背すれば、　定めて〔一九〕阿鼻（アヴィ）獄に入り、
種種の極苦を受く　之を說くこと深くして怖る可し。
阿闍黎（アーチャルヤ）を謗るに由つて　中に於て常に止住す。
〔二〇〕彼の阿闍黎は　弘く正法藏を持す。
是の故に當に一心にすべし。　輙ち輕毀を生ずる莫れ。
常に阿闍黎に於て　承事して供養せよ。
尊重心を發生して　則ち障惱を蠲除せよ。

【八】揀擇、わかちえらぶ。
【九】閑、大ひなり。又、ならふ(習)。
【一〇】眞言。梵語で曼怛羅是は如來は三密の隨一語密である。總じては法身佛の說法を言ふ。たとひ經中顯言あるも、其の聲名句文は大日如來の祕密加持を以て體性となす故に總じて眞言祕密藏である。別しては陀羅尼を云ふ。譯して總持と云ひ、又祕密號密言密語と云ひ、呪明とも云ふ。東密はたとひ總門に依るも眞言とは兩部の大經に限るとし、東密は理祕密教を立て、釋迦所說の法華・華嚴・楞伽・仁王等の諸經總て一乘教の眞如法性を說くものを眞言となす。大日經疏一によれば、眞言とは眞語如語不妄不異の音で、龍樹の釋論では之を祕密號と言つてゐる。是は釋摩訶衍論中に說く五種言語の第五如義語である。顯教は眞如は言語道斷であると言ふが、前四種の語に依れば眞言卽ち如義語を以ては眞如何說くべしと言ふ。さて眞語とに眞如を說く語である。(台密の義) 眞實の語である。又眞卒正眞の語である。(東密の義)。如語とは又眞如を說くことである。眞實如常の語である。此の二は顯教の假名語に對する。不妄と

事師法五十頌

馬鳴菩薩集

西天譯經三藏朝散大夫試鴻臚少卿宣梵大師賜紫沙門臣日稱等　詔を奉じて譯す。

諸經律秘密教に依つて　略して承[一]事師儀軌を出す。
聞き已つて愛樂して淨心を發し、　當に如來の金剛智を獲べし。
若し灌頂師に於て　三時に禮奉を伸せば、
則ち己れ十方諸如來を　供養せんが爲め
最上の恭敬を起し、　合掌して以て華を持し、
彼の[二]曼荼維に散じて　頭面足に接して禮す。
彼の師或は家在、　及び新に具戒を受けしもの、
經像を前に置けば、　則ち諸の癡謗を息む。
[三]若しくは出家の弟子にして　常に心を淨めて承事すれば
已坐して當に起迎すべし。　唯[四]致禮を除く。
[五]彼の師及び弟子は　互に其の器を審かにすべし。
若し先ず觀察せざれば、　同じく越法罪を得。
[六]若し忿恚にして慈無ければ　貪愛にして散亂多し。
[七]憿易にして種族を恃めば、　慧を以つて當に揀擇すべし。

【一】印度にては師弟關係は佛教のみに限らず、印度全般の通則として規定され、摩菟の法典(Mānava-dharmaśāstra)等に現れてゐる。
【二】曼荼羅(Maṇḍala)、曼陀羅、滿茶羅、曼陀努羅、略して曼拏、曼茶と云ふ。新舊の譯が種々ある中、舊譯は多く壇又は道場と譯し、新譯は多く輪圓具足又は聚集と譯してゐる。此中、體に就けば壇又は道場と譯すを正意とし、義に就けば輪圓具足又は聚集と譯すを本義とする。即ち方圓の土壇を築いて諸尊を此に安置し、以て祭供するものが曼陀羅の本體であつて、此壇中には諸尊諸德を聚集し具足して一大法門を成し、轂輞輻の三具足して圓滿の車輪を成ずるが如くである。是が曼陀羅の義である。而して常に曼荼羅を稱するのは之を圖畫したものを言ふ。こゝでは道場の意である。
【三】常に心を淨くして承事すべし。
【四】致禮、禮を行ふこと。
【五】師弟は互に己の器を審かにすべし。
【六】師に於て輕毀を生ずる勿れ。
【七】憿易、憿、おごる、おごり。

重ぜられ、修道は人生の殆んど凡てであつた古代印度に於ては最等事師の儀軌は空文死語でなく、印度師弟間に嚴然と守られたものであつたであらう。

現代に於いてこの凡てが遵守され得べきものではないが、人心荒み、師弟關係亂れたる現在に於ては、この馬鳴の事師法五十頌はその頌文美麗流暢なると相俟つて、現代人に諷誦され、一の清涼劑たらしむるに足り、その幾分は遵守されて可なりであらう。

昭和七年六月十五日

譯者　平等通昭　識

五、樂んで喜捨を行ひ、己が身をも惜むべからず。況んや財物をや。

六、師の影をも踏むべからず。況んや牀坐資具をや。

七、師の教誨する所、歡喜して聽受すべし。

八、師の財物を守護する事、己が身命の如くせよ。

九、師の前に於て、頂を覆ひ、乘御し、足を翹げ、手を以て腰をうち、安然として坐臥すべからず。また雙足を舒ぶべからず。

師の前に於て隣近と語笑する勿れ。歌舞する勿れ。

又疲勞の相を現はし、指節を屈して聲を作し、柱壁に倚るべからず。笑嗽伸欠する時は、手を以て口を遮れよ。師の前に於ては常に諸の威儀を具へよ。

一〇、師の名を稱擧すべからず。

一一、事あつて啓聞する時は、躬を曲げて輭語すべし。

一二、在家の女人來れば、威儀を具へ、憍慢を捨離すべし。

一三、常に師の德を慕ひ、小過をも窺ふべからず。

一四、師と同じく居る時は、旨なくして說法すべからず。弟子を度すべからず。

一五、說法によつて得る所あらば、悉く以て其師に奉じ、與へらるるに隨つて用ふべし。

一六、常に師をして歡喜せしめ、諸の煩惱の事を離れしむべし。

この事師の儀軌は詳細にして微に渡り、しかも極めて嚴格なるものである。この師弟關係の儀軌は必ずしも佛教獨特のものでなく、印度古來の宗規にも古くより此の如きものが定められてあつた。卽ち摩蒐の法典(Mānava-dharmaśāstra)に於ては嚴かに之を規定し、婆羅門族(Brāhmaṇa)は八歲の時、刹帝利族(Kṣatriya)は十一歲、毘舍族(Vaiśya)は十二歲の時に於て、聖糸を被つて師の宅に送られるを要し、その時は唯一筋の帶と一本の杖と一二領の衣とのみを有し、其他一切の物を携へてはならない。師の宅に在る間は弟子は唯々として師の命に從ひ、決して敬虔の念を失つてはならず、日々食を乞ひ得て—之を恭しく師に奉じ、業成るまでは幾十年なりとも、師の爲に一切の賤役に從事し、決して師をして不便を感ぜしめてはならないことになつてゐる。而して馬鳴の事師法五十頌等の佛教の師弟關係の儀規は、之等印度傳統的の儀規を、更に佛教化したものであると言へる。之等儀規は記述嚴肅にして眞面目を吐露し、少しも虛飾に流るる所が伺はれないことから考へれば、東西古今稀れな宗教的民族にして、文教は最も

陀の弟難陀（Nanda）の回心を美しく書いたものである。大莊嚴論經（Sūtrālaṃkāra-śāstra）は譬喩譚を集成したものであるが、馬鳴作であるかも知れぬ。金剛針論（Vajrasūci）は漢譯は法稱（Dharmakīrti）著としてゐるが、馬鳴の著作であるかも知れない。外に馬鳴著たること略〻確實な戲曲舍利弗劇外二篇があり、斷片が中央亞細亞より發見された。

彼は佛教的思藻を純藝術的表現によつて歌ひ出で、實に羅摩耶奈詩（Rāmāyaṇa）の作者跋彌（Vālmīki）の後繼者であり、かの有名なカーリダーサ（Kālidāsa）の先驅者である。彼は藝術的才能に勝れ、又卓越した音樂家であつて、付法藏因緣譚第五によれば、彼は妙伎樂賴吒啝羅を作り、其音清雅哀婉調暢にして、苦空無我の法を宣べ、伎人解すること能はず、曲音節悉く乖錯する時、馬鳴自ら衆伎人中に入り、自ら鐘鼓を擊ち、琴瑟を調和したといふ。

馬鳴は從來大乘佛教家として喧傳崇拜されて來たが、今後は寧ろより多く佛教詩人・文藝家として注目讃仰さるべきである。彼は最近敍事詩人・戲曲家・抒情詩人として印度文學史上に最も優れた詩人の一人として顯著な重要な地位を占めるに至つた。

漢譯者日稱（Sūryayaśas ?）は印度沙門であつて、北宋（九六〇—一一二七）の時支那に來り、宣梵大師の宣號を有し、中印度摩訶陀の人にて支那に紀元一〇〇四年に來た法護（Dharmarakṣa ?）と同年代の人であつた。彼に歸せられる譯經が二部ある。

卽ち事師法五十頌と同じく馬鳴菩薩造の十不善業道經（Daśaduṣṭakarmamārga-sūtra 一〇〇四—一〇五八）とである。事師法五十頌は紀元一〇〇四 一〇五八年に譯出された。

二、結構・文體並に思想

事師法五十頌は五字一句より成る二百八句より成り、從つて梵本一頌（śloka）を、大體四句で譯してゐる譯である。譯文は簡潔であつて、平易、略〻明快である。原文は韻律の流麗と相待つて、優れたものであつたらう。

事師法五十頌は弟子の師主に事へる心得・態度を記したものであつて、馬鳴菩薩が事師に如何に一擧止一投足の末にも細心留意し、又印度古代の儀軌が如何に愼重綿密であつたかを知り得る。今其の梗概を擧げれば、

一、常に心を淨うして承事すべし。

二、師弟は互に自己の器を審かにすべし。

三、師をして少分も煩惱を生ぜしむる莫れ。

四、師に於て輕毀を生ずる莫れ。

事師法五十頌解題

事師法五十頌は頌文で師に事ふるの法を記述した小詩である。

一、作者並に漢譯者

事師法五十頌（Garusevādharmapañcāśadgāthā）は馬鳴菩薩集と記されてゐる。之が馬鳴菩薩の著述なることを立證する文獻は他にないので、事師法五十頌を馬鳴作なりと斷定することは出來ない。然しながら事師法五十頌は思想の點からも流麗な偈文の表現の點からも、漢譯に馬鳴菩薩集と傳へるならば、この著を佛所行讃（Buddhacarita）・孫陀羅難陀詩（Saundarananda-kāvya）の著作者である馬鳴（Aśvaghoṣa）の著と暫く見做しても差支へない性質のものである。

馬鳴菩薩については金剛針論其他の著者として本國譯一切經の他の卷にても記述し、更に自著『梵文佛傳文學の研究』（二三一—九五頁）・『梵詩邦譯 佛陀の生涯』（六一—一二頁）に論究してあるので、此處では詳記するを避けることとする。馬鳴は不出世の佛教詩人であつて、深遠な思想を蓄へた史上須要な佛教思想家であると同時に、才氣喚發たる天才的詩宗である。大體彼は迦膩色迦王（Kaniṣka）と同年代であつて、西曆一世紀の人である。彼の生地は舍衞國娑枳多（Bhāsita）（Āketa, Ayodhyā今日のOudh）とされ、或ひは婆羅捺斯（Vārāṇasī）又は巴連弗城（Pāṭaliputra）とも言はれてゐる。自著孫陀羅難陀詩と西藏譯「佛陀の生涯」にはサーケータ生れ（Sāketa）と自稱してゐる。中印度生れなのは事實であらう。母はスヴァルナークシィー（金色眼 Suvarṇākṣī）と言ひ、婆羅門族の出身で、深い婆羅門教育を受けたが、脇（Pārśva）尊者又は富那奢（Puṇajayaśas）尊者が來て、彼を佛教に歸依せしめた。

馬鳴の佛教思想は大體小乘の說一切有部に屬して原始佛教を多く出でてないが、大衆部等の進步的思想を多少取り入れ、又文體氣分態度等から、自由思想の佛教詩人として分別部又は分別部的行き方を取つて進んだ人のやうに思はれる。大乘思想家ではないが、佛陀の崇拜讃嘆に力を入れる內、心內に大乘の萠芽を藏するに至つたが、それは十分に芽生えなかつたらしい。

馬鳴の著作として確實なものは、『佛陀の生涯』（佛所行讃）と孫陀羅難陀詩である。『佛陀の生涯』（Buddhacarita）は佛陀の傳記を美しく歌つたものであり、孫陀羅難陀詩（Saundarananda-kāvya）は佛

是の故に汝等を勸む。　無常身を觀察し、
欲渇の心を遠離して　人天の樂に耽るなかれ。
須臾にして久長ならず、　皆散壞に歸す。
我れ淨信心を起して　虚幻の樂を捨離し
常に佛前に詣で、　合掌して親近し
自の大菩提を以て　而して解脱の主と作れ。

稱せられ、台密には歡喜天の如く双身毘沙門法もあり、但し阿娑縛抄に出す双神は共に男天である。その形像は多種ある。胎藏界曼陀羅の像は甲冑を着て左掌に塔があり、右に寶棒を持つてゐる坐像である。或は傳によつて立像のものもある。金剛界曼陀羅も同じである(織田)。

【六六】 那羅延(Nārāyaṇa)。天上の力士の名。或ひは梵天の異名。眞諦等は那羅(Nara)は人、延(yana)は生本と譯し、梵天は衆生の祖父故生本と言ふとし、羅什は天力士で端正勇健であると言つてゐる。又毘紐天(Viṣṇu)の別名で、多力を求めるものは承事供養すれば神力を獲ると言つてゐる。迦婁羅(Garuḍa金翅鳥)に乘り、虚空を進むと。那羅延天はもと印度教の有力な神であつたが、佛教に入つた。

【六七】 四天王。帝釋の外將である。須彌山の山腹に一山あり、由揵陀羅と名ける。山に四頭あり、四王各之に居り、各一天下を護る。依て護世四天王と云ふ。其の所居を四王天と云ふ。是れ六欲天の第一であつて、天處の最初である。四天王天(Caturmahārājakāyika)と稱し、東は持國天(Dhṛtarāṣṭra)南は増長天(Virūḍhaka)西は廣目天(Virūpākṣa)北は多聞天(Dhanada)又は(Vaiśravaṇa)と云ふ。

賢聖集伽陀一百頌(終)

若し財食等を以て　罪人に布施すれば、
功利漸く殊を加へ、　福を獲ること千倍を成す。
若し持戒の人に施せば、　福を獲ること千百倍にして
無心の人に施せば、　百俱胝を益すを得。
若し人、有學　及び彼の無學の者に施せば、
獲る所福德に於て　前に比して最上なり。
若し佛・如來に施せば、　當に天上に生ずべく、
大富永く斷たず、　恒に快樂を受け、
乃至輪廻を盡して　寂滅法を證す。
我れ此一切の　佛說の[五三]伽陀經を集め、
略して福報を明かにし、　普く信受を生ぜしむ。
假使(たとへ)ば千光の日　吉祥にして大地を照し、
夜分滿月輝いて　能く靑蓮華を開く。
[五四]水天・[五五]毘沙門(ヴァイシユラヴァナ)　[五六]帝釋(シャクラ)・那羅延(ナーラーヤナ)の
上首諸天等　俱に因りて施を行じ得て、
日に虛空を行きて　上下普く皆照して
能く諸物の命を活かす。　時至つて亦無常なり。
[五七]帝釋・四天王　竝びに諸天衆の
福壽窮盡する時　而して死寃の口に入る。
憂悲苦惱の火　住せずして焚燒せらる。

【五三】伽陀(Gāthā)。譯、偈。一般に印度文學に於て長き偈文を言ふ。韻文にして簡勁に思想を吐露す。佛教にも多し。
【五四】水天。梵語嚩嚕拏(Varuṇa)。水と譯す。龍神の名である。水に於て自在の力用を具するので水天と名ける。金剛界曼荼羅の四大神、及び外金剛部二十天、又胎藏界曼荼羅の外金剛部院に於て各一位を占む。是れ水神であるので、西方に屬して西方守護の天とする。
【五五】毘沙門(Vaiśramaṇa)富神クヴェーラのこと。財を司り、雲の最頂アラカー(Alakā)に宮殿あり、夜叉(Yakṣa)等に仕へられ、日夜快樂あり。又多聞天。四天王中毘沙門天の王である。もと金毘羅(Kumbhīra)として暗黑の屬性であつたが、次第に光明神と化して、アハ!ベーラタ物語に入つて施福の大神として尊重せられるに至つた。佛教中には護法の天神と施福の神性とを兼ねる。法華義疏には恒に如來の道場を護つて法を聞く故に多聞天と名けると云ふ。胎藏界曼陀羅には外金剛部院北方の門側にあり、金剛界曼陀羅には西方に位する夜叉王である此の天と吉祥天とは古神話時代から常に相關連して夫妻と

若し彼の諸の有情、[45]妙法寶を書寫すれば、
當に[46]宿命智を得べく、富貴にして恒に安樂にあり
而も一切の罪を滅し、彼の[47]倶胝(コーチイ)劫を經て、
地獄及び鬼・畜生に墮せず。
若し彼の智ある者 掃灑して壇場を結び、
旋遶して香華を散らし、恒時にして供養すれば、
後人間に生れ、及び天上に生れ、
恒に富貴を受く。復た寂滅を證するが故に。
若し[48]長明燈を以て 佛・聖賢を供養すれば、
彼の人天の中に生れて [49]三眼常に清淨なり。
慧眼と天眼と 及び肉眼に於ての故に。
又彼の燈を施す者は 常に天上に生るゝを得て、
口亦[50]瘖瘂(おんあ)ならず、耳・眼に[51]聾眇(ろうべう)無し。
又彼の燈を施す者は 唯三眼淨きのみに非ず、
能く正覺の法に於て 一切悉く通達す。
[52]智者若し財を施して 有德の衆
沙門・婆羅門を供養すれば、少施して多報を獲、
廣く順道の財を得て、長時にして受用す。
又彼の施を行ふ者は 食を畜生類に施せば、
獲る所は福德に於て 而して百倍を成じ、

【四五】寫經の功德。
【四六】宿命智。宿命を知る智である。
【四七】倶胝(Koṭi)。又倶致。拘致。數の名。譯億。
【四八】長明燈供養の功德。
【四九】三眼。慧眼、天眼、肉眼。
【五〇】瘖。病によつて言語を發すること能はざること。おふし、おし。瘂、おし、おふし(瘖)。
【五一】聾。つんぼ。眇、一目少なり。かたかた盲なること。かため、めつかち。すがめ。又その者。
【五二】沙門婆羅門、畜生罪人への布施功德。

井泉及び池沼を　修飾して嚴淨ならしめ、
彼の渇乏の人を救うて　普く皆充足せしむ。
後報、天に生ずるを得て、　或は梵世に生れて
種々、快樂を受け、　復た寂滅の果を證す。
若し[四三]鉢多羅を以て　三寶に布施すれば、
當に一切處に生れて　富貴にして快樂あるべし。
彼の世間の中に於て　尊高にして德最上なり。
復た諸の衆生　恒時にして供養するを感ず。
智者若し力を施せば、　天上に生るゝことを得べく、
智慧極めて聰利にして、　永く刀兵に値はず。
若し人、其の針を施せば、　智慧恒に猛利にして
能く諸の煩惱を斷ちて　彼の寂靜道を證す。
佛は說くに若し人有つて、　[四四]佛像を塑畫すれば、
天界中に生れ、　身體眞金色にして
清淨の光は日の如し。　而して諸天人衆
天男及び天女は　恒時にして歸命す。
若し彼の智慧人　善能く法を說いて施せば、
天上人間に生れ、　智德力具足して
恒に快樂を受け、　永く憂悲苦を離れて、
其後有の身に於て　寂滅道を證すべし。

【四三】鉢多羅（Patra）。鉢のこと。梵語音譯である。

【四四】佛像塑畫の功德。

甘露復た身に隨ふ。
[三七] 若し人、齋食を設くれば、
貧寒を遠離して
若し象馬等
佛如來に供施すれば、
若し鞋[三九]襪(バツ)等を施せば、
常に象馬車有り、
師長等病有り、
當に一切處に於て
若し座具等を施せば、
苦の辛勤を受けず、
敷設臥具の施あり、
身相廣く端直にして
種雜の園林を修して
人に施して遊止せしめ、
當に歡喜園を招くべし。
諸天女等と
若し炎熱の時に於て
當に[四二]優曇鉢(ウドンバラ)
復た後に天に生るゝを得て、

飲を施して斯の報を得。
當に人天に生れ、
長命にして財寶に足るを得べし。
[三八] 車乘及び輦輿を以て
當に大神通を得べし。
恒に[四〇]上族の家に生れ、
永く貧辛苦を離る。
若し人、勤めて承事すれば、
所求、皆成就すべし。
天上に生るべし。
常に上妙座に坐して
天に生れて恒に快樂あり、
無畏にして人、稱讃す。
諸の屋宅を嚴飾し、
身心、適悅を生じ、
天人遊行の處
嬉戲して快樂を受く。
[四一] 而も蔭涼の施を爲せば、
尼倶(ニヤクローダ)・菩提樹を感ずべし。
恒に五欲の樂を受く。

【三七】 齋食供養の功德。
【三八】 以下車輿。鞋襪、座具供養の功德。
【三九】 襪、たび(足衣)。
【四〇】 上族。よき高位の族の意。
【四一】 蔭涼の施の功德。
【四二】 優曇鉢(Udumbara)。優曇、烏曇。花の名。具には優曇波羅、烏曇跋羅。譯、靈瑞、瑞應など。天の華で、瑞相とされ、喜ばれる。學名(Ficus Glomerata)なる實在の本もあり。尼倶(Nyagrodha)「下に生ずる」。バンヤン(Banyan)又は印度の無花果樹。氣根が枝から地に向つて下り、根を出して新しい幹を作る。學名(Ficus Indica)。菩提樹(Bodhidruma)又(Bodhivṛkṣa)釋尊此の樹下に成道したので、菩提樹と名け、譯して道樹又は覺樹と言ふ。この樹本名は佛所行讚(Buddhacarita)には(Aśvattha)「馬、その下に立つ」、法苑珠林には具多樹と言ひ、法顯傳には阿沛多羅樹、西域記八に畢鉢羅樹(Pippala)と云ひ、觀佛三昧經に阿輸陀樹(Aśvattha)と言ふ。(Aśvattha)正しいらしい。アシユヴアッタは神聖な無花樹學名(Ficus Religiosa.)

當に天界中に生るべし。
摩尼(マニ)寶器を以て
飢饉・刀兵劫
若し人、飲食を以て
人天の中に生ずべし。
種々にして最上にして
若し美妙食を以て
常に富樂の身を得。
色力の相具足す。
若し慈愍心を以て
[三四]酥・乳・酪漿等を施し、
之を飲んで安樂を得しむれば、
若し　[三五]訶梨勒(ハリタキー)・
聖賢に供施すれば、
無病にして長壽、
又彼の漿飲を施して
[三六]劫樹華芳盛にして
寶器にて酒蜜等
又復た劫樹に於ては
妓唱天樂等

眷屬、寶座を同じうして
天上の　[三三]妙饌(めうせん)を食し、
永く其の中に生ぜず。
聖賢衆に供養すれば
美食常に豐かに足りて
智者恒に敬愛す。
彼の出家者に施せば、
辯才にして長壽、
施食の報、是の如し。
彼甘蜜の水
彼の渇乏者をして
亦前の如き報を得。
林藤の諸藥草を以て
當に人天の中に生るべし。
恒に身の安樂を獲。
後に天宮に生るゝを得ば、
求むる所、意に隨つて得。
眷屬と同じく飲む所なり。
能く莊嚴の具を出し、
天衆の心を悅樂して

六

【三一】鈴鐸供養の功德。鈴鐸、すず。鐸は古昔に教令を布告する時に、之を振りて衆を警めたもので、文事には木舌のものを用ひ、武事には金舌のものを用ひた。おほすず。

【三二】飲食供養の功德。

【三三】妙饌、饌。具ふる酒食。そなへもの。

【三四】乳、初めて牛より出るもの。酪、生乳より取つたもの。酥・酥に生酥味・熟酥味の二種ある。生酥味は酪より更に製したもの。熟酥味は更に生酥より精製したもの。この外に醍醐味あり、熟酥を更に煎熟したものである。

【三五】以下藥草供養の功德。訶梨勒(Haritaki)。又訶利勒、呵利勒、訶梨勒、訶梨怛鷄等。果の名。天主將來、五藥の一。佛陀成道後暫くして下痢せられた時、龍の捧ぐるハリータキー果を食して癒られた記事あり、黃色のミロバラン(Myrobalan)木。學名(Terminalia Chebula)。果實は黃色の染料と緩下劑に用ひられる。

【三六】劫樹。劫波樹、帝釋天の喜林園に在る樹の名。劫波は時の義。時に應じて一切所須の物を出す。

彼の諸の眷屬と　園林に遊嬉して
種々の華を以つて供養し、　而して是の如き果を獲。
〔二八〕琉璃・眞珠の寶　金・銀・青緑等、
〔二九〕繖蓋(さんがい)を莊嚴して　團圓なること、滿月の如し。
若しくは王、若しくは大臣となり、　而して用ひて頭頂を覆ふ。
佛、此の因を說くが如し。　施蓋して斯の報を獲たり。
貪憂惱を解脫して　無病にして恒に安樂に
復た世間の王と作(な)るも　亦是れ施蓋の報なり。
〔三〇〕若し佛の塔廟に於て　幢旛を布施すれば、
當に天輪王となり、　世上能(よ)く勝る者なく、
一切の罪を遠離す。　諸の衆生の中に於て
而も上首となり、　恒に人の供養を得たり。
若し人、塔廟に於て　〔三一〕鈴鐸等を布施すれば、
罪惡の地に生れず、　常に梵音聲を得。
若し人、妓樂・　琴瑟・鼓吹等を作つて、
佛・聖賢を供養し、　聞心をして適悅ならしめば、
天耳根を獲べし。　莊嚴常に清淨にして
復た金剛慧を得て、　煩惱の山を摧壞す。
〔三二〕若し信喜の心を起し、　妙色の香味
種々の美飲食を以て　諸佛等を供養すれば、

び法界次第に除覺分と名く。身心麁重を斷除して身心をして輕利安適ならしめること。六に定覺支、心を一境に住して散亂せしめないこと。七に行捨覺支、諸の妄謬を捨て一切の法を捨て、平心坦懷更に追憶しないこと。是は行蘊所攝の捨の心所であるので、行捨と云ふ。此の七法に於て若し行者の心が浮動する時は除捨定の三覺支を用ゐて之を攝むべく、若し心沈沒する時は擇法精進喜の三覺支を用ゐて之を起すべきである。念覺支は常に定慧を念ずるのである。廢退すべきでない。是の故に念覺を除き、他の六覺は行人の要に隨つて之を用ふるのである。此の七事を以て無覺果を證するを得るのである。

【二七】帝釋。釋提桓因（Sakra devānām indraḥ）のこと。佛教の守護としての因陀羅 Indra である。

【二八】琉璃（Vaidūrya）新譯は吠琉璃、吠琉璃耶。七寶の一。遠山寶、不遠山寶と譯す。青色の寶石である。産出の山によつてつけた名である。遠山は須彌山の異名。不遠山は波羅奈城を去る遠からざる山であると言ふ。

【二九】繖蓋。きぬがさ。

【三〇】幢旛供養の功德。

名衣及び上服を
後、天界に生ずる時、
青黃の種々の色あり、
而して用ひて莊嚴を作し、
快樂も亦無邊にして
若し人、世間に生れて、
諸色相を具足し、
種々殊勝の香は
皆、佛衣を施すに因て、
若し天界に生ずる有らば、
身に珠の瓔珞を挂け、
[21]耳鐶及び[22]腕釧あり。
佛に莊嚴具を施して
若し大國王と作つて
瓔珞・摩尼珠
亦是れ[24]三寶田に
智者に淸淨心あり。
天上及び人間に生れ、
復た後報の中に生ず。
復た天山地に生れ、

佛に施し、及び僧に施せば
最上の天衣は香り、
百千摩尼の寶あり、
富貴にして無量なり。
斯の勝妙果を獲。
而して國王と作るを得ば、
上妙の繒綵衣、
身に隨つて恒に受用す。
斯の如きの報を成就せり。
種々の寶にて莊嚴し、
頭に寶玉の冠を戴き、
是の如き富・快樂は
天の勝妙の果を獲たり。
身相廣く嚴飾して
[23]打璫の聲響亮に
莊嚴の具を布施すれば、
佛に[25]華鬘等を施せば、
常に快樂を獲て
[26]七覺華を成就して
而して[27]帝釋主と爲つて、

【二一】鐶。郭にして孔有りて貫繫すべき金屬のもの。かねのわ、たまき、わ。
【二二】釧。うでわ。
【二三】璫、耳飾の玉。みみたま。みみかざり。
【二四】三寶田。佛法僧の三寶を言ふ。
【二五】華鬘。華で造つた鬘。現今の花環。
【二六】七覺華。七覺を華に喩へたのである。七覺分は又七菩提分、七覺支と云ひ、倶舍論に七等覺支と云ふ。七科道品中の第六である。覺とは覺了覺察の義。聖道の生じないのは定慧の調はないのによる。故に心の定慧に據るを明かに見分けて偏に一方にかたよらしめず、定慧均等ならしめる法である故に等覺と名け、覺法七種に分れるので、支或は分と云ふ。修道に於て思惑を斷ずるのは、此の七覺の力に依るのである。それ故修行の次第に約すれば八正七覺と列ぬべきであるが、數の次第に約して七覺八正と列ねるのである。一に擇法覺支、智慧を以て法の眞僞を簡擇するのである。二に精進覺支、勇猛の心を以て邪行を離れ、眞法を行ずるのである。三に喜覺支、心に善法を得て歡喜を生ずるのである。四に輕安覺支、止觀及

有色無色の生も亦爾り。
當に生老病死の苦を離れて、
若し塔廟に於て[一二]舍利を安んじ、
彼の智光を得て、大地を照し、
無邊の衆生界に安住し、
若し[一三]寂靜山峰の上に於て
形量指節許りの如きなるべきも、
端嚴大富色力安かに、
若し人、手を以て佛塔を開けば、
身體光潔にして心柔輭に、
若し[一五]智者有つて[一六]檀度を行じ、
[一九]恭倶摩等の種々の香を施せば、
若し人、佛を信じて歡喜を生じ、
種々に佛・如來を供養すれば、
彼の池の蓮の細香藥を以て
曼那吉偏水清淨に
波濤流湧して噴香冷かなり。
天等親て斯く恒に[二〇]適意なり。
是の如きの功德、量る可からず。
是の故に諸經、頌を結んで讃す。

富貴は無邊にして量る可からず。
究竟菩提・佛果は圓かなり。
及び佛像を畫いて供養すれば、
善逝は淨妙にして佛は富貴なり。
同じく平等無相の性に入る。
佛塔及び相輪を安置せば、
當に一切人天中に生じ、
後に[一四]三十三天子と作る。
當に富貴を及び具足を獲べく、
多智・性淨にして瞋恨無し。
佛に[一七]塗香及び[一八]白檀
當に廣大にして愛す可き果を獲べし。
妙香花及び音樂を持し、
天に生れて金寶池を感じ、
遍身霑惹して澡浴し、
入る者の塵垢は自然に除き、
寶岸に紅蓮周匝して開き、
佛僧に給施して此の報を得、

【一二】舍利安置の功德。舍利(Śarirah)。文字の意味は單に骨の意であるが、復數は特に佛陀身の荼毘後殘つた遺骨を言ふ。
【一三】山峯に佛塔相輪安置の功德。
【一四】忉利天に於ける三十三天を言ふ。
【一五】佛供養の功德。
【一六】檀度、檀那波羅蜜(Dāna-pāramitā)即ち布施波羅蜜のこと。
【一七】塗香。香を細い粉末として身體に塗るやうにしたもの。香氣の外に暑熱の折、身體を冷すに用ふ。
【一八】白檀(Candana)。白色の旃檀であつて、香木である。そのまゝ燒香として用ひ、又その粉末を身體に塗つて化粧並びに冷却に用ふ。學名(Sirium myrtiforium)。香料として極めて高價なものである。現在のサンタル。
【一九】恭倶摩 Agurn (蘆薈)か。然らば芳香ある蘆薈木。(Aguilaria Agallocha)。寒き時用ふる香料であると。
【二〇】適意(Manorata)。意に適ふ、卽ち心快きこと。

是の如くして無量の福を獲
一切の惡道の苦を消除して
[六]諸佛如來行住の處に
承事供養し、兼ねて法を聞き
當に廣大無邊の果を獲べし。
器を以て較量するも算して及ばず。
若し人、[七]佛殿を修建すれば、
最先に寂滅の法を獲證し、
[八]若し人、佛像を塑畫すれば、
復た天に生じて勝妙身・
若し人、佛像を重修すれば、
長壽・色力・[九]諸相圓かなるを得、
煩惱・諍訟皆滅除し、
諸根を調伏して策勤し、
若し人、諸の佛像等を修すれば、
富貴端嚴にして衆の欽ぶ所となり、
[一〇]破損の塔廟を若し重ねて修すれば、
一切世間の愛す可きの果は
若し[一一]佛像及び佛塔を造らば
唯天上と人間となるのみならず、

及び智者の[五]七聖財を得。
永く大富を受けて窮盡することなし。
若し人到り已つて恭敬を生じ、
深く信じて修學し、戒行に依れば、
譬へば大海の渺々として深きが如く、
福德の因緣も亦是の如し。
寒熱風雨も侵すこと能はず。
一切隨意の願を圓滿す。
憂惱・疾病は解脱を得、
大智・吉祥・及び尊貴を得、
當に堅牢無病の身・
後に涅槃寂靜の樂を得。
勇猛辯才あり、人稱讃し、
一切の莊嚴は衆の敬ふ所となる。
遠く過失を離れて、天に生ずるを得て、
一切の福德皆具足す。
彼の人無病にして身は圓滿なり。
種々心に隨つて皆具足す。
形量の至小なること麥粒の如きも、
決定して王と爲つて快樂を受けん。

【五】七聖財(Saptadhana)。見道以後の聖者を七種に分つたもの。諸經の所説は少しく異る。寶積經四十二には、信(正法を信愛すること)、戒(法律を持すること)、聞(能く正教を聞くこと)、慙(自分に慙づること)、愧(人に愧づること)、捨(一切を捨離して染着なきこと)、慧(智慧事理を照すこと)、等の法を七聖財と謂ひ、衆生が此を守らないのを極貧窮と名けるといふ。涅槃經十七には信戒慚愧多聞智慧捨離を七聖財としてゐる。

【六】巡禮禮拜の功德。

【七】佛殿修建の功德。

【八】佛像塑畫重修の功德。

【九】相好(lakṣaṇa)即ち佛陀菩薩等の肉體的特相を言ふ。

【一〇】塔廟重修の功德。

【一一】佛像佛塔建立の功德。

賢聖集伽陀一百頌

西天譯經三藏朝散大夫試鴻臚小卿明教大師臣天息災　詔を奉じて譯す。

[一]一切の出世間　三界の最尊功德海に稽首す。
智火は能く煩惱の垢を燒く。　正覺に我今歸命し禮す。
能く生死の險を拔き、　普く憂惱貪癡海を竭し
彼は塵勞罪業の山を破る者に稽首す。　我今妙法の寶に歸禮す。
一切佛の稱讚する　八聖道行作莊嚴に稽首す。
無爲禪定漸く圓明となり。　我今聖なる衆寶に歸禮す。
內宮の寶藏・諸の樓閣・　金玉・[二]摩尼の種々の光・
眞珠・瓔珞廣く莊嚴し、　百千天人恒に遊履す。
[三]若し天界中に安居するを得ば、　佛寺を修嚴して斯の報を獲。
信心して三寶に歸敬し、　財帛を精舍の中に給施すれば、
彼の人天の快樂を受け已つて、　當に涅槃寂滅の果を得べし。
[四]精舍年深くして多く摧壞す。　重修嚴飾して佛僧に供すれば、
常に快樂を獲て人天に住し、　亦涅槃寂滅の果を得。
若し精舍に於て園林・　座具・衣服・湯藥等を施し、
復た惡世飢難の時に遇うて　彼の衆生の飲食物に施せば、

【一】偈文に共通する歸敬文。

【二】摩尼(Maṇi)。梵語の音譯。珠玉の意。

【三】以下諸の德行の功德を記す。先づ歸三寶の功德。

【四】精舍修造の功德。

王となる。同じく鈴鐸等を布施すれば、罪惡地に生ぜず、梵音聲を得る。伎樂琴瑟鼓吹等を作し佛聖賢に供養すれば、心適悅にして天耳根また金剛慧を獲る。信喜心を發し、妙色香味・種々美飮食を諸佛に供養すれば、天界に生じ、天の妙饌を受け、飢饉刀兵劫がない。人飮食にて聖賢衆を供養すれば人天中に生れ、美足あり、美妙食を出家に施せば富樂身を獲、辯才長壽である。慈愍心を以て甘蜜水・酥・乳・酪漿等を施せば安樂を獲、呵梨勒・林藤諸藥草を以て聖賢に供施すれば、人天中に生れ、無病長壽であり、漿飮を施せば、天宮に生ずる。齋食を設ければ、人天に生じ、象馬等車乘及び輦輿を佛如來に供施すれば、大神通を得、鞋韈等を施せば、上族家に生じ、象馬車あり、貧辛苦を離れる。人に承事し、一切處にて果し、座具を施せば、天上に生じ、上妙座と快樂あり、園林を修し、屋宅を嚴飾すれば、天の快樂を受け、炎熱の時に陰凉を施せば、優曇鉢・尼俱樹・菩提樹を感じ、天を生ずるを得、五欲樂を受け、井泉・池沼を修飾し、渴乏人に施せば、天・梵世に生れ、快樂を得、寂滅果を得る。鉢多羅を三寶に施せば、富貴にして尊高にして德最上で、智者刀を施せば智慧聰利となり、針を施せば、智慧猛利にて煩惱を斷ち、寂靜道を證し、佛像を塑畫すれば、天界に生れ、人に歸命され、說法を施すも同じく、妙法寶を書寫すれば宿命智を得、一切罪を滅し、壇場を掃灑し散花すれば、人間天上に生れ、長明燈を佛・賢聖に供養すれば、人天中に生れ、慧眼・天眼・肉眼淸淨に瘖瘂聾眇無く、正覺法に於て一切通達す。財を施し、有德衆・沙門・婆羅門を供養すれば、少しく施して多報を得、畜生類に施せば、福德之に百倍し、罪人に施せば千倍、持戒人では千百倍、無心人では百俱胝を益する。有學無學では最上で、佛如來に施せば天上に生じ富最上で、輪迴が盡き、寂滅法を證する。かくて世の無常を觀察して、欲渴心を遠離し、人天の樂に耽らず、佛前に詣で、大菩提を志し、解脫王と作るべきであると勸めてゐる。

之を要するに、本頌は布施と供養の功德の絕大なことを事細かに說いたものである。思想に於ては特記すべきものは見出されないものである。

昭和七年六月十八日

譯者　平等通昭識

賢聖集伽陀一百頌解題

賢聖集伽陀一百頌（Āryasaṅgīti-gāth=aśataka）は偈文からなる小經である。

作者は不明である。漢譯者天息災は勝軍化世百喩伽他經の折に說いた如く、北印度惹爛駄羅(Jalandhara)又は北印度迦濕彌羅(Kaśmīra)の沙門で、紀元九八〇年支那（北宋九六〇—一一二七)に來り、二十年間譯經に從ひ、紀元九八二年に明敎大師の稱號を受け、一〇〇〇年に死んだ。追號を慧辯法師と言つた。

賢聖集伽陀一百頌は七字一句よりなる一〇八句、五字一句より成る二九二句より成り、都合四百句、正確に一頌(Śloka)を四句を以て譯してゐる。前後句の字數の異るのは、頌の韻律が前後で異り、綴字(Syllable）の前後で多少がある爲であらう。文體は拙劣でなく中庸である。原文が韻律を踏んでゐたことは勿論である。

元來詩文に於て、賢聖集伽陀一百頌・勝軍化世百喩伽他經乃至事師法五十頌の如く、百頌五十頌と限つて作詩するのは、一般印度文學の通例であつて、佛教偈文々學に止らず、純粹文學にもその例甚だ多いのである。スールヤ・シャタカ(百)Sūryaśataka アアル・シャタカ(アマルの百韻) Amaruśataka. 盗人の五十韻(Caurapañcaśikā) 等の如くである。

賢聖集伽陀一百頌は宮廷詩並びに佛教經典の規に倣つて、先づ佛法僧の三寶に歸依してゐる。次に佛寺を修嚴し、三寶に歸敬し、財帛を精舍に給施する者は人天の快樂を受け、涅槃の寂靜の果を受けるとする。摧壞した精舍を嚴飾に佛僧に供するものも同じく、續いて精舍に園林・座具・衣服・湯藥等を施すものゝ功德、佛殿を修建し、佛像を塑畫し、修し、たとへ少くとも、佛塔廟を造るものゝ功德、塔廟に舍利を安じ、佛像を畫くものゝ功德、寂靜なる山峯上に佛塔及び相輪を安置し、手にて佛塔を開くものゝ功德、檀度を行ひ、佛に塗香・白檀・恭俱摩等種々香を施し、又佛を信じ、妙香花・音樂を佛如來に供養するものゝ功德を、夫々記して絶大にして量る可らざることを述べてゐる。

人が國王と作れるのは佛に衣を施したにより、天界に生れ、勝好果を獲るのは、佛に莊嚴具を施した爲、大國王となるのは莊嚴具を布施したにより、智者が佛に花鬘を施せば、天上・人間界にて恒に快樂を獲る。王・大臣にして蓋を施せば、貪憂惱を解脫し、無病安樂にて復世間王となる。佛塔廟に幢幡を布施すれば、轉輪

た時、來つて法を聞き、三歸して優婆塞となつた。後佛が舍衞城に來て國人を度することを願ひ、佛に園林精舍を献ぜんとした。佛は之を許し、長者は國に歸つて太子誓多の園林Jetavanaを撰んだ。祇陀は賣るを欲せず、長者は又その地面に黄金を敷き、之を以て償ほうとした。祇陀は之を感じて林を佛陀に供養した。之を以て祇樹給孤園を又祇園精舍と言ふに至つた。

【七】 曲女城(Kanyakubja)。西域記二に「羯若鞠若國、人長壽の時、其舊の王城を拘蘇磨補羅と號し、王を梵授と號す。福智兼ね備り、威嚇部に震ふ。千子を具足す。復百女あり、儀貌妍雅。時に仙人あり、殑伽河の邊に居て棲神定に入る。數萬歲を經て形枯木の如し。遊禽棲集し、尼拘律果を仙人の肩に遺す。芽を生じて大木となる。多く年所を經て定より起ち、其の樹を去らんと欲すれども鳥巢を覆さんことを恐れて敢てせず。時人其の德を美して大樹仙人と號す。仙人偶目を河濱に寓して王女の嬉戲するを見、欲界の愛起つて染著の心生ず。自ら王所に詣つて女を請ふ。王已むを得ず。之を諾し、仙を還らし、諸女に歴問するに一も娉に應ずるものなし。王、仙人の威を恐れて憂愁措く能はず。時に諸王女の中最も幼なるもの自ら之に當つて、王の患を解かんことを請ふ。王喜んで送つて仙廬に至らしむ。仙人見て悦ばず、乃ち王に謂つて曰く、「吾老叟を輕じて此の不研を配す」と。王曰く、「諸女を歴問するに肯て命に從ふものなし。惟此の幼女給使に充らんことを願ふ」と。仙人怒を懷き、便ち惡咒して曰く、「九十九女一時に腰曲り、形毀弊して畢世に婚なし」と。王往いて驗せしむるに果して傴る。是れより後曲女城と名く」。

【八】 忉利天(Trāyastriṁśa)。怛唎耶怛唎奢天、多羅夜登陵舍天に作る。譯、三十三天。欲界六天中の第二。須彌山の頂、閻浮提の上、八萬由旬の處にある。この天の有情身長一由旬、衣の重さ六銖、壽一千歲である。(世間の百歲を一日一夜とす)。城廓八萬由旬、喜見城と名く。帝釋こゝに居す。嶺の四方に峯あり。各廣五百由旬、峯每に八天あり。凡て三十三天である。

【九】 王舍城。梵名曷羅閣姞利呬城(Rājagṛha) 中印度摩伽陀國に在て頻婆娑羅王が城の舊都から新に都した所である。王舍城を圍んで五山があり、五山の第一は卽ち靈鷲山である。舍衞城と共に佛教宣流の根據地となつた。

【一〇】 廣嚴城。梵語、毘舍離(Vaiśālī)、譯廣嚴。中印度に在り、佛此に在て藥師經維摩經等を說く、摩訶陀の東北方にあり、强力であつて佛陀時代恒河を中心として屢ゝ爭があつた。佛陀は晩年此の地にて捨壽を思ひ立つた。

【一一】 拘尸那城(Kuśinagara)。又俱尸那、拘夷那竭、究施、拘尸那竭、拘尸那揭羅、城の名。譯、角城、茅城なぞ。世尊はこの城外の沙羅樹林にて病篤くなつて入滅された。迦毘羅城舍衞城の東北方、毘舍離城の北方で、印度北隅にある。

【一二】 大力士地、大力士の住地の意。力士は大力の士夫である。拘尸那竭城に此等の力士の一族が居つた。梵語末羅(Malla)。佛を荼毘するとき此の輩が棺槨を舁いだ。荼毘の遺骨分配につき、力士族と他の七王族との間に爭があつた。

【一三】 二十九歲出家、其他佛陀の歴年記事は貴重な資料である。

【一四】 摩拘梨。不明。

【一五】 尸輸那、輸那(Śuna)、國のことか。譯勇猛。

【一六】 憍睒彌(Kauśāmbī)又拘剡彌に作る。中印度に在て周り六千餘里、土地沃穰氣序熱し、都城の宮內に大精舍あり、高さ六十餘尺、內に刻檀の佛像あり、是れ優顚王の作る所、諸國の君主來て之を移さんと欲すれども能はず、遂に圖して供養し、俱に眞を得たと言ふ。城東遠からず。故塼室あり、世親菩薩此に於て唯識論を作つた。其東、菴沒羅林の中に故基あり、無着菩薩此に顯揚論を作る、其より東北七百餘里殑伽河の邊に迦奢布羅城があり、護法菩薩此に外道を降伏させた。〔西域記五〕。

【一七】 吠蘭帝。不明。

佛說八大靈塔名號經（終）

『是の如きは八大靈塔なり。若し婆羅門及び善男子善女人等有つて、大信心を發して塔廟を修建して承事供養すれば、是の人は大利益を得、大果報を獲て、大稱讃を具す。名聞普遍し、甚深廣大なり。乃至諸の苾芻亦應當に學ぶべし。

『復次に諸苾芻よ。若し淨信有る善男子・善女人有つて能く此の八大靈塔に於て、此の生中に向つて至誠に供養すれば、是の人命終して速かに天界に生ず。』爾の時世尊復た諸の苾芻に告げたまはく、

『汝等諦かに聽け、我今遊止せる國城及び住世を說くべし。』頌を說いて曰く、

『[二三]二十九載、王宮に處り、　六年雪山に苦行を修す。
五歲王舍城に化度し、　四年毘沙林に在り、
二年惹里巖に安居し、　二十三載、舍衞に止る。
廣嚴城及び鹿野園　[二四]摩拘梨と忉利天と
[二五]尸輸那と　[二六]憍睒彌と　寶塔山頂並びに大野
尼努の聚落　[二七]吠蘭帝　淨飯王の都迦毘城、
此等の聖境に各一年　釋迦如來行住す。
是の如く八十年住するなり。　然る後に牟尼涅槃に入る。』

【三】摩伽陀（Magadha）又摩訶陀、摩竭提といふ。中印度の國名、王舍城の在る所である。持甘露。善勝、無惱、無害などと譯す。或は星の名とし、或は古仙人、又帝釋前身の名としてゐる。佛陀當時强大なる國家であつた。尼連河（Nairañjanā）又尼連禪河、尼連禪那とも書く。河の名。佛が成道に先だち先づ此の河に浴し、後に菩提樹下に坐した。玄應音義三は尼(nai)は不、連禪那 rañjana は樂着にて不樂着河と名けると。

【四】迦尸（Kāśi）。國の名。恒河中流に臨み、中天竺の境、憍薩羅國の北隣に在る。十六大國の一である。迦尸は本と竹の名で、此の國が此竹を出すので名けたと。今のベナレス Benares の地名を言ふ。

【五】波羅奈（Vārāṇasī）。具稱婆羅痆斯、波羅奈斯。中印度恒河流域の國の名。今のベナレスを中心とする地方である。佛初轉法輪の池鹿野苑のある地であつて、有名である。この地に今も古も宗教の中心にて全印度行者集り、修道論談す。

【六】舍衞國（Śrāvasti）もと城の名。以て國號とする。國の本名は憍薩羅國である。南方の憍薩羅國と區別する爲に城名を以て國號となしたのである。新に室羅伐悉底と云ふ。聞者、聞物、豐饒、好道などと譯する。此の城が多く名聲の人を出し、多く勝物を生ずるからであると。又別名があり。舍婆提城、尸羅跋提、捨羅婆悉帝夜城と云ふ。古仙の名に依て名けると言ふ說があるけれども梵音の轉訛に外ならない。祇陀園とは祇陀(Jeta, Jeta)。舊稱、祇陀、新稱、逝多、誓多。譯、勝。舍衞國波斯匿王の太子の名。この園は元祇陀太子の所有であつたので祇陀林と言ふ。詳しくは祇樹給孤獨園 Jetavanānāthapiṇḍikasyārāma と言ふ。舍衞城に長者があつて、よく孤獨者を哀憐したので、世人が給孤獨 Anāthapiṇḍika と呼んだ。佛が摩掲陀國に在つ

佛說八大靈塔名號經

西天譯經三藏朝散大夫試光祿卿明教大師臣法賢　詔を奉じて譯す。

爾の時世尊諸の[一]苾芻に告げたまはく、『我今八大靈塔の名號を稱揚せん。汝等諦かに聽け。當に汝の爲めに說くべし。何等か八と爲す。所謂第一は[二]迦毘羅城龍彌儞園にて是れ佛生の處なり。第二は[三]摩訶陀國尼連河の邊菩提樹下にして佛道果を證する處なり。第三は[四]迦尸國[五]波羅奈城にて大法輪を轉ずる處なり。第四は[六]舍衞國祇陀園にて大神通を現ずる處なり。第五は[七]曲女城にて[八]忉利天より下降する處なり。第六は[九]王舍城にて聲聞佛を分別し化度を爲す處あり。第七は[一〇]廣嚴城の靈塔にて壽量を思念する處なり。第八は[一一]拘尸那城娑羅林の內大雙樹の間にて涅槃に入る處なり。是の如きの八大靈塔なり。重ねて頌を說いて曰く、

『淨飯王の都迦毘城　龍彌儞園は佛の生ずる處なり。
摩伽陀の尼連河の側　菩提樹下は正覺を成ずる處なり。
迦尸國波羅奈城は　大法輪十二行を轉ずる處なり。
舍衞大城祇園の內　三界に遍滿して神通を現ずる處なり。
桑迦尸國曲女城は　忉利天宮より降下する處なり。
王舍大城は僧如來を分別し　善化して慈悲を行ずる處なり。
廣嚴大城は靈塔の中　如來の壽量を思念する處なり。
拘尸那城は[一二]大力地　娑羅雙樹は涅槃に入る處なり。

【一】苾芻 (Bhikṣu)。又比丘。譯乞食。男子の佛教僧侶に主として言ふ。

【二】迦毘羅城(Kapila)。迦毘羅婆蘇都、迦維羅閱、迦比羅皤窣都等。城の名、佛陀の生國。迦毘羅 (Kapila) は數論の神話的始祖の住所なる故にかく名けたと言ふが、この地方の土が黃褐色 kapila なる爲かく呼ばれたのであらうと。初め城名であるが、國名に轉ぜられた。王舍城 (Rājagṛha)より六十由旬、吠舍離城(Vaiśālī)より五十由旬、舍衞城より六、七由旬であると傳へられる(一由旬は一二哩三分の四、又は七・五哩)。現在尼波羅國(Nepal)內にある。大唐西域記の記す所によれば、古代迦毘羅城は周圍四千餘里、宮城の周圍十四、五里であつたと。(領域の周圍百九十里、王宮の廣さ二十二町餘である)。龍彌尼(Lumbinī)、又藍毘尼、嵐毘尼、嵐鞞尼、留毘尼、流彌尼。花園の名。迦毘羅城の東に在り、摩耶夫人が佛陀を生んだ處である。藍毳尼は鹽と譯す。上古園を守る婢の名で、之を園に名けたと。或ひは可愛と譯す。ルンビニーに於て英政府によつて阿育王の建てた碑文が發見され、其の位置を確定することを得た。

第七、廣嚴城（Vaiśāli）靈塔―思ニ念壽量一處。

第八、拘尸那城（Kuśinagara）娑羅（Śāla）林內大雙樹間―入涅槃處。

この八塔は八相成道の說に立脚してゐる如くである。

本經は小經であるが、特に貴重な資料である點は佛陀一生の編年史を卷末に記することである。

二十九年　王宮に處る。

六　年　雪山（Himālaya）に苦行を修す。

五　歳　王舍城に化度す。

四　年　毘沙林に在り。[一]

二　年　惹里巖に安居す。

二十三載　舍衛に止る。

十一年　廣嚴城・鹿野苑（Mṛgadāva）・摩拘梨・忉利天[二]・尸輸那・憍睒彌（Kauśāmbī）・寶塔山頂・大野・尾努聚落・吠蘭帝・淨飯王都迦毘城（Kapilavastu）爲一年（計十一年）

第八十年　涅槃に入る。

之は正確な編年史でなく、滯在年數を記すものであるが、編年史的佛傳の殆んどない現在、十二遊經・僧伽羅刹經と共に佛傳研究の一好資料となる。

而してこの八大靈塔名號經は八相成道說を豫想し、紀年的に佛傳を記す點、紀元後の經典成立であると思はれる。

【一】毘沙林（Vaiśāli）ならん。本經は毘沙（音譯）と廣嚴城（漢譯）とを別々に出す。

【二】普通佛傳は忉利天は三ケ月滯在とするに對し、本經は一ケ年とす。

昭和七年六月十七日

譯者　平等通昭　識

二

佛說八大靈塔名號經解題

佛說八大靈塔名號經（Aṣṭamahāśricaitya-nāma-sūtra?）は八大靈塔梵讃（Aṣṭaśrī-caityastotra）と同じく法賢の漢譯又は漢音譯であつて、題名も出てゐるので、何等かの關係があるやうに思はれる。八大靈塔梵讃は梵語を漢字で表音したもので、難解にして容易く佛說八大靈塔名號經と對照し得ないが、同題號同一譯者である點、密接の關係のあるのは事實と思はれる。

八大靈塔梵讃は西天戒日王製と成つてゐる。戒日王とはウジャインのヴィクラマーディトヤ（Vikramāditya of Ujjayin）王で、西紀第六世紀の中葉の有力な著名な王であつて、その御宇にはかの有名な詩聖カーリダーサ（Kālidāsa）始め其他卓越した諸々の詩人・作家が輩出したと傳說的に傳へ、印度宮廷詩歌の黃金時代であつた。この八大靈塔梵讃も戒日王の作と傳へてゐるが、當時の詩人は自作の詩歌を自らの保護者（ペートロン）の作として發表したことが多いので、この梵讃も戒日王の保護を受けた宮廷詩人が自作を彼の作に歸したのかも知れない。而してこの佛說八大靈塔名號經が八大靈塔梵讃の譯本であるとすれば、—自分は未だ兩本を逐字的に對照してゐないので、斷言し得ないが、—佛說八大靈塔名號經の作者も戒日王又はその保護を受けた宮廷詩人の作と言ふこととなる。

漢譯者法賢は迦葉仙人說醫女人經に說いた如く、初め法天（Dharmadeva?）と言ひ、中印度摩訶陀國那爛陀寺の僧で、北宋（九六〇—一一二七）の紀元九七三—一〇〇一年間譯經に從ひ、九八二年皇帝より傳教大師の稱號を賜り、同時に法賢と改名した。本經は改名後の譯經である。

佛說八大靈塔名號經は極めて短い經典で、佛自ら此の世に於ける八大靈塔名を擧げ、聽者にその供養を勸め、死後天に生れると說いてゐる。

即ちその塔の名は

第一、迦毘羅城（Kapilavastu）龍彌儞（Lumbinī）園—佛生處。

第二、摩伽陀（Magadha）國泥連（Nairañjana）河邊菩提樹下。—佛證道果處。

第三、迦尸（Kāśī）國波羅柰（Vārāṇasī）城，轉大法輪處。

第四、舍衛（Śrāvastī）祇陀園（Jetavana）—現大神通處。

第五、曲女城—從忉利天下降處。

第六、王舍城（Rājagṛha）—聲聞分別佛佛爲化度處。

淨に依止して縛なく、　諸の依止中の勝なり。
救なき者は救を爲し、　無歸者は歸をなす。
諸の趣向する者なく、　佛爲に趣向をなす。
已に生死海を渡り、　遍く諸境界に入る。
應に現化すべきの處　一切に皆な能く到る。
諸墮惡趣者は　佛常に知り常に思ふ。
即ち善方便を以て　而して普く救度を爲す。
無貪及無瞋　無癡の善根具はり
大身常住の身にして　悲愍して利益する者なり。
身に釋種の服を被り、　廣く吉祥事を作して
希有なる精神力あり、　大智正識の者なり。
戒忍法は眞實にして　內心に常に精進す。
廣大にして復た甚だ深く、　諸の功德を具足す。
光明は大照曜し、　調伏心は潔白なり。
猶ほ湛水の澄淸するが如く、　善種圓滿を現ず。
世間の淸淨眼にて　[19]青優鉢羅華の如く
廣大にして殊妙なり。　十方界に周遍し、
寂止して性潤澤　一切智は妙月の如し。
佛德廣くして邊なし。　是の故に我れ稱讃す。

佛吉祥德讃（終）

である。王舍城を心王になして觀じ、萬二千の聲聞を十二入に各千如を具して萬二千と觀ずる如くである。

【一一】摩耨若（Manusya）人間の意か。

【一二】頭陀（Dhuta）又杜荼、杜多、譯抖擻、抖捒、洮汰、浣洗など、衣服飲食住處の三種の貪着を抖擻ふ行法を言ふ。

【一三】補特伽羅（Pudgala）我の意である。

【一四】七種の染不明、染、染垢、染汚と熱して不潔不淨の義、執着の妄念及び所執の事物を言ふ。

【一五】二邊、斷常の二見である。一に斷見、邊見の一分、人の心身は斷滅して續生せずとの一邊を固執する妄見である。即ち無見である。二に常見、邊見の一分、人の心身は過現未共に常住にして間斷なしとの一邊を固執する妄見である。即ち有見である。

【一六】喜び、又恐れる時、印度にては身毛立つと形容す。喜恐より離れたるを言ふ。

【一七】補特伽羅（Pudgala）人間の意。

【一八】甘露。（Amṛta）、Amṛtaは元來不死の意である。天界の甘露を飲めば、不死となる爲不死の意にも移つたか、印度にてAmṛtaを既に甘露の意にも用いてゐる。涅槃は不死なるにより、樂しき故にかく喩ふ。

【一九】優鉢羅（Utpala）又烏鉢羅。漚鉢羅。優鉢刺。譯青蓮花。黛花、紅蓮。蓮のこと。

一切を現に觀察して
應に知るべき所は已に知り、
已に事悉く周圓し、
佛は是れ大聖者にて
已に淸淨を安立して
最上道
最上句を獲得し、
愛網の根を拔除して
善く行じて別異なく、
善生及び善體
善本の從つて來る所なり。
無動にして不思議なり。
諂曲の過染除き、
相應行を解脫して
已に無取心を得、
已に過失の邊を盡し、
已に一切障を斷ち、
所有の邪妄の言
邪念・邪作の事
蘊處界の諸法

一切に著する所なし。
應に離るべき所は已に離れ、
勝れし所作を已に作せり。
世間の教授と爲る。
精進すること未曾有なり。
希有廣大なる行あり。
希有難思の法を現證して
涅槃の[一〇]甘露を飲む。
諸の過失の本を絕つ。
無染の法能く著す。
勝善にして出家す。
善來者を稽首す。
智者にして智中の尊なり。
已に煩惱の海を渡る。
諸纏縛を解脫し、
已に一切漏を盡し
已に一切毒を破り、
盡く諸見の網を燒き、
及び邪妄の見聞
佛は一切を已に離れ、
廣略に隨つて善く說く。

漏の勝法を勤めんが爲に之を毀るなり。是れ皆衆生の意樂に隨ふ說なれば衆生意樂意趣と名く。
【九】名、梵語娜摩(nāman)能く音聲に隨つて物體に赴き、以て體を詮して人をして想を起さしむるもの。名を聞けば必ず其の物體の相を心に浮べるからである。相、梵語攞乞尖拏(lakṣaṇa)事物の相狀・外に表れて心に想像せらるるもの。
【一〇】七種觀想法。觀法は心に眞理を觀念する法である。觀心に同じ。七種觀想法不明。六觀法。本業經上に出づ。一、住觀。別教の菩薩十住位中に於て一切法性皆空の空觀を修習する。二、行觀。別教の菩薩十行位の中に於て一切法不具の假觀を修習する。三、向觀。別教の菩薩十回向位中に於て一切法非空非假即中道の觀を修習する。四、地觀。別教の菩薩十地位中に於て中觀を修習し、住持して動ぜざる。五、無相觀。別教の菩薩等覺位中に於て中觀を修習し、惑染の性相本空と了知する。六、一切種智、別教妙覺の果佛中道の觀を成じ、一切道種の差別を知る觀を名く。三種觀法。天台所立觀心の法規に三種ある。一に託事觀、又曆事觀と名く。事相の一一を心に入れて實理に觀じ成ずるの

復た一切衆の中に
咸な敬愛の心を起し、
佛は是れ親近し、
眞如を見る
佛の慧眼の光明は
慧の焰明を開發して
慧燈を燃して普く耀さ、
一切性自性を
如來の勝慧根は
如來の大慧力は
無盡の慧財を積んで、
快利なる慧刀を持ち、
鋒利の慧劍を秉りて、
佛は善く正慧を開き、
廣慧を宮殿と爲し、
堅固慧は牆と爲し、
不思議の正慧を
屈伏なき勝尊は
他の爲に伏さるる所とならず。
三界中に於て

佛を所愛の尊と爲す。
尊重を作して觀想す。
及び隨從恭敬する所
吉祥最上寶を頂禮す。
復た慧眼より生ず。
廣大なる慧炬を持す。
大慧もて諸暗を破す。
如來は悉く照了す。
微妙にして復た最上なり。
屈伏すべからず。
無價の慧寶を具し、
勝慧の器仗を執り、
慧は墮なく、滅なし。
一切法を覺了す。
正智者の安んじて處る。
周匝して密護す。
階梯と爲して進趣す。
異心なくして安住す。
亦復た取る所無し。
應に供養すべき所の者なり。

ば便ち極樂に往生すべしと說くが如き、之れ解意者を勸めん爲に別時の利益に就て之を說く。今直ちに之を得と言ふにあらず。猶一錢に依て百錢を得ると說く如し。是れ別時に就て說けば別時意趣と名く。三に別義意趣、言說と意義と不同あるなり。幾許の恒河沙の佛に奉事して大乘法を解了すと說く如き、もと大乘法の義理を解了する如きは難事にあらず。凡夫能く思惟すれば之を能くす。敢て恒沙の佛に遭ふを要せず。大乘の實理を證得するは容易の事にあらず、地上の菩薩にして初て之を能くす。因て今恒沙の諸佛に事へて大乘法を解了すと言ふは其の言相は只大乘の教義を解するに似たれども、其の意思は大乘の實理を證得するに在り。是の如く言說と意義と別なので別義意趣と名ける。四に補特伽羅(Pudgala)意樂意趣、補特伽羅、衆生又は有情と譯す。衆生の樂意に隨ひて種々に法を說くなり。先に一衆生に對して布施を讚嘆し、其人已に布施を樂欲するを見て更に布施を毀呰す。持戒等亦た是の如し。是れ一法に於て毀讚相違するは初め其の人の慳悋の心を除かんが爲に布施を讚するなり。後は更に無

佛は勝れて比等なく　亦復た等等なし。
功德は稱すべからず、　已に稱量を過ぐ。
復た像を取るべからず、　亦各別の分なし。
補特伽羅(プドガラ)[17]に勝れて　唯一にして無二なり。
佛は是れ自然智なり。　而して同等者なし。
廣く諸の衆生を利す。　一切智に稽首す。
諸の天・人・世間　梵・魔・沙門中
佛は是れ最上尊なり。　復た勝る無き者と爲す。
佛寶は甚だ希有にして　亦復た得難し。
佛寶の出生に遇ふも、　實に希有にして得難し。
佛は是れ廣大眼なり。　復た大光明と爲す。
大曜大明照　大燈大光炬
暗無きの大熾明にして　已に最上法を得たり。
根力覺道圓かに　聲聞と共ならず。
若し利益の事無くんば、　如來は卽ち生ぜず、
利なければ現化せず、　利なければ亦隱れず。
佛は諸の群品の爲に　利益する故に出生す。
諸の世間を悲愍して　諸の利樂の事を作す。
諸の天人中に於て　佛は是れ正見者なり。
正道の法律を以て　普く一切を教示す。

果)の人、三は阿那含(卽ち不還果)の人、四は阿羅漢の人。是れ內證は大乘の菩薩であるけれども、外に聲聞の相を現じて法を傳へ、人を化するのである。而して其の內證の涅槃に就て之を大乘の位次に配するに諸說不同である。先づ天親の涅槃論に初地を初依とし、六七地を二依とし、八九地を三依とし、第十地を四依とする。天台は法華玄義五に地前を通じて初依とし、初地より五地を二依とし、六七地を三依とし、八九十地を四依とする。等。說四依、四意趣と同じ。佛の說法に四意四祕あり。以て一切の所說を解決すべし。別に言外の意趣あると說くもの四意趣と名く。此四意趣に依て一切の佛意を決すべしといふ。玄奘譯攝論譯五、復た四意趣四種祕密あり。一切の佛言應に隨つて決了すべし。四意趣とは一に平等意趣、我昔曾て彼時に於て毘婆尸佛と名くと說く如き、昔時の毘婆尸佛卽ち今の釋迦尊には非ざれども、諸佛所證の諸平等なるに依て我は卽ち彼、彼卽ち我れなりと說く。之を平等意趣と名く。二に別時意趣、多寶如來の名を稱すれば卽ち等正覺を決定すべし。阿彌陀の名を稱すれ

如來は已に最上利を得て、
世間の安隱處を引示して
大覺尊に歸命す。
梵行を修せざる者は
佛は是れ道を知る者、
佛を正道尊と爲す。
佛は照明より生ず。
義生及び法生なり。
諸義出離する者にて
人中の大象龍
人中の正知者
人中の勝無比
人中の殊妙士
怖なく及び驚きなく、
佛は是れ怖を離るる者なり。
怖畏の險は除き難し。
自ら怖の境を出過して、
自ら怖難を斷滅して
[26]自ら怖難の海を渡り、
身毛喜んで豎つを離れ

自らの樂を喜捨して著せず。
廣く衆生の爲に正道を說く。
現に正覺道を證す。
佛、善く建立を爲す。
道を識り道を說く者なり。
諸道の歸向する所なり。
復た是れ智生者なり。
善く明了の善を說く。
人中の大師子
人中の大仙王
人中の智勇尊
人中の極最上
人中の白蓮華なり。
怯無く亦懼無し。
畏無く奔競無し。
諸の怖の難を斷滅し、
復た他をして出でしむ。
復た他をして斷ぜしむ。
復た他をして渡らしむ。
身毛悚れて立つを離る。

法に契はば以て信受奉行すべし。たとひ佛身の相好を現ずるも、說く所法に契はざれば捨てて依るべからず。況んや餘人をや。二に依了義經不依不了義經。三藏中了義經あり不了義經あり、明かに中道實相の義を明かすを了義經とし、然らざるを不了義經とする。群生は情識の淺深利鈍の不同なるに依つて大臣をして別說せしむ。故に入道の人先づ之を曉らしむべし。壅として通ぜざるなく疑あれば皆決せん。三に依義不依語。語は言說、但是れ筌蹄を張るのである。若し言說に依れば徒らに疑惑諍訟を增さんのみ。義は中道第一義なり。言說の及ぶ所にあらず。學人宜しく筌蹄を去りて實義を思惟すべし。四に依智不依識。識は妄想の心六塵に對して起り、眈迷して覺らず、牛羊と何ぞ異らむ。識を恣にせば妄惑を增長せんのみ。智は本心照明の德。以て法性に契合すべし。學人宜しく妄識を定止して眞智を策發すべし。人四依。涅槃經六に如來の使者となりて末世の弘經をなし、人天の依止となる者四人を擧げる。之を人の四依と云ふ。一は具煩惱性の人（即ち三賢四善根）二は須陀洹（即ち預流果）斯陀含（即ち一來

調伏中最上を教化し
求むるなく、慢るなく、愛著なし。
已に暗翳を離れて所染なく、
已に善寂大名稱を得。
迷惑耽著は已に久しく離れ、
初中後善法宣揚して
衆生は苦に處つて疲懈なく、
衆生は出離の門に趣かず
如來は滅法に住せず、
復た廣大なる正法門に於て
已に邪妄の諸分別を息め、
諸惡法を摧いて勝人と號し、
空の如く泥せんと欲するも染むる能はず。
染法を除くと雖も性空を了し、
佛常に身を念性に安住し、
正智深密なる勇力の尊なり。
大悲の不思議に稽首す。
他の劣弱者は助けて營修す。
佛は是れ金剛堅固の身なり。
一切相應の門に安住して、

無上に愛すべく、光明を作す。
諍る無き清淨者に稽首す。
補特迦羅（プツドガラ）中の最上なり。
著無く纏縛無きものに稽首す。
無我にして相を取つて我見除く。
善文善義皆な圓滿なり。
佛は方便の故休息せしむ。
佛は方便の故に出離せしむ。
常に救度を行じて世間を攝す。
大智にて悉く包攝するものに稽首す。
善く一切を離れて道を尋求す。
[一四]七種の染を離れて梵行を圓かにす。
清淨にして常に梵行に依止す。
語言を出過して心著するなし。
佛心已に[一五]二邊を過ぎたり。
吉祥門中の善身者なり。
一切の所作に自ら通ずるの力あり。
他の善美者は必ず隨順す。
眞實處より出生する所。
大涅槃最上の樂を得。

ある。問ふ、佛弟子應に三寶を念ずべし。何ぞ彼の生天を念ずる。是れ自己の善根の果なるを以ての故である。問ふ、生天は是れ凡天の法なり。何ぞ之を念ずる。有人涅槃に入るに堪えず、故に彼の生天を念じて起行趣求す。此の六念法は大小乘の通説なり。但し念天に就て大小乘の解釋を異にす。大乘は涅槃經に依れば天に三種あり、一に生天、三界の諸天である。二に淨天、一切三乘の賢聖である。三に第一義天涅槃である。二乘の人は初の二天を念じ、菩薩は但し第一義天を念ずると。

【八】四依、四種ある。一に行の四依、二に法の四依、三に人の四依、四に説の四依である。

行四依。行人所依の四法である。一に糞掃衣、二に常乞食、三に樹下坐、四に腐爛藥。此の四種の法は入道の縁、上根利器の依止する所であるので、行の四依といふ。又之を四聖種と名ける。此法能く聖道を生じ、聖が爲に種となるが故に聖種と曰ふ。法の四依、一に依法不依人。人は情有の假者である。法は法性自爾の軌模なり。法に依つて道に入るべし。人何ぞ實行に關せん。其人假令凡夫外道なるも説く所

疑なく染を離れ常に喜び足り。
大沙門の事作已に成じ、
佛を（二）摩糯惹中の勝と爲す。
應に已得の諸説門を得べし。
正念勝れて一切覺を觀じ
已に寂靜にして無所爲を得たり。
無量甚深にして寂默に住し、
其の法律妙威儀の如し
諸行妙圓にして語善く説く。
言に戯論なく正眞に住す。
如來の尊勝にして復た自在なり。
向ふ所正順にして復た善く觀じ、
一切清淨にして清淨なる者なり。
成熟の功德沓充滿し、
佛は是れ最上の大仙王にて
淨行已に圓かに諂已に除く。
身心清淨にして復た輕安なり。
寂慧廣慧大慧の尊なり。
（二三）補特伽羅（プッドガラ）中勝るゝものなし。
句身通達して已に疑無し。

已に世間の諸妄源を息む。
眞實の歡喜者に稽首す。
已に其の身に於て善く觀察す。
如來の無比喩を稽首す。
他の爲に伏して能く他を伏す。
牛王勝上者に稽首す。
正智にて常に安樂行を行す。
身嚴心寂靜なるもの稽首す。
身は（二三）頭陀の難行の相を現す。
離貪正命の士に稽首す。
猶ほ帝釋天中の勝の如し。
語言謙下して和美なり。
善く無著を愛して廣く清淨なり。
已に最上に到る處に稽首す。
廣く功德を積んで滿ちて減ずるなし。
正智光明衆に稽首す。
已に一切の諸寃對を息む。
忿恚の源を塞いで常に歡喜す。
稱量すべからずして諸著を離れ、
能仁善解者に稽首す。

二界の衆等心念掉動して禪定を退失する煩惱。四に慢結、他を凌ぐ憍慢の煩惱。五に無明結、二界の衆生痴闇の煩惱。〔同上〕

【七】六分法。念佛等の六念を以て六法とする。一に念佛は十號を具足し、大慈大悲大光明あり、神通無量にして能く衆生の苦を拔濟す。我れ能く佛と同じからんと念ずるのである、二に念法、如來所説の三藏十二部經は大功德があり、諸の衆生の大妙藥である。我れ能く之を證して衆生に施與せんと念ずるのである。三に念僧、僧は是れ如來の弟子、無漏法を得、戒定慧を具足し、能く世間の良福田である。我が僧行を修せんと念ずるのである。四に念戒、戒行大勢力あり、能く衆生の惡不善の法を除く。我れ能く精進護持せんと念ずるのである。五に念施、施行に大功德あり、能く衆生の慳貪の重病を除く。我れ能く善施を以て衆生を攝取せんと念ずるのである。六に念天、天とは欲界の六天乃至色界無色界の諸天である。彼處自然の快樂を受く。皆往昔戒施の善根を修するに由る。我れ亦如是の功德を具して彼の天處に生ぜんと念ずるので

染見なく及び染思なく　染語なく幷びに染業なし、
無染命と無染勤と　無染念と兼ねて無染定と
解脫無染にして智無染にて、　戒定慧に於て善く安住す。
一切の結縛は悉く斷除し、　諸の煩惱顚倒處を破る。
如來の梵行の出生する處、　已に最上の淸涼池に住す。
一切所作は寂靜なる尊なり。　世間敬愛の事に著せず、
已に能く[六]五分結を斷除して　復た能く[七]六分の法を具足す。
一平等護念の心を起し、　[八]四依成就して缺くるなし。
純一に眞實にして別異なく、　平等に世の所受を棄捨す。
無倒にして眞正の心を思惟し、　已に一切の輕安を得たる者なり。
心善く慧解脫を解脫して　純一の梵行は善く安立す。
如來は最上の勝丈夫なり。　是の故に歸命して廣く稱讚す。
勝大阿羅漢に稽首す。　名を離れ、相を離れ、分位を離れ
[九]名相分位門を出過し、　名・相・分位は皆寂靜なり。
善見心は能く欲焰を息め、　欲境貪愛染皆な除く。
諸の欲染に於て含藏を離れ、　及び一切欲の過失を離る。
善く[十]七種觀想の法を修し、　善く菩提分の法門を說く。
一切已に能く他を勝伏す。　佛は是れ勇猛無畏なる者なり。
癡を離れ、染を斷ち、勝中の勝なり。　戒力增長して罪なき者なり。
善智慧微妙の心を具し、　內に種々の功德の行を攝す。

【六】五分結、結とは結集の義。繫縛の義。煩惱の異名。煩惱が因となつて生死を結集するので結と云ひ、又衆生を繫縛して解脫せしめないので結と云ふ。即ち生死の因となるもの。五結とは一に貪結、生死の法に貪着する煩惱。二に恚結、違情の事に忿怒する煩惱。三に慢結、已を恃んで他を凌ぐ煩惱。四に嫉結、他の繁榮を妬む煩惱。五に慳結、財物を慳惜する煩惱。五下分結。三界の中、欲界の結惑を下分結と云ふ。五結を立つ。一に貪結、貪欲の煩惱。二に瞋結、瞋恚の煩惱。三に身見結、我見の煩惱。五に疑結、諦理を孤疑する煩惱。此の五惑は欲界に於て起すもの。且つ之が爲に欲界を超脫すること能はざれば下分結と名ける。倶舍論には順下分と云ふ。〔倶舍二十一〕五上分結。五下分結に對して五上分結を立てる。色界無色界に於て之を起し、且つ之が爲に色界無色界を離るることを得ざらしめないので上分結と名ける。倶舍論には順上分結と云ふ。一に色愛結、色界の五妙欲に貪着する煩惱。二に無色・愛結・無色界の禪定の境界に貪着する煩惱。三に掉結、

常に一切の諸冥闇を離れ、
畢竟じて染なく淸淨尊なり。
能く自身に於て空性を觀ず。
諸の欲境に於て想心を離れ、
心は寂靜なる諸事業に住し、
最上の寂靜なる大牟尼にして
出世の功德已に廣大に
世間の妄境悉く能く觀じ、
愛繩を已に斷つて神通具はり、
彼の一切依著の心を破り、
如來は已に諸の過失を離れ、
一切の無利の惡法除き、
佛と衆生とは善友と爲り、
念慧諸性の中に安住して
佛は義に於て無義を自性とし、
生死の此の岸は怖れ已に除き、
佛は善く正道の行に依止して
諸の淸淨中に佛は最尊なり。
世間の所有の耽欲の味を
智慧は涅槃門を稱讃す。

熙怡の眼を開きて常に觀視す。
罪福動かすなく、解脫を行じ、
愛見已に盡きて善く染むるなし。
染煩惱を離れ及び分別して
默然たる法中に解脫を得。
一切淸淨にして染なき者なり。
善く世間に布いて大いに明照す。
眞實の諸法想を圓滿す。
善く智慧の大光明を發す。
諸の意樂に於て皆寂靜なり。
應に敬禮及び供養すべき所なり、
一切の利益に相應する者なり。
無足・二足の第一なる者なり。
善く無忘失の法を具する者なり。
和合依止して著せず。
能く涅槃の彼岸の樂を證す。
聽聞して謬なく、心に減ずるなく、
廣大の色相の慧光照らし、
佛智久しく已に善く出離す。
如來決定の說を稽首す。

吠陀本典を四種に分つ、第一梨俱吠陀(Ṛgveda)第二沙磨吠陀(Sāmaveda)第三夜柔吠陀(Yajurveda)第四阿闥婆吠陀(Atharvaveda)であつて、第一のものは神に對する勸請偈用として、第二詠歌偈用、第三祭供偈用として編輯され、その中に同一のものが各吠陀に現れることが多い。第四のものは後世に成立したもので、民間信仰思想を代表し、祈禱呪咀のものである。

甚深なる正知見を安立し、　諸の等持寂靜善を得。
善法中に放逸心なく、　已に先づ佛の成ずる所の道を證す。
甚深なる正道を覺了するものは、　甚深なる智の光明を開發して、
彼の[三]無尋無伺の道に於て　如來の證悟を稽首する者は
智者の所知の境を總集して　微細甚深にして悉く覺知す。
二種の[四]涅槃界を顯示して　盡く一切の涅槃道を證す。
衆生は長夜に虚妄を起し、　佛方便して無妄の法を說く。
衆生は生死の泥に沒在し、　佛は手を垂れて善く接度を爲す。
衆生は惡趣に墮在する者なり。　佛は方便力にて拯拔を爲す。
諸の衆生は生等の怖を起せば、　佛は爲に無畏處を引示し、
自から廣大なる威神力を具して、　身は一切の色相の寶を現ず。
內藏の心寶は妙圓明に　無比正法の寶を宣說す。
佛は他の攝伏する所とならず、　一切の佛に違ふ者なし。
一切の歡喜門に安住し、　佛は一切相皆な圓滿なり。
無上の沙門の正眞行は　蓮華開くが如く智淸淨なり。
普く梵行を集めて盡く餘りなく、　梵行の已立者を稽首す。
世間の[五]圍陀典（ヴェーダ）を明かにすと雖も　一切の聖法の教を壞せず。
一切の諸罪垢を洗滌し、　第一の增上法を獲得し、
善く能く持明の法を成就し、　能く善く寂靜處を引示す。
導師は善樂の門を開示し、　曠野を輪廻して善導を爲す。

六に利和敬、衣食等の利を同じくするのである。或は行和敬と名く。修行を同じくするのである。或は學和敬と名く。行和敬と言別意同である。或は施和敬と名ける。或は布施の行法を同くするのである。

【三】無尋無伺、色界の二禪以上には尋の心所も伺の心所もないのを言ふ。七十五法中の不定地法の二種の心所である。尋とは事理を尋求する麁性の作用である。二に伺、事理を伺察する細性の作用である。

【四】涅槃界、界とは藏の義、涅槃はよく無爲の萬德を藏するので界と云ふ。又因の義である。涅槃は能く一切の世間出世間の利樂の事を生ずるので界と云ふ。又界は界畔であるる。涅槃に界畔はないが生死界に望んで涅槃界と云ふ。

【五】圍陀典（Veda）、印度古代の詩人達の集つた讚歌の集成であつて、世界最古の文獻でもある、少くとも二千年以前であつて、自然現象の神格化である神々を讚詠したもので、哲學的のものをも含んでゐる。詩體は直潔素朴で簡潔であるが、對話的、敍情的のものもあり、後世の抒情詩戲曲に移る萌芽を有してゐる。思想的には勿論後世の凡ての宗教哲學の淵源をなしてゐる。

卷の下

大師子吼を作すものに歸命す。
一切性に於て實の如く知り、
衆生を善化して時に間無し。
最先に彼の無明の卵を破り、
衆生を覺了せしむる大正士にて
無我の理に於て已に覺明かにして
一切界の分量を覺了し、
諸の苦法に於て實の如く知り、
善く能く覺悟して燒惱するなし。
諸の惡見を破りて知開明し、
三界出離の相を覺了す。
身疲倦なく相工を執し、
畢竟方便して善く攝益して
善い哉、釋迦牟尼尊、
最上說者・寂默者に頂禮し歸命す。
善く衆生の諸の意樂を攝し、
一種の稱讃を具足する者は
[二]六和敬の法を善く宣揚し、

一切善行を出生する門は
無勝知見は一切に遍し。
無邊の諸法門を宣說して
一切諸法を隨覺する者なり。
微妙の諸法を覺悟せる尊なり。
善く諸業の自性を覺る者は
生滅の本來の性を了知して、
善く眞實の自性を悟る者なり。
世間の自性を悉く覺知して
一切の因果を覺了する者なり。
故に復た諸の極難の行を修す。
然も小法に於て厭離せず。
中道の諸法門を宣說す。
應供者
最上最勝の我が大師にして
諸事相に於て悉く取らず。
善く能く[一]四攝法を成就す。
六を常に行じ行じ已つて圓滿なり。

【一】四攝法。(Catuh-sangraha-vastu.) 一に布施攝。若し衆生財を樂めば、財を布施し、若し法を樂めば法を布施し、是に因つて親愛の心を生じ、我に依て道を受けしむるを言ふ。二に愛語攝、衆生の根性に隨つて善言慰喩す。是に因つて親愛の心を生じ、我に依附して道を受けしむるを云ふ。三に利行攝。身口意の善行を起して衆生を利益し、これに由て親愛の心を生ぜしめ、道を受けしむるを云ふ。四に同事攝。法眼を以て衆生の根性を見、其の所樂に隨つて形を分けて示現し、其の所作を同じうして利益に霑はしめ、是によつて道を受けしむるを言ふ。「仁王經中」

【二】六和敬、僧は和合を義となす。和合に二義あり。一に理和、同じく滅理を證するのである。是れ見道以上の聖者である。二に事和、之に六種あり、即ち六種敬具である。見道以前の凡僧に屬す。一に身和敬、禮拜等の身業を同じくするのである。二に口和敬、讃詠等の意業を同じくするのである。三に意和敬、信心等の意業を同じくするのである。四に戒和敬、戒法を同じくするのである。五に見和敬、空等の見解を同じくするのである。

じ、次第の如く常樂我淨の四種の顛倒を破するのである。故に唯四あつて不增不減である。此の四念處は慧を體とする。慧の力能く身受心法の所觀の處を念ぜしむるが故に念處と名け、又慧の力能く念をして所觀の處に住せしむる故に念住と名けると。(織田)

【五八】善來(ehi 一來れ)の譯、佛陀が弟子に親しく呼びかくる語である、之を以て呼ばれる比丘を善來比丘(ehi bhik-khu)と名け、高弟である。

善來の語を出して義の如く語り
如來の一切の功德は圓かに、
最上の攝益は調御に勝れ、
悲心堅固にして利他を欲し、
佛と衆生と恩德あり、
父の如く母の如く能く出生して
佛は衆生の親教師爲り。
最上の句義を理の如く宣べ、
如來は常に著する無き說を以て
大悲して相續生を斷ぜず、

一切の正所行を具足す。
無忘失法者に稽首す。
歡喜して諸の衆生を悲愍す。
常欲利樂者に稽首す。
常に善友及び智識と爲りて
衆生をして善樂を得しめんと欲す。
善く勝義の諸法敎を說く。
一切の性を了知せしむ。
增す無く減ずる無く善く稱揚す。
善見處非處に稽首す。

然らばアンギラス(Angiras)の子孫である。彼等はアンギラスに歸せられる傳說の性質に關係してゐる。アンギラスはアグニ(Agni)の父で、アンギラサスはアグニの子孫であるとも言つてアグニをアンギラスの最初の人と呼んでゐる。アンギラサスはアンギラスと共に光明の神格として讃歌に現れ、後世は光の人格化光れる身體あるもの、時の區分、天の現象の人格化となり、月の滿と移り變りとして、火が王那住馬犧牲祭(Aśvamedha, Rājasūya)等の如き特別の場合に適用されるに至つた。シヤタパタ・ブラフマナ(Śatapa-tha Brahmana)では彼等とアーディトヤ(Āditya)とは生主(Prajāpati)から生れ、彼等は共に天に登る優先權について爭つたと言つてゐる。釋迦族はアンギラサスから來つたと傳へられてゐる。

【五三】 瞿曇(Gautama)、釋尊の姓である。「最上の手」を意味し、迦葉(Kāśyapa)迦旃延(Katyāyana)等と共によい姓の一とされてゐる。傳說的には大仙瞿曇(Gotama)に關係付けられ、之から下つたと言はれてゐる。

【五四】 六通。作用自在にて無礙なるを通と云ふ。佛菩薩外道仙人の所得である。その內六通とは、一、神境智證通、二、天眼智證通、三、天耳智證通、四、他心智證通、五、宿命智證通、六漏盡智證通の六である、內第六通は三乘の聖者に限られてゐる。詳しき說明は前出。

【五五】 三眼、三種稱讚、不明。

【五六】 三不護。「如來の三業は純淨にして過を離れ、防護を須ゐず、三不護と名く。諸の羅漢の三業は淨なりと雖も、常に防護を須ゐて方に能く過を離る。如來は彼に異なる。故に三不護を立つ。

【五七】 四念處。舊譯で四念處と言ひ、新譯で四念住と云ふ。小乘の行人五停心觀の後に四念處觀を修するのである。五停心に依て行人の亂心を止めるのは奢摩他である。四念處に依て行人の觀慧を發すのは毘婆舍那である。一に身念處、身は不淨であると觀ずるのである。身とは父母所生の肉身である。身の內外汚穢充滿して些の淨處がない。故に身は不淨と觀ずる。二に受命處、受は苦なりと觀ずるのである。受とは苦樂の感である。樂は苦の因緣より生じ、又苦樂を生ずる。世間に實樂はない。故に受は苦であると觀ずる。三に心念處、心は無常であると觀ずるのである。心とは眼等の心識である。念念に生滅して更に常住する時がない。故に無常であると觀ずる。四に法念處法は無我なりと觀ずるのである。法とは上の三を除いて餘の一切である。法に自主自在の性はない。故に無我であると觀ずる。是れ苦の一諦に就いて四念處を修するのである。我々の苦諦の依身に此身受心法の四義があれば、之に就て不淨苦無常無我を觀

佛已に具足して說の如く稱じ、
一切の功德解脫は周く
佛音を聞く者心に歡喜し、
一切の言說の中に墮せず、
平等に先づ最初の道を證し、
衆生の大擔負は任に堪へ、
已に大慈等の功德圓かにして
正智慧を以つて衆生を攝し、
如來は常に大勇悍を發し、
復た一切衆生の中に於て
佛は是れ世間を悲愍する者にして
如來の[五五]三眼已に圓明にして
如來は已に[五六]三不護を具す。
[五七]四念處の行は廣く通達し、
巧妙無盡にして隨意に稱じ、
種類の語言善く解して知り、
諸の違背中に順向を作し、
諸の慢中に於て敬心を發し、
所作正眞にして復た最上なり。
清淨なる一切の言說の門にして

善く諸行を滿たして彼岸に到る。
勝身心淸淨なるを顯示す。
佛自らの所行悉く周く圓かなり。
自分の功德相を取らず、
次に大行を集めて遺餘せず。
諸相の中に於て寂靜を得たり。
未だ嘗て捨行を遠離せず。
長夜の中に於て遍く觀察す。
諸の善行を以て衆生を敎ゆ。
已に悲心を得て善く平等なり。
第一義諦は善く解了す。
三種の稱讚は善く具足す。
三界の無垢を顯示するの尊なり。
名句文身自在なる者なり。
一切を說いて智を示して悉く通ず。
辨才に處するに隨つて悉く礙なし。
諸恚怒中に淸淨を作す
一切の利養の事を棄捨す。
自力を以つて能く證を現すの尊なり。
語言無執著に稽首す。

情に五蘊から成り、無色界の如き身なき有情は四蘊から成るのである。

【四七】七法、不明。

【四八】七聖財、見道以後の聖者を七種に分つたもの。諸經の所說小異す。寶積經四十二には「云何ぞ聖財。謂く信（正法を信受するなり）、戒（法律を持するなり）、聞（能く正敎を聞くなり）、慙（自分に慙づるなり）、愧（人に愧づるなり）、捨（一切を捨離して染着なきなり）慧（習慧事理を照すなり）。是の如き等の法は是れ七聖財と謂ふ。彼の諸の衆生は此を獲ざる故に極貧窮と名く。

【四九】所作已辨。(K. tarthn)、成すべきことを爲し遂げたこと、即ち目的を成就したことである。

【五〇】結、結集の義、繫縛の義。煩惱の異名。煩惱が因となつて生死を結集するので結と云ひ、又衆生を繫縛して解脫せしめないので結と云ふ。即ち生死の因となるものである。

【五一】大衆部の所說によれば、佛の心は一刹那に一切法を了する、外界心は勿論、認識しつゝある心―主觀そのものをも認識し得ると主張してゐる。

【五二】登疑導婆、([illegible])

違逆せしむる者に恩徳を知り、能く衆生の意の求むる所を滿たす。
呪明かに眞實修を成就し、能く煩惱を破る者に稽首す。
佛已に諸の誑妄を遠離し、心に燥動なく、高擧ならず。
吉祥門を尊勝し顯示して佛の福の爲に生ずる處に稽首す。
畢竟じて最上門を成就し、一切神通種を共にせず。
[五一]一刹中に一切行を生じ、一切處に非句義を離る。
一切の疑惑及び雜説は正語を決定して悉く能く破る。
諸の吉祥行を平等に修し、善く一切衆生の意を知る。
已に能く諸の他語を攝伏して猶ほ猛火の乾薪を焚くが如し。
諸の煩惱を燒き義も亦然り。安住せる正士の法に稽首す。
諸の吉祥を共にして慚愧を具し、世間の主宰は勝れて寂默たり。
釋迦牟尼大導師[五二]盎儗囉娑[五三]瞿曇の族は
諸の煩惱癡の黑暗を離れ、悲愍して普く諸の衆生を攝す。
常に利他攝益の中に於て廣多なる諸の勝行を具足す。
佛は一切衆生の類一切增上の所行の中に於て
佛は大智を以て常に觀察して普く世門の利益の事を集め、
[五四]六通を具足して智を調伏す。德智・說智及び時智なり。
一切對治して勝神通あり界趣勝解業障智
法を說いて最も勝れ、神通具はり、三を調伏する時善く開化す。
一切の文義を善く解して圓かに辯才無盡智に稽首す。

つて衆生を保護する意であると言ふ。是は乞食のことでない。

【四六】五蘊、梵語(Skandha)之を舊譯は陰と譯し、新には蘊と譯し、又衆と譯してゐる。陰は積集の義、蘊は衆多和聚の義にて蘊の義と同じ、是れ數多積集する有爲法の自性を顯はす。有爲法の用を作すに純一の法なく、或ひは同類、或ひは異類、必ず數多の少分相集つて其の用を作せば、概して之を陰又は蘊と云ひ、之を大別して五法とする。一に色蘊、五根五境等の有形の物質を總該する。二に受蘊、境に對して事物を受け込む心の作用である、三に想蘊、境に對して事物を想像する心の作用である。四に行蘊、其他の境に對して瞋り貪る等の善惡に關する一切の心の作用である。五に識蘊、境に對して事物を了別識知する心の本體である。之を一有情に徵すれば、色蘊の一は即ち身であつて、他の四蘊は即ち心である。心の中に受想行の三は心性上各一種特別の作用であるので之を心所有法、即ち心王の所有の法と名け、識の一は心の自性であるので之を心王と名ける。即ち五蘊は心身の二法であつて、色界欲界の如き身ある有

梵行は眞實にして善く安立し、
常に無畏を以て衆生に施す。
佛・大阿羅漢に歸命す。
[四九]所作已に辦じて德圓明かなり。
已の所作の義利を逮得し、
正智の解脫心に安住す。
已に無言にして解脫の理を證し、
心に忘失なく解脫圓かに
佛心無量にして復た廣大なり。
心は繋を離れ煩惱を除くを得て、
諸の染業を盡して清淨を得。
人中の最勝解脫尊なり。
諸善法不放逸に於て
善く寂眼を開いて衆生を視る。
善く衆生の無明の睡を覺まして
佛は勤めて精進心を勇起し、
諸不善中に善法を施し、
諸の怖畏中に無畏を施し、
諸の暗冥中に明照を作す。
諸の過失中に功德を生じ、
上下縱橫にして悉く歸依す。
法に於て取著を離れしものに稽首す。
一切の漏盡きて無染の尊なり。
已に諸の重擔を除くものに稽首す。
諸の有の[五〇]結障を盡して蠲除す。
出離解脫せし者に稽首す。
愛盡き、取盡きて解脫す。
顚倒心無き者に稽首す。
別異の法なく、善く心を修す。
已に諸異類を破せし者に稽首す。
已に無餘依涅槃を證す。
魔軍を戰死せしめて勝を得。
善く正念正智慧に住す。
善く生死の苦を救ふものに稽首す。
善く衆生の諸愚癡を破つて、
一切の懈怠者を策發して
諸の墮學中に學門を開き、
安隱ならざる者を安隱ならしむ。
諸の不善中に善を修せしむ。
諸の罪業中に罪業を除き、

に厭患對治で、加行道である。見道以前に在つて苦集二諦を緣じて深く厭患の念を生ずるを言ふ。二に斷對治で、無間道である。無間道に於て四諦を緣じて正しく煩惱を斷ずるのを言ふ。三に持對治で、解脫道である。無間道の後に解脫道を起し、更に四諦を緣じて彼の無間道に得た擇滅の得を攝持し、以て所斷の煩惱をして更に起たしめないのを言ふ。四に遠分對治で、勝進道である。解脫道の後に勝進道に入り、更に四諦を緣じ、所斷の惑をして更に遠去からしめるを言ふ。この內正對治は第二の無間道斷である。

【四四】 八法、又八風と言ふ。世間の愛する所憎む所、能く人心を扇動するので、八風と名ける。一に利、二に衰、三に毀、四に譽、五に稱、六に譏、七に苦、八に樂である。

【四五】 分衞(Piṇḍapāta)或は乞食と譯し、或は團墮と譯す。乞食とは比丘が行つて食を乞ふのである。團墮とは乞食して得た食である。印度では多く食を團團に摶つて鉢中に墮墨するからである。或ひは乞得した食物を僧尼に分與し、之を衞護して道を修めしめる義であると言ふ。之は乞食の意味である。又佛、身を分

能く善く聖法幢を建立し、
盡滅を開示して貪門を離れ、
能く諸法を表示する者は
能く利益の大導師と作る。
常に教の利喜の語を說き、
最上清淨の大梵尊なり。
已に種姓の諸言論を息め、
世間の人事の語も亦た亡ぶ。
如來の行步は常に寂靜にして
善に順じて行き、見る者忻ぶ。
如來不壞の正知見は
諸福事を成じて疑根を斷じ、
出ずれば必ず顯明にして衆の覩る所となる、
勝妙殊特にして衆吉祥あり。
能く善く[四六]五蘊の法を了知せり。
已に能く我慢心を摧滅す。
如來已に無動の法を得て、
善く能く[四八]七聖財を成就す。
佛は大丈夫の應に讃ずべき所。
遠く一切の不吉祥を離れ、

諸行の無常法を表示す。
寂滅出離の道を顯示す。
能く諸法を以つて教授する尊なり。
善施歡喜者に稽首す。
大威德大神通を具し、
自在にして復た熾盛なる者に稽首す。
復た族氏の諸語言を斷つ。
常說正法語に稽首す。
闊なく狹なく、平正に行く。
如來善行の相を表示す。
先の如き所作の性を具足す。
[四五]分衞心を離れて聚落に入る。
無依無轉の最上の尊なり。
純一に梵行を具足せる者にして
復た能く[四七]七法の行を具足し。
能く愚癡網を破するものに稽首す。
復た能く深廣心を具足す。
善く三學を學ぶ者に稽首す
邪異の諸境は能く怖れず。
已に調伏の地に到るものを稽首す。

汚無知、劣慧を體とする。劣慧は無始以來學問研究を怠つた結果、事物の義理を解しない下劣の智慧である。是は物に執着する不淨の性分でないので不染汚と云ひ、事物の義理を知らないので無知と言ふ。天台の所謂塵沙の惑である。故に不染汚無知は事物に執着しないので生死を出る障とならないので、聲聞緣覺の二乘は之を斷ぜず、佛は衆生を濟度する上に於て一切の事物を知る必要があるので、此の劣慧を斷じて一切種智を成ずるのである。〔倶舍光記一、「織田」〕

【四二】二種智。二智、一に如理智、佛菩薩の眞諦の理に如ふ實智である。或は根本智と名け、無分別智と名け、正體智と名け、眞智と名け、實智と名ける。二に如量智、佛菩薩の俗諦の事實に如ふ智である。或は後得智と名け、有分別智と名け、俗智と名け、偏智と名ける。

以下佛智を中心として讃嘆す。

【四三】諸の實理に於て猶豫不決の心を言ふ。故に一旦諦理に契悟しない限りは之を絕つことが出來ない。即ち小乘には預流果以上、菩薩には初地以上には斷疑しないものである。

【四四】對治。煩惱を斷ずることである。之に四種ある。一

如來智性中は平等にして
悲心廣大にして量るべからず。
佛は衆生の爲めに一藥を說き、」
畢竟じて極苦も亦蠲除す。
純一に眞實に決定して行じ、
決定して復た法生に染まず。
己利を以つて他に求めず、
宜しきに隨つて悲愍心を方便し
衆生の所應調伏の時
衆生の爲に不請の友と作り、
能仁善く妙法の藥を說き、」
衆生過現の身を照明し、
衆生煩惱の病を斷除し、
其の何病に隨つて除くに堪へん。
如來の行ずる所の一切の行は
若しくは一、若しくは多く門を出現して、
如來功滿ちて已に能く到り、
道を知り、道を識り、道を說きて尊し。
一切輪迴の苦を拯拔し、
普く煩惱の流を渡るを得しむ。

若しくは寃、若しくは親を等しく觀て、
普く一切衆生の類を攝して
身病・心病普く安からしむ。
善說妙藥者を稽首す。
純善を決定して染む無きの尊なり。
一向に他の爲に善く長養す。
自らの得る所の樂を悉く棄捨す。
決定して衆生の病を調伏す。
如來は善く知つて失なく
普く得度して悲心を起さしむ。
彼の生法苦根の源を治す。
煩惱無邊の性を了知す。
佛は時量を知つて悉く差ふなし。
世尊は應の如く藥を說くを爲し、
修習して理の如く悉く周圓なり。
和合了知して皆礙りなし。
一切智智の清涼池なり。
勝道衆道に歸向する者なり。
諸の衆生をして纏縛を離れしむ。
堅固に慚愧を具足する者は、

對なることもある。

【三四】兩踝俱隱而不龜。二五、足不露踝(Ucchankhapādah.)

【三五】窊、あな。

【三六】黶黯疣贅。黶、笑ふ時に頰に現れるくぼみ、ゑくぼ。疣、いぼ、凡て身體の贅肉を言ふか。

【三七】頻婆。又頻螺、頻羅婆、避羅に作る。赤色の果實で、齒等の染料に用ふ。

【三八】兜羅(tūla)綿のこと。

【三九】漏、梵語(Āśrava)煩惱の異名である、漏に流注漏泄の義、三界の有情は眼耳等の六瘡門から日夜に煩惱自ら流注漏泄して止まないので、漏と言ふ。又煩惱現行して心をして連注流散せしめて絕えないので漏と名く。煩惱は漏器漏舍の如くである。

【四〇】二種の無智、昏闇の心にて事理を知照することがないのを言ふ。小乘教で二種の無智を立てる。一に染汚無知即ち一切の煩惱である。天台の所謂見思二惑である。無明を以て體とする。無明は事理の法に執着して其の性分が不淨である故に染汚と云ひ、其の體昏闇にして四諦の眞理を知らないので、無知と云ふ。此の無明一切の餘惑を俱起すれば無明を擧げて一切の煩惱を攝むるのである。二に不染

自境界及び他境界　一切の境界所作して成じ、
彼の一切根義の中に於て　佛は是能く勝るゝ無き根の者なり。
相中に餘相の所緣無し。　非色種現じ皆悉く斷つ。
無生の重擔は久しく已に除き、　已に緣生の河流の底に徹す。
[40]二種の無智・癡暗離れ、　[41]二種智の光明を發生す。
復た二種の[42]疑求心を離れ、　二種の決定智を建立す。
已に盡智世間の句を得　智の障已に離れて法は圓明なり。
勝依寂止門を具足し、　勝處を具足して善く安住す。
一切所應の行を具足して　明行具足し、色相圓かなり。
種姓及び語言を具足して、　神通果を獲て善く救度す。
身語意の業は悉く護らず。　無著無盡智凝然たり。
不退轉の智門を決定し、　智は不壞因時相を說く。
種々の因門は皆な覺了し、　種々の果門も亦悉く知る。
種々の煩惱は[43]對治に及び、　如來善覺者に稽首す。
無二の言說無盡の辯あり。　善く不退轉の法を說く者なり。
世間の[44]八法は心に染まず、　善逹功德の岸に稽首す。
佛三阿僧祇劫中　行じ難き一切の行を積集し、
大悲を運らして普く覆ひ、　自他能く煩惱の流を渡る。
三苦を了知して極めて微細に　苦を愍むに由るが故に大悲を起す。
三界所緣の諸性中　大悲にて一切處に普及し、

又歌羅頻伽、迦蘭頻伽、迦陵迦等。譯、好聲、和雅。雀の一種で、聲美しく、美聲の喩に常に引喩される。

【二八】 眼睫齊整狀牛王、眼睛晈潔紺靑色。五、眼色紺靑而眼睫如牛王(Abhinīlanotra-gopakṣamā)。眼睛は瞳のこと。

【二九】 眉間、柔軟妙毫相。四、眉間白毫、(Ūrṇākeśaḥ)眉間に白い綿毛の如きものがあり捲いてゐること。說法の折はこれより光明を放つ。

【三〇】 右旋淸淨如螺白。二、頭髮右旋(Pradakṣiṇāvartakeśaḥ)

【三一】 烏瑟膩沙頂莊嚴。頂上肉髻、(Uṣṇīṣaśīrṣakatā)頭の頂に鷄のとさかの如く肉の髻、(もとどり)があること。烏瑟膩沙は (uṣṇīṣa)卽ち肉髻である。

【三二】 以上は三十二相(lokṣaṇa)である。然し規本的のものの內の三、額廣平(Samalalāṭaḥ)八齒根深(Aviraḍa-dantaḥ)二五足不露踝(Ucchaṅkhapādaḥ)二頰車如獅子相(Siṃhahanu) 等は現れない如くである。

【三三】 以下六十隨形を出す。繁雜なるため、他の所傳と比較せず。六十隨形は三十二相に洩れたる顯著ならざる特相を出し、場合によつては、甲の三十二相に現れるものが乙の六十隨形に現れ、又この反

四牙鋒利にして妙堅固なり。　最上淸淨にして復た齊平なり。
諸の齒方整に、鮮白にして齊しく、　眼相修廣にして蓮華の如し。
眼睫稠密にして白からず、　眉潤ふて白からず復た修長なり。
耳輪長廣にして厚く復た圓かなり。　身毛の一一皆な潤澤にして
額は廣く平正にして相殊妙なり　上半身分悉く充圓なり。
首髮稠密にして整ひ復た長し。　紺靑に、旋轉して光潤あり。
乃至廣く及び佛の胸臆は　倶に喜旋德相の文あり、
螺髻紺靑にして妙莊嚴あり。　見る可からざる頂相に稽首す。
處非處智力に歸命す。　過現未來の業皆知る。
禪定の解脫等持の門　自他の諸根性を了別し、
種々の信解悉く通達し、　種種の界趣も亦悉く知る。
他心の種類は無差を了し、　宿住の隨念智具足す。
一切生滅の法を照明して　三九 諸漏已に盡きて漏餘るなし。
是の如き十力智は周圓なり。　如來大精進に稽首す。
如來は漏盡きて餘染なく、　諸法を覺了して亦餘なし。
故に正等正覺尊と稱す。　我今稽首し敬禮を伸ぶ。
一切の染法は平等に說き、　諸の出離道も亦善く宣す。
一切を覺了して盡く餘すなく　能仁初覺者に稽首す。
佛は不壞の正智慧を具し、　普く無餘を盡して覺尊を現ず。
正智は諸邪智心を破し、　佛の眞覺は已に餘覺なし。

【一七】　項及腋腋悉充圓。一六、兩腋滿相(Citāntarāṃsaḥ)。
【一八】　容儀敦肅妙端嚴。一八、正立不屈二手過膝。(Sthitānavanatapralam-bavāhutā?)
【一九】　身相修廣復端直如諸瞿陀身圓滿。二〇、身縱廣等如尼卓答樹。(Nyagrodha-parimaṇḍalaḥ)　身體が廣がつてニヤグローダ(揚樹)の如くであること。ニヤグローダは「下の方に生ずる」の意で、バンヤン(Banyan)卽ち印度無花果樹(Figus Indica)地に向つて枝から鬚根が下り、根を出し、幹となる。
【二〇】　上半身如師子王。一九、上身如獅子(Siṃha-pūrvārdha-kāyaḥ)。
【二一】　常向面向各一尋、不明。
【二二】　四十齒平不疎缺。六、四十齒具足、(Catvāriṃśaddantaḥ)、七、齒齊密(Samadantaḥ)
【二三】　四牙鮮白妙鋒利。九、齒白淨(Suśukla-dantaḥ)に當る。
【二四】　常得味中最上味。一〇、咽中津液得上味(Rasarasāgratā)如何なる食物を食しても美味であること。
【二五】　舌相薄淨廣復長。十二、舌覆面至髮際(Prabhūtajihvaḥ)(舌の長きこと)。
【二六】　梵音深妙猶天鼓。一三、聲如梵王(Brahma-svaraḥ)。
【二七】　迦陵頻伽(Kalaviṅka)、

[三三]如來の隨形好に歸命す。
手足指圓かにして悉く纖長に、
筋脈盤結にして復た深隱なり。
充滿柔軟にして足安平なり。
行步直進して象王の如く、
自在に次序して牀鵝王の如く
身分次第にして高顯に
善相は堅固の身に屬著す。
身支安定にして掉動せず。
妙童子の相淸淨なる身は
腹形方正にして欠缺なく、
右旋し深厚なる妙臍の輪あり、
身支近く觸れて諸過を離れ、
譬へば蓮華は垢侵さゞる如し。
面輪圓滿にして皎として淸淨なり。
舌相廣長にして赤銅の如く、
脣色光潤にして愛すべく、
水雲擊響等の音聲は
音聲深遠にして復た美妙なり。
手軟かにして猶ほ[三八]兜羅綿(トーラ)の如く、

指爪狹長にして赤銅の如く
手足の諸指皆な次第す。
[三四]兩踝俱に隱れて麁ならず。
迴顧右旋すること鹿王等の如し。
明顯端嚴にして障礙なく、
身を擧げて隨轉して步み安審なり。
平等に隨轉して身曲がらず。
身淨くして光明は翳暗を離れ、
端直の身相善く圓滿す。
柔軟妙好にして悉く比なし。
穴ならず、凹ならず、廣く復た圓かなり。
淨くして點なく、[三五]竅(ケウ)は減下なし。
悉く[三六]黶點疣贅等なし。
亦復た諸の不寂靜を離る。
身相具足して減ずるなし。
柔軟にして復た蓮華葉の如し。
[三七]頻婆菓及び赤銅の如く、
復た象王の大震吼の如し。
一切聞者は咸な悅意す。
手文深明にして斷たず。

し、あしのかふ(足背)。
【八】 足趺修高、三一、足趺高隆(Āyatapāda-parṣṇiḥ)。修は長きこと。
【九】 腨如伊泥邪鹿王、三二、腨如鹿王(Aineya-jaṅghaḥ)。腨、ふくらはぎ、こむら。伊泥邪は(Aineya)「雌の黑羚羊から造られたる」の音譯である。
【一〇】 雙臂修圓摩膝輪。一四、臂頭圓相(Susaṃvṛttaskandhaḥ)に當るか。
【一一】 陰相藏密猶龍馬。男根が象又は馬の夫の如く腹中に隱れてゐること。希臘彫刻にて裸身に薄ものをまとつた時、男根がすかし見えるのから妙相に聯想したのであらうと。(高楠敎授說)。
【一二】 髮毛端潤皆上靡。二二、毛上靡、(Ūrdhvaṃgaromaḥ)。靡、なびくこと。
【一三】 一一身毛悉右旋。二一、(Ekaikaromapradakṣiṇāvartaḥ)一の毛根から一毛が生じ、右に旋つてゐること。
【一四】 身皮細滑。一七、皮膚細滑(Sukṣmasuvarṇacchaviḥ)。
【一五】 身眞金色光晃耀、巴利語妙相、身黃金色(Suvaṇṇa-vaṇṇo-kañcana-sannibhattaco)。
【一六】 手足頸肩七處滿。一五、七處平滿(Saptotsadaḥ)。

卷の中

[一]「如來の勝れし妙相に歸命す。
[二]千輻輪文は足心に現る。
[四]兜羅綿の如く手足軟かなり。
[六]手足の諸指は妙纖長なり。
[八]足趺修高にして復た充滿す。
[一〇]雙臂修圓にして膝輪を摩し、
[一二]髪毛端潤にして皆な上靡す。
[一四]身皮細滑にして垢侵さず。
[一六]手足頸肩の七處滿つ。
[一八]容儀敦肅にして妙にして端嚴なり。
諾瞿陀身の如く圓滿す。
[二二]常に光れる面向は各一尋にして
[二三]四牙鮮白にして妙鋒利なり。
[二五]舌相薄淨にして廣く復た長く、
音聲を聞く者皆な悅意し、
[二八]眼睫齊整にして牀牛王の如く
[二九]眉間柔軟にして妙毫相あり。
[三一]烏瑟膩沙にて頂を莊嚴す。

[三]足下平滿にして善く安住す。
輞轂衆相皆な圓滿なり。
[五]縵網光は手足の間に現る。
[七]足跟圓滿にして趺相稱ふ。
[九]腨は伊泥邪鹿王の如く
[一一]陰相藏密にして猶ほ龍馬のごとし。
[一三]一一身毛は悉く右旋し、
[一五]身は眞金色にして光晃耀す。
[一七]項及び膊腋悉く充圓す。
[一九]身相は修廣にして復た端直なり。
[二〇]上半身は師子王の如く、
[二一]四十齒平かにして疎缺ならず。
[二四]常に味中の最上味を得。
[二六]梵音深妙にして猶ほ天鼓のごとし。
復た迦陵頻伽の聲の如し。
眼睛皎潔にして紺靑の色あり。
[三〇]右旋して淸淨に螺白の如し。
[三二]大丈夫の相具するものに稽首す。」

【一】 以下佛陀の三十二相を說く。その一々を以下に三十二相の正規のものに宛てて註釋す。
【二】 足下平滿善安住、三〇足下安平(Supratiṣṭhitapādah)足の平が安平なること。偏平足の如きを言ふ。
【三】 千輻輪文現足心、これ、手足具千輻輪(Cakra-vikita-hastapādatalah)手足の平に輻輪(車のや)の形が現れてゐること。
轂、こしき、輪の正中、其の中を空にして軸之を貫き、輻之に湊る。又車の義に用ふ。
【四】 兜羅(tūla)、綿のこと。手足軟。二六、手足柔軟(Mṛdutaruṇahasta-pādatalah)、手足の柔かなこと。
【五】 縵網光現手足間、二七、手足縵網(Jālavanaddha-hastapādah)。手足の指間に水鳥の水掻きの如き薄膜があること。佛像彫刻にて手足の指の落脫しない爲指間に材料を殘したのを、妙相になしたのであらうと。(高楠博士說)
【六】 手足諸指妙纖長。二八、指纖長(Dirghāṅguli。)
【七】 足跟圓滿。二四、足跟圓好(Suvartitorṇāḥ)跟は足後の地に著く處。くびす。くびすが圓きこと。趺、跗と同じ。あ

世間の生滅を眞實に知り、
如來眞實最上の教
善趣惡趣悉く了知し、
縛を了知して本來の性を脫し、
邪正・染淨悉く能く知り、
已に能く最上の善を具足し、
一切の惡趣中に救拔し、
天仙最上士に稽首す。
適悅喜愛の心を生ぜず。
自身廣大なる諸色相は
三界の最勝應供の尊なり。

善く最勝の諸法寶を說く。
三界の所作能く成就す。
善惡事中智倒るゝなし。
而して善く能く縛脫の門を說く。
善不善義は皆な明了なり。
善行を具するもの普く稱揚す。
如來悲んで一味の藥と爲す。
甚深なる禪定の樂に著せず、
誓つて愚迷を貪欲海を度す。
畢竟じて圓滿して稱揚すべし。
我今不可議に歸命す。

廣く衆生の調伏門を啓いて
佛は是れ正法調伏士にして
無等の法門調伏師、
如來の戒具足して同等に
解脫を具足するも本同源なり。
聖正吉祥大覺者
常に林野に於て衆緣を息め、
不害相を以て說法し、
動動相なくして說法し、
已に輪廻相を斷じて說法し、
他の苦相なくして說法し、
世門利益相にして說法し、
同異生相にして說法し、
無住相說法に稽首す。
若しは法、若しは智は實に亦然り。
法の正白善分別を說き、
正道邪道悉く顯彰し、
若くは善不善悉く分別し
功德已に圓かに過已に除く。
能く善法を以て惡趣を破り、

聖法性調伏に稽首す。
塵を離れ、諸法調伏尊なり。
無量法を以て調伏せし者なり。
定慧を具足して亦差ひ無し。
解脫知見を具して異るなし。
最上の調伏同一門なり。
隨意に坐臥して安止す。
綺語の相なくして說法し、
出離相を示して說法し、
涅槃相を愛すべくして說法し、
善自性相にして說法し、
邪見相を離れて說法し、
相續を轉ぜざる相にて說法す。
照すに眞實義の眞實なるを照明す。
明了の義を說いて疑惑を破り、
高下に平等にして普く言宣す。
利非利の事皆善く了る
正教邪教の門に通達して、
自他能く度する者に稽首す。
樂中の非樂を方便して說く。

等には無上士と調御丈夫を合せて一號となす故に世尊に至つて十號となる。即ち前の九號を具へて世に尊重せられる故に世尊と名くと云ふ。又大論には此二を別開するが故に佛に至つて正に十號となり、世尊を別の尊號とする。即ち上の十號の德を具するが故に世尊と稱するのである。又梵語に薄伽梵(Bhagavān)と言ふのは之である。

【三七】 以下十號を擧げ、夫々の內容に從つて佛を讚嘆す。

佛・世尊の號は普く普照す
如來染なく、發悟なし。
能く衆生の諸願求を滿たす。
清淨聖王の種に生ずるを示し、
悉く能く棄捨して出家す。
最上なる諸の色力を具足し、
世の諸妙境は悉く棄捐す。
戒律清淨にして具さに缺くるなく
大智大慧大聖尊は
佛は正白を語つて復た妙善なり。
一切の善法は悉く觸除し、
諸の行語を說いて纏縛を離れ、
沙門婆羅門衆中に
面相圓正にして顰蹙を離れ、
善來の愛語は衆生を攝し、
所出の語言皆具足し、
深語正語智語を言ふ。
佛語は著なく、依止なく、
所有の言說は悉く無邊なり。
巧妙美なる語言・善き辯才をもつて

是の故に我今讚禮を伸ぶ。
胎藏の生を離れて殊勝に生ず。
善攝一切法に稽首す。
廣大富貴にして復た最高なり。
下心にて高擧を離るゝものに稽す。
端嚴なる相好は見る者忻ぶ。
清淨解脫者に稽首す。
應に、能く說き卽ち能く行ずべきが如し。
同事攝益者に稽首す。
貪欲を斷除して過生ぜず。
正因正語の業を宣說す。
常に柔輭なる愛言を以て宣べ、
如來の語言常に先づ勝る。
正順先導して安然たり。
正說して諸過を攝するものに稽首す。
無畏の語業は善く稱揚さる。
如來の惡語を息むるを稽首す。
亦た違背の諸語言なし。
能く義語を敷了するものに稽首す。
諸の衆生を利樂悲愍す。

(Samyakaṃmbuddha) 正しく徧く一切の法を知るが故に正徧知と名く。四に明行足、梵語で鞞多庶羅那三般那(Vidyāc-araṇa-saṃpanna)三明の行具足する故に明行足と名く。五に善逝、梵語で修伽陀(Sugata)又好去好去と云ふ。一切智を以て大車とし、八正道を行じて涅槃に入るが故に善逝と名く。六に世間解、梵語で路伽憊(Lokavid) 世間の有情非情の事を能く解するが故に世間解と名く。七に無上士、梵に阿耨多羅(Anuttara)諸法の中に於て涅槃の無上なる如く、一切衆生の中に於て佛亦無上なるが故に無上士と名く。八に調御丈夫、梵語で富樓沙曇藐婆羅提(Puruṣa-damya-sārathi)佛或る時は柔軟語を以て、或る時は苦切語を以て能く丈夫を調御して善道に入らしめるが故に調御丈夫と名く。九に天人師、梵語で舍多提婆魔㝹沙喃(Śāstā-devamanuṣyā-nām) 佛は人及び天の導師にして能く其の應作不應作を敎示するが故に天人師と名く。十に佛世尊、梵語で佛陀路迦那他(Buddhalokanātha)佛陀は知者又覺者と譯す。世尊とは世に尊重せられる義である、この中で佛と世尊とを分てば十一號となる。然るに成實論

已に一切語言に非らざるを離る。
常に無諂無誑の行を行じ、
廣く愛敬を行つて實にして虚なし。
一切の所作の善は成就し、
見る者世間尊に歡喜し
親しく諸の法教を說くものに歸命し、
正善にして出離の門を了知し、
高勝歸向の法を破する無く
乃至正しく妙に廣く、
如來所說の諸法語は
聲を調伏せずして悉く已に除く。
如來久しく諸淨命を修し、
三處平等にして心に念住す。
佛已に疑惑の語を斷除し、
涅槃は無異勝の愛門なり。
佛は最上勝道者と爲す。
神通方便悉く圓成す。
衆德圓かなるに稽首歸依す。
[二六]如來・應供・正等覺・
世間解了無上士

善言攝化者に稽首す。
清淨眞實の心を順行す。
已に生死雜を度せしものを稽首す。
是れ正法の爲に[二四]生門を出づ。
清淨士に稽首歸命す。
宜しきに隨つて轉ずる無く、煩惱除く。
菩提眞實の法を證するに趣く。
善く世間寂淨の門を啓く。
天人世間利樂法を宣揚し、
諸の愛欲を離れて聲に染著し、
善く法教を說く者に稽首す。
心動亂なく本安然たり。
能仁[二五]三不護に稽首す。
平等に分位して常に行ずる所。
廣大なる證入者に稽首す。
衆德を具足する天人尊なり。
已に諸の自在得しものに稽首す。
十號滿足して比等なく、
明行具足・善逝尊
調御丈夫・天人師

【二四】 生門(Yoni)、女性の陰門を言ふ。佛の誕生は正法を說く爲であるとす。形而上的修飾化である。

【二五】 三不護、「如來の三業は純淨にして過を離れ、防護を須ゐず。三不護と名く。諸の羅漢の三業は淨なりと雖も、常に防護を須ゐて方に能く過を離る。如來は彼に異る。故に三不護を立つ。」〔大乘義章一九〕

【二六】 十號、劫初には諸說の上に皆萬名あり、衆生漸く鈍いので減じて千名となる。衆生彌よ昧ければ減じて百名あり、衆生更に愚かであるので、減じて現に十名あると。天竺の俗法に十名あり。天上に利根であるので尙百名あり、大日如來は天上に於て成道する故に之に應じて百八號を立て、釋迦如來は人界に成道するが故に亦之に應じて十號を立てる。其の十號とは一に如來、梵語で多陀阿伽陀(Tathāgata)、成實論に如實の道に乘じて來りて正覺を成ずるが故に如來と名くと。又大論には諸佛が安隱の道から來る如く、此の佛も是の如く來るが故に如來と名くと。二に應供、梵に阿羅伽(Arhat)人天の供養に應ずべきが故に應供と名く。三に正徧知、梵に三藐三佛陀

稱讃平等智にして智安然たり。　謗讃著せざるに稽首す。
平坦高下及び染淨は　苦法・樂法と愛憎と
佛智は著なく、亦差なく、　如來の善語者に稽首す。
衆生の惡覆語は義利なし。　如來善覆して顯彰なし。
諸の施法を行じて世間を攝す。　正眞能語者に稽首す。
惡人惡語固より〔二〕觸嬈するも　佛心動く無くして安然たり。
善言惡語等しくして差なし。　愛恚平等者に稽首す。
黄金瑠璃眞珠の寶は　斯れを世間の最上珍と爲す。
如來は已に貪愛の心を離れ、　草木土石等に同じと觀ず。
如來は已に〔三〕三種の慢を離れ、　其の心安定して寂然たり。
床敷臥具及び諸診は　見來つて求むる者に皆な給施す。
利に於て利に非らず、喜恚なし。　輕慢にも亦喜捨の心を生ず。
憂なく、惱なく、過生ぜず　〔三〕智邪法を破する者に稽首す。
已に能く諸嬈惱を遠離し、　常に親近する諸善人に說く。
世門利養の言を說かず、　亦虛妄等の言說なし。
言說隨意にして復た自在なり。　言說調寂にして喜樂を離れ、
言說純一にして淨くして瑕なし。　言說寂靜なる者に稽首す。
言說甘美にして著するなく、　言說能く一切の魔を伏す。
言說決定して世間を離れ、　已に諸の無智を離れしものに稽首す。
已に遠く顚倒の見を離れ、　已に輕浮動亂の緣を離る。

【二】觸嬈、嬈擾りに戲弄す。たはむる。もてあそぶ。
【三】三種の慢。慢は普通七慢九慢と數ふ。一慢、劣れる者に於て己が勝ると言ひ、等しき者に於て己と等しと謂ふものである。是は境に稱ふが心高擧する爲に慢とする。二、過慢。等しき者に於て己れが勝ると言ひ、勝る者に於て己れと等しと謂ふもの。三、慢過慢、他の勝る中に於て己れ更に勝ると謂ふもの、四に我慢、我あり、我が所有ありと執して心をして高擧ならしむるもの。五に增上慢。未だ聖道を證得せざるに已れ證得したと謂ふもの。六、卑慢、他の多く勝る中にて已れが少し劣ると謂ふもの。七、邪慢、惡行を成就し、惡を恃んで高擧するもの、九慢としては我勝慢・我等慢・我劣慢・有勝我慢・有等我慢・有劣我・無勝我・無等我・無劣我。この九慢は三慢の分類である。
【三】說法に於て勝れることを說く。

戒禁を具足して妙にして瑕なく
無滅の三摩地に安住して
已に高下取捨の心なし。
妙高山[二〇]の如く心安固にして
一切處に遍して智常に隨ふ。
諸法を了知して能く勝るゝなく、
智は善を愛し、德を愛して邊なし。
最上の威儀を衆は喜愛し、
辯才は意に隨つて愚癡を破る。
名稱廣大にして復た希有なり。
世間の智者隨つて問ふて言へば、
佛の威儀の相勝れて比なし。
普く世間をして喜愛を生ぜしむ。
迅疾なる言説は重複なく
美味にして妙言音を具足す。
佛は是れ人中の大智者にて
世間の異見悉く生ぜず、
已に諸苦惱を憂悲するを息めて、
輕浮動亂の過生ぜず
如來を毀呰するも心下らず、

大力三摩地[一九]に稽首す。
患なく、動なく、諸危を離れ、
結生の相續は悉く永く離る。
不退轉智は悉く能く成す。
無勝無滅智に稽首す。
佛は是れ愛見善見の尊なり。
愛憎平等者に稽首す。
美妙なる諸の辯才を具足して
正語を宣暢する者に稽首す。
三界中に遍くして普く聞ゆ。
佛は皆善答して隱覆するなし。
見る者咸な適悦心を生ず。
善施歡喜者に稽首す。
平等にして等しきなく差別なし。
語言無等等に稽首す。
復た最上の人中の仙と爲す。
邪思覺を遠離せしものに稽首す。
染法を蠲除して盡く餘りなし。
永く諸過を離るゝ者を稽首す。
如來を讃與するも心高からず、

【一九】三摩地(Samādhi)、舊稱三昧・三摩提・三摩帝・新稱三摩地・三昧地。定又は等持、一境性と譯す。心念定止する故に定と言ひ、掉擧を離れるが故に等と云ひ、心散亂せざる故に持と言ふ。

【二〇】妙高山(Sumeru)、又妙光・安明・善積・善高と譯す。梵語修迷樓、蘇彌樓、須彌樓、須樓・須彌に作る、山の名。一小世界の中心である。器世界の最下を風輪とし、其上を水輪とし、其上を金輪即ち地輪となし、其の上に九山八海あり、即ち持雙・持軸・擔木・善見・馬耳・象鼻・持邊・須彌の八山八海と鐵圍山である。其の中心の山は須彌山である。水を出づること八萬由旬、水に入ること八萬由旬、其の頂上を帝釋天の所居とし、其の半腹を四王天の所居とし、其の周圍に七香海七金山があり、其の第七金山の外に鹹海があつて、其の外圍を鐵圍山と言ふのである。依つて九山八海と言ふ。瞻浮洲等の四大洲は此の鹹海の四方に在るのである。

佛は一切智にして無上尊なり。
善く世間の護を作すものに歸命す。
自らの智は諸法門に通達し、
先づ自らの智を以て諸法を見、
後衆生を覺るの利も亦然り。
眞實に諸梵行を了智し、
淸白を具足して復た周圓なり。」
忘失の法なく、已に安住し
佛心廣大にして量無邊なり。
佛は最勝なる[一六]善調御となす。
諸の沙門中の大沙門にて
佛已に諸淨行を具修し、
復た勝觀解脫尊となす。
寂靜を調伏して寂靜に近く
第一義諦門に入るを得。
一切合掌して恭敬をなし、
人天の施福田と爲すに堪ゆ。
法を知り、義を知り、時量を知り、
自他の根性を悉く了知し、
[一八]三摩呬多(サマーシタ)諸根寂として

佛大恩を爲す者に歸命し、
諸法に隨應して悉く已に聞ゆ。
最勝の知法者に稽首す。
無上大菩提を證得す。
自他の眞覺者に稽首す。
破なく、斷なく、色力堅く、」
淨修梵行者に稽首す。
勇猛堅固にして最勝尊なり。
悉く能く苦樂の性に照達す。
復た無上の[一七]二足尊と稱す。
沙門の過無き者を稽首す。
能く世間の大醫王と作る。」
道師の大智慧に稽首す。
最上の調伏心に安住して
已に淸凉池に到りしものに歸命す。
應に人天最初の供を受くべし。
福生無上士に歸命す。
實の如く自らを知り、亦た他を知る。
此彼數趣を取るを了知す。
諸行の所作悉く周圓なり。」

ある。後に本文に出づ。
【一四】この前後に諸波羅蜜を說く。
【一五】阿私陀(Asita)、阿夷、阿私、阿斯陀など、二人あり、一人は過去世に釋尊の爲に法華經を說いたもの〔法華經提婆達多品〕一人は釋尊が生れた時淨飯王にて之を相したもの。こゝでは後者と思はれる。
【一六】調御丈夫、佛十號の一。梵語、富樓沙曇藐婆羅提(Puruṣa-damya-sārathi)、丈夫を調御するのである。佛は能く一切の可度の丈夫を調御して修道に入らしめる故にかく言ふ。佛は又女人を化するけれども尊に從つてかく言ふのであると。
【一七】二足尊、又兩足尊と云ふ。二脚を有する生類中に於て最も尊きものの意で、佛の尊號にした。又二足とは福智の二に譬へると、佛は福智の二足を圓滿するので、二足尊と言ふと。
【一八】三摩呬多(Samāhita)、禪定の一種。譯、等引。

能く魔力の大龍象を摧き、
安じて勝妙忍辱の樂に住し
正智安立して智堅牢に、
最上の得難き[一二]優曇華にして、
如來聖尊は値ふこと復た難く
地能く諸の種子を持する如く、
如來の智慧も亦復た然り。
無垢無染にして本清淨に
衆生を引導して彼岸に行き、
[一三]三十二相悉く具足し、
百福倶に圓かなり。勝れし妙身は
已に諸法に於て自在を得、
智は能く諸境界中に遍く、
已に能く世間の境を調伏し、
煩惱を對治して盡く餘りなし。
[一四]布施・持戒及び忍辱
諸の波羅蜜は悉く已に圓かにして
佛は是れ最勝の功德山
自覺覺他の覺行圓かにして
無邊の言說無邊の德

善く最上の諸法語を說く。
已に一切愛の羈縛を斷つ。
智慧深く廣くして破らるゝ無き智あり、
百千種の勝功德を具す。
無邊の功德法を具足す。
安定寂靜にして復た廣大なり。
無邊の功德法を具足し、
身心を沐浴して調伏して尊し。
正法を宣說して世を救ふ者なり。
八十種好復た莊嚴し、
廣大最上にして等比なし。
淸淨なる勝義の門を顯示す。
智の金剛は諸の煩惱を破す。
希望を發悟して性已に除く。
廣大なる辯才は障碍なし。
精進・禪定幷びに智慧の
[一五]阿私陀仙は常に供養す。
功德藏幷びに功德海なり。
聲聞十方に普く震ふ。
辯才盡くるなく亦邊無し。

【九】 奔拏利迦葉(Pundarika)。分陀利・芬陀利・分陀利迦、分茶利華に作る。正しく開いた白色の蓮華である。印度の蓮に青黄赤白の四種がある。又未敷・開・落の三時に隨つて名を異にしてゐる。分陀利華は白蓮華の正しく開敷したものである。又此の華の最も大なるものは、花辨が數百もあるので、百葉蓮と言ふ。又此華は多く阿耨達池に出でて人間にあることがないので、人中好華、希有華等とも言ふと。

【一〇】 說法をすることを轉法輪と言ふ。轉輪聖王(印度の理想的統一王)が輪を投じて宇內を統一することに、佛が說法して法界を統一することに喩へた。

【一一】 奢摩他(Samatha)。又舍摩他、奢摩陀、舍摩陀に作る。禪定七名の一。止寂靜、能滅等と譯す。心を攝して緣に住し、散亂を離れることである。

【一二】 優曇華(Udumbara)、又烏曇。具には優曇波羅。烏曇跋羅。優曇鉢など。譯、靈瑞、瑞應。天に咲く華といはれ、珍奇とされる。

【一三】 三十二相、八十種好、百福、夫々佛陀の相好の名數にして、佛陀の身體的特相で

正眞にして理の如く解脱の音は
廣大清淨にして虚空の如し。
佛光は明かにして日月の如し
已に七覺支の妙寶を得て、
愚癡の暗翳は悉く開明し、
人中の最上人中の尊にして、
人中の[九]奔拏利迦華
清淨にして、生死の憂悲惱
永く鬪戰・諍訟の門を塞ぎ、
諸法を付授して祕惜せず、
[一〇]正法輪を轉じて衆生を利す。
[一一]奢摩他（シャマダ）の水湛然として淨く、
已に能く愛の源流を枯渇して
見者咸忻悅の心を生じ、
能く己身を捨てゝ衆生の爲めにし、
色は眞金の初めて焰を出すが如く、
身光照曜して淨く復た明かに
精進勤策を以て腰と爲し、
知慧通達して頂門と爲す。
如來は勇猛にして無畏の尊なり。

復た能く一切語を了知す。
最上の族氏は王宮に生れ、
天・人・阿脩羅（アスラ）供養す。
最上の法寶幢を建立す。
黃金の光聚身照耀す。
已に貪恚癡等の[八]染を斷ず。
人中の諸妙蓮花等にして、
無明憍慢悉く已に除き、
永く相續諸染種を斷つ。
我慢の幢を摧きて法幢を竪て
生死輪を壞して諸苦を息め、
海流注いで深きこと底なきが如し。
是の故に功德の水を充滿す。
一切處に於て所著なし。
冤親二處悉く平等なり。
舌は蓮花に比して廣く清淨なり。
熾盛なること金の如く、亦電の如し。
安住三摩地（サマーディ）を頸となし、
次第にして莊嚴の相を表はす。
一切廣遠にして悉く通達す。

る。

【六】梵王。梵天のこと。新に婆羅賀磨天(Brahmadeva)と云ふ。こゝでは佛教の梵天で、印度教のでない。色界の初禪天である。此の天は欲界の婬欲を離れ、寂靜清淨であるので梵天と云ふ。此中三天がある。第一を梵衆天(Brahmakāyika)第二を梵輔天(Brahmapurohita)第三を大梵天(Mahābrahman)と云ふ。但し常に梵天と言ふのは大梵天を指すのである。名を尸棄(Śikhin)と言ひ、深く正法を信じ、佛の出世毎に必ず最初に來り、轉法輪を請ひ、又常に佛の右邊に在つて手に白拂を持する。然し外道所說の梵天は之と異つてゐる。

【七】帝釋。忉利天（三十三天）の主である。須彌山の頂喜見城に居つて他の三十二天を統領する。梵名釋迦提桓因陀羅(Śakraḥ devānām indraḥ)略して釋提桓因と云ふ。新釋の梵名は釋迦提婆因達羅、澤迦は固有名詞。能と譯すは當らず、天帝の姓である。提桓は「天の」、因陀羅は帝、主と譯す。卽ち能天帝である。

【八】染。染垢染汚と熟語にして不潔不淨の義である。執着の忘念及び所執の事物を言ふ。

佛吉祥德讚

卷の上

尊者寂友造

西天譯經三藏朝奉大夫試光祿卿傳法大師賜紫臣施護、詔を奉じて譯す

[一]我今佛世尊に歸命し、　最上の諸功德を稱讚す。
時語如語不誑語　實語法語如義語
正語寂語無我語にて、　[二]第一義諦門を顯示す。
諸身を出現して眠を普遍し、　善く光明を施して常に觀照す。
諸の有情に智慧の目を開き、　彼の所有癡暗の冥を破る。
[三]十力は眞實にして出生して　已に最上清涼池に到る。
[四]四無所畏等具足し、　大光明を作して燈炬を持つ。
明焔を開發して光照を布き、　彼の熾盛なる大明聚を施し、
堅固なる精進の行を發起して、　一切の勝れし功德を減ぜず。
釋迦は師子大吼音もて　能く無縛の正法を說く者なり。
世間の[五]八法は染る能はず。　最上の清淨なる大悲者なり。
[六]梵王・[七]帝釋・毘沙門　及び餘の天等は皆恭敬す。
我が佛は常に妙巧語を出し、　甘美にして甚だ深く復た廣大なり。

【一】歸敬文。

【二】第一義諦、二諦の一。世俗諦に對するの稱。又眞諦と云ひ、聖諦と言ひ、勝義諦と言ふ。涅槃・眞如・實相・中道・法界・眞空など凡て深妙の眞理に名く。諦は眞實の道理である。此の道理は諸法中第一であるので、第一義と云ひ、眞實なれば眞と言ひ、聖者の見る所であるので聖と言ひ、殊勝の妙義であるので勝義と言ふ。

【三】十力。如來の十力である。知覺處非處智力・習三世業報智力・知諸禪解脫三昧智力・智種種解智力・習種種界智力、智一切至所道智力・八智天眼無解智力・九知宿命無漏智力、十知永斷習氣智力。詳しくは前出。

【四】四無所畏。化他の心の怯れないのを無畏と名ける。四無畏に佛陀のと菩薩のとがある。佛のは一切智無所畏・漏盡無所畏・說障道無所畏・說盡苦道無所畏。詳しくは前出。

【五】八法。八風とも言ふ。世に八法がある。世間の愛する所憎む所能く人心を扇動すれば八風と名ける。一に利、二に哀、三に毀、四に譽、五に稱、六に譏、七に苦、八に樂である。八法に外に二種あ

網羅してゐると言つて過言でない。唯この内大乘的の法數—三十二相・六十隨形・六波羅蜜・十力智・二種智・七法行・七聖財・六通・四念處・四攝法・六和敬・二種涅槃・七種觀想法等を擧げてゐるのは注意を要する。本讃は一百五十讃の小乘的讃佛頌であつたのに對して、明確に大乘の立場に立脚して佛德を讃嘆してゐる。藝術的表現では必ずしも賞揚すべきものではないが、佛教文獻中の大乘の讃佛頌としては尊重すべきものであらう。

昭和七年三月八日

譯者　平等通昭　識

柔輭愛語・深語正語・智語・妙美語・善辯才・戒定慧具足・解脫知見具足・無住相說法・善不善分別・所作成就・善惡越了知・邪正染淨了知等である。而して之等の德目を述べた後に、夫々の德目を行ひ、或ひは具足する者としての佛陀に稽首してゐる。

上卷に於て佛陀の精神的特相を記したのに對し、中卷に於ては、如來の勝妙相に歸命し、三十二相・八十隨形好を一々擧げてゐる。その夫々の凡てに說いては各條項下に出來得る限り詳細な註釋を加へたので、此處には略することゝする。就いて見られたい。妙相等は佛陀の精神的特色に對し、肉體的の特相を言ふのであつて、佛陀が過去世の修行の結果として得られたものであるが、本頌に出でるものは諸法要集 Dharmasaṃgraha 阿毘達磨俱舍論等に出づるものと多少異るものもあり、後者にて三十二相のものが前者にて八十隨好として出で、後者にて八十隨好として出でるものが本頌で、三十二相である場合もある。概して三十二相八十隨好は順次成立した故か、各本によつて明確には一致しないのが常である。

續いて佛陀の精神力を記述し、處非處智力・十力智・諸法覺了・二種智・一切所應行種姓言語具足・大悲・煩惱斷除・輪廻離脫・寂滅出離道顯示・七法行具足・七聖財成就・漏盡・所作已辦・愛取染業盡・一刹中一切行生・破一切疑惑雜說・六通具足・三不護具足・四念處通達等を記し、之等の德を具足する者としての佛陀に稽首してゐる。

下卷に於ては主として敎化の德を記述し、眞實說者・方便攝益・四攝法成就・六和敬法宣揚・二種涅槃界顯示・威神力濟度・無比正法宣說・善業門開示・無利惡法除去・無染見無染思・無染命・無染業・無染念・五分結斷除・六分法具足・依四成就・名相分位門出過・修七種觀想法・頭陀修行等の德行あり、人間中佛に勝るものなく、如來は滅法に住せず、救度を行じて攝し、七種の染を離れ、梵行を圓らかにし、二邊を過ぎ、一切相應の門に安住して大涅槃最上の樂を得る。かくして佛陀は人間中の最上者にして唯一無二である。根力覺道圓らかに、一切を敎示し、如來の勝慧根は微妙にして最上、大慧力は屈伏すべからず、所作已に作し、涅槃の甘露を飮み、一切漏を盡し、大身は常住、大智正識の者であつて、內心常に精進し、廣大にして甚だ深く、諸の功德を具足し、光明は大照し、世間の淸淨眼にて、廣大殊妙に、一切智は妙月の如く、佛德は廣くして邊がない。是の故に我稱讚すと言つて結んでゐる。

之を要するに、佛吉祥德讚は佛を讚嘆するにあらゆる德目を羅列し、克明に懸命に努力してゐる。殆んど佛敎の德目を

佛吉祥德讃解題

佛吉祥德讃（Buddha-śrīguṇa-stotra）は寂天（Munimitra ?）造とされ、宋（九六〇—一一二七）の施護が紀元九八〇—一〇〇〇年に譯してゐる。上中下三卷より成る、讃偈としては長大なものである。

第一、著者と譯者

著者寂天（Munimitra ?）については殘念ながら何も知られてゐない。譯者施護については讃法界讃の譯者として既に詳述した。就いて見られたい。從つて製作年代は漢譯年代紀元千年以前といふより外、推定し得ない。

第二、結構と表現

結構は上中下三卷より成り、各卷は略同等の分量にして、一句は七字より成り、一卷は三、四千句より成つてゐる。恐らくマートリチェータの一百五十讃及び四百讃に倣つて、大乘的立場に基いてより長大な讃偈を造つたのではなからうか。思想用語は大乘的であつて、佛教偈文としては中等であるが、表現は一百五十頌より遙かに劣り、修辭的でなく、明快を缺いて多少難澁の慊ひがある。韻律は有するものであらうが、梵本が無いので、果して欽定詩調に則つてゐるかどうか、不明である。一百五十讃は佛所行讃・長老偈歌・長老尼歌・本生鬘論等と共に勿論印度文學史主潮に棹さす名作であるが、佛吉祥德讃は先づ佛教文學内に於て比較的整つた偈文と言ひ得るに止らう。

第三、佛吉祥德讃の思想

本讃は先づ上卷沒頭に歸敬文として佛陀に歸命し、佛說法語の功德を述べ、續いて佛德を讃じて、貪恚癡等の染なく、我慢なく、禪定三昧に深く入り、智慧深遠に、堅牢なるを種々說述し、三十二相八十種好百福具り、妙身廣大最上にして、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六波羅蜜は圓らかにて、辯才盡くる無く、無上大菩提を證得したと述べる。

而して、以下に佛の夫々の德を擧げ之に稽首すと記してゐる。例へば、『淸白を具足して復た周圓なり。淨修梵行者に稽首す』の類である。その德目の主なるものは次の如くである。勇猛堅固・諸淨行具足・入第一義諦門・知法知義知時量・三摩地安住・不退轉・愛憎平等・辯才具足・名稱廣大・言說重復なし・苦惱憂悲を息む・行施法・離貪愛心・離三種慢・利養妄語無し・言說隨意調寂純一甘美・無諂無誑行・親說法教・了知出離門・神通方便圓成・十號滿足・富貴・最大色力具足・戒律淸淨・

法は寶藏を衆めて眞に際なく、　德源福海は實に量り難し。

若し衆生有り曾つて尊を禮せば、　【四七】彼を禮するも亦名けて善禮と爲す。

聖德神功盡くる有るなし。　我今智劣にして微塵に喩ふ。

如來の功德山を讚ぜんと欲せば、　望崖退を怯れて斯に由つて止まる。

無量無數無邊の境　思ひ難く見難く理を證し難し。

【四八】唯だ佛の聖智にして獨り了知す。　豈に是れ凡愚の能く讚する所ならんや。

一毫一相も法界に充ち、　一行一德も心源に遍し。

清淨廣大なること芳池に喩へ、　能く衆生の煩惱の渴を療す。

我、牟尼(ムニ)の功德海を讚し、　斯の善業に憑りて菩提に趣かん。

普く願くば含生、勝心を發し、　永く凡愚虛妄の識を離れんことを。

一百五十讚佛頌（終）

無知。了本際。憍陳如（Kauṇḍinya）譯、火器。

【四三】須跋。蘇跋陀羅（Subhadra）舊稱須跋陀、譯、善賢、佛最後の弟子である。佛が拘尸那竭城外の沙羅樹林にて正に入滅せんとするとき訪ぬ來つた老婆羅門にて、佛の教化を受け、得果し、佛陀の入滅に先立つて入滅した。

【四四】三有。三界の異名である。生死の境界、因あり、果あるを有と言ふ。三有は三界の生死である。一に欲有、欲界の生死である。二に色有、色界の生死である。三に無色有、無色界の生死である。

【四五】二利。自利利他を言ふ。

【四六】一闡提。不成佛の義である。此に二義ある。一に斷善闡提、大邪見を起して一切の善根を斷ずるもの。二は大悲闡提、菩薩大悲心あつて一切衆生を度し終つて成佛せんと欲し、衆生が盡きない故に自分は畢竟成佛の期なきものである。こゝでは前者の意に用ひる。沙羅雙樹林に須跋を救ふを言ふか。

【四七】作者は佛を讚ずるも力少なく、盡さざるを嘆いてゐる。

【四八】この比喩。大乘佛教に好んで用ひられるものであるが、この邊の詩頌極めてよし。

悲心にして一切を化し、 聖意は希求を絕つ。
利樂施さゞるなく、 能事斯くして皆な畢る。
如來の勝妙法 若くは或は遷移すべし。
[四一]調達は善星と 應に此の敎に投ずべからず。
無始流轉の中 互に不饒益をなす。
斯に由つて佛世に出で、 開示して衆生を化す。
鹿園に[四二]倶隣(カウンディヌヤ)を度し、 堅林に[四三]須跋(スバトラ)を化す。
此の土の根緣盡きて 更に餘の債の牽くなし。
法輪久しく已に轉じ、 諸の群迷を覺悟さす
恒沙の受學の人は 皆能く[四四]三有を利す。
勝金剛定を以て 自ら堅牢の身を碎き、
大悲を捨てず、 自化猶ほ分布す。
[四五]二利の行已に滿ち、 色・法兩身圓かなり。
[四六]一闡提を救攝して 雙林に佛性を顯はす。
悲心三有を貫き、 爾乃ち圓寂に居す。
粟粒は分身を以てし、 色像群方に應ず。
善い哉、奇特の行 希有なり、功德の身。
大いに諸法門を覺つて、 世の未曾有とする所
流恩は含識に遍ねく 身語恒に寂然たり。
凡愚は聖恩に背き、 尊に於て謗怒を興す。

【四一】 調達。提婆達多(Devadatta)。提達達兜、地婆達多、達兜と譯す。譯天授。釋迦族にて斛飯王の子、阿難の兄。佛弟子であつたが、佛に逆き、惡逆の事あり、爲にか佛陀との交渉について種々の說話が生じた。提婆達多の幼時、彼は群雁の飛ぶを射落した。佛、之を憐れみ、拾つて傷をいやして放つた。初めて達多との間に爭あり、又耶輸陀羅姫を爭つたとも傳へる。出家後、他の釋子に供養多く自らに少き時、利養の爲神通を學び、阿闍世太子をそゝのかして父王頻沙王に逆かし、佛を迫害し、醉象を放ち、佛前に石を落した。かくして身に三十相を具し、六萬の法藏を誦したが、利養の爲三逆罪を造つて、生きながら地獄に落ちたと。(佛本行集經一一、五分律三、增一阿含四六、毘奈耶破僧事一三、出曜經十五)。然しながら大乘にては惡逆調達も亦救はれることとあり、本地は深位の菩薩にて法華經に於て天王如來の記別を受けてゐる。
【四二】 倶隣。又居倫、拘隣、居隣に作る。五比丘の第一。最初に鹿野園にて佛の濟度を受けた。阿若憍陳如(Ajñātakauṇḍinya)阿若は名、憍陳如は姓。阿若(Ajñāta)は已知、

漂流を怖畏する處　唯だ佛に歸依すべし。
勇猛大悲尊　諸の群品を拯濟し、
身雲は法界に遍く、　法雨は塵方に灑ぐ。
應現各同じからず、　機に隨ふが故に異あり。
善淨にして諍なく、　唯だ尊は承奉すべし。
廣く諸の人天を利し、　咸な應じて供養を興す。
身口に起作なく、　善化して群方に遍し。
所說は妙を相と應ず。　此の德唯だ尊のみ有り。
久しく三業淨を修し、　妙瑞は無邊に現はる。
普く諸の世間を觀ずるに、　曾つて此の勝德なし。
況んや極惡の者に於てをや、　純ら最上の悲を行ず。
廣く諸の衆生を利し、　勇猛にして勤精進す。
聲聞にして法を知る者は、　尊に於て恒に奉事す。
設使(三九)涅槃を證するも、　終に名けて負債を爲す。
彼等諸の聖衆は　已の爲めに學を修め、
利生心を捨つるに由つて、　還債者と名けず。
無明の睡已に覺め、　悲觀して群芳に遍ねし。
荷負して翹勤(四〇)を起し、　聖善には宜しく親近すべし。
厭怨と惱害と　佛力已に能く除く。
無畏功德中　斯れ但だ少分を顯はす。

百九十九人を殺害し、各々の指を切り取り首にかけて鬘となし、千人目は我が肉親の母を殺さうとしたが、佛は之を憐愍して正法を說きかせたので、改過懺悔して佛門に入り、後羅漢果を得た。(西域記六、經律異相十七、賢愚因緣經八)。

【三九】涅槃を證するとは有餘涅槃を得たのを言ふか。成道した時を言ふのであらう。成道によつて自らは救はれたのであるが、それは自利に止り、尚衆生を救ふて利他を行ふ可きである。即ち未だ負債を負ふてゐる譯である。群生を濟度した時還債者と名く可きである。

【四〇】翹勤。翹、衆き貌、高き貌、おこる、おこす。長き貌、遠き貌。

恩深くして覆載に過ぎて、
德背して深怨を起す
[三五]尊は怨極境を觀じて、
猶ほ極重の恩の如し。
尊を怨んで害を轉ずるも、
尊は怨に於て親を轉ず。
彼は恒に佛過を求め、
佛は彼を以て恩を爲す。
[三六]邪宗は妬心を以て請じ、
毒飯と火坑と
悲願もつて淸池と化し、
毒を變じて甘露と爲す。
忍を以つて恚怒を調べ、
眞言もつて謗毀を銷す。
慈力にて厭怨を伏し、
正智にて邪毒を降す。
群迷は曠劫より
習惡、性を以つて成ず。
唯だ尊は妙行圓かに
一念翻つて善ならしむ。
溫柔暴虐を降し、
惠施は慳貪を破り、
善語は麁言を伏す。
唯だ尊の勝方便なり。
[三七]難提(ナンディ)は巨慢を摧き、
[三八]鴦掘(アングリマーラ)は慈心を起せり。
調へ難きを能く調ふ。
誰れか希有を讚ぜざる。
唯だ尊の聖弟子は
法味自から神を怡(よろこ)ばす。
草坐を以て安と爲し、
金床貴ぶ所に非らず。
善く根の欲性を知り、
攝化して機緣に任ず。
或ひは其の請を待つあり、
或ひは問無くも自ら說く。
後、施戒業を陳べ、
漸次にして淨心を生ず。
後ち眞實の法を談じ
究竟して圓證せしむ。

【三五】 提婆達多の迫害、乃至魔王の誘惑を言ふか。大般涅槃經(Mahāparinibbāna-suttanta)によれば魔王は佛成道後四十五年佛にまとふて過を求めたが、遂に得なかつたといふ。

【三六】 佛法の隆盛を妬み、佛が乞食に遊行する時、外道が家の前に火坑を作り、毒飯を盛つたことがあつた。佛は佛力を以て火坑を淸池とし、毒飯を甘露となした。

【三七】 難提(Nanda)。譯喜。佛弟子。釋迦族にて、出家成果後林棲して「我樂し」と叫んだ。佛弟子は彼がよからぬ樂に耽けるかと思つて佛に告げた。佛の問に對し、難提に昔日城壁に圍まれ、護衞を付けながら何人か謀反をせぬかと、不安であつた。今得果して林中、猛獸毒蛇の中にても心安らかである。故に「我樂し」と思はず叫んだのであると告げたと。之は本頌に關係なきも、難提得果前の逸話である。

【三八】 鴦掘。詳しくは舊稱央掘摩羅、央仇魔羅、央崛鬘、新稱鴦竭利摩羅、鴦寠摩羅。譯、指鬘。佛陀在世の時、舍衞城に住したもの。人を殺すのは涅槃を得る因であるとの邪說を信奉し、市に出でて九

人天の受用する所、
唯だ尊の正法味は
氏族
有善根の人に隨つて
廣く諸の希有を現じ、
聖衆及び人天
嗚呼生死の畏れを
諸の衆生を饒益して
惡人と共に處り、
謗は其の身を惱害するも、
物の爲めに勤苦を行じ、
世尊の希有の德は
尊は嶮惡の道に遊び、
[三四]苦行して六年を經て、
尊は最勝位に居り、
縱ひ輕賤の人に遇ふも、
或ひは尊貴の主に位し、
己を屈して衆生に事へ、
機情億萬種
如來、慈善の音を以て

類に隨つて差殊有り。
平等にして差別なし。
色力及び年華を觀ぜず、
求むる者皆な[三二]遂を蒙る。
緣無くも大慈を起す。
合掌して成な親近す。
佛出でて、乃ち光暉あり。
皆能く其の願を滿す。
樂を摧して憂危を取る。
猶ほ勝德を受くるが如し。
曾つて染著の心なし。
名言を以てしても說き難し。
[三三]馬麥(めみやく)及び牛鏘とにて
安受して心退くなし。
悲んで群生を愍化す。
身語逾(いよい)よ謙敬なり。
曾つて憍慢の心なし。
卑恭にして僕使の如し。
百千端論難し、
一答して疑ひ皆斷す。

【三二】 遂。とぐる、成就する。

【三三】 馬麥牛鏘。馬麥は馬糧の麥である。佛一夏阿耆達婆羅門天の請を受けて彼國に安居し、五百の比丘と共に三月馬麥を食ふた。佛の十難の一。牛鏘。鏘、玉の鳴る聲。又樂の聲。物の鳴る聲。

【三四】 成道前六年間の苦行を言ふ。

淨戒は妙器を成じ、　良田は勝果を生ず。
善友は能く饒益し、　慧命は此に由つて成る。
行恩及び和忍は　見る者咸な欣悅す。
廣く仁慈の心を集めて、　功德は邊際なし。
身口は過惡なく、　愛敬は之れに由つて生ず。
吉祥・衆義利は　咸な善逝の德に依る。
導師は能く善誘して　隋慢を[二七]翹勤せしむ。
[二八]等持にて曲心を調へ、　途に迷ひしは正道に歸す。
善根成熟の者は　駕馭するに[二九]三乘を以てす。
[三〇][illegible]悷して不調の人は　悲に由る故に暫く捨つ。
遭厄に於ては能く救ひ、　安樂にして修を勸む。
苦の衆生を悲愍して　諸の群品を利樂す。
違害には慈念を興し、　行を失する者は憂を生ず。
暴虐にして悲心を起さば、　聖德能く讃する無し。
恩は[三一]罔極にして深く、　擧世咸な知る所なり。
此に於て返つて怨を生じ、　尊は恒に慈愍を起す。
身を亡ぼして一切を救ひ、　自事に憂を生ぜず、
諸の崩隤の人に於て　親く能く援護を爲す。
二世行恩遣り、　諸世間を超過す。
闇に於て常に照明し、　尊は慧燈の炷となる。

【二七】翹勤。翹、あぐ、高き貌。おこる、おこす。遠き貌。かく、かゝる。
【二八】等持。定の別名である。梵語舊稱三昧、定と譯し、新稱三摩地、等持と譯す。心を一境に住して平等に維持するを言ふ。是は定散二心に通ずるのである。たとひ散心に在つても心の一境に專注するは三摩地である。故に定と譯すのは不可であると。(織田)
【二九】三乘。人を乘せて各其の果地に到らしめる敎法を乘と名ける。一乘乃至五乘の別があるが、その内の三乘であるが、四種あるが、大乘の三乘は前に出した。
【三〇】[illegible]。もどる(戾)、恨、悲しむ。
【三一】罔極。罔は無なり。窮極なき義。

暫く佛の所說を聞けば、　金剛の種は已に成ず
縱ひ未だ樊籠を出でざるも、　終に死行處を超ゆ。
法を聞いて方さに義を思ひ、　如實に善く修行すれば、
次第に三慧圓かに、　餘教皆な此れ無し。
唯獨り[二四]牛王仙　妙に眞圓理を契る。
斯の教は勤めて修せざれば、　寧ろ怨み此に過ぐるあり。
暫く聞きて渴愛を除き、　邪見は信心を生ず。
聽く者は喜心を發し、　斯に依りて淨戒を具す。
誕應時に咸な喜び、　成長して世皆な歡ぶ。
大いに化して群生を利し、　滅を示せば悲感を興す。
讃詠すれば祟毒を除き、　憶念すれば欣慶を招く。
尋いで慧明を求發し、　解悟心は圓潔なり。
遇ふ者は尊貴ならしめ、　恭しく侍すれば、勝心生ず。
承事すれば、福因を感じ、　親奉すれば憂苦を除く。
[二五]尸羅具さに清潔にして、　靜慮心は澄寂なり。
般若圓智融らかに、　[二六]恒沙の福の集まる所、
尊容及び尊教　及び尊所證の法
見聞思覺の中　此の賓、最殊勝なり。
漂流して洲渚となり、　己を害して恒に護を爲す。
怖るる者には歸依となり、　之を引きて解脫せしむ。

【二四】牛王仙。故事不明。

【二五】尸羅(Śīla)。戒。般若(Prajñā)。智慧。靜慮(Dhyāna)。

【二六】恒沙。恒河(Gaṅgā)の沙。數の多きことの喩に用ふ。

能く諸の邪見を抜き、　之を引いて涅槃に趣く。
罪垢は能く洗除し、　尊に由つて法雨を降す。
一切智は礙なく、　恒に正念の中に住す。
如來の〔三二〕記莂する處、　一向に虛謬にあらず。
非處・非時なく、　亦た非器なくして轉ず。
尊言は虛發ならず、　聞く者悉く勤修す。
一路勝方便して　無雜にして修學すべし。
〔三三〕初中後盡く善にして、　餘の教ふる所皆な無なり。
斯の如く一向善にして、　狂愚にして謗心を起し、
此の教に若し嫌を生ずれば、　怨み無く斯と等し。
歷劫群迷の爲めに　備に衆の苦毒を經。
此の教縱ひ善に非ざるとも、　一佛を念じて尚ほ修すべし。
況んや能く大饒益あり。　復た深妙の義を宣べるをや。
縱使頭は焚かるとも　先づ應に此の教を救ふべし。
自在なる菩提の樂あり、　聖德は恒に淡然たり。
皆な此の教に由りて生ず。　彼の亡言の處を證す。
世雄の眞實の教を　邪宗は聞いて悉く驚き、
魔王は惱心を懷き、　人天は勝喜を生ず。
大地に分別なきも、　平等に普く能く持す。
聖教は群生を利し、　邪・正倶に益を蒙る。

【三二】 記莂(Vyākaraṇa)。あるものがある事の功德により何時の世、何佛の下にて成道すべしとの、佛の豫言を言ふ。

【三三】 「初に於て善く、中に於て善く、終に於て善し」とは完全に善しの筆法として屢々用ひらる。

義詞恒に善巧にして
利益悉く虚しからず、
柔軟及び麁獷と
聖智は無礙心にて
勝なる哉無垢の業。
此の微妙の身を成じて、
觀る者皆歡喜す。
笑顏妙詞を宣べて、
慈雲は法雨を灑ぎ、
彼の[一九]金翅王の如く、
能く無明の闇を[二〇]殄して、
我慢の山を摧碎して
現證して虚謬にあらず
如實に能く修行すれば、
創めて佛の所説を聞き、
此に從つて善思惟して、
苦に遭ふて能く安慰し、
樂に著して厭心を勸め、
上智には法喜を證し、
淺劣には信心を發せしむ。

或ひは復た麁言を出だす。
故ら並びに眞妙を成ず。
事に隨つて衆生を化す。
一味皆な平等なり。
善巧は良工に喩ふ。
斯の珍寶の句を演じ、
説を聞いて並びに心開く。
月の甘露を流すが如し。
能く清染にして塵を欲す。
諸龍毒を呑滅し、
喩へば千の日光の如し。
譬へば[二一]天帝の杵の如し。
靜慮して亂心を除く。
三事皆な圓滿す。
心に喜びて已に開明す。
諸の垢染を消除す。
放逸にして怖を生ぜしむ。
事に隨つて皆な開誘す。
中根には勝解生ず。
麁言は遍く饒益し、

【一九】金翅王。迦樓羅 Garuda の舊譯、金翅鳥。新譯妙翅鳥、鳥の名。四天下の大樹に居り、龍を取つて食となす。八部衆の一。
【二〇】殄。つく、つくす、たつ、たゆ。やむ、やます。
【二一】天帝杵(Vajra)。天神(多くインドラ)の持つ武器の杵である。この比喩はしばしば好んで用ひられる。

誰か當さに先づ敬禮せざる　唯佛は大悲尊に。
聖德は世間に超へ、　悲願は生死に處す。
尊は寂靜樂に居り　濁に處るは群生の爲なり。
永劫久しく精勤し、　慈心に一切の爲めにす。
眞に從つて利俗に還るは、　悲に由つて引生する所。
呪して潛龍を出し、　雲を興し、甘露を注ぐが如し。
恒に勝定の位に居り、　等しく觀するに怨親を以てす。
兇嶮[一八]倡聒の人も　身を投じて聖德に歸す。
神通師子吼し、　三界に尊しと宣言す。
久しく已に名聞を厭ひ、　悲に由つて自ら稱讚す。
常に利他の行を修して、　曾て自利の心なし。
慈念、衆生に遍く、　已に於て偏して愛するなし。
悲願は無邊際なり。　器を逐ふて群生を化す。
隨處皆な饒益せられ、　猶ほ祭食を散ずるが如し。
深心して一切を念ひ、　恒に須臾も捨てず。
彼を利して反つて辱に遭ひ、　咎に由り、佛作にあらず。
慈音、妙義を演じ、　誠諦にして虛說に非ず。
廣略して機緣に任じ、　半滿時に隨つて轉ず。
若し尊の演說を聞かば　孰れか希奇を歎ぜざる。
縱ひ惡心を懷くも、　有智咸な信に歸す。

七

【一八】倡聒。倡、みだる、くるふ。聒、かまびすし、多言して人の意を亂る貌、無知なる貌、くらし、おろか。

徳情に於て著なし。　德者も亦貪るに非らず。
善い哉極めて無垢にして　聖智恒に圓潔なり。
諸根常に湛寂にして、　永く迷妄の心を離る。
諸の境界の中に於て　[一五]現量は親覩に由る。
念慧は眞際を窮め、　凡愚の測る所に非らず。
善く語言を安立して　彼の亡言の處を證す。
寂靜なる無礙光は　皎潔にして遞輝映す。
妙色は世の希有にして、　孰れか敬心を懐かざる。
若し暫く初に觀ずるあるも、　或ひは復た恒に瞻覩するも
[一六]妙相會つて二なく、　前後悉く同じく歡ぶ。
最勝なる威德身は　觀る者心に厭くなし。
縦ひ無量劫を經るも、　欣仰して初めて觀るに似たり。
所依の德體　能依の德心
性相二つながら倶に融し、　能所初めて異なるなし。
斯の如く善逝の德は　總じて如來の躬に集まる。
佛の相好身を離れて　餘は安處する所に非ず。
我、先世の福に依り　幸ひに[一七]調御師に遇ふ。
仰いで功德の山を讃じ、　遠く尊の所説に酬ゆ。
一切の有情の類は　皆な煩惱に因つて持す。
唯だ佛善く除く。　悲に由つて久しく世に住す。

【一五】現量。因明用の三量の一。又心識の三量の一。現實に量知すること、色等の諸法に向つて現實に其自相のまゝを量知し、毫も分別推求の念なきもの。五識の五境を緣ずると、意識の五識と共に五境を緣ずるものと、五識と同時に起るものと、又定中にあるときの意識と、第八識の諸境を緣ずると、共に現量である。是れ總じて心識上の現量を出したのである。此中に因明用の現量は五識と五同緣、五倶の意識のみである。(織田)

【一六】妙相(lakṣaṇa)。佛陀菩薩又は轉輪王の肉體上の特相である。普通三十二相を數へる。こゝでは佛陀のを言ふ。

【一七】調御師。佛尊號の一。

上に諸の引く所の如く、　世の中の殊勝の事なり。
佛法逈かに超過す。　俗事は哀愍すべし。
聖法の珍寶衆は　佛、最も其の頂に居る。
無上無比の中　唯だ佛は佛と等し。
如來の聖智海を　衆に隨つて少分を歎ず。
鄙詞にて勝德を讃するも　此に對して實に慚多し。
時に俗に降魔を覩て、　一切咸な歸伏す。
彼の同眞性を觀るに、　我は輕毛に等しと謂ふ。
[一三]假令大戰陣に　智勇能く摧伏するも、
聖德は世間に超え、　彼を降すも喩と爲すに非ず。
隣次降魔の後　夜の後分の中に於て、
諸の煩惱の習を斷じ、　勝德皆圓滿なり。
聖智は衆闇を除き、　千日の光に超過す。
諸の邪宗を摧伏して　希有にし能く比する無し。
三善根圓滿にして　永く貪恚癡を滅す。
[一四]種智悉く已に除き、　清淨にして能く喩ふる無し。
妙法を尊は恒に讃じ、　不正の法は恒に讃ずるに非ず。
斯の邪正の處に於て　心に憎愛有る無し。
聖弟子衆と　及び外道の師徒に於て
彼の違順の中に於て　佛心初めて無二なり。

五

【一三】以下佛陀の降魔成道を言ふ。

【一四】種智。種子と習氣をいふ。種子は次の業の種子となるもの。習氣、前出。

勤めて出離の法を修し、
經行の處に坐臥して
衆の過染を拔除し、
斯く積行の成るに由つて、
衆福皆圓滿し、
如來の淨法身は
〔一二〕資糧は集つて更に集り、
譬類を求めんと欲して、
遍に諸の世間を觀ずるに、
縱ひ少分の善有るも、
諸の過患を遠離し、
最勝の諸善根は
如來の智は深遠にして
世事を佛身に喩へれば、
深仁にして一切を荷ひ、
大地は重擔を持するも、
愚痴の闇は已に除き、
世智は能く譬ふるに非らず。
如來は三業淨くして
世潔を佛身に喩ふれば、

衆行の頂を超昇す。
勝福田に非らざるなし。
清淨の德を增長す。
唯尊は最にして無上なり。
諸過悉く〔一〇〕蠲除す。
〔一一〕塵習皆已に斷つ。
功は調御の身に歸す。
能く佛と等しきものなし。
災橫はつて障惱多し、
得易くして比對を爲し、
堪然として安かにして動かず。
能く譬喩を爲すなし。
底なく、邊際なし。
牛跡も方に大海なり。
世間比有るなし。
此れ實に輕しとなすに喩ふ。
牟尼の光は普く照す。
螢の日光に對するが如し。
秋月の空池に皎たる如し。
倶に塵濁の性を成す。

【一〇】蠲除。のぞく。
【一一】塵習。塵、一切世間の事法眞性を染汚するものをいふ。四塵、五塵、六塵など。習、煩惱の餘氣を習氣又は習と言ふ。
【一二】資糧。資は資助である。糧は糧食である。人の遠くに行くに必ず糧食を假りて身を資助する如く、三乘の證果を欲するには善根功德の糧を以て己が身を資助すべきである。

正しく菩提種に遍く、　心恒に珍坑する所なり。
大雄[八]に勝り難く、　智能く及ぶものあるなし。
等しき無き菩提の果は　苦行、是れ其の因なり。
此に由つて身を顧みず、　勤めて諸勝品を修す。
豪貴と貧賤と　等しく引いて大悲を以てす。
諸差別の中に於て　高下の想なし。
勝樂等しく果を持ち、　心に貪著あるなし。
普く諸の群生を濟ひ、　大悲は間斷なし。
尊は極苦に遭ふと雖も、　樂に於て悕求なし。
妙智の諸功德は　殊勝にして能く共にするなし。
染淨の諸雜法は　僞を簡んで其の眞を取る。
清淨鵝王の如く　乳を飲んで其の水を棄つ。
無量億劫に於て　勇猛にして菩提に趣く。
彼の生生の中に於て　身を喪ふて妙法を求む。
三僧祇の數量　精勤して懈惓するなし、
此を持して勝件となし、　以て妙菩提を證す。
尊は嫉妬の心なく　劣に於て輕想を除く。
平等にして乖諍なく、　勝行悉く圓成す。
尊は唯だ因行[九]を重んじ、　果位の圓を求むるに非ず。
遍に諸の勝業を修して、　衆德自から成滿す。

【八】大雄(Mahāvīra)。大にすぐれ秀でたるものの意。佛の尊稱の一。但し、耆那教の教祖の名にも通常用ふ。

【九】因行果。大日經所說の三句義である。第一句菩提心爲因は因である。第二句大悲爲根は行である。第三句方便爲究竟は果である。此の三に一切大小顯密の諸宗を攝する。

福慧及び威光　誰れか能く數量を知らん。
如來の德は限りなく、等しきなく亦能く說くなし。
我今福利を求め、假りに讃するに名言を以てす。
我が智力微淺にして、佛德に崖際なし。
唯願くは大慈悲　我を[六]拯ふて歸處なし。
怨親悉く平等にして　緣無きに大慈悲を起し、
普く衆生海に於て　恒に眞善友と作る。
內財尙ほ能く捨つ。何んぞ況んや外財に於てをや。
尊は慳惜の心なく、求むる者は其の願を滿たす。
身を以て彼の身を護り、命を以て他命を贖ふ。
尊は惡道を畏れず、亦た善趣を貪らず。
但心の澄潔の爲に　尸羅此に由つて成す。
常に諸の邪曲を離れ、恒に質直者に親しむ。
諸業は本性空なり。唯だ第一義に居る。
衆苦は其の身に逼るも、尊は能く安處す。
正智は諸惡を斷じ、過有るも悉く悲を興す。
命に殉じて他難を濟ひ、無量の歡喜を生ず。
死して忽ち[七]蘇を重ずる如く、此の喜び彼に過ぐ。
怨對其の身を害するも、一切時に恒に惱む。
其の過惡を觀ぜず、常に大悲心を起す。

二

ると言つたと。

【三】那爛陀(Nâlanda)。中天竺摩竭陀國にあり。菩提道場の大覺寺東七驛、佛滅後鑠迦羅阿逸多王の建てる所、歷代相繼いで之を增建し、遂に五天竺第一の精舍となる。那爛陀は施無厭と譯す。世俗の傳に此の寺邊の池中に住む龍王の名であると言ふ。若し實義に依れば、釋迦如來往昔此地に在りて國王たりし時の德號であると云ふ。詳しくは看西域記九、求法高僧傳下。

【四】以下詩偈の歸敬文。

【五】檻。いかだ、うきき。この譬喩、事の稀れなことの例に多く用ひらる。

【六】拯。すくふ、たすく。

【七】蘇。蘇生の略か、蘇摩酒の略か。蘇摩酒(Soma)ならば一種の蔓草よりしぼりかもす印度古代の酒にて、祭式等に用ひる神酒にて、殊に神々が好んで用ひると傳へる。不明。

一百五十讚佛頌

尊　者　摩[二]咥　里　制　吒　造

大唐沙門義淨、[三]那爛陀寺に於て譯す

[一]世尊は最も殊勝にして
無量の勝功德
唯だ佛は歸依すべく、
理の如く思惟する者は、
諸惡煩惱の習を
福智二ながら倶に圓かにして、
縱ひ惡見を生ずる者、
身語業を伺求して
我、人身を得るを記し、
譬へば巨海の內
忘念は恒に隨逐し、
故に我、言詞を以て
牟尼は無量の境にして
自利を求めん爲の故に、
無師智、

善く諸の惑種を斷ち、
總べて如來の身に集まる。
讃すべく、承事すべし。
宜しく應に此の敎に住すべし。
世を護る者は已に除く。
唯だ尊は退沒せず。
尊に於て嫌恨を起すとも、
能く瑕隙を得るなし。
法を聞きて歡喜を生ず。
盲龜の[五]椬穴に遇ふが如し。
惑業は深坑に墮す。
佛の實功德を歎ず。
聖德、邊際なし。
我今少分を讃す。
希有なる衆事性を敬禮す。

【一】一百五十讚佛頌（Pañcaśatikanāma-stotra）。西藏祖師部ではこの作者を馬鳴としてゐるが、義淨は詩人摩咥里制吒（Mātṛceṭa）の作だと言つてゐる。このマートリチェータは恐らく馬鳴の學派に屬してゐたので、馬鳴と混淆されるに至つたのであらう。「藝術的價値に富む餘り誇張されない欽定詩調の讃歌である。」百五十讃は四百讃と共にその朗詠は人を魅するものであつて、比丘達は好んで之を學んだと言ふ。一百五十讃の梵文原典の斷片が中央亞細亞で發見され、ジーグリンゲ氏が整理して、殆んどその三分の二を得た。

【二】摩咥里制吒（Mātṛceṭa）。比丘の名。譯、母兒。內海寄歸內法傳には尊者摩咥里制吒は西方の宏才碩德にて群英に秀冠してゐたと。傳說によれば、佛在時に徒衆を親しく領して人の間を遊行した時、鸚鳥があり、佛の相好が儼として金山の若きを見て、林內に於て和雅の音を發し、讃詠するが如くであつた。佛は諸弟子を顧みて「此鳥は我を見て歡喜し覺へず哀鳴す。斯の福によつての故に我沒した後、人身を得、摩咥哩制吒と名け廣く稱嘆を爲し、我が實德を讃す

昭和七年六月十日

譯者平等通昭識

【八】無着、阿僧伽(Asaṅga)とも言ふ。無着菩薩の梵名。世親の兄。法相宗の祖である。婆藪槃豆傳によれば「大乘の空觀を得、此に因つて名と爲した」と。

世親、梵名婆藪槃豆 Vasubandhu. 天親と譯し、新譯に伐蘇畔度、世親と譯す。佛滅後九百年に印度阿踰陀國に出世し、俱舍論・唯識等の大小論千部を造つた。初め小乘の徒であつたが、兄無着の導により大乘に回心した。

【九】筭、算に同じ。かず、かぞふ。

【一〇】陳那(Diṅnāga or Dignāga)菩薩の名。童受と譯し、又域龍と譯す。佛滅後一千百年の頃南印度案達羅國に出世して因明正理門論を作る。新因明の祖である。

【一一】雜讃、Miśra-stotra

る。

この後、一百五十讚は佛教の衰亡と共に、印度本土に全く失はれ、東トルキスタンに現在發見されたことは非常に興味あることである。

五、佛教偈文文學としての一百五十讚

かく見來れば、一百五十讚は表現は辭意美麗、文意明確、譬喩巧妙にして、餘り長大ならず讀誦によく、思想的には佛德と佛法を要説して讃嘆し、修道に役立つ所多く、しかも大小乘何れにも偏さず、思想難解といふのではなく、何人にも容易に諒解し得る。しかも『藝術的價値高い、餘り誇張されぬ欽定詩調に成つてゐる。佛教偈文文學として白眉であり、往時佛教寺院に於て無數の僧に愛誦されたのは尤もである。而して現在に於ても尙日本佛教徒に愛讀愛誦されて然るべきものである。一方學術的には漢譯と藏譯が現存するのみならず、最近斷片なりとも、その梵本が發見、刊行されたのである。梵本斷片はレヴイ教授の言によれば、漢譯と對照して斷片の前後を按配すれば、殆んど本頌の全部を得可く、この研究は漢譯に通づる日本佛教學者に待つ所多いといふ。今後梵本斷片と漢藏譯と並びに西藏譯四百讚佛頌とを對照し、比較研究することは研究價値の高いものである。殊に陳那の註釋雜讚、釋迦提婆の糅雜讚が發見された場合には尙更のことである。日本佛教學者の重要な研究題目の一たるを失はないであらう。

［附記］　マートリチェータ並びに一百五十讚及び四百讚は國譯一切經論集部六の金剛針論と共に近く別に自分の研究を學術的論文の形式にて發表する豫定であり、且本稿は國譯解題である關係上、詳細な學術的考證は之を避けることとした。

【一】 F.W. Thomas; Orientalist-enkongresse (Verhandlungen, Transactions Actes), Hamburg, 1902, S. 40 參。
S. Lévi: Journal Asiatique. Série IX, vol. viii, pp.444 ff., vol. IX, pp. 1 ff. Thomas: Indian Antiquary vol. xxxii, pp. 345 ff.
Winternitz: Vienna Oriental Journal vol xxvii, pp. 43 ff.

【二】 Thomas: Indian Antiquary (Bomby)1903. p. 345 ff.; S.Ch. Vidyābhūṣana, J.A.S.B. 1910, p. 477 ff 參。
Winternitz: Geschichte der Indischen Litteratur. II. Band, 1920 Leipzig, S. 211
S.Ch. Vidyābhūṣana, Journal of the Asiatic Society of Bengal, 1910. p. 477 ff. 參

【三】 S. Lévi: Journal Asiatique, 1908. S. 10. t.XVI, p. 450f.

【四】 V. Poussin: Journal of Royal Asiatic Society, 1911. p. 764 ff.

【五】 A.F. Rudolf Hoernle: Manuscript Remains of Buddhist Literature found in Eastern Turkestan facsimiles with Transcripts Translations, and Notes, vol. 1. Oxford, 1916

【六】 Thomas: Indian Antiquary vol. 34. 1905. p. 145 ff.

【七】 藏、はz。

く大乘小乘の嫌ひなく、等しく愛讀愛誦された原因であらう。

四、百五十讃の効果と影響

百五十讃は義淨も南海寄歸内法傳四に『其の佛を讃する者は舊に已に有り。但し之を行ふを爲すに稍別あり、梵と同じからず。且つ佛を禮するの時の如し。佛の相好を歎ずるを云ふ者は卽ち直聲を合せて長く讃じ、或は十頌二十頌、斯くするは其の法なり。又如來等の唄は元是れ佛を讃ず、良く音韻を以て稍長く、意義顯れ難し。或は齊に因り靜夜大衆悽然たる可し。能者をして一百五十讃及び四百讃幷びに餘の別讃を誦せしむ。斯くして佳を成すなり。然して西國の禮敬は盛に讃歎を傳ふ。但し才人有れば、敬する所の尊に於て稱說を爲さゞる莫し。尊者摩咥哩制吒の如きは乃ち西方の宏才碩德にして群英に秀冠するの人なり。……』とあるによれば、佛禮拜讃嘆の場合に、之が衆僧によつて誦されたものであるらしい。『大小乘の別なく、五戒十戒を誦し得る者皆之を好んで誦した』とあるから、佛教精舍・佛教徒全部に流布してゐたと言つても過言ではない。[二]更に又一百五十讃の梵本斷片が中央亞細亞東トルキスタンに發見されたことは、如何にこの頌文が流布されてゐたかを語らなくて何であらう。[三]この美しい詩篇が韻律を以て靜夜僧堂に衆僧によつて一齊に合聲された時如何ばかり感動多きものであつたか、想像に難くない。[四]

義淨によれば、この佛頌に六意があつたといふ。

一、能く佛德の深遠を知る。
二、制文の次第を體す。
三、舌根をして清淨ならしむ。
四、胸藏をして開通せしむ。
五、衆に處つて惶てず。
六、長命にして無病なり。

卽ち佛德を知り、文章の構造に通じ、舌淨く心朗らかに、大衆の中にて落着が出來、長命無病になり得るといふのである、佛頌讀誦の間直接の功德を言つたのであらうが、此によつても如何に一百五十讃並びに四百讃が尊重されてゐたかゞ知られよう。

やがてこの佛頌が範となり、刺戟となつて、以後模倣者註釋者が陸續として出で、類似の讃頌續出し、之の註釋が又多く現れたのも道理である。かの佛教史上著名な論師陳那（Dignāga）さへもが親しく自ら和して、頌の初に一頌を加へ、雜頌（Miśra-stotra）と名くる註釋的讃頌三百を造つた。更に鹿苑の名僧釋迦提婆(Śākya-deva) が陳那の頌の前に更に一頌を加へ、四百五十頌ある糅雜讃と名くる讃頌を造つた。之によつても一百五十讃が印度に如何に重ぜられ、愛誦され、殊にその影響の深大であつたかゞ知られ

あながち度を過ぎてゐるとは言へない。大小乘を問ふ無く、初學の者が競ふて愛讀愛誦し、範として習ひ、追從模倣したのは道理である。

三、百五十讃の内容

百五十讃佛頌は佛頌の名の如く、佛陀の德行を讃嘆したものである。先づ佛德讃嘆の理由と讃仰の福利を述べ、世尊の缺陷を探めても得られぬと述べる。進んで、佛陀の智慧の深遠にて利益多きを種々の方面、種々の引例を以て讃嘆し、佛身の清淨、殊勝にして塵習を斷ち、過患を遠離し、三業淨く、如來は三善根圓滿にして種習除き、聖弟子と外道の間に於て佛心は二無く、妙相好（lakṣaṇa）殊勝に、慈悲心は凶惡の人をも化し、悲願無邊際なりと說き、慈悲の深く廣きを述べて、上智に法喜を證し、中根に勝解生じ、淺劣に信心を發せしめて、菩提に趣かしめ、敎化の力の强いことを數多くの例と文字とを以て說述してゐる。而して佛陀に親侍すれば尸羅（シーラ）(Śīla)・靜慮心(Dhyāna)・般若(Prajñā) 悉く具り、諸德成じ、援護を受けて闇に於ても照明あり、饒益を蒙ると述べる。更に佛陀の生涯を以て實證し、馬麥牛鏘とにて六年苦行し、最勝位に在つて謙敬にして憍慢の心なく、憐愍して恩深く、尊を怨んで害を爲すも親と轉じ、邪宗が妬心にて毒飯と火坑を設けても甘露・清池と變へ、溫柔にして暴虐を降し、惠施は慳貪を破り、難提（ナンディ）の巨慢を摧き、鴦掘（アングリマーラ）は慈心を起し、諸人をして慈心を生ぜしめた。かくして作者は佛陀尊崇奉侍を勸め、佛陀に從つて精進すべきを勸め、佛陀の慈愛深きを述べて、俱隣（カウンディニャ）(Kauṇḍinya)・須跋（スバドラ）(Subhadra) を敎化したことを記し、二利の行滿ち、色法兩身圓かであると述べ、法藏は際無く、德源福海は量り難く、聖德神功盡くるなく、佛智のみ無量無數無邊の境、思ひ難く見難く、理を證し難を獨り了知し、一毫一相も法界に充ち、一行一德も心源に遍く、清淨廣大なる芳池は衆生の煩惱の渴を療し、凡夫の能く讚ずる所でないが、牟尼の功德海を讃し、善業に憑つて菩提に趣き、衆生が勝心を發し、凡愚虛妄の識を離れんことを願つてゐる。

本讃に現れる思想は大體佛陀の智慧と慈悲の記述であつて、之を各種類に分割し、種々の方法・引例を以つて說明してゐる。而して佛敎思想としては六度（Pāramitā）を中心として倫理修道思想を說いてゐる。佛身思想は色法二身思想に立つてゐる。從つてその表現の卓越せるに比して、思想は顯著なものが現れず、特に大乘思想と目すべきものもなく、大體小乘有部思想に立ち、詩人としての自由な立場から初期大乘思想をも包含してゐる程度である。反つて之が義淨も言ふ如

病なり。此を誦し得已つて方に餘經を學ぶ。然して斯の美未だ東夏に傳らず。釋を造るの家、故に亦多し。爲に之に和する者誠に一[九]算に非ず。[一〇]陳那(ちんな)菩薩親ら和を爲す。頌初に於ける每に各其一を加ふ。名けて[二]雜讃と爲す。頌三百有り。又鹿苑の名僧、釋迦提婆と號するは、復陳那の頌前に於て各一頌を加ふ。糅雜讃と名く。總べて四百五十頌有り。但制作の流有り。皆以て龜鏡と爲す。』

之によれば、この詩は麗しきことと天上の華にも比す可く、品位高きことと巍然たる山の嶺にも較ぶ可きものであつた。故に印度の讃歌詩人は好んで彼の調子を學び、彼を文學の父と仰ぎ、多くの追從者を出した。無着（Asaṅga）世親（Vasubandhu）菩薩の如きも尙彼を驚嘆して止まなかつた。印度の比丘達は五戒十戒を誦する事が出來れば、直にマートリチェータの讃歌を學んだのである。

一、制作動機

摩咥哩制吒は初め外道であり、佛教に歸してからは、佛教の深遠な教理、解脫に歡喜し、佛陀の德行に感嘆して、內心燃ゆる讃仰の情熱と法悅より佛陀と佛法讃嘆の念に馳られたに相違ない。傳によれば、外道であつた折は大自在天に事へ、讃詠したといふ。而して前非已往を悔い、大師に遭はなかつたことを悔い、佛の遺敎遺像に仕へるとき、懺悔の心からも、佛陀讃仰の心動いたであらう。こゝに性來の詩藻を馳せ、外道時代の習練の印度修辭法を使つて、四百讃と一百五十讃を制作し、心內の讃仰の情を吐露したのであらう。さうであればこそ、この詩頌は藝術的價値に富むと共に、佛陀を讃仰して敬虔の念に溢れてゐる。佛法を讃嘆するに之れ努めながら、誇張せさる欽定詩調の讃歌たり得たのである。

二、一百五十讃の結構と表現

原詩はその名の示す如く、百五十頌であつたに相違ない。漢譯は五百八十四句より成り立ち、一句五字より成り、內最後の二十句丈は七字より成つてゐる。

章（Sarga）を設けないが、大體欽定詩調（Kāvya）により、殘存梵本斷片は立派に韻律を踏んでゐる。漢譯は梵詩一頌を四句內外に適宜譯出したらしく、漢語としての韻律を踏んでゐる。

欽定詩として中庸を持し、餘り誇張されてゐない。漢譯によれば義淨の譯筆の靈妙にもよらうが、美麗にして、明確である。殘念ながら、梵本は全部回復されず、殘存部分も分明ではないので、修辭の明細が知られないが、漢譯から推せば、文意明確にして意を盡し、譬喩に巧みに、直勁に讃嘆の高潔なる宗教的情操を吐露してゐる如くである。『文情婉麗にして天蘤と共に齊(つど)しく芳く、理致淸高にして地獄と峻を爭ふ』との義淨の讃辭は

して極めて貴重な文獻である。元來印度本土は非歴史的非記錄的であるので、印度古代地理歴史の確固たる文獻が存在しないのである。然し、此處に支那旅行家の忠實詳細な記述あるが爲に、印度中期の地理歴史文化が確定したと言つていゝ。印度のみでなく、大唐西域記は玄奘通過の中央亞細亞諸國の、南海寄歸內法傳は義淨通過の南海諸國の、夫々の緻密な記錄を爲すので、當時の暗黑の東洋の全面を明白ならしめる、殆んど唯一の資料と言つて過言でない。義淨は玄奘と共に譯經家としてのみならず、旅行家として貴重な存在である。更に譯經時代とも言ふべき當時に於ては、譯經家求法僧は同時に新佛教思想家であり、教理の組織者であるので、この意味でもその重要性を增すのである。

　一百五十讃は彼の譯經中でも―よし教理史上貴重なものでないにしても―譯經としては出色のものである。南海寄歸內法傳にもある如く、自ら愛誦して喜び、好んで心好く譯出したらしく、實に印度滯在中那爛陀寺に於て譯出し、(六七一―六九五)、歸國後紀元七〇八年更に修正してゐる。在印中の草稿を更に潤文したのであらうか。譯經家として令名ある義淨が、しかも在印中譯經し、更に歸朝後修正したのであり、飜譯に當つて印度佛教家の意見を聽したとも想像出來るので、漢譯として最も信頼出來るものである。譯文、明確美麗である。尙一百五十讃は西藏譯をも存する。

五、一百五十讃佛頌の思想と表現

　一百五十讃佛頌に就き、義淨の言ふ所は、その製作動機・思想表現・影響について大體的確に言つてゐると思ふ。

『後乃ち記名する所を見て、心を飜して佛を奉じ、衣を染めて俗を出づ。廣く讃嘆を興し、前非已往を悔い、勝轍を將來に遂じ、自ら大師に遇はざるを悲しむ。但し遺像に逢ひ、遂に盛藻を抽き、符を仰ぎ、記を授け、佛の功德を讃ず。初め四百讃を造り、次に一百五十讃を造り、總べて六度を陳べ、佛世尊の所有の勝德を明かにす。斯くして文情婉麗にして共に天葩と共に齊しく芳く、理は清高を致し、地嶽と峻を爭ふと謂つ可し。西方に讃頌を造る者は咸同じく祖習せざるなし。無着・世親菩薩も悉く皆趾と仰ぐ。故に五天の地初めて出家する者も亦既に五戒十戒を誦するを得れば卽ち須く斯の二讃を誦するを敎ふべし。大乘小乘を問ふ無く、咸同じく此に遵ず。六意有り。一は能く佛德の深遠を知る。二は制文の次第を體す。三は舌根をして清淨ならしむ。四は胸藏開通するを得。五は則ち衆に處つて惶てず。六は乃ち長命にして無

この四百讃は漢譯はなく、西藏譯のみが存在してゐる。之は西藏語飜譯に當つては『ヴァルナナールハ・ヴァルナナストートラ（Varṇanārha-varṇana Stotra）即ち『讃嘆に價するもの丶讃嘆の頌』と呼ばれ、トマス Thomas が之を譯出した。ターラナータは讃歌作家としてのマートリチェータに就いて彼の『佛教史』（シーフナー Shiefner 譯九一頁）に記述し、之をマートリチェータの著であるとし、六世紀前半のチャンドラゴーミン Candragomin と同時代で競爭者である月稱阿闍梨 Candrakīrti によつてかゝれた四百讃の註釋に開說してゐる。四百讃は一百五十讃と同じく頌文にて書かれ、西藏譯では十二章に分れてゐる。殘念ながら四百讃の殘存寫本は明瞭ではない。書體はグプタ Gupta 體の斜體であつて、東トルキスタンの北方に流布してゐたものである。

三、漢譯者義淨

一百五十讃は唐（六一八—九〇七）の義淨によつて中印度那爛陀寺滯在中（六七一—六九五）に漢譯され、紀元七〇八年に修正された。

釋義淨は元の姓は張で、文明の名を持つてゐた。彼は齊州の范陽の支那沙門であつた。紀元六七一年に支那を出發して印度への航海に出で、三十箇國以上を旅行し、六九五年に支那へ歸つた。その間の旅行記がかの有名な南海寄歸內法傳である。彼は四百部五十萬頌に近い梵本と遺物を持ち歸つた。紀元七〇〇—七一二年間に五十六部二百三十卷を譯出した。內あるものは更に早き時期に譯されてゐたのである。西紀七一三年、彼は七十九歲で死んだ。その內に佛說三轉法輪經・金光明最勝王經・根本說一切有部毗奈耶・根本說一切有部毗奈耶雜事・根本說一切有部破僧事・根本說一切有部苾芻尼毗奈耶・根本說一切有部尼陀那・根本說一切有部苾芻尼戒經・能斷金剛般若波羅蜜經論釋等であつて、說一切有部律系統の律本が多い。

義淨は譯經家としては唐の玄奘と共に漢譯者として最も卓拔した双璧で、譯語譯文共に秀れ、後世の譯經の範となつたものであり、活潑に活動した人で、譯經史上最も顯著な存在である。價値ある譯經も多く、一方他の陸路入竺した求法僧と異つて、南海を經て渡天した求法僧で、その旅行記南海寄歸內法傳は南海・印度の佛蹟・地理風俗の當時の狀態を亘細洩さず、綿密明敏な觀察と忠實な記述とを以て記載してゐる。之は玄奘の大唐西域記と共に、當時の佛教の教理敎勢風習遺跡を知り得る點佛敎史の資料として極めて貴重であるのは勿論、一般の古代地理歷史の記錄として、文化史の資料と

され、追從者註釋家が生じたらしいのである。

　マートリチエータの年代を確定すべき年代はない。大體馬鳴は西紀一世紀（カニシユカ王と同年代）とされてゐるが、彼は馬鳴より後世と思はれる。然し、ターラナータはチャンドラグプタ Chandragupta の子ビンヅサーラ Bindusāra (297―873B.C.) 王と同年代とし、即ち紀元前三世紀としてゐるが、之は信じ難い。一百五十讃の註雜讃 Miśra-stotra の著者陳那即ち紀元六世紀以前餘り遠からずと考へるのは確實なことである。漢譯者義淨（六七五―六八五）より以前であることも確かで、從つてマートリチエータはこの二人より二、三世紀以前の人と考へるのが正しいであらう。

　兎に角、摩咥哩制吒に就いてはこの南海寄歸傳の外に記載する確實な文獻が見當らない。唯彼の文才・思想・人格を傳說的に想像するのみである。

　然しながら、西藏の史家ターラナータ (Tāranātha) はマートリチエータをも馬鳴の一名であるとしてゐる。[一] 然し之は一寸信じ難いことである。『マハーラーチヤ・カニカ・レーカ』Mahārāja-Kaṇika-lekha) の作者であるマティチィトラ (Maticitra) がマートリチエータと同一人であるか否かは、之を斷定することは出來ない。[二]

二、一百五十讃の原典

　近時幸にもマートリチエータの一百五十讃の梵文原書の斷片が中央亞細亞で發見され、ジーグリング Siegling 氏は高昌發掘の寫本斷片を整理してその原典の殆んど三分の二を得た。又中央亞細亞發掘に得た小斷片を[三]レヴイ博士 (Lévi) と[四]プーサン (La Vallée Poussin) が發表した。

二

ホルンレ Hoernle も共の著 "Manuscript Remains of Buddhist Literature found in Eastern Turkestan" に百五十讃の解說を出し、四葉の寫本のローマ字化と英譯を出してゐる。

1. 第 23―38頌. Hoernle Ms, No. 149 $\frac{x}{17}$
2. 第 48― 74頌. Stein Ms. Ch. vii, 001 B[1·2]
3. 第117― 131頌. Stein Ms., Ch. vii, 001 B[3]
4. 第146―150頌. Stein Ms. Khora 500 b.

ホルンレの同著にはマートリチエータの四百讃 (Catuḥśataka Stotra) も記載されてゐる。

1. 第一章 第1-11頌 Stein Ms., Khora 005 a
2. 第六章 第32―40, 第七章 第 1― 2, Hoernle Ms., No. 149 $\frac{x}{31}$
3. 第十二章 第6―15. Ho rnle Ms., No. 149 $\frac{x}{35}$

一百五十讃佛頌解題

一百五十讃佛頌（Pañcaśatikanāmastotra）は摩咥哩制吒（Mātṛceṭa）によつて造られ、義淨によつて中印度那爛陀寺（Nālanda）に於て漢譯された。美しい韻文を以て佛陀の徳行を讃嘆した、著名な詩頌である。

一、作者摩咥哩制吒

一百五十讃佛頌の作者を漢譯者義淨は摩咥哩制多（Mātṛceṭa）としてゐる。義淨は自ら印度に滯在した人である故に、之は略ゝ疑ひない事實であらう。唯、西藏祖師部では「百五十讃」をも馬鳴（Aśvaghoṣa）の作であるとしてゐる。之は摩咥哩制吒が恐らく馬鳴學派に屬し、詩才豐かであつたが故に、馬鳴と混淆されたのであらう。義淨は彼を稱讃して次の如く言つてゐる。

『尊者摩咥哩制吒の如きは乃ち西方の宏才碩徳にして群秀に秀冠するの人なり。傳に云ふ。昔佛在るの時、佛親しく徒衆を領し、人間遊行するに因る。時に鸚鳥有り、佛の相好儼にして金山の若きを見、乃ち林內に於て和雅の音を發し、讃詠するに似り。佛乃ち諸弟子を顧みて曰く「此の鳥我を見て歡喜して覺えず哀鳴す。斯の福に緣るが故に、我世を沒する後、人身を獲得し、摩咥哩制吒と名け廣く稱嘆を爲し、我が實德を讃するなり。」』と。〔南海寄歸內法傳四〕

而して同註には『摩咥哩（Mātṛ）は是れ母、制吒（Ceṭa）は是れ兒なり』と言つてゐる。

是の傳說によれば、彼の前生は鴬であつて、その美妙な音聲を以て佛陀を讃嘆し奉つたとさへ言ふのである。

續いて同書には

『其の人初めて外道に依つて出家し、大自在天に事へ、既に是の尊ぶ所、具さに申して讃咏す。後乃ち記名する所を見て、心を翻して佛を奉じ、衣を染めて俗を出づ。廣く讃歎を興し、前非、已往を悔い、勝輸を將來に遵じ、自ら大師に遇はざるを悲しむ。但し遺像に逢ひ、遂に盛藻を抽き、符を仰ぎ記を授け、佛の功德を讃ず。初め四百讃を造り、次に一百五十讃を造り、總べて六度を陳べ、佛世尊の所有の勝德を明かにす。之に依れば摩咥哩制多は初め外道であつて、後佛教に歸し、大師に會ひ得ないのを悲み、遺像を尊び、讃佛頌四百讃と一百五十讃を造つて、佛德を讃嘆したのである。而して兩讃は非常に優れてゐた爲、製作後數世紀間非常に尊重され、佛僧に好んで誦

[四]三塗の苦報は悉く能く除き、　三界に比なき大牟尼なり。

[五]迴向

是の如き佛身は無漏智なり。　我常に[六]淨き三業を信解す。
無量慧大福行を以て　一心に慇を諸の群生に垂れ、
今三身佛を頌讃するを以て　獲る所の無漏の功德の種をもつて、
願くは我速かに佛菩提を證し、　盡く衆生を引いて正道に歸せしめん。

佛三身讚（終）

【四】三塗。四解脫經の說。塗は途の義。一に火途、地獄趣の猛火に燒かるる處。二に血途、畜生趣の互に相食む處。三に刀途、餓鬼趣の刀劍杖を以て逼迫せらるる處。
【五】迴向。前出。
【六】三業。身口意三處の所作。身の爲す所、口の語る所、意の思ふ所。

佛三身讃

西土賢聖撰

西天譯經三藏朝散大夫試光祿卿明教大師臣法賢詔を奉じて譯す

[一]法身

我今法身佛に供養し奉る
法界に充滿して罣礙なし。
非有非無なる性は眞實なり。
平等無相にして虚空の如く、
喩ふる無く思ひ難き普遍智は
湛然寂靜にして等々なし。
亦た多少に非ずして數量を離る。
自他の福利は亦是の如し。

[一]報身

我今報身佛に稽首す。
菩薩衆を哀愍化度す
[二]三祇に諸の功德を積集して
大音聲を以て妙法を談じ
湛然として安住する大牟尼は
會に處つて日の如く普く照らす。
始めて能く寂靜の道を圓滿す。
普く平等果を獲得せしむ。

[一]化身

我今化身佛に稽首す。
或ひは變現を起し、或ひは寂靜にして、
或ひは法輪を[三]鹿苑に轉じ、
菩提樹下に正覺を成じ、
或ひは復た十方に往化し、
或ひは大光を現じて火聚の如し。

【一】法身、報身、化身佛。の三身については前出。
【二】三祇。菩薩は三祇百劫の間に於て六度を修す。
【三】鹿苑。鹿野苑のこと。仙人論處、仙人住處、仙人墮處、仙園、鹿園等といふ。中天竺波羅奈國に在り、佛成道の後、始めて此處に來て四諦の法を說き、憍陳如等五人の比丘を度す。古來仙人の始めて法を說く處であるので、仙人論處と名け、仙人の住處であるので仙人住處と名け、昔五百の仙人、王の婇女を見て欲心を發し神通を失して此處に墜墮したので仙人墮處と名け、多く鹿の住する處であるので鹿林と名け、梵達多王此林を鹿に施與したので施鹿林と言ふと。波羅奈は古來印度の宗教の中心であつて、その鹿野苑には仙人が多く住し、論議した。

佛三身讃解題

佛三身讃（Buddhatrikāya-stotra）は西土の賢聖が撰し、西天譯經三藏の法賢が漢譯してゐる。

作者は單に西土賢聖撰とあり、名は不明である。法賢は初め法天（Dharmadeva）と言ひ、後法賢と改名した。中印度の那爛陀寺の沙門で、紀元九七三―一〇〇一年間に數多くの著作を譯出した。九八二年に彼は皇帝より傳教大師の稱號を受けた。此の年、彼は名法天を法賢に換へたので、譯經に署名されてゐる二つの名によつて、彼の譯經の時期は瞭に二分されてゐる。紀元一〇〇一年に死し、玄覺禪師の追號を受けた。彼の譯に歸せられる譯著が百拾八卷あり、內四十六卷が法天の名（紀元九七三―九八一）の下に第一期に譯された。その內に金剛針論（Vajrasūcī）・佛說分別緣生經・七佛讃唄伽陀・佛說七佛經等がある。法賢の名の下に七十二經があり、その內に佛三身讃を初めとして佛說頻婆娑羅王經・佛說護國經等がある。兩時代共陀羅尼・偈文等の少經の譯が多い。

佛三身讃は佛の三身、卽ち一、法身 Dharmakāya 二、報身 Sambhogakāya 三、化身 Nirmāṇa-kāya を讃嘆したものであつて、その內に佛三身の說明を兼ねてゐる。この佛三身讃の外に同じく論集部に法賢が梵語を音譯した三身梵讃がある。長さから言つても、前に出づる點からも、佛三身讃の梵本と思はれる。佛三身讃を參照して三身梵讃を梵語に還元し、三身梵讃を參考として佛三身讃を解釋することは學術的にも興味深く價値あることである。

昭和七年六月十日

譯者 平等通昭 識

廣大發願頌(終)

薩品)。

【一五】 善財。善財童子のこと。「文殊師利福城の東に在つて莊嚴幢娑羅林中に住す。其の時福城に長者の子五百童子あり、善財は其一人なり。善財生るる時種種の珍寶へ自然に涌出すれば相師此の兒を名けて善財と云ふ。(華嚴經入法界品)。善財文殊師利の所に詣で、發心し、其より漸次南行して五十三知識に參じて法界に證入したと。

【一六】 地藏。梵名。乞叉底蘗婆(Ksiti-garbha) 忉利天に在て釋迦如來の付囑を受け、每日晨朝に恒沙の禪定に入て衆機を觀じ、二佛の中間無佛世界に於て六道の衆生を敎化する大悲の菩薩である。安忍不動なること大地の如く靜慮深密なること秘藏の如くなれば地藏と名けるのである。又密敎に在ては密號を悲願金剛或は與願金剛と稱し、金剛界に在ては南方寶生如來の幢菩薩と示現し、胎藏界に在ては地藏院中九尊の中尊地藏薩埵である。

【一七】 寶藏神。無盡の財寶を司る大夜叉王である。衆生敬信する者能く一切の財寶に安住することを得ると。

【一八】 曇無竭。菩薩の名。具名、達磨欝伽陀。譯、法盛、法勇、法上、法起など。衆香城に主となりて常に般若波羅蜜多を宣說す。常啼菩薩此に到つて般若を聞く、と。

【一九】 常啼尊。常啼菩薩のこと。梵名、薩陀波倫(Sadāpraläpa)智度論九十六に「問ふ、何を以て薩陀波倫と名るや、薩陀、秦に常と言ひ、波倫を啼と名く。是れ因緣の名字なりや。答ふ。有人言はく。其の少時喜んで啼くを以ての故に常啼を名く。古人言く、此の菩薩大悲柔軟を行ずるが故に衆生惡世に在て貧苦老病憂苦するを見て之が爲に悲泣す。是の故に衆人號して薩陀波倫と爲す。古人言く、是の菩薩佛道を求むるが故に憂愁啼哭すること七日七夜なり。是の故に天龍鬼神號して常啼と曰ふ」となり。

此等の最上の諸佛子は
名稱廣大にして復た盡くるなし。
我、此の佛の功聚を讃す。
普く願くは世間の諸の有情は
最勝功德聚無邊なり。
願くは我名稱亦是の如し。
最上の勝善は極めて廣大なり。
彼の最勝功德聚に住せよ。

三

ずる。初め過去の彌勒佛に値て慈心三昧を修得してから慈氏と稱し、乃至成佛して猶是の名を立てるのであると。

【六】 虛空藏。梵名(Ākāśa-garbha 又 Gagana garbha)虛空孕と云ひ。菩薩の名。空慧の庫藏猶虛空の如くであるので虛空藏と名け、一切の功德を包藏すること虛空の如くであるので虛空藏と名ける。胎藏界曼荼羅虛空藏院の中尊である。

【七】 金剛手。菩薩の名。手に金剛杖又は金剛杵を執るもの。執金剛又持金剛と云ふ。總名は一總別の二名がある。總名は一切の金剛衆に通じ、別名は金剛薩埵をさす。即ち總即別名である。

【八】 十地。菩薩の修業中に踏む十の階段である。種々あり、三乘共の十地とは一乾慧地、二性地、三八人地、四見地、五薄地、六離欲地、七已辨地、八支佛地、九菩薩地、十佛地。大乘菩薩十地は一歡喜地、二離垢地、三發光地、四焰慧地、五極難勝地、六現前地、七遠行地、八不動地、九善慧地、十法雲地である。外に四乘十地、眞言十地等あり。詳しくは看論集部六。金藏薩埵の變化身が金剛藏王である。

【九】 金剛藏。金剛藏は執金剛の總名であるので、金剛藏薩埵と異名同體である。又釋迦には金剛薩埵の變化身であるので、釋迦と金藏藏王とはその能變の體に於て同一と云ふことが出來る。

【一〇】 除蓋障。除一切蓋障菩薩の略名。除蓋障院の中尊である。その眷屬は八菩薩―除疑蓋菩薩、施一切無畏菩薩、除一切惡趣菩薩、救意慧菩薩、悲念菩薩、慈起菩薩、除一切熱惱菩薩、不可思議慧菩薩がある。除蓋障院は胎藏界茶陀羅十三大院の第八院の名。悲愍菩薩の九尊を安ずる。除蓋障菩薩とは又金剛界曼荼羅賢劫十六尊中の一尊である。

【一一】 堅固慧。堅固意のことか。然らば梵名(Dṛḍhamati)又堅固深心夜、地利祖地也舍とも言ふ。胎藏界地藏院九尊の一。即ちその第八尊である密號は超趣金剛。戲論を滅却する意であつて、內證堅固を表はす。三摩耶形は蓮華上の羯磨である。尊形は肉色であつて右手に開敷蓮華を持し、華中羯磨金剛がある。赤蓮華に座してゐる。

【一二】 無垢稱。維摩居士の翻名。毘摩羅詰(Vimalakīrti)舊に淨名、新に無垢稱。維摩は佛の在世毘耶離城の居士であると。傳說によれば、妙喜國より此に化生して身を在俗に委し、釋迦の教化を輔く。法身の大士である。佛毘耶離城の菴摩羅園に在て城中五百の長者子佛所に詣で法を說くを請ひし時、彼故らに病を現じて行かず、爲に佛をして諸の比丘菩薩を遣して其の病床等問はしめんとして以て、方を時の禪訶を成じた法であるので、其の經を維摩經と名けると。

【一三】 無盡意。梵名。阿差末底(Akṣayamati)佛、寶莊嚴堂に遊んで大集經を說く時、東方不眴國の普賢如來の所から來て廣く八十無盡の法門を說く。無盡意菩薩經が之である。又法華經の會座に於て普門品の對揚衆となり、頸上の瓔珞を取つて觀世音に與へた。

【一四】 妙音尊。妙音菩薩のこと。「釋迦如來、肉髻白毫の二の光を放つて東方八萬億の世界を照らす。其を過て淨光莊嚴といふ國あり、佛を淨華宿王如來と云ふ。妙音菩薩彼の世界より八萬四千の菩薩と共に靈鷲山に來る。時に七寶の蓮華を降らし、百千の音樂自ら鳴る。花德菩薩、佛に問ふ。此の妙音菩薩は如何なる善根を植ゑて此神力なりやと。佛言く、過去に雲雀雷王といふ佛あり、此の時妙音菩薩十萬種の伎樂及び八萬四千の寶鉢を以て之を供養せり。依つて今淨華宿王智佛の國に生れて現一切色身三昧を得て、一切世界に三十八種の身を現じて說法度生す」と。(法華妙音菩

願くは我、生々に深智を具すること、　常に[二]妙吉祥菩薩の如くならん。
悲心にて苦を息め、世間を救ふこと、　願くは[三]觀自在菩薩の如くならん。
賢善愛眼もて衆生を見る視ること、　願くは[四]普賢尊と異るなからん。
慈意にて善く諸情品を觀ずること　願くは我れ常に[五]慈氏尊の如くならん。
布施は願くは[六]虛空庫の如く、　持戒は願くは神通慧の如く、
忍辱精進の二度の門は　願くは我悉く常精進の如くならん。
定力は能く諸散亂を攝すること、　願くは我、[七]金剛手の如くなるを得ん。
善く[八]十地の諸法門を說き、　智を說くこと、願くは[九]金剛藏の如くならん。
佛世尊に於て善く請問すること　願くは我[一〇]除蓋障の如きを得ん。
深心の智慧具さに堅固なること、　願くは我、常に[一一]堅固慧の如くならん。
神通無礙にして善く方便すること、　願くは我、[一二]無垢稱の如くなるを得ん。
善く衆生の諸善根を護り、　勤勇なること願くは常勇猛の如くならん。
善く波羅蜜等の法を說くこと、　願くは我、[一三]無盡意の如くなるを得ん。
無量の妙音聲を具足すること、　願くは[一四]妙音尊と異るなからん。
善知識に近づいて心懈るなきこと、　願くは我、生々に[一五]善財の如けん。
虛空無喩の法を能く宣ぶること、　願くは我、虛空藏の如くなるを得ん。
地能く諸世間を長養し、　善く利すること、願くは[一六]地藏尊の如くならん。
貧苦を息除して衆生を利すること、　願くは[一七]寶藏神と異るなからん。
語は無盡の妙法寶を出す。　願くは我[一八]曇無竭の如くなるを得ん。
智慧堅利にして復た常に勤む。　願くは[一九]常啼尊と異るなからん。

(Viśvabhadra)又は三曼多跋陀羅(Samantabhadra)と云ひ、或は普賢と譯し、徧吉と譯す。一切諸佛の理德、定德、行德を主り、文殊の智德、證德と相對す。即ち理智一雙、行證一雙、三昧般若一雙である。故に以つて釋迦如來の二脇士とす。文殊は師子に駕して佛の左方に侍し、普賢は白象に乘じて佛の右方に侍す。此の理智相即し、行證相應じ、三昧と般若を全くせるものが即ち毘盧舍那法身である。華嚴一經の所明は此の一佛二菩薩の法門に歸するので、之を華嚴の三聖と稱するのである。華一切行德の本體である故に華嚴の席に十大願を說き、又諸法實相の理體であるが故に法華の席に法華三昧の道場に其の身を現ずべしと誓ふ。

【五】慈氏尊。彌勒(Maitreya)の譯。彌帝隸、梅低梨、每怛哩等と音譯す。菩薩の性である。名は阿逸多、無能勝と譯す。或ひは阿逸多は姓にして彌勒は名であると言ふ。南天竺婆羅門の家に生れ、釋迦如來の佛位を紹ぐ補處の菩薩である。佛に先立つて入滅し、兜率天の內院に生じて彼の四千歲即ち人中の五十六億七千萬歲を經て人間に下生し、華林園の龍華樹の下に正覺を生

廣大發願頌

龍樹菩薩造

西天譯經三藏朝奉大夫試光祿卿傳法大師賜紫臣施護等詔を奉じて譯す

所有一切衆生の類は　過未現在世盡くるなし。
而して諸佛刹廣くして無邊なり。　彼の無邊刹に塵充滿す。
又一一塵を一刹と爲し、　廣大の佛刹、塵等の如し。
一一刹中の正覺の尊は　塵の如く無量にして我普く禮す。
彼の塵のごとく倍聚せる諸佛刹　刹中の佛々を我稱讃す。
我常に供養するに一心を以てし　塵の如き數の廣大劫を經て、
諸佛及び法衆を頂禮す。　我三寶に於て常に歸命す。
我、悉く持するに諸妙華　及び衆寶聚を以て常に普く施す。
若し我れ已に一切の罪を起さば、　我今普く盡くして懺悔す。
若し我、未だ一切罪を生ぜずんば、　我、一切時に常に遠離す。
所有の一切の勝福事は　一切に於て常に隨喜す。
此の福を有情　及び佛の無上菩提果に　迴向す。
佛の正法中の所説の如し。　願力堅固にして復た眞實なり。
我、常に諸世尊に供養す。　願くは我、最後に成佛を得ん。

【一】迴向。一切所修の善根を衆生に向け、又佛道に向けるのである。回は回轉である。已が所修の功德を回轉して期する所に趣向は趣向である。已が所修の功德を回轉して期する所に趣向せしむるを回向と云ふ。已が善根功德を他に施與せんと期するは衆生に回向するのである。已が功德を以て自他共に佛果を成ぜんと期するは佛道に回向するのである。

【二】妙吉祥。文殊師利(Mañjuśrī)のこと。舊稱は文殊師利、滿殊尸利、新稱曼殊室利、妙德、妙首、普首、妙吉祥と譯す。文殊或は曼殊(Mañju)は妙の義、師利或は室利(Śrī)は頭の義、德の義、吉祥の義である。此菩薩は普賢と一對にて常に釋迦如來の左に侍して智慧を司るのである。

【三】觀自在菩薩。舊に光世音、觀世音と云ひ、觀音と稱す。新に觀世自在、觀自在と云ふ。梵音(Avalokiteśvara)とす。觀世音とは、世人彼の菩薩の名を稱する音を觀じて救を垂るる故に觀世音と云ひ、觀世自在とは世界を觀じて拔苦與樂するに自在なるを云ふ。觀音に六觀音、七觀音乃至三十三觀音がある。但常に觀音と云ふのは六觀音中の聖觀音を指す。

【四】普賢。梵語で邲輸跋陀

廣大發願頌解題

廣大發願頌（Mahāpranidhānotpāda-gāthā）は讃法界頌と同じく、龍樹（Nāgārjuna）によつて造られ、施護（Dānapāla?）によつて紀元九八〇—一〇〇〇年間に漢譯された。（龍樹・施護については讃法界頌參照）

七字一句の頌文より成り、先づ佛陀を讃嘆し、自らの廣大なる所願を述べ、最後に成佛を得んと願ひ、妙吉祥菩薩（—深智）・觀自在菩薩（Avalokiteśvara）—悲心）・普賢尊（Samantabhadra —賢善愛眼）・慈氏尊（Maitreya—慈意）・虛空庫（布施）・神通慧（持戒）・常精進（忍辱精進）・金剛手（定力）・金剛藏（十地法門を說く）・除蓋障（請問）・堅固慧（智慧堅固）・無垢稱（神通無礙）・常勇猛（勤勇）・無盡意（說波羅蜜法）・妙音尊（妙音聲具足）・善財（善知識訪問）・虛空藏（虛空無喩の法を宣ぶ）・地藏尊（諸世間長養）・寶藏神（貧苦息除衆生利益）・曇無竭（妙法寶を出す）・常啼尊（智慧堅利・常勤）・等の諸菩薩の如く夫々の菩薩の特長とする德（括弧內）を成就せんことを願つてゐる。大乘菩薩の願望を吐露するもので、別な顯著な思想を藏してはゐない。修道者の熱烈なる宗教的願望の切實な詩的吐露とも言ふ可きものである。

昭和七年六月十日

譯者　平等通昭　識

讚法界頌（終）

如來に至つて轉じて四智となる。一に大圓鏡智、第八識を轉ぜしもの。有漏の第八識依正二報を變じて有情の身を持する如く、此の智如來の身土を變じて一切の功德を持す。猶大圓鏡の中に一切の色像を現ずる如くであるので、大圓鏡智と名け、緣鏡無邊にして法界の事理を照せば又一切種智と名ける。即ち如來萬德の總本である。二に平等性智、是は第七識の轉じたもの、第七識の我見に反して無我平等の理に達して一切衆生に無緣の大悲を起す智である。三に妙觀察智、第六識を轉じたもの、妙に諸法の相を觀察して說法斷疑の用を施す智である。四に成所作智、眼等の五識を轉じたもの、一切の凡夫二乘の類を利せんが爲に種々變化の事を成す智である。如來の化身化土を現じ、及び諸の神通の所作皆智の作用である。〔唯識十〕

【三二】　六通。作用自在にして無礙なるを通と云ふ。佛、菩薩外道、仙人の所得である。一に通力、神通などと言ふ。一に神境智證通、又身如意通(Ṛddhividdhijñāna)と云ひ、身通と云ひ、神足通と云ふ。即ち不思議に境界を變現する通力であるので、神境通と云ひ、遊步往來の自在である通力なので、神足通と云ひ、自身の變現自在を得る通力なので身如意通と云ふ。各一邊に就いて名を與へたのである。其の中神境が最も汎く通じてゐる。二に天眼智證通(Divyacakṣus)。色界天の眼根を得て、照久無礙なるを天眼智證通と云ふ。三に天耳智證通(Divyaśrotra)色界天の耳根を得て聽聞無礙なるもの。四に他心證通(Paracitta-jñāna)他人の心念を知るに於て無礙なるもの。五に宿命智證通 Pūrvanivāsānusmṛti-jñāna 自己及び六道衆生の宿世の生涯を知るに於て無礙なるもの。此五通は有漏の禪定或は藥力を呪力に依つて得れば外道の仙人も之を成就するを得るのである。此の五を總べて智證通と名けるのは各其の智に依つて證得する通力であるからである。六は漏盡智證通 Āśrava-kṣaya-jñāna で三乘の極致。諸漏即ち一切の煩惱を斷盡するに無礙なるものである。此の六通を成就するのは三乘の聖者に局る。

【三三】　頗胝。又頗梨、頗䋈、頗黎に作り、新譯に頗胝迦、塞頗致迦 Sphaṭika と云ふ。此方の水精に當る。紫日紅碧の四通がある。

【三四】　二空。一に人空、又我空、生空を曰ふ。人我の空無なる眞理である。凡夫濫りに五蘊を計して我となし、强いて主宰を立て、以て煩惱を引生し、種々の業を造る。佛此計を破らんが爲に五蘊無我の理を說く。二乘之を悟つて無我の理に入るを人空と云ふ。二に法空、諸法の空無なる眞理なり。二乘の人、未だ法空の理に達せず、五蘊の法實なりと計して一切の所知障を免れず、佛之が爲に五蘊の自性皆空を說く。菩薩之を悟つて、諸法の皆空の理に入るを法空と云ふ。(織田)

【三五】　五乘。人を乘せて各其の果地に到らしめる教法を乘と名く。一乘乃至五乘の別がある。この內五乘に六種ある。代表的なものは一、人乘、五戒の行法に乘じて天上生るるもの。二、天乘、十善の行法に乘じて天上に生るるもの。三、聲聞乘、四諦の行法に乘じて阿羅漢果に到るもの。四、緣覺乘、十二因緣の行法に乘じて辟支佛果に到るもの。五、菩薩乘、六度の行法に乘じて佛果に上るもの等。

【三六】　二嚴。一に智慧莊嚴、智慧を研いて身の莊嚴となすもの。二に福德莊嚴、福德を積んで身の莊嚴となすもの。六度の中に檀等の五は福德莊嚴である。慧度は智慧莊嚴である。

讃法界頌

永く緣生の染を絕ち、
菩提を最勝と稱す。
智用深きこと海の如く、
水淸くして月影來り、
況んや[33]頗胝寶に似たるをや。
物情根に感あり、
餓鬼は恒に飢渴し、
衆生少信なく、
化現の身の諸相
佛は恒に世にありと雖も、
塵沙界を曉了して、
[34]二空殊勝の智
淸淨にして諸垢を絕ち
恒に色究竟に居り、
衆生の苦を救護して、
[36]二嚴盡くるなく、
佛一乘の法を演べ、
蓮花は垢の染むるなし。
少分にして稱讃して
願くは將に諸の功德をもつて

恒時に涅槃に處る。
物情を化益して歡ぶ。
機に隨じて應身を現ず。
處々に迷津を度る。
緣に隨つて影を現すこと同じ。
周遍して事窮りなし。
水泉を見る能はず。
宿業自ら縈纏す。
光明皆な燦然たり。
宿の緣なきを覩ず。
根隨染久しく無し
妙用して童愚を化す。
自他受用の身は
[35]五乘の人を利益す。
倶胝壽命長し。
功德回に量り難し。
機に隨つて悟淺深なり。
玉は本と瑕侵を絕つ。
廣く理趣の玄を宣ぶ。
普く利して人天に施さん。

るなり。八に知天眼無碍智力、天眼を以つて衆生の生死及び善惡の業緣を見るに障碍なき智力である。九に知宿命無漏力、衆生の宿命を知り、又無漏の涅槃を知る智力である。十に知永斷習氣智力、一切の妄惑の餘氣を永く斷じて生ぜしめざるに於て能く如實に知る智力である。（智度論二五、倶舍二九）

【二九】無畏。四無畏のこと。佛の四無畏は一、一切智無所畏、世尊大衆の中に於て我は一切正智の人なりと師子吼して些の怖心なきをいふ。二、漏盡無所畏、世尊大衆の中に於て我一切の煩惱を斷じ盡せりと師子吼して些の怖心なきを言ふ。三に說障道無所畏、世尊、衆の中に於て佛道害障する法を師子吼して些の怖心なきを云ふ。四に說盡苦道無所畏、世尊大衆の中に於て盡苦の道を師子吼して些の怖心なきを云ふ。

【三〇】三身。佛の三身である。佛身に於て經論の所說或ひは二身乃至十身、開合多途であるけれども三身を以て通途となし、諸身の不同は三身を出でない。法報應の三身之である。前出。

【三一】四智。法相宗所立の如來の四智。凡夫に八識あり、

二五 世俗の二乘行
相無功用滿ち、
智用は無分別にして
衆魔降つて退散し、
善慧を無礙と名け、
身雲甘露の雨、
衆德は猶ほ水の如く、
重龕皆た蔽塞し、
審かに輪迴の事を諦め、
要は苦惱なきを知つて、
佛眞子に歸命す。
細微皆斷盡して
諸の光照を 二六 灌頂して、
金剛寂大定
大寶花王の座
莊嚴は皆な普遍して
二八 十力と 二九 無畏と
三一 六通恒に自在にして
照曜として圓月の如く、
十方遍からざるはなく、

久しく道を修して已に明かなり。
最後に遠行を稱す。
恒時運に任じて成ず。
動かず、獨り名を彰はす。
十方演法希れなり。
物に應じて最も依るに堪ゆ。
虛空は喩へば身に似たり。
大法は智稱の雲なり。
孰れか能く業の牽くを免かれん。
淨土相ひ纒ふ勿れ。
位は智慧の雲に登る。
苦を超へて諸塵を離る。
根塵普く身に遍し。
衆苦は相親む勿れ。
二七 倶胝の衆妙成ず。
功德實に思ひ難し。
三〇 三身 三一 四智圓かなり。
物に應じて機緣を化す
恒時に焰熾燃たり。
燦爛として轉た光鮮かなり。

乘とて現世の中に回心向大せずして涅槃に入るもの。二は小愚法二乘といひ、現世の中に回心して菩薩乘の人となるもの、天台の藏敎、華嚴の小敎の中の二乘は初の愚法二乘である。又天台の通敎、華嚴の始敎に屬する大乘三乘中の二乘は卽ち後の不愚法二乘である。（織田）

【二六】 灌頂（Abhiseka）。王の卽位に水式を頭より浴せかけるを言ふ。佛は法界の王故、同じく「灌頂」の字を用ひ、引いて佛敎關係の人にも言ふに至つた。

【二七】 倶胝（Koṭi）。數の名。譯、億。

【二八】 十力。如來の十力である。一に知覺處非處智力、處とは道理の義、物の道理非道理を知る智力である。二に知三世業報智力、一切衆生の三世の因果業報を知る智力である。三に知諸禪解脫三昧智力、諸の禪定及び八解脫三三昧を知る智力である。五に知種種解智力、世間の衆生の種々の境界同じからざるに於て如實に普く知る智力である。七に智一切至所道智力、五戒十善の行は人間天上に至り、八正道の無漏法は涅槃に至る等の如く各其の行因の至る所を知

譬へば[一九]黒月の如し。　光明未だ能く見はれず。
有情は煩惱に纒はれ、　眞如未だ明顯せず。
月の初光ありと雖も、　漸々にして增長す。
初地は菩提を證すれども、　菩提は未だ圓滿ならず。
[二〇]十五の月は圓滿にして、　處々に光皎潔なり。
解脫して法身を顯はす。　法身の理は缺くるなし。
[二一]染汚意相應して　纒縛して倶に生滅す。
一切の障を解脫す。　三世の悟は有に非らず。
初の[二二]大僧祇滿ちて、　三種普く遍修す。
分別の障を斷除し、　歡喜智、[二三]僑し難し。
三業の愆と犯とは　重と及び輕を防非す
尸羅(シーラ)圓滿の戒は　垢を離れて獨り名を標す。
二障恒時に染め、　倶に空の慧刄除く。
光を發して能く照曜し、　破滅して漸く餘なし。
根隨の染を遠離し、　漸く焔慧の威を增す。
菩提を最勝と稱す。　燒照して光輝を轉ず。
眞俗、[二四]二智を稱し、　相應じて互に起違す。
合して所礙なからしめ、　恒時に事ふるに勝へ難し。
十二緣生智　巡環の理趣全し。
甚深にして最勝を稱し、　般若は前に現す。

を合せて一月となすのである。

【二〇】白月中の十五日、卽ち滿月を言ふ。

【二一】染汚意。第七識の異名。七識は迷染の根本にして、我痴・我見・我慢・我愛の四煩惱と倶起して八識の見分を緣じて我執を生ずる故である。

【二二】僧祇、阿僧祇(asaṃkhya)の略。譯、無數。或ひは無央數。印度數目の名。

【二三】僑。たぐひ、なかま、等類。

【二四】二智。一に如理智、佛菩薩の眞諦の理に如ふ實智である。或ひは根本智と名け、無分別智と名け、正體智と名け、眞智と名け、實智と名く。二に如量智、佛菩薩の俗諦の事量に如ふ智である。或ひは後得智と名け、有分別智と名け、俗智と名け、遍智と名ける。

【二五】二乘。人を乘せて各其の果地に到らしむる敎法を乘と名ける。一乘乃至五乘の別がある。その中二乘に三種ある。普通のものは一に聲聞乘、佛の聲敎を聞いて四諦を觀じて空智を生じ、以て煩惱を斷ずるのである。二に緣覺乘、又獨覺乘と云ふ。機根銳利にして佛の聲敎によらず獨り自ら十二因緣を觀じて眞空智を生じ、煩惱を斷ずるもの。此二乘に二類あり、一は愚法二

迷執して自ら纏縛し、假名の智に了達す。
菩提は近遠に非らず。三世の理は有にあらず。
煩惱は縮つて迷執するは世尊の經に宣ぶる所なり。
智は惑染の滅を生じ、妄執相ひ纏ふこと勿れ。
去來、最勝を執し、體空猶ほ思ふべし。
菩提は妄執に非らず。正證は亦非を知る。
水乳同じく一處にあり、鵝は乳を飲むも雜ふるに非ず。
生空煩惱離の二障も亦雜らず。
妄執我は無に非ず、本非有を了達す。
涅槃は清淨の理なり。二我は倶に立つに非らず。
[一五]三檀齊しく施を修し、[一六]尸羅(シーラ)は過非を離る。
忍は端正の果に因り、精進は勇懃に依る。
靜慮は心をして止まらしむ。般若は用つて疑なし。
[一七]願と方便と力とは、勝菩提に安住す。
菩提は妄執し難く、眞空は生滅なし。
空の本性に了達して、二相も亦有に非らず。
乳糖は甘庶を離れ、庶糖を離れて有るに非らず。
[一八]三乘は菩提に趣き、種體を離れて有るに非らず。
稻穀の種を守護すれば、芽莖必ず生ずるを得。
菩提の種を守護すれば、菩提は此より起る。

ある。こゝでは大乘の三乘を言ふのであらう。一に聲聞乘、又小乘と云ふ。速きは三生、遲きは六十劫間空法を修し、終に現世に於て如來の聲教を聞いて四諦の理を悟り、以て阿羅漢を證するもの。二に緣覺乘、又中乘、辟支佛乘と云ふ。速きは四生、遲きは百劫の間空法を修し、其最後生に於て如來の聲教に依らず、飛花落葉の外緣に感じて自ら十二因緣の理を覺り、以て辟支佛果を證するもの。三に大乘、又菩薩乘と云ふ。三無數劫の間六度の行を修し、更に百劫の間三十二相の福因を植ゑ、以て無上菩提を證するもの。或は之を羊鹿牛の三車に譬へ、或は之を象馬兎の三獸に比ぶ。是れは大乘の三乘である故に、不愚法の二乘を攝しない。(織田)

【一九】黑月。又黑分(Kṛṣṇapakṣa)。地球とも言ふ。太陰曆の下半月を言ふ。月、太陽の陰にて黑くなる一月の半分を言ふのである。印度の曆法は月の盈缺を以て白黑の名を立て、月の盈より滿に至る間を白月(Śuklapakṣa)となし、白月一日乃至白月十五日と稱する。十六日からは黑分で、黑月は一日乃至十五日である。而して前の黑月と後の白月と

眼の諸色を觀るが如く
眞空の理も亦然り。
耳識は聲を聞き、
法界の性も亦た然り。
鼻は能く諸香を嗅ぐ。
色・相二つながら倶に亡ぶ。
舌根の自性は空なり。
識空の體も亦然り。
身根は自性淨にして、
法界の理亦然り。
意は法を緣として稱へて最とす。
諸法性は本空に、
見聞及び覺知
諸の妄想を了絕し、
根塵は妄執を起し、
迷執は根塵あり。
世間並びに出世
我が法は迷に由つて起り、
法界の理清淨にして
迷・悟は心より起り、

障を離るれば皆照耀す。
照曜して生滅を離る。
妄を離れ及び分別す。
妄を分別すれば、有に非らず。
妄執の性は有に非らず。
眞空も亦た是の如し。
味界を恒に遠離す。
法界の理、是の如し。
冷煖の觸は有に非らず。
觸處常に遠離す。
自性恒に遠離す。
圓通の理、是の如し。
相應の法も亦空なり。
見聞の理も亦た非なり。
清淨の體源無し。
根塵の理は有に非らず。
空性は本差ふなし。
遍く計つて自ら輪廻す。
貪瞋癡本なし。
三毒の法は假名なり。

を名けて知障とも、所知障とも名ける。所知の境を障礙して現はれしめないので所知障と言ひ、能知の智を障礙して生ぜしめないので、智障と云ふ。所知又は智の障の依主釋である。此の所知障は法執より生ずる。而して此の二障は一體二用であつて事物の用の和合の事に迷ふ邊を煩惱障と名け、事物の體の如幻の理に迷ふ邊を所知障と名ける（織田）。

【一四】 愚人が兎の耳を誤つて角となすも角は必無である。以て物の必無に譬へる。

【一五】 三檀。檀は梵語檀那(Dāna)の略。布施と譯す。三檀は財施・法施・無畏施の三施である。以下十波羅蜜名目を擧ぐ。

【一六】 尸羅(Śīla)。戒律を言ふ。

【一七】 願波羅蜜(Praṇidhāna-pāramitā)。求菩提願と利樂他願との二種がある。方便善巧波羅蜜(Upāyapāramitā)。迴向方便善巧と拔濟方便善巧との二種がある。力波羅蜜(Balapāramitā)。修習力と思擇力との二がある。

【一八】 三乘。人を乘せて各其の果地に到らしむる教法を乘と名ける。一乘乃至五乘の別がある。その中に三乘に四種

種々に疑慮を生じ、　慢及び恚癡を見る。
妄計して眞實あり。　眞實の計は有に非らず。
兎角の體は有に非らず。　妄執して眞實ならしむ。
法界は妄執を離れ、　妄執は眞に有に非らず。
色は必ず破壞するが如く、　微塵も猶ほ知るべし。
法界は破壞に非らず。　三時得る能はず。
生有りて還た滅有り。　榮辱も亦皆隨ふ。
法界は生滅するに非らず。　云何ぞ所知と言はん。
[一四] 兎角は本と有に非らず。　三世猶ほ思ふ可し。
眞空は兎角にあらず。　思慮して知る能はず。
眞空は善逝と稱す。　色相悉く皆な亡ぶ。
應・化は緣に隨つて有り。　修因は執非を離る。
圓通は日月の如く、　水は影を現じて皆同じ。
色聲雙つながら泯絶し、　差別云何ぞ有らん。
三世尋思すべし。　生緣は時に決定す。
若し己身の法を悟らば、　己身云何ぞ有らん。
水の熱際に居るが如く、　熱に處して非を覺悟す。
寒際の理亦然り。　圓通も皆な是の如し。
心恒に煩惱に覆はれて　迷惑して了する能はず。
若し煩惱の纒を離るれば、　覺悟して有に非らず。

言ひ、相を離るる故に空と言ふ。是れ無一物の偏眞單空である。
　妙有に對する眞空は小乘の遍執する如き但空でないのを言ふ。
【九】朗然。ほがらかなる貌。明かなる貌。
【一〇】叵。かたし、すべからず。つひに。
【一一】根塵境。根、五根又は六根を言ふ。感覺器官のこと。塵、一切世間の事法眞性を染汚するものを言ふ。四塵、五塵、六塵なぞ。境、感覺對象を言ふ。
【一二】孕。胎内に兒を懷く。身重になる。はらむ、はらみ。
【一三】二障。煩惱障、智障を言ひ、新譯に煩惱障、所知障と云ふ。貪瞋癡等の諸惑に各二用あり。一は業を發し、生を潤して有情を縛し、三界五趣の生死の中に在らしむ。これに由て涅槃寂靜の理を障る用を煩惱障と名け、煩惱能く涅槃を障る故に障と名く。即ち煩惱即障の持業釋である。此の煩惱障は我執より生ずるのである。二は一切貪瞋癡等の諸惑は愚癡迷闇にして諸法の事相及び實性(眞性)を了知せず、即ち事相實性を了知すべき菩提の妙智を障る用がある。この妙智を障る愚癡迷闇

讃法界頌

法界に垢染なく、　[六]龍夜雨の塵の如し。
況んや[七]羅睺の面に似て、　光明恒に燦然たるをや。
譬へば火の布を浣ふが如し。　火に處つて能く染を離る。
垢去つて布猶ほ存す。　光明轉た瑩淨にして
貪愛は心を染しめ、　虚妄にして輪迴あり。
亦火の布を浣ふが如し。　[八]眞空は妄にして有に非らず。
三毒は生死の本にて　智慧の火能く燒く。
法界の體常有にして、　[九]朗然として恒に照耀す。
煩惱染を垢と稱す。　世尊の恒に宣ぶる所なり。
垢滅して眞如顯はる。　池中の泉を汲むが如し。
法界の體は垢なく、　根隨つて能く覆藏す。
若し煩惱を除き盡せば　瑩淨[一〇]叵に量り難し。
法界は本無我なり。　二形及び女男
體に虚妄の執なく、　何處にか更に思惟せん。
法界は憎愛を離れ、　[一一]根塵境本無し。
虚妄の執を因となす。　差別、此より生ず。
眞空は苦惱に非ず。　貪愛は苦惱の因なり。
耽染は妄想に由る。　三界は乃ち輪迴す。
懷[一二]孕して腹にあり。　嬰子は未だ見ると言はず。
[一三]二障、眞如を覆ひ、　法界證る能はず。

不遠山は波羅奈城を去る遠からざる山であると言ふ。
【五】瑩淨。瑩はあきらかなること。
【六】如龍夜雨塵。
【七】羅睺(Rahu)。ラーフは蝕の原因であつて、蝕自身を示すにも用ひられる。彼は緯星の一、流星の王南西の守護者と考へられる。神話的にはラーフは日と月を捉へ、呑み込み、光を暗くし、蝕を起す神格と考へられる。彼はヴイプラチテイ Vipracitti とシンヒカー Siṁhikā の子で、サインヒケーヤ Saiṁhikeya とも呼ばれる。四本の腕を持ち、身體の下部は尾になつてゐる。彼は大な不幸を齎らすもので、神々が太洋を攪拌して甘露(Amṛta)を作つた時、變裝してその中に入り、飲んで仕舞つた。日と月とが之を見破つて、ヴイシュヌ Viṣṇu に告げ、ヴイシ、ユヌは彼の頭と二本の腕を切り取つた。彼は不死であつたので、身體は星界にあり、上體は龍の頭で代表され、登る交點であつて、下の部分は龍の尾で代表され、ケーツ(Ketu)降る交點である。ラーフは日と月とに復讐して、時々日月を呑み、蝕を起す。
【八】眞空。小乘の涅槃を言ふ。僞に非らざるが故に眞と

初・中及び最後　二障は擾はす能はず。
淨き[四]瑠璃の珠の如し。　恒時に光照曜す。
光明の物に障られ、　障られて明は見ゆるに非らず。
法界は煩惱に覆はれ、　眞如の理、顯れ難し。
圓寂として體は光潔なり。　輪廻は能く染めず。
勤求して法界に趣き、　輪廻は能く拚ぼすに非らず。
米糠の纏ひ裹ふ如し。　穀體に米無きにあらず。
煩惱は眞如を覆ふ。　眞如に煩惱あり。
穀、其の糠を去つて、　米體、自然に見はるゝ如く、
若し煩惱の糠を離るれば、　法界の理方さに顯はる。
妄執は世間に有り。　芭蕉に終に實なし。
法界は世間に非らず。　亦た虛妄の見にもあらず。
人の甘露を飮むが如し。　熱惱悉く皆除く。
若し法界性を證らば、　煩惱の熱皆棄てらる。
煩惱の焰を滅除して　法界の甘露現はる。
一切の有情の中　高下皆平等なり。
禰實果生ぜず、　種を執るに果有るに非ず。
智慧出生の時　有爲は法界に非らず。
法界本處なく、　究竟して方さに證すべし。
淸淨にして恒に光潔に、　日月皆な[五]瑩淨なり。

【二】凝然。さだまる形。

【三】酥・醍醐。乳味・酪味と共に五味を爲す。乳味とは初めて牛より出づるもの。二酪味、生乳より取つたもの。三酥味に生酥味と熟酥味がある。三の生酥味は更に酪より製したもの。四の熟酥味は更に生酥を精製したもの。五の醍醐味は更に熟酥を煎熟したものである。佛を牛に譬へ、佛が初めて華嚴經を說くのは牛の乳に於けるが如くである。此の時二乘の機は未だ熟せず、至つて淡泊なること復た生乳の如くである。酪味を以て佛が華嚴の後に阿含經を說くとき、阿含經を聞く小乘の機に譬へる。生酥味を以て阿含の後に方等經を說くと、小機熟して大乘通敎の機となるに喩へる。熟酥味を以て方等經の後に般若經を說くとき、通敎の機熟して大乘別敎の機とあるのに譬へる。醍醐味を以て般若經の後に法華涅槃の二經を說くとき、別敎の機熟して大乘圓敎の機となるのに譬へる。

【四】瑠璃(Vaidūrya)。新譯は吠瑠璃、吠瑠璃耶、毘頭梨等。七寶の一。遠山寶、不遠山寶なぞと譯す。靑色の寶名である。產出の山に就いた名である。遠山は須彌山の異名。

讃(さん)法(ほっ)界(かい)頌(じゅ)

聖　龍　樹　菩　薩　造

西天北印度烏塡曩國帝釋宮寺三藏傳法大師賜紫沙門臣施護詔を奉じて譯す。

十方佛　[1]法身及び報化身に歸命したてまつる。
願くは諸の衆生と共に　速かに法界性を成ぜん。
三惡道に輪廻し、　法界の理　[2]凝然たり。
本來は常に淸淨なれば　諸相は遷する能はず。
寂靜なること虛空の如く、　處々に悉く周遍す。
體皆な彼此を離れ、　深きに非らず、復た淺きに非ず。
乳、未だ轉變せざるの時、　[3]酥・醍醐、見はれず。
煩惱未だ伏除されざれば、　法界は由つて顯はるゝなし。
酥は乳中に處るが如し。　酥は本と妙光瑩なり。
法界は煩惱に覆はれ、　圓滿にして體淸淨なり。
燈の障礙せらるゝが如く、　能く餘物を照すに非らず。
無明は恒に心を覆ひ、　法界は明了なるに非らず。
燈の障礙を離るゝが如く、　處々に物能く照らす。
煩惱破壞する時　眞如は恒に顯現す。

【一】法身、報化。法身、報身、化身、卽ち佛の三身を言ふ。法身は中道の理體である。報身は因行の功德に報ふて顯れた佛の實知である。これを二分して自ら內證の法樂を受くる身を自受用報身と名け、初地以上の菩薩に對して應現する報身を他受用報身と名く。此は次の應中の勝應身と同體異名である。三の應身、又は應化身と云ふ。理智不二の妙體より衆生化度の爲に種種に應現する身である。之を亦二分して初地の菩薩に對して應現するのを勝應身と名ける。卽ち上の他受用報身である。地前の凡夫及び二乘に應現するのを劣應身と名ける。釋迦如來の丈六の身が是である。此の三身中法身如來を毘盧舍耶と名け、遍一切處と譯す。報身如來を盧舍那と名け、淨滿と譯し、又光明遍照と譯す。應身如來を釋迦文と名け、度沃燋と譯す。此の三名は皆く佛身に就いて分別したものであるから、應化身を分別すれば、此の中に固より諸趣隨類の身を攝盡するのである。此の三身を四土に配すれば、法身は寂光土に處し、勝應身は方便土に處し、報身は實報土に處し、劣應身は同居土に處する。

本頌は名の如く法界を讃じたものであるが、先づ法界が煩惱に覆はれ、心が無明に覆はれ、輪廻があり、眞如が現はれぬと述べる。三毒二障の害を擧げ、眞空を說明し、眼耳鼻舌身・色聲香味觸、皆空にして、法界の理も同樣にして、根塵は妄執を起し、清淨の體源が無い。法界の理は清淨にして、涅槃は清淨の理にして、菩提を求むべしと言つてゐる。三檀(Dāna)・尸羅(Śīla)・忍(Kṣānti)・精進(Prayatna)・靜慮(Samādhi) 願・方便・力等の波羅蜜を擧げ、三乘は菩提に趣くと述べてゐる。眞俗の二智・世俗の二乘行を擧げ、中觀派の特色を示し、種々の莊嚴、十力・無畏・三身・四智・六通を擧げて、佛陀と法界を讃嘆してゐる。又二空・殊勝智・二嚴・五乘等の語を出して、大乘的立場を示してゐる。本頌は大乘思想に立ち、中觀派の眞空・眞俗二諦の思想に立つ邊、龍樹少くとも、その系統の論師の作と考へて、思想的には差支へない。

昭和七年六月十五日

譯者　平等通昭　識

那の求法僧義淨は彼の時代で愛讀暗誦されたもの丶一であると、龍樹のこの書を稱揚してゐる。

鳩摩羅什(Kumārajīva 西紀四百五年)の漢譯龍樹傳に依ると、龍樹は南方印度の婆羅門族に生れ、四吠陀並に一切の科學を研究した。若き頃、彼は魔術を以て身を隱し、三人の友達と共に王宮に忍び入つて、宮女を犯したことがある。彼等は發見されて斬殺されたが、龍樹獨り身を以て免れた。彼は以前より比丘を志願してゐたので、その願を遂げ、九十日にして三藏を研究し、その意義を會得した。之を以て滿足せず、更に他の經典を得んと志し、遂に雪山に於て高齡の比丘から大乘經典を得た。龍王の助を得て、彼は又その經の註釋をも得た。かくて熱心に佛教を南天に流布し、傳によれば三百年以上法を說いたと。

この傳說から考へれば、龍樹は馬鳴の如く、もと婆羅門の出身であることは事實らしい。その著作は婆羅門科學に造詣の深かつたことを證して居る。大乘の創始者と言へないにしても、彼は大乘佛教の主分派の開祖として非常に尊敬されてゐたに相違ない。之が爲に數世紀後の著書がその特別の權威を確保せんがために龍樹に歸せられるに至つたものが多い。本頌も或ひはこの類に屬するかも知れない。

【一】Mūlamadhyamakakārikās (Mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā, Commentaire de Candrakīrti, publié par L. de La Vallé Poussin, St. Petersburg (Bibliotheca Buddhica IV), 1903ff.

【二】笠原研壽 & Max Müller, H. Wenzel: Dharmasaṃgraha (Anecdota Oxoniensia, Aryan Series, Vol. 1, Part 5), Oxford, 1885.

二、譯者施護

施護(Dānapāla ?)は北印度烏塡曩國(Udyāna)の沙門で、支那に宋の西紀九八〇年に到著し、數年間譯經に從つた。九八二年に顯教大師の尊號を天子より受けた。彼の譯經は百十一經あつて、譯經家としては活動した方であるが、小經が多い。その內本頌の外佛說五十頌聖般若波羅蜜經・佛說諸佛經等を含んでゐるが、教義上重要著名なものは少い。

三、文體

文體は五字一句より成る八十七頌より成つて、勿論韻文である。文勢明快にして簡潔、推理も巧みに、譬喩の妙もあり、原文には梵詩の韻律・措辭があつたことと思はれるから、論頌としては名文であると思はれる。簡潔明快にて、要を盡してゐる點、この種の頌としては上々である。

四、讃法界頌の思想

讃法界頌解題

讃法界頌（Dharmadhātu-stotra）は龍樹菩薩の作で、宋の施護が譯したものである。偈頌の形式になつてゐて、法界を讃じ、佛教の要諦に觸れ、八十七頌より成り、偈頌としては比較的長いものである。

一、著者龍樹

讃法界頌は龍樹の著とされてゐる。然し、彼の著作なりと斷定する文獻的根據がないので、――思想的には例へば空思想二諦思想の如き、龍樹の特色を示すものはあるが、――その眞僞を斷定し難い。今は傳承に從つて彼の著として論を進める。

龍樹(Nāgārjuna)は既に論集部六卷に稍ゝ詳しく紹介したので、此處では略述するに留めるが、紀元三世紀頃の佛教屈指の論師で、傳說上では傳燈十三世に當つてゐる。大乘佛教の先驅的組織者であつて、中觀派系統の教理を創設した。中觀本頌（Mādhyamakakārikā, Mādhyamikasūtra）の著者で、婆羅門の科學的文書によくある略頌（Kārikā）風の系統的哲學書であつて、空(Śūnyatā)思想を高潮し、「中道」を宣揚してゐる。この中に彼は上座部の主張した無我論から出發した有無を否定し、中道を樹立してゐる。空思想の反對者が若し一切が空にして生無く滅が無ければ、四聖諦もなく、この眞諦の認識に立つた生活もなく、善惡業の果もなく、佛法もなく、僧團もなく、終には佛陀も無くならねばならぬ、然らば佛陀の凡ての法は無に歸すると言ふに對し、龍樹は佛陀の教は二諦によつて支へられる。一は深理の埋沒した俗諦であつて、一は最高義の眞諦である。この二諦を識別しない者は佛教の深理を理解しないものである。俗諦に立つてのみ眞諦は會得され、眞諦の助を以て我々は涅槃に入るのである、と。十萬首盧伽の般若波羅蜜多經も彼の作に歸せられるが、之は疑しい。般若經の註釋である大智度論百卷は梵本は傳はらないが、略ゝ彼の著である。漢譯中觀論四卷、十二門論一卷、十住毘婆沙論十四卷も彼の著と目される、この外、龍樹に歸せられる著作は非常に多い。然し、その眞僞は多く決し兼ねる。「法集名數經」(Dharmasamgraha)は彼の著と認められてゐる。佛教術語の簡單な目錄で、その梵文原書も現存してゐる。「友書」Suhṛllekha と云ふ龍樹が佛教の根本義に就て一王に贈つた百二十三頌から成る書簡は、西藏譯が現存し、支

麗しい崇高な詩句である。優陀那は詩と物語とより成る「靈的な格言」の集錄で、佛陀が在世に種々の體驗に刺激されて發せられた感激的な詩的感興語である。長老歌・長老尼歌は長老及び長老尼が自らの生活に於ける尊い體驗・思想・感情を詩的に吐露したもので、その力と美に於て印度抒情詩史上優に高い地位を占め得る詩集である、之等の偈文は佛傳文學殊に大般涅槃經 Mahāparinibbāna-suttanta 大事譬喩譚 Mahāvastu-avadāna 佛本行集經には甚だ多く出で、馬鳴作、佛所行讃（「佛陀の生涯」Buddhacarita）は全く典麗な頌文から成つてゐる。

大藏經論集部に出で、本書に譯出集錄したもの丶中にも、この佛教偈文々學に屬するものが可成あり、今回譯者が譯註するものは殆んど全部之である。即ち讃法界頌・廣大發願頌・佛三身讃・一百五十讃佛頌・佛吉祥德讃・佛說八大靈塔名號經・賢聖集一百頌・事師法五十頌・密跡力士大權神王經偈頌・勝軍化世百喩伽他經等であつて、散文は請賓頭盧法・賓頭盧突羅闍爲優陀延王說法經・迦葉仙人說醫女人經に止る。之等の諸偈の內、密跡力士大權神王經偈頌は散文を混へてゐるが、他は凡て偈頌よりなり、多く原本を失つてゐるが、原本は勿論韻律を持つてゐたのであらう。特に摩咥里制吒（Mātṛceta）の一百五十讃佛頌は代表的な美しい詩文であつて、著名なものである。而して今回收めるものは、多く佛陀・佛法の讃仰であつて、純粹の自己の思想・信仰の告白ではなく、多く、短少のものであつて、その詳しき解說は各經の下に爲すこと丶する。

昭和七年六月十日

平等通昭 誌

總序佛教偈文文學

佛教聖典の中には處々に多くの偈(Gāthā)が散在してゐる。之等の偈は散文聖典の中に單獨に挿入されて出ることもあり、獨立して一の典籍をなしてゐることもある。この思想內容は多く佛教の要諦で、佛陀又は佛弟子の簡勁寸鐵の如き思想・信仰の感興的告白、佛教の生活理想・現世の一切の繋縛から解脫した阿羅漢の法悅の思藻・涅槃の常住の境地の記述で、多く堅縮した警句金言である。その表現は佛教經典としては珍しく極めて文學的で、韻文であつて、シユローカ(Śloka)、トリシユトブ(Triṣṭubh)ヂヤガテイー(Jagatī)等の韻律から成り、告白者又は作者の心內の切實なる思想感情は讀者の胸を切々として打つものがある。之等の美しい簡潔な思想豐かな偈文は、一般に冗長散漫で簡枯な佛教文獻の中にあつては、讀者にとつて、長い單調な沙漠の旅の後の綠したたる綠地(オアシス)、荒涼たる曠野の中の百花取り取りに爛漫と咲く花園、砂濱の砂礫の中に光る珠玉である。私はかゝる佛教文學中の美しい佳詩句を佛教偈文文學と名ける。之等の偈文は散文經典中に單獨に挿入されてゐる場合には、その前の部分の散文は偈文の說明解說になつてゐる事と、前の散文を後の偈文が簡潔に纒めてゐる事とがある。妙法蓮華經(Saddharmapuṇḍarīka-sūtra)の中にはこの散文の間に偈文が挿入された顯著な例を見る。これは經藏のみでなく、律論藏の中に於ても見出すことが出來る。獨立して一の典籍・經典として編纂されたものとしては、廣義の意味で、有名な法句經(Dhammapada)・嗢陀那(感興語、Udāna)・長老歌(Theragāthā)・長老尼歌(Therīgāthā)・經集(Suttanipāta)等を擧げることが出來よう。法句經は佛教の倫理的教義に關するもの丶詩的形式による語錄であつて、又多數の偈が集つて一つの小詩を成してゐることもある。その內の成道偈(法句一五三以下)の如きは非常に

所を離るゝなり。應に義に依るべし。愛馳して雜飾の句味を逐ふこと莫れ。應當に智に依りて識に依ること莫るべし。了義の經に依りて不了義の世俗の言說に著すること莫れ。應當に法に依るべし。人見を取ること莫れ。應に如實の法に隨順して行じ、無住處に入りて、善く無明・行・識・名色・六入・觸・受・愛・取・有・生・老死の憂悲苦惱の困極を觀じ、皆悉く寂滅すべし。是くの如く緣生を觀じ已りて引出すること無盡なり。衆生を愍念するを以ての故に、諸見に著せず、放逸を作さず、若し常に此くの如くなるを、乃ち無上の法の供養と名づく。

三九 是くの如き此の資糧は　恒沙等の大劫に
出家及び在家は　當に正覺を滿すことを得べし

前に說く所の如き資糧は、恒伽沙と等量なる大劫の中に於て、出家衆及び在家衆の菩薩乘は、多時に滿願して正覺を成ずることを得ん。

四〇 彼の資糧の頌に繫りて　菩提の爲に思惟せり
資糧の義は闕くること無く　能く彼の頌に在るが如し
我れ今彼の頌を擇び　義に於て或は增減し
善く頌の義等を解せり　賢智は當に之れを忍ぶべし
彼の資糧の頌を釋したる　我が作す所の福善は
流轉の衆生の　當に正遍覺を得べき爲めなり

聖者龍樹の作る所の菩提資糧論竟る。我れ比丘自在の解釋竟る。

菩提資糧論（終）

【三九】 總結。

【四〇】 自在比丘の回向偈。

香・鬘・末香・燈輪を以て供養し、或は諸の盖・幢・旛を以て供養し、或は諸の音樂等を以て供養し、或は諸の藥・美の飲食等を以て布施し供養す。若し彼の諸の供養に勝過するものを以て佛を供養せんと欲せば、復た何者か是れなるや。答へて言く謂はゆる法の供養なり。彼の法の供養に復た何なる相有りや。

若し菩薩藏を持し　及び陀羅尼を得て
深法の源底に入る　是れを法の供養と爲す

中に於て若し菩薩藏と相應する如來所説の經等の甚深の明相は、諸の世間に背きて其の底を得難く、微細にして無著なる了義を見ること難し。總持經王の印を以て之れを印し、不退轉の因は六度より生じ、善く所攝を攝して助菩提法に順入し、正覺性に合し、諸の大悲に入りて大慈を説き、衆魔の見を離れて緣生を説き、衆生無く命無く長養無く人無きに入りて、空・無相・無願無作と相應し、覺場に坐して法輪を轉じ、天・龍・夜叉・乾闥婆の讃歎する所と爲す。在家の泥を度りて諸の聖人を攝して諸の菩薩行を演説す。法・義・辭・樂說の辯に入り、無常・苦・無我等の音聲の雷を震ひ、諸の外論見得の執を怖れ、諸佛の歎ずる所の流轉を對治して涅槃の樂を示す。是くの如き等の經を若しは說き若しは持し、觀察し攝取す、是れを「法の供養」と名づく。又法の供養とは退墮せずして順行する總持を得るが故に、空・無相・無願無作と相應する深法の中に於て、其の底に入至して無動無疑なり。是れを最勝義の中の法の供養と名づく。

[三八]應當に義に依るべし　唯雜味を愛すること莫るべし
深法道の中に於て　善く入りて放逸なること莫れ

又「法の供養」とは、若し法の中に於て法を思ひ法を行じ、緣生に隨順して諸の邊取の見を離れ、無生忍を出ずること無くして無我に入るを得。因緣の中に於て違ひ無く鬪ひ無く諍ひ無くして我々

【三八】四依。

き、若しは自ら之れを見るに、彼れ皆殊勝の功德を攝衆せり。「皆彼等をして自らの佛土の中に入り到らしめん」と、應當に是の如く願ふべし。所願に隨ひ即ち隨ひて成就せんとし、亦應に是の如く精勤に修行すべし。

[三五] 恒に諸法の中に於て　取らずして捨を行ず
此れ諸の衆生の爲に　受擔して荷負せんと欲す

「取るを以ての故に苦、取らざるが故に樂なり」と、是の念を作し已りて、恒に諸法に於て取らずして捨つ。取らずして捨つと雖、若し此れ先きの時に菩提に趣かんとする爲めの故に、願を作して衆生を受擔し、「未だ度せざる者は我れ當に度すべし、未だ脱せざる者は我れ當に脱すべし、未だ寂滅せざる者は我れ當に寂滅すべし」と。此れ應に荷負して諸の衆生の爲にすべきが故なり。

[三六] 諸法を正觀するに　我無く我所無し
亦大悲と　及以び大慈を捨つること勿れ

諸法は無所有なりと説くは、夢の如く幻の如くなるが故に諸法は無我なり、其の我所無しとは無相を觀ずるが故なり、是くの如く最勝義の法を以て、此の相を觀ずる時、然も衆生に於て大悲及以び大慈を捨てず。是の如く應に倍す復た稱量し、歎じて言ふべし。「奇なる哉。彼の諸の衆生は癡闇に覆はれて我・々所に著し、此の最勝義の道法の中に於て而も覺知せず、我れ當に何れの時にか彼の衆生をして此の最勝義の道法の中に於て覺知することを得しむべき」と。是れを衆生の中に於て大悲及以び大慈を捨てずと爲す。

[三七] 諸の供養に勝過するものを　以て佛世尊に供ふ
彼れの作すは何者か是れたる　謂はゆる法の供養なり

若しは諸の供具を以て、諸の聲聞・獨覺・菩薩及び佛世尊を供養する有り。謂はゆる或は諸の華・

【三五】衆生受擔行。
【三六】正觀と大慈悲。
【三七】法供養を明かす。以下三偈幷に釋は『維摩經』卷下の法供養品の一部と同意。

大いに福報を具足せる天の中に住すと雖、其の心喜と樂とを作さず、餓鬼の貧窮破散の爲めに逼惱するは、此れ最も活き難しと雖、下心を生ずべからず、亦復た憂ふべからず。何に況んや人道の貧窮破散をや。

三一 若し已に學べる者有らば　應に極めて之れを尊重すべし
　未だ學ばざるは學に入らしめ　輕蔑を生ずべからず

若し已に學べる衆生有らば、彼れに於て應に至極の尊重を作すべし。若し未だ學ばざる者は應に彼等をして學に入らしむべし、亦之れを輕蔑すべからず。

三二 戒の具する者は恭敬し　破戒を戒に入らしめ
　智を具する者に親近し　愚者を智に住せしむ

戒を具足する人を應に問訊し、合掌向禮等もて之れを恭敬し、亦應に彼れの爲に持戒の福を説くべし。若し破戒者は應に戒に入らしむべく、亦應に彼れの爲に破戒の罪を説くべし。智を具足する者には應に親近すべし、亦應に彼れの爲に智慧の德を顯はすべし。愚者は應に智に住せしむべく、亦應に彼れの爲に愚癡の過を演ぶべし。

三三 流轉の苦は多種なり　生・老・死・惡趣
　此等の畏れを怖れず　當に魔の惡智を降すべし

菩薩は流轉の中に於て、流轉は多種なり、生・老・死・憂・悲・苦・惱等、地獄・畜生・餓鬼・阿修羅の惡趣等を怖畏すべからず、唯當に惡魔の惡智を降伏すべし。

三四 所有る諸の佛土は　諸の功德を撮聚す
　皆彼れを得んが爲の故に　發願し及び精進す

十方無量の諸佛の國土の、若しは佛土の具足、若しは佛土の莊嚴を、若しは諸佛菩薩に從ひて聞

【三一】已學未學の衆生を尊重す。

【三二】持戒・破戒・智・愚の攝益。

【三三】流轉を怖れず、魔を降す。

【三四】佛土功德を得る願行。

り。傘蓋・皮鞋・象・馬・車輿乘等を布施するは、菩薩の無上神通乘を得ること離からざるが爲めの故なり。

二七 専ら應に法を喜樂すべし　樂しみて信佛の得を知り
喜樂して僧を給侍し　亦樂しみて正法を聞く

中に於て菩薩は、常に應に是の如く法を喜樂すべし。唯信樂して色身を見ること莫れ。五欲の福樂を喜ぶこと莫れ。當に佛を信じて得る所の利を知るべし。當に僧中に於て諸の樂具を以て常に憙びて給侍し、唯憙び詣りて問訊する而已なること莫れ。常に憙びて法を聞いて厭足有ること無し。唯憙樂して暫く其の語を聞くこと莫れ。

二八 前生の中に生ぜず　現在の中に住せず
後際の中に到らず　是の如く諸法を觀ず

「因緣和合力の故に、及び從來する所無きが故に、前世の中に生ぜず。念々に破滅するが故に、及び住せざるが故に、現在の中に住せず。滅して餘すこと無きが故に、及び至り去る所無きが故に、後際の中に到らず」と、應に是の如く諸法を觀察すべし。

二九 好事を衆生に與へ　彼の好報を求めず
當に爲に獨り苦を忍び　自ら偏へに樂を受けざるべし

菩薩は衆生に於て、當に好事を以て之を利樂し、自ら彼等衆生を利樂する好事を希望せず。及び諸の衆生に無量なる苦相有らば、我れ獨り其れが爲に忍受す。我れに樂具有らば、諸の衆生に與へて受用せしむるを樂みと爲す。

三〇 天の福報を足ふと雖　心擧がらず喜ばず
貧なること餓鬼の如くなりと雖　亦下がらず憂へず

【二七】三寶聞信の喜樂。

【二八】三世不住の觀。

【二九】他に好事を與へ自ら苦を受く。

【三〇】福報に擧らず貧窮に下らず。

二四 分に非ざる貪を作すこと勿れ　横貪は意に稱はず
離るる者は皆合せしむ　親と非親とを問ふこと無し

若し利養・名聞・安樂・稱譽・福德を具足せる衆生を見れば、彼の具足せる福の中に於て、分に非ざる貪心を作すこと莫れ。分に非ざる貪心を作すを以て卽ち意に稱はず。是の故に作すべからざる所なり。又各々共に諍ひて離壞する衆生の中に於て、親と非親とを問ふこと無く、皆和合し同心に相愛せしむ。

二五 空に於て而も空を得るに　智者は依行すること莫し
若し當に空を得べければ　彼の惡は身見に過ぐ

空に依りて大無智聚を拔除するが故に、智者は空を得るに依りて行ずること莫し。若し空を得るに依りて行ずるは、則ち有身見の人に於てよりも治し難きこと之れに過ぎ、惡も亦之れに過ぐ。諸見を以て行ずるは空に由りて出離す。若し空見に着せば彼れは治すべからず、更に出離せしむるもの無きを以ての故なり。

二六 掃と塗と莊嚴と　及び多種の鼓樂と
香・鬘等の供具を　支提に供養す

如來の支提及び形像の所に於て、地を掃き、地に塗り、香鬘・燒香・末香・華蓋・幢旛等の莊嚴供養の具をもつて當に供養を作すべし。端正にして戒香自在なるを得るが爲の故なり。貝笛・箜篌・腰鼓・大鼓・雷鼓・拍手等の種々なる鼓樂をもつて供養するは、天耳を得るが爲の故なり。

種々の燈輪を作りて　支提舍を供養し
蓋及び革屐と　騎乘・車輿等を施す

支提舍の中にて、應に種々の香油・酥燈・鬘等を以て善く供養を作すべし、佛眼を得るが爲の故な

【二四】非分の貪を離れ衆を和合す。
【二五】空に於て空を得ざる行。
【二六】支提供養。

住するも、應に是の如く作すべし。又禁戒清淨の心意に安住し、精勤鮮潔にして當に銀主・游主等の陀羅尼を生じ及び聞くべし。又法を聽く者の所に於て、微少なる因緣を以てするも而も障礙を作すこと勿れ、法災より生ずる業を離れんが爲の故なり。

〔三〕惱の中に能く調伏し　小事は捨てゝ餘すこと無し
八種の懈怠の事は　皆亦應に除斷すべし

「惱の中に能く調伏す」とは、中に於て九種の惱事有り。謂はゆる我れに於て利益無きことを作すに、已に作せると、今作すと、當に作さんとすると。是れを三種と爲す。我が親愛なるものに於て利益無きことを作すに、已に作せると、今作すと、當に作さんとするとを、復た三種と爲す。我が憎嫌なるものに於て與に利益を作すに、已に作せると、今作すと、當に作さんとするとを、復た三種と爲す。此等は皆惱を作す事なり。此の九種の惱事の中に於て、當に自ら調伏すべし。「小事は捨てて餘すこと無し」とは、中に於て二十種の小事有り、謂はゆる不信(一)、無慚(二)、諂幻(三)、掉(四)、亂(五)、放逸(六)、害(七)、無愧(八)、懈怠(九)、憂(十)、昏(十一、舊には睡)、睡(十二、舊には眠)、恨(十三)、覆(十四)、嫉(十五)、慳(十六)、高(十七)、忿(十八)、悔(十九)、悶(二十)なり。此れ等二十種の小事は、皆捨てて餘すこと無し。「八種の懈怠事は皆亦應に除斷すべし」とは、中に於て八種の懈怠事有り、謂はゆる我れ務めを作さんと欲し、即ち便安臥して精進を發さず(一)、我れ務めを作し已る(二)、我れ路を行かんと欲す(三)、我れ路を行き已る(四)、我が身疲乏して修業する能はず(五)、我が身沈重にして修業する能はず(六)、我れ已に病を生ず(七)、我れ病み起つことを得て久しからずとて即便ち安臥して精進を發さず(八)、此等に由るが故に、應に得べきを得ず、應に到るべきに到らず、應に證すべきを證せざるなり。此等の八種の懈怠事の中に、除斷せんが爲の故に應に精進を發すべし。

【三】九惱調伏、二十小事棄捨、八懈怠事斷除行。

の雜辯才に習近するが故なり「世の財物を攝る」とは法を攝らざるが故なり。「獨覺乘」とは少義利・少作事の故なり。「聲聞乘」とは、自利行の故なり。

　此の四の惡知識は　　菩薩は應當に知るべし

二〇 復た應に求むべきもの有り　　謂はゆる四大藏たり

前に說く所の如き四種の知識は是れ惡知識なり。知り已りて應に離るべし。復た應に求めて得べきもの有り。謂はゆる四大藏なり。

　佛出づれば諸度を聞き　　及び法師の所に於て

　之れを見るに心無礙なり　　空閑の處に樂住す

此の四種の菩薩大藏は、應當に之れを得べきなり。何等をか四と爲す、謂はゆる世に出でたる諸佛に奉事して六波羅蜜を聽聞し、無礙心を以て法師を見、不放逸を以て空閑の處に樂住す。此れは是れ四種の菩薩の大藏なり、應當に之れを得べし。

二一 地・水・火・風・空は　　悉く共れと相似たり

　一切處に平等に　　諸の衆生を利益す

地・水・火・風・虛空と等しき二の因緣の相似あり。菩薩は應當に攝受すべし。謂はゆる平等の故に、利益の故なり。地等の大及び虛空の五種の如きは、有心・無心の中の一切處に於て平等にして異相有ること無く、諸の衆生の等しく常に資用する所にして、而も變異無く報恩を求めず。我も亦是の如く、乃至覺場に究竟して、諸の衆生の資用する所と爲り、而も變異無く報恩を求めざらん。

二二 當に善く義を思惟し　　勤めて陀羅尼を生ずべし

　法を聽く者に於て　　爲めに障礙を作すこと勿れ

「義」とは、佛の說く所の義なり。彼れに於て當に善く思惟すべし。若しは共に談じ、若しは獨り

【一〇】四大藏求得行。

【二一】平等利益行。

【二二】善義思惟行。

せしむ、此れ等皆差別無し。是れを四種と爲す。

[一七] 法の爲めにして利の爲めにせず　　徳の爲めにして名の爲めにせず
衆生の苦を脱せんと欲し　　自身の樂しみを欲せず

此の四種を眞實の菩薩は應當に覺知すべし。何等をか四と爲す、謂はゆる但だ法の爲めにして財利の爲めにせず。但だ功德の爲めにして名稱の爲めにせず。但だ衆生の苦を脱せんと欲して自身の安樂を欲せざるなり。

密意もて業果を求め　　所作の福事生ずれば
亦衆を成熟せんが爲めにし　　自らの事を捨離す

若し業果に於て密意に欲求し、三福の事を作して、此の福を生ずる時、唯菩提の爲めに衆生を利樂し、亦唯菩提の爲めに衆を成熟し、衆を利するが爲めの故に、自らの事を捨離す。是れは此れ四種の眞實菩薩なり。

[一八] 善知識に親近すとは　　謂はゆる法師と佛と
出家を勸勵する者と　　及以び乞求の輩なり

此の四種の菩薩善知識は應當に親近すべし。何等をか四と爲す。謂はゆる法師は是れ菩薩の善知識なり、聞慧を助持するが故に。佛世尊は是れ菩薩の善知識なり、諸の佛法を助持するが故に。出家を勸むる者は是れ菩薩の善知識なり、諸の善根を助持するが故に。乞求者は是れ菩薩の善知識なり、菩提心を助持するが故に。此の四種の菩薩の善知識は應當に親近すべし。

[一九] 世論に依止する者と　　世の財を專求する者と
獨覺乘と　　及以び聲聞乘を信解するとなり

此の四種の菩薩の惡知識は應當に之れを知るべし。何等をか四と爲す、謂はゆる世論とは、種々

【一七】四種覺知行。
【一八】四種善知識親近行。
【一九】四種惡知識遠離行。

此の中、菩薩に四種の菩薩錯失有り、應當に捨離すべし。謂はゆる聲聞・獨覺乘の諸の衆生の中に於て、爲めに最深の法を說くは、是れ菩薩の錯ちなり。

深き大乘を信ずる　衆生の爲に
而も聲聞・獨覺乘を演說する　此れも亦是れ其の錯ちなり

深き大乘を信ずる諸の衆生の中に於て、爲めに聲聞・獨覺乘を說くは、是れ菩薩の錯ちなり。

大人來りて法を求むるに　慢緩にして爲めに說かず
而も反りて惡もて攝受す　信なき者を委任す

若し正住の大衆生有り、來りて求むる所有る時は、應に卽ち爲めに善法を說くべし、而も更に慢緩にして破戒の惡法をもつて反りて之れを攝受するは、是れ菩薩の錯ちなり。大乘の中に於て未だ信解有らざるに、未だ四攝事を以て成熟せざるは、而も之れを信任するは、是れ菩薩の錯ちなり。是れを四種と爲す。

[一五]說く所の錯ちを遠捨し　說く所の頭多の德は
彼れに於て當に念知すべし　亦皆應に習近すべし

此の中に說く所の四種の錯失は應に遠く捨離すべし、此れは菩提を去ること遠きを以ての故なり。若し聲聞・獨覺乘の中に說く所の、頭多等及び餘の功德は、但だ彼等の菩提の與に障礙と作らざるものなるを知り、彼々の中に於て亦應に習近すべし。

[一六]等心にして平等に說き　平等に善く安立し
亦正しく相應せしむ　諸の衆生に別なし

此の四種の菩薩道を應當に習近すべし。何等をか四と爲す、謂はゆる諸の衆生の中に平等心を起し、諸の衆生の中に平等に說法し、諸の衆生の中に平等に善く安立し、諸の衆生の中に正しく相應

【一五】頭多行。
【一六】四種平等行。

佛に於ては分別すべからず。世尊は未曾有の法を具足するを以ての故なり。亦佛法に於ては疑惑すべからず、諸の衆生に於て是れ不共の法なるを以ての故なり、及び最も難信なる佛法の中に於て、深心清淨を以ての故に、應當に之れを信ずべし。

[一二]實語に由りて死し　轉輪王
及以び諸の天王を退失すと雖　唯應に實語を作すべし

若し菩薩は實語に由るが故に、若しは物を奪はれ、若しは死し、轉輪王及び諸の天王を退失すと雖、唯應に實語すべし。何に況んや其の餘にして實語せざらんや。

[一三]打罵・恐・殺縛は　終に他を怨責せず
皆是れ我が自らの罪なり　業報の故に來現せり

諸有る他より來る打罵・恐怖・殺縛・幽閉は、皆是れ自らの罪にして應當に此れ有るべきなり。終に他を瞋らず、此れは是れ我が業の前世に已に作せるを、今の時還りて相似なる不愛の果を受くるなり。彼の諸の衆生に都て罪有ること無し。唯是れ我が罪の報の來現せるなり。[一三]應當に此れ有るべきなり。

應に極尊重の愛もて　父母を供養し
亦和尚に給侍し　阿闍梨を恭敬すべし

父母の所に於て、應當に極愛し尊重し供養すべし、應に天の想を作し、父母の意に隨ひて悅樂を得しめ、諂幻の心を離るべし。又應に和上・阿闍梨を恭敬し給侍し、和上・阿闍梨の所說の法の中に隨ひて、內祕有ること無く、皆外化を爲すべし。

[一四]聲聞乘　及以び獨覺乘を信ずるものの爲めに
最深の法を說く　此れは是れ菩薩の錯ちなり

【一二】實語。
【一三】受苦を業報の來現とす。
【一三】父母・和尚・阿闍梨の尊敬。
【一四】菩薩の四種錯失。

多聞にして厭くこと無く、聞き已りて法を持ち、法を持ち已りて法に順じ行法す。尊ぶ所の福田を誑はさず、亦教師をして此の法を歡喜せしむ。是れ菩提心を忘失せざる因なり。

[六] 他家を觀るに　心に敬養を懷くべからず
論難を以ての故に　世典を習誦すること勿れ

應に供養・恭敬の因緣の爲に往いて他家を觀るべからず、菩提心を安立する因緣の爲めなるを除く。亦論難を爲さんと欲するが故に諸の世論等を習誦すべからず、多聞の因緣の爲めなるを除く。

[七] 瞋恚を以ての故に　諸の菩薩を毀呰すること勿れ
未だ受けず、未だ聞かざる法も　亦誹謗を生ずること勿れ

何を以ての故に、善法を續生する因緣を護らんが爲なり。

[八] 憍慢を斷除し　當に四聖種に住すべし
他人を嫌ふこと勿れ　亦自ら高擧すること勿れ

「憍慢を斷除す」とは、諸の衆生の中に於て、當に下心なること狗の我慢を斷除するが如くなるべし。輕儉なる衣・食・臥床・藥具に於て四聖種の中に亦應當に住すべし。彼の聖種に於て足ることを知るが故に他を嫌ふべからず、亦自ら高擧すべからず。

[九] 若し實と不實との犯も　他を發覺することを得ず
他の錯失を求むること勿れ　自らの錯ちは當に覺知すべし

他の梵行を同じくする者罪を犯すに、若しは實なるも、若しは不實なるも、皆應に發覺すべからず。他に錯失有るも求覓すべからず、唯自らの錯ちに於ては卽ち應に覺知すべし。

[一〇] 佛及び諸の佛法を　分別し疑ふべからず
法は最も難信なりと雖　中に於て應に之れを信ずべし

【六】他家の觀見、世論誦習の注意。

【七】菩薩及び法を謗らず、

【八】四聖種。

【九】他犯を發かず。

【一〇】信佛信法。

五衆は殺者の如しと　　應に是の如きの觀を作すべし

長夜に諸の樂具を受用する因縁を以て、此地等の四界を守護し將息し長養すと雖、而も速疾に發動し、恩養を知らず、依怙すべからず、委信すべからざるが故に、應に觀察すること猶ほ毒蛇の如くなるべし。主無きを以ての故に、我・我所を離るるが故に、眼等の諸入には六賊の衆有り、逼惱して畏る可きが故に、應に觀察すること猶ほ空村の如くなるべし、物と共和し、破壞し打罰するを遮障すること能はざるが故に、猶ほ殺者の如しと、五受衆に於て應に日日是の如く觀察すべし。

[四]法及び法師を重んじ　　亦法慳を捨つ
教師は捲めて祕すること勿れ　　聽者は散亂すること勿れ

此に於て四種の法有りて、能く大智を生ず、應に受取すべし、法及び法師の尊に於て應に尊重すべし。亦法慳を捨て、隨所に法を聞き、隨所に習誦し、他の爲に演說す。若し法を樂欲するもの有らば、教師は爲めに手を捲めて祕惜すること勿れ、聽者は散亂すること勿れ、謂はく異欲有ること莫きなり。

慢無く希望無く　　唯悲愍の心と
尊重恭敬の意を以て　　衆の爲に而も說法す

復た四種の法有り、是れ大智の相なり、應當に受取すべし。謂はゆる自らを高くし他を輕んずることを遠離す、憍慢無きが故なり。利養・恭敬・名聞を棄捨す、希望心無きが故なり。無明闇障の衆生の中に於て唯悲愍の故に、尊重恭敬し。其れが爲めに說法す。此の四種の法を以ての故に、菩薩の大智は具足す、まさに受取すべし。

[五]聞くことに於て厭足無く　　聞き已りて皆誦持す
尊き福田を誑はさず　　亦師をして歡喜せしむ

【四】大智を生ずる四種行。以下二十二偈は『十住毘婆沙論』第九、四法品の首部と同意なるも偈の文句は大に異る。

【五】菩提心を忘失せざる因。

巻の第六

問ふ、云何んが修習するや。答ふ。

[一]四神足を根と爲す　欲・進・心・思惟なり
四無量を住持す　謂はく慈・悲・喜・捨なり

此の四無量の中に於て、習近し多作し已りて、心堪能なることを得。心堪能なることを得已れば、便ち初禪那に入る、是の如く第二、是の如く第三、是の如く第四に、彼れは禪那を得已りて身心輕きことを得。彼れは身心の輕を具足するを以ての故に、神通に入る道を出生す。神通に入る道を具足し出生するが故に、便ち神足を生ず、謂はく若しは欲・若しは精進・若しは心・若しは思惟なり。中に於て「欲」とは法に向ひ、「精進」とは法を成就し、「心」とは法に於て觀察し、「思惟」とは法に於て善巧なるなり。彼の菩薩は神通に於て若しは信解し。若しは作用するに、其の心自在にして、欲する所に隨ひて行じ、善く成熟するを以ての故に、自ら根本に住持するが故に、諸處に順行すること風の空に遍ねきが如し。中に於て菩薩は四無量及び四禪那を得已りて、若しは信解し・若しは作用するに天眼を出生す、若しは諸の天・龍・夜叉・乾闥婆[二]等、若しは學人及び聲聞・獨覺の天眼あるも、中に於て獨り增上の力有り。清淨勝過・光明勝過、上首勝過・殊異勝過なり。其の眼無礙にして、世間の色相は麁細にして遠近あるも、其の欲する所に隨ひて彼れを皆能く見る、是の如く天・人・畜生等の聲を聞き、是の如く前世の無邊無際なるを念知し、是の如く他心の貪欲等と倶なると、乃至八萬四千の差別とを知り、是の如く無量の神足を得。神足を得るを以ての故に、諸の應に衆生の調伏すべき所を悉く調伏せしむ。

[三]四界は毒蛇の如く　六入は空村の如く

【一】四神足。

【二】乾闥婆(Gandharva)。樂神。八部衆の一。

【三】四界・六入・五衆觀。

五九

天耳と天眼と　　　　　神足と他心と

及び宿命住と　　　　　應に淨の五通を修すべし

中に於て天耳と天眼と宿住を憶念すると他心を知ると神足と、此等の五種の智通を、應當に修習すべし。

【五九】五通の修習。

[五七] 出世の語を喜樂し　　世言に樂依すること莫れ
自ら諸の功德を受け　　亦應に他をして受けしむべし

或は言說の出世間を能くするもの有らんに、若しは佛・法・僧と相應し、若しは六度と相應し、若しは菩薩地と相應し、若しは聲聞・獨覺地と相應すれば、彼の中に應に意樂を作すべし。或は言說の世間に依止するもの有らんに、世間を增長し、貪・瞋・癡と相應すれば、彼の中に應に喜樂すべからず。若し諸の受戒、頭多を學する等の殊勝たる功德の善人の讃ずる所、受取する所のもの有れば、彼等の中に於て皆應に受取すべし。亦應に他をして此の功德を受けしむべし。

[五八] 五解脫入を修し　　十不淨想を修し
八大丈夫覺を　　亦應に分別して修すべし

中に於て「五解脫入」とは、一には他の爲に說法し、二には自ら說法し、三には自ら法を誦し、四には法に於て隨覺隨觀し、五には何等かの三摩提相を取隨す。此れは是れ五解脫入なり。「應當に十不淨想を念修すべし」とは、謂はく膖脹想・青瘀想・膿爛想・潰出想・瞰想・斷解想・分散想・血塗想・肉落想・骨想なり、此れは是れ十不淨想なり。貪若し生ずる時應當に念修すべし、本欲貪を斷除せんが爲の故なり。「八大丈夫覺も亦應に分別して修すべし」とは、中に於て八大丈夫覺有り、謂く少欲は是法、多欲は非法なり、是れを初覺と爲す。足るを知るは是法、足るを知らざるは非法なり。是れを第二と爲す。遠離は是法、雜鬧は非法なり、是れを第三と爲す。精進を發すは是法、懈怠は非法なり、是れを第四と爲す。念に安住するは是法、念を忘失するは非法なり、是れを第五と爲す。定に入るは是法、定に入らざるは非法なり、是れを第六と爲す。智慧は是法、智慧無きは非法なり、是れを第七と爲す。戲論を樂はざるは是法、戲論を樂ふは非法なり、是れを第八と爲す。此等の八大丈夫覺は、應當に之れを覺るべく、多欲等の八不善助は、應當に斷除すべし。

【五七】 出世間言說の喜樂。

【五八】 五解脫入・十不淨想・八大丈夫覺の修習。

「供ふ可きを供へざる無し」とは、中に於て應に供養すべきは、所謂和上・阿闍梨・父・母・兄等なり。「供養せざる無し」とは、敬畏せざる無く、活命の爲めなりと雖、終に法を誇らず、及び此の佛法を説く人を亦應に謗るべからず、應に輕欺すべからず。自らの善助を護らんが爲めの故なり。

[五三]金寶を教師と　　及び教師の支提に散じ
若し誦する所を忘るること有れば　　與に念じて失はざらしむ

應に金・銀を以て教師に散ずべし。亦應に摩尼・金寶を以て教師の寶支提に散ずべし。菩薩に三摩提有り、現在佛對面と名づく、此等の三摩提に住し、生々の中に於て現前に修習す。聞持を得んが爲めの故なり。若し衆生有りて誦する所の世の利樂を引く經書を忘失せば、彼の衆生に於て與に憶念を作す。菩提心を忘失せざらんが爲の故に、及び憶念して現に知るを得んが爲の故なり。

[五四]未だ思はずして所作し已り　　躁ぐ勿れ他に隨ふ勿れ
外道・天・龍・神　　中に於て皆信ずることなかれ

所作の業行の若しは身・口・意の中の諸處に於て、若し未だ思はずして所作し已り、爲めに躁急なること勿れ、亦他に隨ふこと勿れ、應に是の如く行ずべし。若し此れに異なれば則ち熱惱を生じ亦是れ悔いる因なりと。遊行の出家、尼犍等の諸の外道に於て、及び天・龍・夜叉・揵闥婆等の中に於て、皆應に信ずべからず。

[五五]心は應に金剛の如く　　堪能にして諸法に通ずべし
心は亦應に山の如く　　諸事に動かされざるべし

其の心を安置すること應に金剛の如くなるべし、慧力の堪能なるもの有るが故に、諸の世出世法の中に於て、其の自性の如く如實に通達し、諸事の中に於て其の心を安置すること、亦應に山の如く、[五六]八種の世法の動かす能はざる所なるべし。

【五三】金寶を教師及び其支提に散じ、所誦を念ず。

【五四】所作愼重。尼犍（Nir-grantha-putra）は離繋と譯し、裸形外道、無慚外道ともいふ。耆那教のこと。

【五五】不動の心。

【五六】八種世法。五七頁。

四九 應當に法を擁護し　　放逸者を覺察し
及び金の寶網を作り　　支提に於て羅覆すべし

此の法の中に於て應に自ら擁護すべし。若し法に背きて放逸なる衆生有れば、彼れに於ても亦應に方便し覺察して其れをして法に向はしむべし。及び如來支提の所に於て、應に種々の寶網を以て羅覆すべし。相好をして滿足せしむるが爲の故なり。

五〇 婇女を欲求するもの有れば　　莊嚴して以て之れを施し
亦與に佛德を說き　　及び雜光の瓔を施す

若し婇女を求むる者有れば、即便ち婇女を莊嚴し以て布施す。此の諸の婇女は普く皆端正なり、此の布施を以て、自意の求むる所の愛事をして皆滿足せしむるが爲の故なり。又無量の異種なるを以て佛功德の法を說き、應に集會の處に在りて、高く美妙悅意の聲を出して演說を爲す。諸の聲分の清淨なるを得るが爲めの故なり。又種々の光明の照曜する瓔珞の具の、彼の心眼を悅ばしむるものを以て布施す。諸の隨形好を滿足するを得るが故なり。

五一 佛の形像を造作し　　勝蓮花に端坐せしめ
及び六法の中に於て　　同喜樂を修習す

金銀・眞珠・貝石等を以て佛像を造作し、勝蓮花に坐せしむ。化生することを得んが爲め、及び佛身を得んが爲の故なり。「六種の同喜法」とは、彼の同梵行の中に於て、慈の身業・口業・意業・受用物を分たず、戒具足・見具足なり。此等の六種の同喜法の中に、應に數習近すべし。徒衆を得て、諸の外論衆に壞らるるを被らさる爲の故なり。

五二 供ふべきを供へさる無く　　命の爲めなるも亦
佛の說く所の法　　及以び法を說く人を謗らず

【四九】 法・放逸者・支提の擁護。

【五〇】 婇女等を施す。

【五一】 佛像の造作、六種同喜法の修習。

【五二】 和上等の供養、法及び人を謗らず。

善く正意の語を爲せば　　前後に供へざること無し

「前に行ずる善業の首」とは、園林・會堂・義井・花池・飲食・花鬘、行き難き處に於て橋を起し、及び僧坊を遊處等の中に造り、他人を勸勵して自ら前導と爲り、施す所他に過ぐるが故に、當に[四二]尼羅嚧陀普圓身相・頂髻相を得べし、彼の二は是れ勝主の先相なり。「細滑美妙の言」とは、長夜に眞實に細滑語するが故に、當に[四三]廣長舌相・梵音相を得べし、彼の二は是れ五分五分語道具足音を得るの先相なり。五分五分語道具足音とは、一には知る可し、二には解し易し、三には聞くを樂む、四には逆らはず、五には深し、六には寬遠なり、七には嫌ふことなし、八には耳を悅ばす、九には端正し、十には雜らずなり。（二種の五分の故に十ある也）「善く正意語を爲す」とは、長夜に實語し正意語するが故に、當に[四四]師子牙相を得べし、彼れは是れ愛語の先相なり。「前後に供へざること無し」とは、他人に前後有りと雖、然も皆供養して供養せざること無く、如法威儀・平等威儀を以ての故に、當に[四五]齊平齒相・細滑齒相を得べし、彼の二は是れ善淨眷屬の先相なり。

他の眷屬を壞らず　　慈眼もて衆生を觀
亦嫌心を以てせず　　皆善親友の如し

諸の衆生に於て、懷抱・慰喩・攝受の心を作し、不貪・不瞋・不癡の眼を以て觀るが故に、當に[四六]青眼相・牛王眼睫相を得べし、彼の二は是れ愛眼觀の先相なり。

[四七]我れ已に三十二大丈夫相を出生する業を解釋せり、別に種々の菩薩の行有り、今當に解釋すべし。

[四八]應當に言ふ所の如く　　卽ち隨ひて是の如く作すべし
言ふが如く若し卽ち作さば　　他人は則ち信を生ぜん

應當に言ふが如く卽ち是の如く作すべし。若し言ふ所の如く卽ち是の如く作さば、他は則ち信を生じ、言教有るに隨ひて、卽ち當に信受すべし。

【四二】尼羅嚧陀普圓身相（Nyagrodhaparimaṇḍalaḥ）、頂髻相（Uṣṇīṣaśiraskatā）。
【四三】廣長舌相（Prabhūtatanujihvaḥ）、梵音相（Brahmasvaraḥ）『十住毘婆沙論』第八の終には五功德音聲といふ。
【四四】師子牙相（Siṃhahanuḥ 頷如師子）。
【四五】齊平齒相（Samadantaḥ）、細滑齒相。此中に齒白淨（Suśukladantaḥ）、四十齒相（Catvāriṃśaddantaḥ）、齒密緻相（Aviraladantaḥ）を含むが如し。『十住毘婆沙論』には供養に依て齒白相、齒齊相を得。長夜に實語して纖誘せざるに依て四十齒相、齒密緻相を得とあり。
【四六】青眼相（Abhinīlanetraḥ）、牛王眼睫相（Gopakṣmā）。
【四七】種々の菩薩行を明かす。
【四八】言行一致。

得るの先相なり。

乞求者に違はず　　諸の親戚と和合し
眷屬と乖離せず　　宅及び財物を施す

所有する物に隨ひて、若し來りて求むれば、卽ち施して違逆せざるが故に、當に[三五]臂髀牖圓相を得べし、彼は是れ自在調伏の先相なり。親眷朋友と和合して共住し、各各乖異せしめず、若し乖異せば亦和合せしむるが故に、當に[三六]陰密藏相を得べし。彼れは是れ多子の先相なり。舍宅・財物を布施し、及び上妙の牀敷・衣服・堂殿宮等を施すが故に、當に[三七]金色相・細滑薄皮相を得べし、彼の二は是れ上妙なる牀敷・衣服・堂殿宮等を得るの先相なり。

父母及び親友は　　所應に隨ひて安置す
所應の安置處は　　無上自在の主なり

[三八]憂波弟邪夜隋に近誦と云ふ。舊に和上と云ふは略にして訛なり、[三九]阿遮利夜隋に正行と云ふ。舊に阿闍梨と云ふは亦訛なり、父母兄弟等の、尊重すべき所の者は、所應の處に隨ひて安置し、無上自在の主と爲すが故に、當に[四〇]一孔一毛相・白毫印面相を得べし、彼の二は是れ平等の先相なり。

復た是れ奴僕と雖　　善說し亦受取し
應に最も尊重を生じ　　施藥して諸病を愈すべし

「施藥して諸の病者を愈す」とは、病人の所に於て、施藥し給侍し、將息して飲食せしむるなり。給侍し將息するを以て、病みて卽ち能く起つが故に、當に[四一]髆間平滿相・味中上味相を得べし、彼の二は是れ少病の先相なり。

前に行ずる善業の首　　細滑美妙の言

【三五】臂髀牖圓相 (Susamvṛttaskandhaḥ 臂頭圓相)。
【三六】陰密藏相(Kośagatavastiguhyaḥ)。
【三七】金色相 (Suvarṇavarṇaḥ)、細滑薄皮相(Sūkṣmacchaviḥ)。
【三八】憂波弟邪夜(Upādhyāya)。
【三九】阿遮利夜(Ācārya)。
【四〇】一孔一毛相 (Ekaikaromapradakṣiṇāvartaḥ 一々毛右旋)、白毫印面相 (ūrṇākośaḥ 眉間白毫)。
【四一】髆間平滿相(Citāntarāṃsaḥ 兩腋滿相)、味中上味相 (Rasarasāgratā)。

ば常に澁に住することなく、應に正法を以て惑を遣り繋を破るべき時到れば、外道の鹿を怖れしむるが爲の故に、及び正教を住持するが故に、復た當に師子吼を震ふべし。

[27]我れ已に修心を解釋せり、今當に修相を解釋すべし。謂はゆる、

奉迎し及び將送して　應に尊重する所を敬ふべし
諸の法事の中に於て　隨順して佐助す

尊重する所に於て奉迎し將送し、法を聽く時に於て花鬘供養し、支提等を修理する法事の中に於て恭敬をもつて作すが故に、當に[28]手足輪相を得べし。彼れは又是れ大眷屬の先相なり。

殺さるる者を救脫し　自ら然も增して減ぜず
善く明・巧の業を修し　自ら學び亦他に敎ふ

殺さるる者有れば救ひて解脫せしむ、護命の因緣は殺生を離る、此等の業を受けて長夜に習近するが故に、當に[29]長指相・足根平正相・身直相を得べし、彼れは是れ長壽の先相なり。自ら受くる所の善法は、受け已りて增長し損減せしめざるが故に、當に[30]足趺高如貝相・毛上向相を得べし、彼の二は是れ法無滅の先相なり。善く明論・工巧等の業を修し、自ら學び及び他に敎ふるが故に、當に[31]伊尼蹲相を得べし、彼れは是れ速攝の先相なり。

諸の勝善法に於て　牢固にして之れを受け
四攝の事を修行し　衣及び飲食を施す

諸の最勝善法に於て、牢固に之れを受け、習近し多く作すが故に、當に[32]善安立足相を得べし、彼れは是れ能作事業の先相なり。四攝の布施・愛語・利行・同事を修行し、常に習近するが故に、當に[33]手足網相を得べし、彼れは亦是れ速攝の先相なり。妙なる飲食衣服を布施し、常に習近するを以ての故に、當に[34]柔輭手足相・七處高相を得べし、彼れは是れ上妙なる飯食の甜味及び衣服等を

【二七】 三十二相業を明かす。『十住毘婆沙論』第八、共行品の終部と同意。

【二八】 手足輪相（Cakrāṅkitahastapādatalaḥ 手足具千輻輪）。

【二九】 長指相(Dīrghāṅguliḥ)、足跟平正相(Suvartitoruḥ)、身直相（Sthitānavanatapralambabāhutā 正立不屈二手過膝）。

【三〇】 足趺高如貝相（Ucchaṅkhapādaḥ足趺高滿）毛上向相(Ūrdhvaṃgaromaḥ)。

【三一】 伊尼蹲相(Aiṇeyajaṅghaḥ)。

【三二】 善安立足相(Supratiṣṭhitapādaḥ足善安立)。

【三三】 手足網相(Jālāvanaddhahastapādaḥ)。

【三四】 柔輭手足相（Mṛdutaruṇahastapādatalaḥ)。七處高相(Saptotsadaḥ七處平滿)。

心は若し調伏し守護し禁繫すれば、則ち諸の利益と安樂と善事の與に、傳々して生因と作り、若し調伏せず守護せず、修習せず禁繫せざれば、則ち諸の無利と惡濁の與に根と爲ることを知り已り、彼れに於て應に觀察を極むべし。生・住・異相の故に、內・外兩間に住せざるが故に、過去未來現在世に俱ならざるが故に、來る處無きが故に、去る處無きが故に、[二四]刹那・羅婆・牟呼利多の時の中に住せるが故に、猶ほ幻の如くなるが故に、修習せんが爲めの故に、應當に觀察すべし。

[二五]我れ善法の中に於て　日々何に增長し
復た何に損減すること有りやと　彼れ應に觀察を極むべし

若し佛世尊の說く所の、施等の善法の能く菩提を出生するもの、我れ彼の諸の善法に於て、何に增長すること有り、何に損減すること有りやと、常に應に是の如く專精なる觀察を、日々の中に起し而も復た起すべし。

[二六]他の利養恭敬の名を　增長するを得るを見て
微小の慳嫉する心も　皆作すべからざる所なり

若し餘の淨行を同じくする者、或は沙門、或は婆羅門の、利養・恭敬・名聞を增長するを見る時、亦應に微少の慳嫉をも生ずべからず、復た應に思量して是の如き心を生ずべし、「我れも亦喜んで衆生の利養たる衣服・飲食・臥床・病緣藥等の衆具を得ん、我れも亦喜んで在家・出家に恭敬せらるることを得ん、我れも亦喜んで讃ずべきの法を具足することを得ん」と。

諸の境界を羨まず　癡と盲と瘂と聾を行じ
時に復た師子吼し　諸の外道の鹿を怖れしむ

若し他人の利養恭敬名聞を增長するを見る時、色等の境界の中に於て、應に悕羨すべからず。愛・不愛の色・聲・香・味の中に於て、癡・盲・瘂・聾に非ずと雖、而も癡・盲・瘂・聾の行を作し、若し力有れ

【二四】刹那(Kṣaṇam)。羅婆(Lavaḥ)。頃刻をいふ。牟呼利多(Muhūrtaḥ)。須臾をいふ。
【二五】善法消長の觀察。
【二六】他を慳嫉せず。

二〇　有爲の無常なると　　若しは我・々所無きとを觀ず
所有る諸の魔業は　　應に覺りて捨離すべし

「有爲」とは謂く、因緣和合生なり。因緣和合生なるを以ての故に彼れに我所無く、有爲を以ての故に彼れは是れ無常なり、若し是れ無常なれば、彼れは他の爲めに逼迫せらるるが故に苦なり、若し苦なれば彼れは自在に轉ぜざるが故に無我なり、有爲法に於て應に是の如く觀ずべし。「所有る諸の魔業は應に覺りて捨離すべし」とは、或は菩提心と六度と相應する經の中に於て欲樂せさる因緣、散亂の因緣・賖緩の因緣、障礙の因緣と作るもの、若しは自らより起るもの、若しは他より起るもの、皆應に覺知すべし。此の諸の惡魔業に於て、皆覺知し已りて之を離れ、彼れをして自在に行ぜしむること莫れ。

二一　根と力と覺分と　　神足と正斷と道と
及以び四念處とを　　修せんが爲に精勤を發す

信・精進・念・定・慧、是れを五根と爲す。信・精進・念・定・慧、是れを五力と爲す。念・擇法・精進・喜・猗・定・捨、是れを七覺分と爲す。欲定・精進定・心定・思惟定、是れを二二四神足と爲す。未生の惡不善法は生ぜざらしむるが爲め、已生の惡不善法は其れをして斷ぜしむるが爲め、未生の善法は其れをして生ぜしむるが爲め、已生の善法は其れをして住せしむるが爲めに生欲し、發勤し、攝心し、起願する、是れを四正斷と爲す。正見・正分別・正語・正業・正命・正發行・正念・正定、是れを八分聖道と爲す。身・受・心・法、是れを四念處と爲す。此等三十七の助菩提法を、修習せんが爲の故に精勤を發起す。

二三　心は利と樂と善の與に　　傳々して生處と作る
及び諸の惡濁の根たり　　彼れを當に善く觀察すべし

【二〇】魔業を覺知す。

【二一】三十七助菩提法の修習。

【二二】四神足。第六卷の初一六頁參照。

【二三】心の觀察。

一七 正命に安住し　　愛子の肉を食ふが如く
食噉ふ所の中に於て　　愛することなく亦嫌ふこと勿れ

是の如き定行の比丘は、若しは村、若しは僧坊の中に、有るに隨ひて法の如く護嫌する所無く、食を乞ひ得已りて、貪心を起して愛著すること勿れ、亦之を嫌ふこと勿れ、應當に正念に安住して、愛する所の子の肉を食ふが如くなるべし。但だ身を住して壞せず、壽命を存して淨行を攝護せんが爲の故なり、猶ほ昔夫妻の曠野に行く時、共に子の肉を食はんと云ふが如し。

一八 出家は何なる義と爲す　　我が所作の竟と未と
今とに作せりと爲すや不やを思ふこと　　『十法經』に說くが如し

應當に是の如く觀察すべし。「我れは何の義の爲めの故に而も出家を行ずるや、活きざるを畏るるが爲なりや、一九 沙門を求めんが爲なりや」と。若し沙門を求むるが爲めならば、應に是の念を作すべし。「我れ沙門の事に於て、已に作せりと爲んや。未だ作さずと爲んや。今正に作すと爲んや。如し其の未だ作さざると、及び正に作せるとは、因緣を成就せんが爲の故に、應當に精勤すべし。我れ家類を離るれば則ち非類と名く、應に數思念すべし。我が活命は繫りて他に在り、我れ亦應に別異の儀式を作すべし、我れ自ら戒に於て嫌ふこと無きを得るや不や、有智の淨行を同じくする者は、我が戒の所に於て復た嫌ふこと無きや不や、我れ已に諸の恩愛と其の相別異にして與に共俱ならず。我れは業に屬し業の所生は業を受用す、業は是れ親依する所の業にて行ず、我が所作の業は、若しは善きも若しは惡しきも我は當に自ら受くべし。我れ晝夜に於て云何んが過ぎん。我れ空寂を喜樂するや不や、我れ上人の法を有するや否や、能く聖人の勝知見を得るや不や、若し當に後の時に淨行を同ふする者の我れに問ふの時之れを說きて慚ぢざるべきや」と。應に數此等の十法を思念すべし、所謂定行の比丘は應に數思念すべし。

【一七】 食を貪らず嫌はず。

【一八】 出家の反省。十法思念。現存の『十法經』（元魏佛陀扇多譯）、同本の『大乘十法經』（梁僧伽婆羅譯）には十法の思念を記さず。但し菩薩の慚愧を說くは今の意に類似する。

【一九】 沙門（Śramaṇa）。出家の修道者。

半時に或は別して行じ　　一時に餘道を行ずる
修定は應に爾るべからず　　應に一境界を緣ずべし

今此の一日の半時に別の定を修習し、餘時の中に復た異道を行ずべからず。唯一定の應に善く緣ずる境に於て、心を一境に隨へて、餘處に向ふこと勿れ。

[一五] 身に於て貪り有ることなく　　命に於ても亦惜むこと勿れ
縱令此の身を護るとも　　終に是れ爛壞の法なり

應に是の如き心を生ずべし、「我が此の身中には、唯薄皮・厚皮・肉血・筋骨・髓等有るのみにして終に乾枯に歸す。我が此の壽命も亦當に終盡すべし。彼の丈夫の精進、丈夫の勢力、丈夫の健行を我も亦應に得べし、若し其れ未だ得ざれば、我れ精進に於て應に賒緩なるべからず。復た百歲に此の爛身を護ると雖、必定して當に是れ破壞の法なり」と。

[一六] 利養と恭敬と名は　　一向に貪著すること勿れ
當に頭衣を然くが如く　　勤行して所願を成ずべし

今此れ若し曠野に在りて宿住する時、身命を貪り中に於て遊行すること勿れ。若し利養と恭敬と名聞の起る時有らば、貪著すべからず。自ら願を成就せんが爲の故に、應に速やかに勤行すること、頭衣を然くが如くなるべし。

決して卽ち勝利を起し　　明日を待つべからず
明日は太だ賒遠なり　　何なる緣か瞬く命を保たん

彼の頭衣を然くが如き勤行の時に於て、明日は賒遠なれば明日を持つこと莫れ。若し我が身に於て勝利有らば、決して卽ち發起し、應に是の如き心を生ずべし、「何なる緣か能く眼を開き眼を合する間の命を保たん、我は今卽ち勝利を起せり、明日は太だ遠ければ、明日を待つこと莫らん」と。

【一五】身命を惜まず。

【一六】名利に貪著せずして勤行す。

還た彼の境の中に於て　　動くに隨ひて卽ち住せしむべし

中に於て修定の比丘は、心に思惟する時、意を專らにして亂すことなく、若し心、境を離るれば卽ち應に覺知し、乃至境を離れて遠く去らしめず、還りて其の心を攝して境の中に安住すべし。繩にて猿猴を繋ぎ柱に繋著せんに、唯柱を遶ることを得て餘に去ること能はざるが如く、是の如く應に念の繩を以て心の猿猴を繋ぎて境の柱に繋著せば、唯數々境の柱を遶ることを得て、餘に去ること能はざるべし。

〔一四〕應に緩に惡取にして　　而も精進を修すべからず
以て定を持すること能はず　　是の故に應に常に修すべし

「緩」とは謂はく、策勤を離るるなり。「惡取」とは謂はく、善取に非ざるなり。（太だ急なるを謂ふ也）若し三摩提を成就せんと欲せば、緩に作し及び惡取に精進すべからず。緩に作し及び惡取に精進すれば、三摩提を持つこと能はざるを以て、是の故に修定の行者は應に常に正修すべし。

若し聲聞乘　　及以び菩薩乘に登りて
唯自利行を爲すにも　　牢き精進を捨てず

若し聲聞乘及び菩薩乘に登らんと欲せば、唯自利の爲めの故に、自ら涅槃せんが故に、尙ほ晝夜に於て牢固たる精進を捨てずして修行を策勤す。

何に況んや大丈夫は　　自らを度し亦人を度す
而も當に　　倶致千倍の進を發起せざるべけん

然も此の菩薩は應に流轉の河中に於て諸の衆生を度すべく、亦應に自ら度るべし。何ぞ彼の聲聞・獨覺乘の人に過ぎたる、倶致百千倍の精進を發起せざるを得んや。自ら流轉の河を度るが如く、他を度すも亦是の如し。

【一四】精進。

此れ諸の菩薩は修念と相應せんと欲するが故に、先づ當に身・口・意業を清淨にすべし。中に於て殺生・不與取・非淨行等の三種の身の惡行は、應當に清淨にすべし。此れと相違せる三種の身の善行は、應當に之れを受くべし。妄語・破壞語・麁惡語・雜戲語等の四種の口の惡行は、應當に清淨にすべし、此れと相違せる四種の口の善行は、應當に之れを受くべし。貪・瞋・邪見等の三種の意の惡行は、應當に清淨にすべし。此れと相違せる三種の意の善行は、應當に之れを受くべし。諸の〔九〕波羅帝攃叉の學句も、亦當に受けて隨轉すべし。彼の學句に於て、知ること有りて而も故に破ること無し、若し戒を缺漏せば修念の中に於て、心は則ち不定なり。

〔一〇〕正念に安住し　　緣を攝して獨り靜思し
念を用ひて爲めに已れを護り　　心に障心無きことを得

是の如く戒に於て正に淸淨にし已りて、〔一一〕五蓋を斷除し、空閑淨潔にして衆を離れたる處、少聲・少喧・少蚊・虻蛇・虎賊等にして甚だ寒熱ならざるに於て臥床を置かず、若しは立ち、若しは經行し、若しは結跏坐し、或は鼻端に於て、或は額分に於て念を迴らして安住し、一の緣に隨ひて善く攝することを作し已る。若し境界に於て躁動の心有れば、則ち念を用ひて守門と爲し、是の如く守護を置き已りて、障礙の賊心を遠離し、獨り一處に在りて散亂の意あること無くして思惟を修習す。

〔一二〕若し分別を起す時は　　當に善と不善を覺り
應に諸の不善を捨て　　多く諸の善分を修すべし

思惟の時に於て若し分別を起さば、卽ち起す時に於て此の分別を覺る、若し是れ不善ならば卽ち應に捨離し、復た增さしむること勿るべし、若し是れ善分ならば唯當に數〻多く作すべし。散亂して室中の燈の風道を閉さゞるが如くなるべからず。

〔一三〕境を緣ずるに心若し散らば　　まさに念知を專らにし

〔九〕波羅帝攃叉（Pratimokṣa）。廢惡の律條。
〔一〇〕安住正念。
〔一一〕五蓋。善心を覆蓋するもの。欲貪・瞋恚・惛眠・掉悔・疑。
〔一二〕修善。
〔一三〕專意不亂。

應に牢き鎧鉀を用ふべし　　厭ふことなく亦憚ること勿れ

若し罵詈・恐動・嫌恨・鞭打・繫閉・訶責、是の如き等の惡事を以て我れに加ふるもの、及び諸の衆生の無量の諂幻にして化すべからざるを知らば、彼等を以ての故に應に自ら鎧鉀を緩くすべからず。亦流轉を厭ふことなく、菩提を求むるを憚ること勿れ。又應に是の如き心を發すべし、「我れ諂なく幻なき衆生の爲に而も鎧鉀を著す、我れ正に彼等の衆生の爲に此の鎧鉀を著るなり。我れ當に是の如き事を作して精進を發起すべし、彼等の衆生をして速かに諂なく幻なきを建立することを得しめんが爲の故なり」と。まさに是の如く自ら鎧鉀を牢くすべし。

（六）問ふ、已に力を得たる菩薩の修行を說けり、云何んぞ未だ力を得ざる菩薩は修行するや。答ふ、

（七）勝淨の意を具足し　　諂ならず亦幻ならずして
諸の罪惡を發露し　　衆くの善事を覆藏す

「勝淨の意を具足す」とは、謂はく、增上の意なり。又是れ善の增す也、意とは心也、卽ち彼の心具足するを、勝淨の意を具足すと名く。「諂ならず亦幻ならず」とは、諂は謂く別心なり。別心とは質直ならざる也、又諂とは名けて曲心と爲す。幻とは謂はく誑く也、若し心曲らず誑かされば、彼れは是れ諂ならず幻ならざるなり。「諸の罪惡を發露す」とは、若し罪惡有りて顯說し發露せば、彼れを諸の罪惡を發露すと名く。「衆くの善事を覆藏す」とは、若し善業有りて竟に大に覆藏せば、彼れを衆くの善事を覆藏すと名く、若し菩薩、疾く菩提を得んと欲せば、應當に淨意を具足し、諂ならず幻ならずして罪惡を發露し善事を覆藏すべし。是の故に世尊は說きて云く、「諂は菩提に非ず、幻は菩提に非ず」と。

（八）身・口業を清淨にし　　亦意業を清淨にし
諸の戒學句を修し　　缺減有らしむること勿れ

【六】未だ力を得ざる菩薩の修行を明かす。
【七】不諂不幻、悔惡覆善。
【八】三業清淨。

卷の第五

[一]問ふ。力を得たる菩薩は衆生の中に於て、云何んが應に修行すべきや。答ふ、

[二]諸論及び工巧と　　明術と種々の業とは
世間を利益するが故に　　之を出生し建立す

中に於て書印・算數・鑛論・醫論は、能く鬼持・彼毒の論等を滅し、村城・園苑・河泉・陂池・花菓の論等を出生し、金銀・眞珠・鞞琉璃・貝石（石白く貝の如きもの）・珊瑚の寶性の論等を顯示し、日月・星曜・地動・夢相の論等を記說し、諸の身分・支節の論等を相す。是の如き等の無量の諸論の、能く世間の與に利樂を爲すものは、劫の轉壞する時悉く皆滅沒し、劫の轉生する時還人間に於て出生し建立す。木・鐵・瓦・銅の作等の如く工巧は一に非ず、能く鬼持・顚狂・被毒・霍亂・不消食の諸の逼惱等を滅す。種々の明術・雕畫・繡織の作等の種々の事業は、世間の與に利樂を爲すものは、皆亦出生し及び建立せしむ。

[三]化すべき衆生の　　界・趣及び生の中に隨ひて
念の如く卽ち彼に往き　　願力の故に生を受く

諸の摩訶薩は何れの世界の、若しは天・人等の趣、若しは[四]婆羅門・刹帝利・鞞舍等の生に隨ひ、彼々の處に於て、若し化す可き衆生有れば、爲めに無量の思念を起し、彼等の衆生を化せんと欲するが故に、彼の色類の長短寬狹、音聲果報に隨ひ、衆生をして化を受くる事を得しめんとして、卽ち應に願を作すべし、彼の色類の長短寬狹、音聲果報を起すは、彼の衆生をして速かに化を受けしむるが故なり。

[五]種々の惡事　　及び諂幻の衆生に於ては

【一】力を得たる菩薩の行を明かす。
【二】諸論工巧明等。
【三】願力受生。
【四】婆羅門(Brāhmaṇa)。印度四姓の一。祭祀を司る族。刹帝利(Kṣatriya)。四姓の一。王族。鞞舍(Vaiśya)。四姓の一。農工商に從事する平民。
【五】難化衆生の敎化。

界と不男と迦柘とも　　亦燒ける種子の如し

虛空の中に種子を生ぜざるが如く、是の如く無爲の中に於て、曾て佛法を生ぜず、亦生ずべからざること高原の曠野に蓮華の生ぜざるが如く、是の如く聲聞・獨覺の無爲正定位の中に入るは佛法を生ぜず。「峻崖」とは、一切智智の城への道中に於て、二つの峻崖有り、所謂聲聞地の峻崖と、獨覺地の峻崖なり。聲聞・獨覺にして若し一切智有れば、則ち菩薩の二の峻崖に非ざるなり。「深坑」とは、丈夫の善く跳擲を學べるものは、深坑に墮つと雖安隱にして住し、若し善く學ばざるものにして深坑に墮つれば便ち坑內に死すが如く、是の如く菩薩は無爲を修習して善く相應するが故に、無爲を修すと雖、而も無爲の中に墮ちず。聲聞等は無爲を修習して善く相應せざれば、則ち無爲の中に墮つ。「界」とは、聲聞は無爲界に繫在するが故に、復た有爲の中に於て行ずること能はず、是の故に彼の中に菩提の心を生ぜず。「不男」とは、根敗の丈夫の如く、[四六]五欲の利に於て復た利有らざるが如く、是の如く聲聞は無爲法を具するも、諸の佛法の利に於て亦利有ること無し。[四七]「迦柘」とは迦柘の珠を諸天、世間のもの善く彼の迦柘の珠を修理すと雖、終に[四八]鞞琉璃寶と爲すこと能はざるが如く、是の如く聲聞は復た諸の戒學・[四九]頭多の功德・三摩提等を具すと雖、終に覺場に坐して無上正覺を證すること能はず。「亦種子を燒くが如し」とは、燒かれたる種子の、地中に置きて水澆り日暖かなりと雖、終に生ずること能はざるが如く、是の如く聲聞は煩惱の種子を燒き已り、三界の中に於て亦生ずる義なし。是の如き等の縁を以ての故に、當に知るべし、聲聞は無爲法を得已りて、菩提の心を生ぜず。

【四六】五欲。五官の對境たる色・聲・香・味・觸に於ける欲求。
【四七】迦柘(Khaṭikā)。凍石と譯す。
【四八】鞞琉璃(Vaiḍūrya)。
【四九】頭多(Dhūta)。律制に依る托鉢等の行。

是れ流轉の因なるを以ての故に、應に煩惱を畏るべきも、應に畢竟じて煩惱を盡すべからず。若し煩惱を斷てば、則ち菩提の資糧を集むることを得ず。是の故に菩薩は遮制法を以て諸の煩惱を遮す、煩惱を遮して其れをして無力ならしむるに由るが故に、菩提の資糧たる善根を集むることを得、善根を集むるを以ての故に本願を滿足して、能く菩提に到るなり。

問ふ、何が故に斷滅を以ての故に諸の煩惱を滅せざるや、答ふ、

菩薩は煩惱を性とし　是れ涅槃を性とせず
諸の煩惱を燒くに非ず　菩提の種子を生ず

諸の聲聞の聖人等の如きは、涅槃を性と爲す。涅槃を攀緣して沙門の果を得るを以ての故なり。諸佛は涅槃を以て性と爲さず。諸佛は煩惱を性と爲す、菩提心は此れに由りて生ずるを以ての故なり。聲聞・獨覺は諸の煩惱を燒き、菩提心の種子を生ぜず、二乘の心の種子は無流を以ての故なり。是の故に煩惱を如來の性と爲す、煩惱有るを以て衆生は菩提心を發し、佛體を出生するが故に、煩惱を離れず。

[四三]問ふ、若し煩惱を燒きて菩提心の種子を生ぜざれば、何が故に[四四]『法華經』の中に、煩惱を燒ける諸の聲聞等の輿に授記するや。答ふ、

彼の諸の衆生を記するは　此の記に因緣有り
唯是れ佛の善巧なり　方便して彼岸に到らしむ

何等の衆生の成就するやを知らず、彼の中の因緣は唯佛のみ知る所なり、調伏して彼岸に到ること、餘の衆生と共に相似ざるを以ての故なり。而も彼の菩提心の種子を生ぜざるは、無爲の正定位に入るを以ての故なり。[四五]『經』に說くが如し。

空及び蓮華の如く　峻崖と深坑と

【四三】『法華經』の聲聞授記。
【四四】『法華經』譬喩品、に舍利弗を、授記品に迦葉・須菩提・迦旃延・目連を、五百品に富樓那等千二百人を、人記品に阿難・羅睺羅等二千人に授記す。
【四五】『維摩經』佛道品參照。

未だ本願を滿さゞるが故に　　涅槃を證せず

此れ應に思量すべし、若し正定位に到らんとする菩薩は、三十二法[三九]を以ての故に正定位に入り、解脫門と相應する時、中間に未だ本願を滿さゞれば、涅槃を證すと爲んや證せずと爲んや。世尊は『經』の中に說いて、「[四〇]四大は改異せしむ可きも、正定位に入る菩薩は中間に未だ本願を滿さずして涅槃を證するもの有ることなし」と云ふを以て、是の故に正定位に到れる菩薩は本願を滿さゞれば涅槃を證せず。

若し未だ定位に到らざるものは　　巧便力に攝せらるゝが故に
未だ本願を滿さゞるを以て　　亦涅槃を證せず

若し初發心の菩薩にして未だ正定位に到らざるものは、彼れ巧方便に攝せらるゝを以ての故に、三解脫門を修する時、中間に未だ本願を滿さゞれば亦涅槃を證せず。

[四一]極めて流轉を厭ひて　　而も亦流轉に向ひ
涅槃を信樂して　　而も亦涅槃に背く

此れ菩薩は流轉の中に於て、三種の熾火を以ての故に、應に極めて厭離すべし、應に心を起して流轉を逃避すべからず。當に衆生に於て子の想ひを爲すが故に、而も流轉に向ふべし、及び應に涅槃を信樂すること、舍宅を覆護するが如くなるべし。然も復た應に涅槃に背くべし。一切智智を滿さんが爲の故に、流轉の中に於て若し厭離すること有れば、則ち涅槃に於ても亦信樂すること有り。若し流轉に向はずして涅槃に背かず、未だ本願を滿たさずして解脫門を修習する時は、則ち涅槃に於て證を作すなり。

[四二]應當に煩惱を畏るべし　　煩惱を盡すべからず
當に衆の善を集めんが爲に　　遮を以て煩惱を遮すべし

【三九】三十二法『十住毘婆沙論』第十三略行品に「三十二の妙法あり、亦能く發願するを眞實の菩薩と名く」といひ、一、深心に一切衆生の爲めに安樂を求む。乃至三三、善知識に親近するを擧ぐ。

【四〇】四大。地大・水大・火大・風大。

【四一】流轉を厭ひ而も向ふ。

【四二】煩惱を斷滅せず。

に一と。先づ應に是の如く作を起すべし。次に卽ち心と三解脫門と隨順し相應す。隨順とは順後の義なり。若し是の如くならざれば、彼の心の箭は、巧方便に攝せらるゝこと無きが故に、三解脫門を行ずる時、卽ち聲聞の解脫、若しは獨覺の解脫の中に墮ちん。今更に巧方便有り。

[三六] 著ある衆生等の　　久夜及び現に行ずる
顚倒と諸相とは　　皆癡迷を以ての故なり

小兒のごとき凡夫の諸の衆生等は、癡迷を以ての故に、無始際より流轉する久夜に於て、四顚倒に著し。無常を常と謂ひ、苦を樂と謂ひ、不淨を淨と謂ひ、無我を我と謂ふ。及び內外の[三七]衆・界・入の中に於て我・我所を計し、有所得と謂ひ、久夜に行じ已り及び現在に行ず。

相に著する顚倒は　　法を說いて爲めに斷除せんと
先づ是の如き心を發して　　次に後に習ひて相應せん

「是の如き諸の衆生等は、癡迷を以ての故に、我・我所の二種の計著を起す。又色等の無所有の中に於て、妄りに分別を起して相を取り、四種の邪顚倒を生ず。我れ爲めに法を說いて其れをして斷除せしめん」と、先づ是の如き心を起し已りて、然る後に三解脫門の中に於て修習して相應す、若し此れと異りて三解脫門を修すれば、則ち涅槃道に趣近す。

菩薩は衆生を利して　　而も衆生を見ず
此れ亦最も難事なり　　希有にして思ふべからず

菩薩、衆生の想を起すは、此れ亦最も難くして思ふべからず、未曾有なり。虛空に畫くが如し。最勝の義の中に於ては本より衆生無し、此れ菩薩は知らず得ず。而も衆生を利樂せんが爲の故に、勤行精進す。唯大悲を除く、何れの處にか更に此の如き難事有らん。

[三八] 正定の位に入ると雖　　習ひて解脫門に應じ

【三六】衆生顚倒の斷除。
【三七】衆・界・入。五衆(陰)・十八界・十二入。
【三八】涅槃を證せず。

是の如き心を發せ。「我れ當に諸の衆生を利益し、諸の衆生を度脫すべし。三解脫門を修すと雖、涅槃に於て證を作すべからず。然も我れ般若波羅蜜を學する爲めの故に、三解脫門の中に於て、專ら應に成熟すべし。我れ應に空を修すべく、空を證すべからず。我れ應に無相を修すべく、無相を證すべからず。我れ應に無願を修すべし、無願を證すべからず」と。

射師の箭を放つに　各々轉た相射り
相持ちて墮さしめざるが如く　大菩薩も亦爾り

譬へば射師の善く射ることを學び已りて、箭を空中に放つに、續いて放てば後の箭各々相射りて、彼の箭は遂に多きも、空中に相持ちて地に墮さしめざるが如し。

解脫門の空中に　善く心の箭を放つに
巧便の箭續き持ちて　涅槃に墮さしめず

是の如く此の菩薩の大射は、空・無相・無願の弓を學修するを以て、三解脫門の空中に於て心の箭を放ち已り。又衆生を悲愍する巧方便の箭を以て展轉相續し、三界の虛空の中に於て、彼の心の箭を持ちて涅槃の城に墮さしめず。

問ふ、云何ぞ復た彼の心をして涅槃に墮さしめざるや。答ふ。

我れ衆生を捨てず　衆生を利せんが爲の故に
先づ是の如き意を起し　次に後に習ひ相應せん

若し我れ三解脫門に於て、善く成熟し已りて、涅槃を取らんと欲するに手掌に在るが如くなるも、然も我れ小兒のごとき凡夫の猶ほ乳を飲むが如くなるを以て、自ら涅槃の城に向ふこと能はざる者は、未だ涅槃せざるが故に、我れ涅槃に於て獨り入るべからず。我れ當に是の如きの精進を發起すべし。「我が作す所に隨ひて、唯諸の衆生を利益せんが爲の故に、亦諸の衆生の涅槃を得んが爲の故

[三一] 問ふ、已に菩薩は自の善根を護ることを說けり。何をか是れ修道の勝義なるや。答ふ。

[三二] 三解脫門に於て　應當に善く修習すべし
初は空、次は無相　第三は是れ無願なり

中に於て菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、應に三解脫門を修すべし、最初は應に空解脫門を修すべし、諸見を破散するが爲の故なり。第二に無相解脫門は、諸の分別攀緣の意を取らざるが爲の故なり。第三に無願解脫門は、欲界・色界・無色界を超過するが爲の故なり。

問ふ、何が故に此等を解脫門と名くるや。答ふ、

自性無きが故に空なり　已に空なれば何の作相あらん
諸相は既に寂滅なり　智者は何の所願あらん

緣生を以ての故に法は自性無し、此れを名けて空と爲す。其れ空なるを以ての故に心に攀緣無し。則ち是れ無相なり。諸相を離るゝが故に則ち所願無し。又若し法は緣より生ずれば、彼の自性は無生なり、自性は無生なるを以ての故に、彼の法は是れ空なり。若し法は是れ空なれば彼の中には相無し、相有ること無きが故に彼れは是れ無相なり。若し相有ること無ければ彼の中の心は所依なし、依無きを以ての故に三界の中に於て心に所願無し。

[三四] 此に於て修念する時　涅槃道に趣近し
佛體に非ざるを念ずる勿れ　彼れに於て放逸なる莫れ

此の三解脫門を修する時、若し方便に攝せらるゝに非ざれば、則ち涅槃に趣近せん。應に修習すべしと雖、餘の菩提の處に墮つることなく、當に無所得の忍を求むべく、應に善巧方便に住すべし。

[三五] 我れ涅槃の中に於て　卽ち證を作すべからず
當に是の如き心を發すべし　應に智度を成熟すべしと

【三一】 修道の勝義を明かす。

【三二】 三解脫門。

【三四】 善巧方便。以下の四偈并に釋は『大智度論』第三十六の三解脫門の釋と同意。

【三五】 涅槃を證せず。

ことを用ひんや、其の涅槃の樂は平等にして相似たり、聲聞行を行じ疾く涅槃を得よ」と。此等は後に當に其の果報を說くべし。若し種々の譬喩を以て佛の功德を顯はし、其の心に入らしむれば、是れを「示現」と爲す。其れをして具足して諸の菩薩行に精進ならしむれば、是れを「熾盛」と爲す。精進更に增して疾利ならしめんと欲して、爲めに正覺の功德と大神通の事を說くは、是れを「喜悅」と爲す。是の如く彼れをして菩提の心を捨てざらしむ。

[二七] 未だ甚深の經を解せずして　佛說に非ずと言ふこと勿れ
若し是の如き言を作さば　最も苦しき惡報を受けん

「甚深の經」とは、謂く佛の說く所の空・無相・無願と相應して、無量の斷・常等の邊見を除き、我と人と衆生と壽者等の自性を滅し、如來の大神通と希有の功德を顯すものなり。此の經律に於て若し未だ證知せずして、癡を以ての故に佛說に非ずと言ふこと勿れ、何を以ての故に、佛世尊は若し如來所說の經を謗らば惡果の最も苦しきことを說けり。

無間等の諸の罪を　悉く以て一摶と爲し
前の二種の罪に比するに　分數も及ぶこと能はず

世尊は『不退輪經』[二八]の中に於て、五無間業[二九]の所有る諸の罪を說けり。若しは三千大千世界の中の諸の衆生の命を斷てる所有る罪報、若しは恒伽河沙等の佛世尊の滅度し已れる有らゆる支提[三〇]を或は壞し、或は燒き、若しは過去・未來・現在の諸佛の法眼を障礙する所有る罪報なり、是の如き等の過を皆悉く摶聚し、若し未だ解せざる深經に於て執著を起して佛說に非ずと言ひ、及び菩薩の菩提の願を發し已れるに而も菩提心を退かしむ。此の二種の罪を、彼の前の五無間等の罪聚に之れを比するに、百分も及ばず千分も及ばず、乃至數分・柯羅分[三一]・算分・譬喩分・優波尼沙陀分も亦及ばず。是の罪相を以ての故に、自身及び自の善根を護らんが爲に、此の二種の罪を作すこと勿れ。

【二七】 經は佛說に非ずといふを誡む。

【二八】 『不退轉法輪經』第四、安養國品、『廣博嚴淨不退法輪經』第六に出づ。

【二九】 五無間業。無間地獄に墮つる五種の重罪業。

【三〇】 支提(Caitya)。墳または廟の意。もと佛舍利を安置するものを塔といひ、之なきものを支提とするが、後には混用することもある。

【三一】 柯羅分(Kalā)。一毛の百分の一。優波尼沙陀分(Upaniṣad)。數を分ちたる微細の極。

に至極の尊重と愛敬の心を起すこと、猶ほ世尊一切智の師、及び自らを生む所の父母の如くすべし。是の如く初發心の菩薩を以て首と爲し、諸の菩薩に於ても亦應に是の如く極めて愛重を作すべし。若し此れに異なれば則ち自身及び善根は皆悉く滅盡せん。世尊の『經』の中に曾て說きたまふが如し。「我れ餘の一法の菩薩を障礙し、及び善根を滅盡するものを見ず。菩薩に於て瞋りの心を起すが如きは、若し菩薩、百劫に於て善根を積聚すと雖、此の菩薩を瞋る心に由るが故に皆悉く滅盡す」と。是の故に諸の菩薩に於て應に尊重を起すこと、猶ほ教師の如くすべし。

二五
菩薩に過有りと雖　猶ほ應に說くべからず
何に況や實無き事をや　唯應に實の如く讃ずべし

若し菩薩は大乘を行ふ人の罪過を毀呰し、惡名を得しむれば、所有生々の善法は皆悉く滅盡して、白法を增長することを得ず。是の故に諸の菩薩等に過惡有りと雖、自らの善根の命を護らんが爲の故に、應に顯說すべからず。何に況や實無きをや、譬へば王の罪の如し。『經』の中に說くが如し。「菩薩は清淨なる活命のみ有りて毀呰すべきもの無し」と。而も彼の達磨比丘は、其の惡を妄說せるが故に、七十劫の中に於て泥犁の報を受け、又六萬生の中に於て貧窮人と爲り、常に盲・瘂・癩病・惡瘡を受く。是の故に菩薩の所に於て、若しは惡有り若しは惡無きも、皆說くことを得ず、彼れに實の德有らば唯だ應に稱揚すべし。自らの善根を增長せしむる爲の故に、亦餘の人の信を生ぜしむる爲の故なり。

二六
若し人、佛と作らんことを願ひ　退轉せざらしめんと欲せんに
示現し及び熾盛にし　亦喜悅を生ぜしめよ

若し衆生有りて已に發願して菩提を求め、唯其れをして退かざらしめんと欲せんに、而も人有り。愚癡・瞋恚及び貪にして、自ら朋黨なるが故に是の如きの言を作す、「何ぞ長く菩薩の難行の行を行ふ

【二五】大乘人の過を說かず。

【二六】人の菩提心を助長す。

二〇 問ふ、又彼の回向は、應に云何んが作すべきや。答ふ。

二一 右の膝輪を地に著け　一髀に上衣を整へ
晝夜各三時に　合掌して是の如く作す

當に自ら清淨にし淨潔の服を著し、手足を澡洗し、裙衣を圓整し、一髀の上に於て上の著衣を整理し已り、右の膝輪を用て地に安置し、合掌して一心に分別の意を離るべし。若しは如來の塔の所、若しは像の所、若しは虚空に於て諸佛を攀緣すること前に在りて住するが如くす。是の意を作し已りて、前に說く所の如く、若しは晝若しは夜各々三時に作す。

二二 一時に作す所の福　若し形色有れば
恒沙數の大千も　亦容受する能はず

彼の說く所の六時の回向の中に於て、若し一時に作す所の中に於ての福德を分別するに、諸佛世尊の如實に見る者の說く所は、彼れ若し有色にして穀等の聚の如くなれば、是の福の積集は限量有ること無く、恒伽沙等の大三千界の如き其の邊際を盡すと雖、亦容受すること能はず。彼の回向の福は虚空界と等しき回向なるを以ての故なり。乃至一時の回向すら、猶ほ是の如き福聚有り、況や多回向をや。是れ初發心の菩薩と雖、回向力に由るが故に亦大福を成じ、還りて是の如き相の福聚を以ての故に、漸次に能く菩提を得ん。

二三 問ふ、已に諸の菩薩の大福を成ずることを得る方便を說けり。今福用を護らんと欲せば、何に方便するや。答ふ。

二四 彼れ初めて發心し已りて　諸の小菩薩に於て
當に尊重愛を起すこと　猶ほ師と父母の如くすべし

彼の初發心の菩薩は、若し自らの善根及び自身を護らんと欲せば、諸の初發心の菩薩に於て、當

【二〇】回向の行儀。
【二一】「十住毘婆沙論」第六、分別功德品の第一偈と同意。
【二二】回向に由る大福。同論同品の第二偈と同意。
【二三】福用を護る法を明かす。
【二四】小菩薩を尊重す。

と及以び當に聚むべきと、聲聞・獨覺・諸佛・菩薩・諸聖人等、及以び凡夫の所有る諸の福には、我れ皆隨喜せん。是の如く是れ先首者、勝住者・殊異者・最上者・勝攝者・美妙者・無上者・無等者・無等等者に隨喜す。是の如く隨喜するを乃ち隨喜と名く。

[一七]若しは我が所有る福は　悉く以て一摶と爲し
廻して諸の衆生に與へ　爲めに正覺を得しめん

若し我れ無始より流轉して已來、佛・法・僧及び別人の邊に於ける所有る福聚、乃至畜生に一摶の食を施與すること、若しは歸依の善根、若しは悔過の善根、若しは勸請の善根、若しは隨喜の善根、彼れを皆稱量して共に一摶と爲し我れ諸の衆生の爲の故に、菩提に回向して皆悉く捨與し、此の善根を以て、諸の衆生をして無上正覺を證し、一切智智を得しめん。

[一八]我れの是の如き悔過と　勸請と福に隨喜すると
及び菩提に回向するとは　當に諸佛の如くなりと知るべし。

若し我れの諸の衆生の爲に菩提に回向する善根、若しは悔過の善根、若しは轉法輪を勸むる善根、若しは請長壽を請ふ善根、若しは隨喜の善根、彼れを皆稱量して一摶と爲し已りて、過去・未來・現在の諸の佛世尊の菩薩爲りし時、已に回向を作し、當に回向を作さんとするが如く、我も亦是の如く諸の善根を以て菩提に回向し、此の回向の善根を以て、我れ及び諸の衆生をして當に無上正覺を證せしむべし。我れ今更に略して說かん。

[一九]我が罪惡を說悔し　佛に請ひ、福に隨喜する
及び菩提に回向すること　最勝の所說の如くならん

自ら有る罪惡を盡く皆說悔し、及び佛の轉法輪と、住壽の長時とを請ひ、諸の福に隨喜し、福等を回向すること、前の如く菩提の爲めの故に回向す。最勝人の所說の如く、是の如く回向せん。

【一七】自福を衆生に回向す。同論同品の第八偈と同意。
【一八】同論同品の第九偈と同意。
【一九】同論同品の第十偈と同意。

爲の故に住するあれば、今彼等實證者の前に於て諸罪を發露せん。「若しは我れ無始より流轉して已來、其の前世及び現在の時に於て、或は自ら惡業を作し、或は他に教へ或は隨喜し、貪・瞋・癡を以て身・口・意を起せり、我れ皆陳説して敢て覆藏せず、悉く當に永く斷ちて終に更に作さざるべし」と。

一四　彼の十方界に於て　若し佛、菩提を得て
　　而も法を演説せざれば　我れ法輪を轉ずることを請はん

若し佛世尊は大願を滿足し、菩提樹下に於て、無上正覺を證し已り、少らく靜に住せんと欲し、世間の爲に法輪を轉ぜざれば、我は當に彼の佛世尊に佛の法輪を轉じて、多人を利樂し、多人を安樂にし、世間を憐愍して大衆の爲にし、天・人を利樂することを勸請すべし。

一五　現在十方界の　所有る諸の正覺の
　　若し命行を捨てんと欲せば　頂禮して住することを勸請せん

若し佛世尊、世間無礙にして、十方に在りて菩提を證し法輪を轉じ正法に安住し、應に化度すべき所の衆生を化度すること已に訖りて、命行を捨てんと欲せば、我は當に彼の佛世尊を頂禮し、久時に住して多人を利益し、多人を安樂にし、世間を憐愍して大衆の爲にし、天・人を利樂せんことを請ふべし。

一六　若し諸の衆生等の　身・口・意より
　　生ずる所の施・戒の福　及以び思惟修
　　聖人及び凡夫の　過・現・未來世に
　　所有る積聚する福には　我れ皆隨喜を生ず

若し諸の衆生の施・戒・修等の所作の福事、身・口・意より出生する所、已に聚めたると現に聚むる

【一四】說法を勸請す。同論同品の第四偈と同意。

【一五】住世を勸請す。同論同品の第五偈と同意。

【一六】衆生の積福に隨喜す。同論同品の第六、七偈と同意。

衆生をして涅槃を得しめんが為の故にして、終に身に微少の樂事をも為さざれば彼は亦是れ大悲者なり。是の如き大人は、當に知るべし。菩提は其の右手に到ることを。

智慧にして戲論を離れ　精進にして懈怠を離れ
捨施して慳惜を離るれば　菩提は右手に在り

問ふ、前に已に陀那等の諸波羅蜜を解釋せり。今復た解釋するは何の為にする所有るや。答ふ、前には多く修行する者の為に解釋し、今は無所得の忍智の光る者の為に解釋す。一道相を覺知するを以ての故に、彼の智は戲論を遠離す。軛を捨てざるを以ての故に、彼の精進は懈怠を遠離す。貪を除くを以ての故に、彼の施は慳惜を遠離す。是の如き菩薩は、當に知るべし。菩提は其の右手に到れることを。

依無く覺無き定と　無雜戒を圓滿すると
所從なき生忍とには　菩提は右手に在り

若し菩薩、善く禪那波羅蜜を成就し已れば、此の定は三界に依らず、其の相は寂靜にして思覺有ること無し。又尸羅を圓滿して雜り無く濁り無く、菩提に廻向して磨滅有ること無く、又善く般若波羅蜜を成就し已りて、緣生法の中に無生忍に住し、根本勝るるが故に退轉有ること無ければ、當に知るべし。菩提は其の右掌に住するを。

[二二]問ふ、已に修行及び得忍の菩薩の、諸の福田を積聚すること、此の福聚の能く菩提を得ることを說けり。云何んが初發心の菩薩は諸の福田を積聚し、此の福聚は能く菩提を得るや。答ふ。

[二三]現在十方に住する　所有る諸の正覺に
我悉く彼の前に在りて　我が不善を陳說せん

若し現在に佛世尊たるを得て、十方の世間に於て障礙する所無く、本願力を以て衆生を利せんが

【二二】初發心の積福を明かす。
【二三】罪惡を陳說發露す。『十住毘婆沙論』第五除業品の第一偈と同意。

諸の惡刺を寂滅す　是れ菩薩の福藏なり

佛世尊が、波羅奈城[六]の仙人の住處なる　鹿林[七]中に於て法輪を轉じ已りしが如き、彼の最勝の法輪に於て隨順して轉ずるを、亦福藏と爲す。此の隨順轉[八]に三種の因緣有り。謂く、如來所說の深經の、空と相應して世間を出づるものに於て、若しは持ち、若しは說き、及び法に順ひ、法を行ひ、若しは是の如き等の經に於て持ちて失はざらしむる。是れを第一の隨順轉法輪と爲す。根器ある衆生の爲めに分別し演說する、是れを第二の隨順轉法輪と爲す。彼の經の中に說く所の如く、法に依りて修行する、是れを第三の隨順轉法輪と爲す。「諸の惡刺を寂滅す」とは、佛敎の惡刺は謂はゆる外道の邪見、及び惡魔の欲界に自在にして解脫を憎惡するものなり。若しは四衆[九]の中に或は異人有りて、法に非ずして法を說き、律に非ずして律を說き、師敎に非ずして師敎を說く、是れを佛敎內の惡刺とす。應當に如法に彼等を折伏し、慢を摧き見を破りて法をして熾然ならしむべし。此れを「諸の惡刺を寂滅す」と名け。惡刺を寂滅するを以ての故に「菩薩の福藏」と爲すと名く。

衆生を利樂せんが爲に　地獄の大苦を忍ぶ[一〇]
何に況んや餘の小苦をや　菩提は右手に在り

若し菩薩、牢固なる鎧を著して、常に衆生を利樂せんが爲めに精勤の意を發す。一の衆生に於て解脫せしめんが爲の故に、阿毘至[一一]大地獄の中に住し、劫を經て辛苦すと雖、堪忍して動かず。況んや餘の小苦をや。菩薩は能く是の如き等の苦を忍べば、當に知るべし。菩提は右掌に住するが如くなることを。

作を起すも自らの爲めにせず　唯だ衆生を利樂す
皆大悲に由るが故なれば　菩提は右手に在り

菩薩、諸の起作する所、若しは布施等は、大悲に由るが故に、唯だ衆生を利樂せんが爲なり。亦

【六】波羅奈城(Bārāṇasī)。
【七】鹿林(Mṛgadāva)。鹿野苑ともいふ。佛の最初轉法輪の處。
【八】三種の隨順轉法輪を明かす。
【九】四衆。出家の二衆たる比丘(Bhikṣu)比丘尼(Bhikṣuṇī)。及び在家の二衆たる優婆塞(Upāsaka)優婆夷(Upāsikā)。
【一〇】大悲受苦。
【一一】阿毘至(Avīci)大地獄。無間地獄と譯す。苦を受くること極劇である。

る頃に於て、思惟し修習する彼の福聚も、尙ほ量有ること無し。何に況んや若しは一日夜・二日夜・三日夜、乃至七日夜・半月・一月、若しは復た多月に修習し相應する所有福聚は、何人か能く量らん。

佛の讃ずる所の深經は　自ら誦し亦た他に敎へ
及び爲めに分別して說くは　是れを福德聚と名づく

「甚深」とは、謂く甚深の經なり。空と相應して世間を出づるもの、彼れは是れ甚深なり。又復た緣生を分別するが故なり。緣生とは卽ち是れ法なり、法とは卽ち是れ如來身なり。彼れ如來身と相應する者は、是れ甚深經にして諸佛世尊の讃歎する所、若しは自ら誦し若しは他に敎へて誦せしめ、若しは他の爲に解說して悕望心無く、但だ如來身を隱沒せざらんと欲するが故なり。如來身とは卽ち是れ法身なり。久しく住せしめんと欲するが故なり。彼の所有福は誰か能く量ることを得ん。

無量の衆生をして　菩提の爲に發心せしむれば
福藏更に增勝して　當に不動地を得べし

此に善巧方便の菩薩有り、先づ四攝事[五]を以て諸の衆生を攝し、彼の衆生の我が言を受くるを知り已つて、然る後敎へて菩提心を發さしむ。是の如く善巧方便を具足する菩薩は、諸の衆生をして菩提心を發さしむ、彼の所有福は人の能く量るもの無し、無量なるを以ての故なり。又諸の衆生をして菩提心を發さしむるが故に、福藏更に增勝となる。「福藏」と言ふは、福は無盡なるが故に、能く無盡に至るを以ての故に盡くすべからず。「不動地」とは、動かすべからざるを以ての故に不動地と名く。此の中菩薩は他をして菩提心を發さしむるが故に、生々の中に於て、菩提心を動かさず失はず、他をして菩提心を發さしむるを以ての故に、此の心は卽ち不動地の因と爲る。

隨ひて佛の轉ずる所の　最勝の法輪を轉じ

【五】四攝。布施・愛語・利行・同時。

の福は復た是れ無量なるや」答ふ、

自らの親屬と　及び身と命と財とを愛せず
自在と梵世及び餘天を貪樂せず　亦涅槃を貪らず
衆生の爲めの故なり　此く唯だ衆生を念するは
其の福誰か能く量らん

此の中、菩薩は六度の行を行ずる時に、己れの男・女及び親屬と、若しは金・銀等の財、若しは自らの壽命、若しは支節の分、若しは具足の身、若しは身・心の樂、若しは天・人の自在、若しは梵身の天、乃至涅槃に於て、衆生の爲めの故に皆亦た愛せず。唯だ衆生に於て慇念して捨てず。「我れ當に何んが此の衆生の、小兒のごとき凡夫の無智にして翳膜に覆はれたる盲者をして、三界の獄を脫して常樂涅槃の無畏の城の中に安置せしむべき」と。是の如く菩薩は利樂の事を行じ、諸の衆生に於て因なくして而も愛する所有る福德を、何人か能く量らん。又偈に言く。

依と護なき世間の　其の苦惱を救護せんと
是の如き心行を起すは　其の福誰か能く量らん

此れ菩薩は常に大悲を以て、是の如き念を作す「今此の世間は救無く、護無くして、遍く[三]六趣に行き、[四]三苦の火に入り、歸依有ること無くして此・彼に馳走し、身心の諸病常に苦惱あり、依護無き者には我れ當に與に依處と作り、其の身心に受くる所の諸の苦を救ふべし」と。此の心行を起す所有福德は、何人か能く量らん。

智度を習ひ相應すること　牛乳を搆ふる頃の如きと
一月と復た多月と　其の福は誰か能く量らん

此れ般若波羅蜜は、能く諸の佛・菩薩を生じ、及び諸の佛・菩薩法を成就す。菩薩若し牛乳を搆ふ

【三】六趣。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天に出沒し遍歷する。
【四】三苦。逼惱の苦苦、樂みの破るゝ壞苦、成敗變化の行苦。

巻の第四

[一]問ふ、若し是の如くなれば、百須彌量の福聚有ること無きが故に、亦一人の能く菩提を得るもの無からん。答ふ、

小福徳を作すと雖　此に亦方便有り
諸の衆生の所に於て　應に悉く攀緣を起すべし

若し此の菩薩は小福を作すと雖、方便有るを以て大福聚と成る。或は飲食を以て捨てて衆生に與へ、或は華・香・鬘等を以て如來の像に奉るに、彼の諸の福徳を、一切世界に攝むる所の諸の衆生の所に於て、悉く攀緣を作す。「我れ此の福を以て、諸の衆生をして皆無上正覺を得しめん。復た此の福を以て、諸の衆生と與に之れを共にせん」と。是の如き等の福を、諸の衆生と共に菩提に迴向する。是れを菩薩の方便と名く。是の如く迴向せば、其の福無量・無數・無邊と成ることを得。是れを以ての故に彼の一切智智は是れ無邊なりと雖、還た此の相の無邊の福を以ての故に能く得るなり。復た別の義あり。

[二]我れに諸の動作有るは　常に衆生を利せんが爲にす
是の如き等の心行を　誰か能く其の福を量らん

菩薩は晝及び夜に於て、常に是の如き心行を起す。「若し我が所有る動作の善の身・口・意は、皆諸の衆生を度せんが爲の故に、諸の衆生を脫せしめんが故に、諸の衆生を蘇息せしめんが故に、諸の衆生を寂滅ならしめんが故に起し。及び衆生をして一切智智を滿足せしめ、一切智智に至ることを得しめんが爲の故なり」と。彼は是の如く大悲を具足し、善巧方便に安住する所有る福聚は、唯諸佛を除きて何人か能く量らん。是の故に此の福を具すれば能く菩提を得るなり。問ふ、何が故に此

【一】大福聚の方便を明かす。
【二】種々無量の福を明かす。

の聚集ることと能はず。是の故に少少の積聚の福は、菩提を得ること能はず。云何んが百須彌量の福の聚集の、乃ち能く得るものを得るや。

諸相を遠離する空三摩提なれば、此れを無攀緣三摩提と名づく。中に於て、初發心の菩薩は色攀緣三摩提を得、已に行に入る者は法攀緣なり、無生忍を得る者は無攀緣なり、此等を決定を得と名く、自在なるが故なり。

〔六三〕諸佛の現前に住する　牢固なる三摩提
此れを菩薩の父と爲し　大悲と忍とを母と爲す

此に說く所の三種の現在佛の現前に住する三摩提は、諸の菩薩の功德及び諸の佛の功德を攝するが故に、說いて「諸の菩薩の父」と名く。「大悲」とは生死流轉の中に於て、疲倦を生ぜざるが故に、又聲聞・獨覺地の險岸に於て、護りて墮せざらしむるが故に、說いて名づけて「母」と爲す。「忍」とは、忍を得たる菩薩は、諸の流轉の苦及び諸の惡衆生の中に於て流轉を厭はず、衆生及び菩提を捨てず、厭を生ぜざるを以て、是の故に此の忍を又諸の菩薩の母と爲す。更に有る別偈に說く。

〔六四〕智度を以て母と爲し　方便を父と爲すは
生み及び持つを以ての故に　菩薩の父母と說くなり

般若波羅蜜は諸の菩薩の法を生むを以ての故に、佛は般若波羅蜜を菩薩の母と爲すと說く。諸の菩薩の法は般若波羅蜜より生まれ已りて、巧方便の爲めに持たれて、聲聞・獨覺地の險岸に趣向せしめず。是の菩提を持つを以ての故に、巧方便を說いて菩薩の父と爲す。

〔六五〕問ふ、菩薩は幾許の福を以て能く菩提を得るや。答ふ、

少少の積聚の福は　菩提を得る能はず
百須彌量の福を　聚集して乃ち能く得ん

「菩提」とは、謂はく一切智智なり。彼の智は應に知るべきものと等しく、應に知るべきものは虛空と等し。虛空は無邊なるが故に應に知るべきものも亦無邊なり。有邊の福を以ては無邊の智を得

【六三】菩薩の父母。『十住毘婆沙論』第一の入初地品の第十六偈は如來の父母として之を擧ぐ。『三具足經憂波提舍』の最終の偈は今と同意。

【六四】智度の父、方便の母。『十住毘婆沙論』第一入初地品の第十四偈と同意。

【六五】菩提を得る福を明かす。

我等は皆隨喜す　大仙の密意の語をもつて
[五九]聖者なる　無畏舍利弗に授記するが如く
我等も亦當に　成佛して世の無上を得べしと
復た密意の語を以て　無上正覺を説く

何なる義を以ての故に、此の別語の授記を説くや。[六〇]有る論師の説く。「未だ決定して聲聞乘に入らざる者をして菩提心を發さしめんが爲めの故に」。又「已に菩提心を發せる初業の菩薩等の、流轉の苦を畏れ、聲聞の涅槃に於て滅度を取らんと欲する者をして、菩提心を牢固ならしめんが爲の故に」、又「異なる佛土の菩薩有り、此に於て聚集し授記の時到れば、相似の名を以て、彼の爲めに授記するが故に」と。諸師は是の如く別語の授記を分別す。中に於て實義は唯だ佛世尊のみ、乃ち能く之れを知るなり。

[六一]菩薩は乃至　諸佛現前して住する
牢固なる三摩提を得んには　放逸を起すべからず

諸佛現前三摩提を得已りて住すとは、謂はく現在の諸佛、其の前に現はれて住する三摩提なり。「三摩提」とは、平等に住するが故なり。菩薩は乃至未だ此の三摩提を得ざれば、其の間に放逸なるべからず。未だ三摩提を得ざるを以て、菩薩は猶ほ惡趣に墮す、未だ不閑を離れざるが故なり。是の故に此の三摩提を得んが爲めに放逸なるべからず。若し三摩提を得れば、彼の諸の怖畏は皆解脱することを得。此の三摩提に三種有り。謂く、色攀緣・法攀緣・無攀緣なり。中に於て、若し如來の形色相好莊嚴の身を攀緣し、而して佛を念ずるは、是れ色攀緣の三摩提なり。若し復た[六二]十名號身と十力と無畏との不共佛法等の無量の色類、佛の功德を攀緣し、而して佛を念ずるは、是れ法攀緣の三摩提なり。若し復た色を攀緣せず、法を攀緣せず、亦作意して佛を念ぜず、亦無所得にして、

【五九】舍利弗授記。『法華經』第二譬喩品に出づ。

【六〇】初めの二義は無著の『攝大乘論』卷下の「未定性聲聞、及諸餘菩薩、於大乘引攝、定性説一乘」の偈と同意。

【六一】諸佛現前住三摩提。

【六二】十名號身。佛の異名。如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊。

授記す。「汝は來世に於て、爾所の時、某の世界、某の劫の中に於て、當に某の如來應正遍知と爲るべし」と。此れを菩薩の不退轉と名く。

問ふ、初地に住するより乃至七地までの諸の菩薩は、皆決定して[五二]三菩提に向ふ、何が故に不退轉と爲すと說かずして、唯だ[五三]不動地に住する菩薩を不退轉と爲すと說くや。答ふ、

已に不動に住する諸の菩薩は　　法爾に不退の智を得

彼の智を二乘も轉ずること能はず　　是の故に獨り不退の名を得

此れは[五四]信等の出世間の善根を有する所の諸の聲聞・獨覺乃至第七地に住する菩薩を障礙し、其れをして退轉せしむること能はず。故に不退轉と名づくと謂ふなり。餘の十種の菩薩の三菩提の爲めに諸法の中に於て退轉せざるに非ざるなり。已に不退轉の因緣を說けり。此の中、又殊勝の授記を得。大乘の中に[五五]四種の授記を說く。謂はく未發菩提心授記・共發菩提心授記・隱覆授記・現前授記なり。是れを四種の授記と爲す。中に於て、未發菩提心授記とは、其の人利根にして增上の信を具するに、諸の佛世尊は無礙の佛眼を以て觀じ已りて而も授記を爲す。共發菩提心授記とは、善根の種、菩提の種を成熟し先きに已に修習し、其の根猛利にして增上の行を得。但し諸の衆生を解脫せしめんと欲するが故に、卽ち發心の時に不退轉に入り墮落法なくして八不閑(謂はく八[五六]難なり)を離る。此の人或は自ら授記せらるゝを聞けば、六波羅蜜に於て精進を發さず。如し其れ聞かざれば更に精進を發せば聞かざらしめ、他人をして其の授記を聞いて疑心を斷たしめんと欲するが爲めに、佛は威神を以て隱覆して授記す。若し菩薩出世の[五七]五根を成熟して無生忍を得、菩薩の不動地に住すれば、彼れを卽ち現前に授記す。是れを四種の授記と爲す。彼の無生忍を得たる菩薩は已に決定するが故に、諸佛世尊は現前に授記するなり。又別に[五八]密意の授記有り。以て第五と爲す、『法華經』に說くが如し。

【五二】三菩提(saṁbodhi)。遍知と譯す。
【五三】不動地を不退轉となす。
【五四】信等善根。一〇九頁參照。
【五五】四種の授記。『首楞嚴三昧經』卷下に出づ。
【五六】八難。佛に遇ひて聞法し得ない境遇の者。一、地獄・二、餓鬼・三、畜生・四、長壽天・五、邊地・六、聾盲瘖瘂・七、世智辯聰・八、佛前佛後。
【五七】五根。一〇九頁參照。
【五八】密意の授記。

生ならず亦滅ならず　　不生不滅に非ず
倶、不倶に非ず　　空不空を說くも亦爾り

此の中、菩薩は緣生を觀ずる時是の念を作す、「緣生の法は但だ施設のみ有り。無生の中に生有るが如し。是の故に生ずる者は自體不成なり。自體不成なるが故に生は則ち非有なり。生の自體の非有なるが如く、彼の滅を二と爲す。二倶なるも體無きこと生と滅の如し。彼の不生、不滅を二と爲す、亦二倶なるも體無し。彼の生と滅の二種の中、生不生、滅不滅も亦有ならず、互に相違するが故なり。空も亦是の如し。有なる者の自體無きが如くなる故なり。彼の不空及び空不空も亦爾り」と。[四九]問ふ、若し是の念を作すに、緣生を以ての故に諸法に自體無しとせば、何が故ぞ復た是の念を作すも、亦緣生の法有ること無からんや。答ふ、

[五〇]何れの所有る法に隨ひ　　中に於て不動を觀ずる。
彼れは是れ無生忍なり　　諸の分別を斷つが故なり

是の如く菩薩は如實に緣生を觀ずる時、諸法の自體の見を離るゝことを得。自體の見を離るゝが故に、即ち法の自體を取ることを斷ち、法の自體を斷つを得る時是の念を作す。「內外の法無きに非ざるも、而も法の自體無し。緣生の法有りと雖、但だ葦束・幻夢の如し。若し法、緣より生ずれば、彼れは自體不生なり」と。是の觀を作し已るに、若しは沙門、若しは波羅門の動かす能はざる所、而も證を取らず。彼れは樂ひて無生の法を觀ずるを以て、諸の分別を斷つが故に、說いて無生忍と名く。[五一]此の菩薩は即ち菩薩の不動地に住す。偈に言く、

既に此の忍を獲已れば　　即時に授記を得
「汝は必ず當に作佛すべし」と　　便ち不退轉を得

此の無生忍を得るが故に、即ち得る時に於て前に非ず後に非ず、諸佛は現前して作佛することを

【四九】無生忍を明かす。
【五〇】無生忍。
【五一】不動地の授記。

[四四] 問ふ、此に應に思量すべし。菩薩は泥犁に住するを畏ると爲んや、聲聞・獨覺地に墮するを畏ると爲んや。答ふ、

[四五] 假使、[四六] 泥犁に墮するも　　菩薩は怖れを生ぜざれども
聲聞・獨覺地は　　便ち大恐怖と爲す

菩薩は設ひ泥犁に住し、無數百千の苦と倶なるも、聲聞・獨覺地に墮する怖畏には比せず。

問ふ、何が故に此の如くなるや。答ふ、

泥犁の中に墮するも　　畢竟じて菩提を障ゆるに非ず
聲聞・獨覺地は　　則ち畢竟じて障りと爲る

設ひ泥犁に入るとも、正覺の道に於ては、畢竟じて障礙と作ること能はず。泥犁に住する時乃至惡業の盡くる邊は、菩提の道に於ては暫く障礙と爲る。菩薩若し聲聞・獨覺地に墮すれば、則ち畢竟じて生ぜざるが故に、聲聞・獨覺地は正覺の道に於て乃ち障礙と爲る。是の義に由るが故に、菩薩は泥犁に入るも、聲聞・獨覺地に墮する怖畏には比せざるなり。

[四七] 問ふ、其の怖れとは如何。答ふ、

壽を愛する人は　　斬首を怖畏すと說くが如く
聲聞・獨覺地は　　應に是の如き怖れを作すべし

『經』の中に佛世尊は是の如きの說を作せり「壽を愛する人は斬首を怖畏するが如く、菩薩、無上菩提を欲求するに、聲聞・獨覺地を怖畏するも、亦應に此の如くなるべし」と、是の故に菩薩は泥犁に入ると雖、聲聞・獨覺地に墮する怖畏には比せざるなり。

[四八] 問ふ、已に未だ無生忍を得ざる諸の菩薩の障礙の法を說けり。此の菩薩は云何んぞ無生忍を得るや。答ふ、

【四四】菩薩の大怖畏。
【四五】『十住毘婆沙論』第五易行品の第二偈と同意。
【四六】泥犁(Niraya)。地獄。
【四七】二乘地は斬首の如し。
【四八】無生忍を得る法を明かす。緣生の觀察。不生不滅等の四句。

精進して息むべからず　　荷は重擔なるを以ての故なり

復た四因緣の中、一の因緣に隨ふも菩薩は皆不退轉を得と雖、而も精進して休息すべからず。先に是の言を作すに由りて、「我當に諸の衆生をして皆涅槃を得しむべし」と。荷の是くの如く重擔なるを以ての故に、其の中間に於て精進して息まざるなり。

[四〇]問ふ、何が故に其の中間に於て精進して休息することを得ざるや。答ふ、

[四一]未だ大悲と忍とを生ぜざれば　　不退轉を得と雖

菩薩は猶ほ死有り　　放逸を起すを以ての故なり

四因緣の中に於て何れかの因緣に隨ひて、不退轉を得る菩薩、彼れ未だ大悲を生ぜず乃至未だ無生忍を得ず。中間に業力にて死生を受くるは、放逸に入るに由るが故なり。是れを以て菩薩は應當に勤行すること頭衣を然すが如くすべし。無生忍を得んが爲めの故に、其の中間に於て精進して息まざるなり。

[四二]問ふ、菩薩に復た何なる死有りや。答ふ、

[四三]聲聞・獨覺地に　　若し入るを便ち死と爲す

菩薩の諸の解知する所と　　根を斷ずるを以てなり

前に說きし所の四種の因緣の如きは、何れの因緣に隨ひて不退轉を得るも、此の菩薩は未だ大悲を有せず未だ忍を得ず、未だ聲聞・獨覺地を過ぎざれば、或は惡友の力を以て生死の苦を怖るゝが故に、或は受生の中間なるが故に、或は劫壞の時間、菩薩を瞋嫌し正法を毀謗するが故に、菩提心を失ひ、聲聞・獨覺地の心を起し已りて、或は聲聞に於て解脫し、若しは獨覺の解脫に於て證を作せば、彼れは菩薩の根謂はゆる大悲を斷つ。是れを以て諸の菩薩及び佛世尊を名づけて死を說き解し知ると名く。

【四〇】未得忍の菩薩の障礙法を明かす。

【四一】『十住毘婆沙論』第十三略行品の第二十八偈と同意。

【四二】二乘地に入るは菩薩の死。

【四三】以下の四偈は『十住毘婆沙論』第五易行品の第一偈乃至第四偈と同意。

利・名・讃・樂等の　　　四處に皆著せず
上に反するも亦無礙なり　　此等を名づけて捨と爲す

利養・名聞・讃歎・安樂等の中に於て繫著する所無く、此れと相反する無利・無名・毀・苦等の中にも亦退礙せず、愛憎を捨離し中に處して住し、復た分別なし。此れを第二に世間の捨を説くと名づく。

[三三]問ふ、若し菩薩、諸法の中に於て、第一義の捨を作さば、菩提の爲めの故に、頭衣を然すが如き是の如き勤行云何んが得べけん。答ふ、

[三四]菩薩は菩提の爲に　　乃至、未だ不退ならざるまで
譬へば頭衣を燃くが如く　　應に是の勤行を作すべし

諸法に於て應に是の如く捨つべしと雖、而も菩薩は決定して修行すること頭衣を然すが如く、乃至未だ菩提を退轉せざるを得ざる菩薩まで、菩提の爲の故に應當に勤行すべし。中に於て、菩薩に[三五]五種の菩提を退せざる因緣有り。應に知るべし。何をか五となす。[三六]『華聚』等の經の中に說くが如し。若しは大願を具足する諸の菩薩及び佛世尊の名號を聞くが故に、是れを第一の因緣と爲す。若しは彼の佛世尊の國土に生ぜんと願ふが故に、是れを第二の因緣と爲す。『般若波羅蜜』等の深經を受持し及び說くが故に、是れを第三の因緣と爲す。[三七]現前住等の三摩提を修習し、及び隨喜して得る者の故に、是れを第四の因緣と爲す。此の四因緣は未だ忍を得ざる菩薩の退轉せざることを說く。若し此の菩薩、菩薩の[三八]不動地に住し已りて無生忍を得るを、說いて究竟決定して不退轉と爲す。

[三九]問ふ、若し此の四種の因緣の中、隨ひて一の因緣を以てするも、菩薩は不退轉を得んとすれば、先きに頭衣を然すが如く應當に勤行すべしと說けり。彼れ云何んが成ずるや。答ふ、

然るに彼の諸の菩薩は　　菩提を求むる爲めの時

【三三】勤行精進を明かす。第一義の捨と勤行。

【三四】以下二偈は『十住毘婆沙論』第五易行品の第六、七偈と同意。

【三五】五種不退菩提の因緣。

【三六】華聚等經。『華聚陀羅尼呪經』等に不退五因緣の說なし。

【三七】現前住等三摩提(84頁)の偈に諸佛現前住牢固三摩提とあり。即ち般舟三昧(pratyutpanna-samādhi)をいふ。

【三八】不動地得忍の不退轉。

【三九】精進不息を明かす。

ことを得しめ、或は險難を救拔す。是の如き等を名づけて衆生を攝受する方便と爲す。當に此の諸の方便を以て衆生を攝受すべし。棄捨すべからず。

〔三〇〕問ふ、是の如き等の攝受方便を以て、衆生を攝し已りて何なる利を成就するや。答ふ、

作す所衆生を益し　倦まず放逸ならず
願を起して菩提の爲にし　世を利するは卽ち自らを利するなり

此の中、菩薩は願を作して世間を利益する者は、是の如き意を發す。「凡そ世間を利する事は我れ皆應に作すべし」と。此の誓ひを立て已りて、諸の衆生に作す所の事の中に於て、疲倦すべからず放逸なるべからず。又當に是の念を作すべし、「若し世間を利するは卽ち是れ自らを利するなり」と。是の故に菩薩は衆生を利樂する因緣に於て、棄捨すべからず。

〔三一〕問ふ、已に菩薩は常に應に衆生を利樂すべく、捨を行ずべからざるを說けり、諸法の中に於て捨つと爲んや捨てざるや。答ふ、

甚深の法界に入り　分別を滅離すれば
悉く功用有ること無く　諸の處自然に捨す

「法界」とは卽ち是れ緣生なり。是の故に先に說けり。如來の若しは出づるも出でざるも、此の法界・法性は常住なり。所謂緣生なりと。又先きに說けるが如く、「阿難陀よ、緣生は甚深なり、證も亦甚深なり」と。是の故に此の甚深の法界に入る菩薩は、一切の有無等の二邊を滅し、方便智を攝取し已りて、卽ち諸の動念・戲論・分別を斷じ、諸の取相を離れ、諸の心意識の行處皆復た行ぜず。乃至佛を行じ、菩提を行じ、菩薩を行じ、涅槃を行ずる處皆亦行ぜず。則ち諸法に於て復た功用無く、諸法の中に於て、心寂靜なることを得、大寂靜は復た分別無し。是れを第一義の捨と名く。此れ卽ち菩薩の無分別なり。已に〔三二〕出世間の捨を說けり。我今當に世間の捨を說くべし。

【三〇】攝受方便の利を明かす。

【三一】諸法に於ける捨を明かす。出世間の捨、卽ち寂靜無分別。

【三二】世間の捨、卽ち愛憎の捨離。

[二六] 問ふ、若し衆生有りて世樂を喜樂し、[二七] 三福の事に於て力能く行ずること無ければ、彼の人の所に於ては、當に何に所作すべきや。答ふ、

若し人　　天及び解脱の化を受くるに堪へざれば
便ち現世の利を以て　　力の如く應當に攝すべし

若し衆生有りて、專ら欲樂を求めて他世を觀ぜず、地獄・餓鬼・畜生に趣向し、教化して生天し解脱せしむべからざる者は、亦當に彼の智の小兒の如くなるを愍みて其の所應の如く現世に攝受し、已の力能に隨ひて施等を以て之を攝し、愍みて捨てざるべし。

問ふ、[二八] 若し菩薩は此の小兒の相に似たる諸の衆生の所に於て、方便して攝化するを得べきもの有ること無ければ、當に彼の人に於て何に所作すべきや。答ふ、

菩薩は衆生に於て　　緣無きも能く教化す
當に大慈悲を起して　　便ち棄捨すべからず

若し菩薩は罪惡を喜樂する愍れむべき衆生の中に於て、方便して能く攝化を行ふこと有ること無ければ、菩薩は彼に於て當に子の想ひを起し大慈悲を興すべし、道理有りて而も捨棄するを得ること無し。

[二九] 問ふ、已に衆生の中に於て應に攝受すべきを說けり、未だ攝受の方便の云何を知らず。答ふ、

施もて攝し及び說法し　　復た說法を聽聞し
亦利他の事を行ず　　此れを攝方便と爲す

諸の菩薩は衆生を攝受するが爲めの故に、或は布施を以て攝方便と爲し、或は他の施す所を受け、或は他の爲に說法し、或は他の說法を聽き、或は利他を行じ、或は愛語を以てし、或は同事を以てし、或は諸の明處を說き、或は教ふるに工巧を以てし、或は作業を示現し、或は病者をして愈ゆる

【二六】現世利益の攝受を明かす。

【二七】三福。施福・戒福・修福。施福は沙門、貧人等に飲食、衣服の類を施すこと。戒福は不殺生、不偸盜等の道德。修福は心意を守護して奔放せしめぬこと。

【二八】無緣の教化を明かす。

【二九】攝受の方便を明かす。

一を化して大乘に入るゝは　　此の福德を上たりと爲す

若し恒河沙等の衆生を敎化して、阿羅漢果を得しむるよりも、此の大乘の福は、彼の聲聞等の乘に一て敎化する福に勝過す。種子無盡なるを以ての故に、此の所有る種子は、能く餘の衆生等の爲に菩提心の方便と作る。亦聲聞・獨覺を出生するを以ての故に、此の福は彼に勝る。此の福勝るとは、大乘は聲聞・獨覺乘よりも上れたるが故なり。又菩提心に無量無數の福德有るが故なり。又大乘に由りて三寶の種を斷たざるが故なり。是の故に大福を欲求し、應に大乘を以て衆生を敎化し、餘乘を以てせざるべし。

[二一]問ふ、諸の摩訶薩は豈唯だ大乘を以て衆生を敎化するのみにして、聲聞・獨覺乘を以てせざらんや。答ふ

敎ふるに聲聞乘　　及び獨覺乘を以てする者は

彼れ少力なるを以ての故に　　大乘の化に堪へざるなり

若し中、下意の衆生にして、利他の事を捨てゝ大悲を闕き、大乘を以て化するに堪へざる者は、乃ち聲聞・獨覺乘を以て、而も之を化度す。

[二二]問ふ、若し衆生有りて、三乘を以て化すべからざる者は、彼に於ては應に捨つべきや、捨てずと爲んや。答ふ

聲聞・獨覺乘　　及以び大乘の中に

化を受くるに堪へざる者は　　應に福處に置くべし

若し衆生有りて、生死を喜樂して解脫を憎惡し、聲聞・獨覺及び大乘を以て化するに堪へざる者は應當に敎化して[二三]梵乘の[二四]四梵行中に置くべし。若し復た梵乘の化に堪へざる者は、應當に敎化して[二五]天乘の十善業道、及び施等の福事の中に置くべし、捨棄すべからず。

【二一】聲聞乘・獨覺乘の敎化を明かす。

【二二】梵乘・天乘・人乘の敎化を明かす。

【二三】梵乘。梵天に生る道。梵は大梵天王で娑婆世界の王として色界初禪に居る。

【二四】四梵行。梵天に生るゝことを得る福業。一に佛舍利を供養する爲に塔を建つ。二に僧伽を供養する爲に寺を建て、四事即ち衣服・飲食・臥具・湯藥を供給する。三に僧の諍訟を止め和合せしむ。四に衆生に對して慈・悲・喜・捨を修する。四梵福ともいふ。

【二五】天乘。欲界の六天、色界の四禪、十七天、無色界の四天に生る道。天の果報は長壽、端正の身を得て遊戯娛樂に就る。

[一六]「諸佛の神變を聞く」とは、中に於て、諸佛世尊は諸の衆生を教化するが故に、神通變現を起して應に度すべき所の衆生に隨ひ、衆生の身に隨ひ、其の形量長短、寬狹に隨ひ、その色類の種々の差殊に隨ひ、その音聲に隨ひて清淨に分別す。諸佛世尊は種々希有の神通を以て、その所行の如く、その信欲の如く、彼々の方便差別の神變を以て而も之れを教化す。此事を聞き已りて、「愛・喜・受・淨なるを名づけて大喜となす」とは、中に於て若し心、勇悅するを愛と名づけ、愛心、身に遍きを喜と名づけ、喜心、樂を覺ゆるを受と名づけ、樂を受くる時に於て正覺者の大神通の德を念ずるに、其心濁らざるを淨と名づけ、彼の心淨らかなる時、喜の意充滿するを名づけて大喜となす。彼の少分の乘に登る者も亦喜ありと雖、不共を以ての故に大喜の名を得。

[一七] 問ふ、菩薩は應に衆生を捨つべきや、捨つべからずと爲んや。答ふ、

菩薩は衆生に於て　　應に捨棄することを得べからず
當に力の堪ふる所に隨ひて　　一切の時に攝受すべし

菩薩摩訶薩は常に諸の衆生を利樂することを念ず。若し貪・瞋・癡の爲に惱され、慳恪・破戒・恚恨・懈怠・亂心・惡智の道に登り、異路に入る。これ等の衆生も捨つべからざる所なり、一切の時に於て[一八]施・戒・修を說き、力の能ふ所に隨ひて當に攝受すべし。捨棄すべからず。

[一九] 菩薩は初めの時より　　應に力の堪能なるに隨ひて
方便して衆生を化し　　大乘に入らしむべし

此の大乘に登る菩薩は、衆生の中に於て堪能する所に隨ひて初めより應に作すべし。前の方便波羅蜜の中に說く所の方便の如く、應當に精勤して諸の方便を以て衆生を教化し、此の大乘に置くべし。

[二〇] 問ふ、何が故に菩薩は但だ大乘を以て衆生を教化し、聲聞・獨覺乘を以てせざるや。答ふ、

恒沙の衆生を化して　　羅漢果を得しむるよりも

【一三】 四無畏。一、一切智無畏、二、漏盡無畏、三、說障道無畏、四、說出道無畏。

【一四】 十力。一、了達一切法因果、二、如實知去來今所起業果報處、三、如實知諸禪定垢淨入出相、四、如實知衆生諸根利鈍、五、如實知衆生所樂不同、六、如實知世間種々異性、七、如實知至一切處道、八、如實知宿命事、九、如實知生死事、一〇、如實知漏盡事。

【一五】 十八不共。一、身無失、二、口無失、三、念無失、四、無異想、五、無不定心、六、無不知已捨、七、欲無減、八、精進無減、九、念無減、一〇、慧無減、一一、解脫無減、一二、解脫知見無減、一三、一切身業隨智慧行、一四、一切口業隨智慧行、一五、一切意業隨智慧行、一六―一八、智慧知過去・未來・現在世無礙。

【一六】 佛の神通變化を明かす。

【一七】 捨を明かす中、先づ菩薩は衆生を捨てざるを明かす。

【一八】 施・戒・修。七七頁の註參照。

【一九】 菩薩の教化を明かす中、先づ大乘の教化。以下六偈は『十住毘婆沙論』第十三分別二地業道品の第三偈乃至第八偈と同意。

【二〇】 大乘教化の勝るるを明かす。

譬へば長者の唯一の福子にして病苦に遭へるに、愛は皮肉に徹し骨髓に入り、但「何れの時にその病愈ゆることを得ん」と念ずるが如く、悲も亦かくの如し。唯、苦の衆生の中に於て起るのみ。慈とは遍く一切衆生の中に於て起る。又復た慈の故に諸の衆生に於て無礙心を得、悲の故に生死の中に於て疲厭あること無し。又慈は善人の中に於て生じ、悲は不善の人の中に於て生ず。又、菩薩は慈增長するが故に已れの樂に著せずして、則ち大慈を生じ、悲增長するが故に諸の支節及び命を捨て、則ち大悲を生ず。

[三]若し佛の功德を念じ　及び佛の神變を聞いて
愛・喜・受・淨なる　此れを名けて大喜となす

「[四]若し佛の功德を念ず」とは、中に於て何者かこれ佛の功德なるや。謂く、諸佛世尊は無量千百[五]俱致劫の中に、善根を聚集するが故に、[六]身・口・意業を護らざるが故に、[七]五種の應に知るべきものの中に疑を斷つが故に、[八]四種の難に答ふる中に失なきが故に、[九]三十七の助菩提法を教授するが故に、[一〇]十二分の緣生の中、因緣を覺るが故に、[一一]九教を教ふるが故に、四種の住持具足するが故に、四無量を得るが故に、六波羅蜜を滿足するが故に、菩薩の十地を說くが故に、[一二]出世の五衆成滿するが故に、[一三]四無畏、[一四]十力、[一五]十八不共の佛法具足するが故に、無邊の境界なるが故に、自心を自在に轉ずるが故に、厭足なき法なるが故に、金剛の如き三摩地を得るが故に、虛しく說法せざるが故に、能く法を壞るもの無きが故に、世間の導師なるが故に、能く頂を見るもの無きが故に、與に等しきもの無きが故に、能く勝るもの無きが故に、不可思法なるが故に、大慈・大悲・大喜・大捨を得るが故に、百福相なるが故に、無量善根なるが故に、無邊の功德なるが故に、無量の功德なるが故に、無數の功德なるが故に、分別すべからさる功德なるが故に、希有の功德なるが故に、不共の功德なるが故に。是の如き等を佛の諸の功德を念ずと名づく。

【三】大喜を明かす。
【四】佛の功德を明かす。
【五】俱致(Koṭi)。億。
【六】身・口・意業を護らず。佛は一切煩惱を斷ち一切善根を成就するから自然に三業清淨なり。故に特に守護することなし。『十住毘婆沙論』第十一參照。
【七】五種應知。三世の疑を斷ち、三世を過ぐる法及び不可說法の疑を斷つ。
【八】四種答難。一、決了答、二、解義答、三、反問答、四、置答。
【九】三十七助菩提法。四念處、四正勤、四神足、五根、五力、七覺分、八聖道分。一〇九頁參照。
【一〇】十二分緣生。一三一頁參照。
【一一】九教。經の分類で多說ある中に『十住毘婆沙論』第九念佛品には、修多羅(Sūtra)、岐夜(Geya)、授記(Vyākaraṇa)、伽陀(Gāthā)、憂陀那(Udāna)、尼陀那(Nidāna)、如是語經(Itivṛttaka)、斐肥儸(Vaipulya)、未曾有經(Adbhutadharma)。
【一二】出世五衆。五分法身(戒・定・慧・解脫・解脫知見)。

巻の第三

[一]「復た有餘師の意は　　諸の覺の資糧は
　實と捨と及び寂と智との　　四處の所攝なり

又、一論師は是の如きの念を作す。「一切の菩提の資糧は皆、實處、捨處、寂處、智處の所攝なり」と。

實とは虛誑ならざる相なり。實は卽ち是れ戒なり。この故に實を尸羅波羅蜜となす。捨は卽ち布施たり。是の故に捨處を陀那波羅蜜となす。寂とは卽ち心濁らざることなり。若し心濁らざれば、愛・不愛の事の動かす能はざる所なり。この故に寂處を羼提波羅蜜及び禪那波羅蜜となす。智處を還た般若波羅蜜と爲す。毘梨耶波羅蜜は遍く諸處に入るに、以て精進なければ、則ち諸處に於て成就する所なし。この故に毘梨耶波羅蜜は諸の事を成就す。この故に一切の資糧は皆四處に入るなり。

[二]問ふ、『經』に說くが如く、「慈の資糧を以て無礙心を得、捨の資糧を以て憎愛を斷つことを得」と。中に於て慈と悲に何の差別ありや。答ふ、

大悲は骨髓に徹し、　　諸の衆生の依となる
父の一子に於けるが如し　　慈は則ち一切に遍し

若し生死の嶮道に入り、地獄・畜生・餓鬼の諸趣に墮し、惡邪見の網に在りて愚癡の稠林に覆はれ邪徑と非道を行ふこと、猶ほ盲闇の、出離に非ざる中に見て出離と爲すが如く、老・病・死・憂・悲・苦・惱の諸賊の爲に執持せられ、魔意の稠林に入り、佛意を去ること遠き者に、菩薩の大悲は、自身の皮肉及び筋を穿ち、徹して骨髓に至り、諸の衆生の爲に而も依處と作り、此の衆生をして、是の如き生死の曠野、險難の惡路を度ることを得て、一切智の城、無畏の宮に置かしめんとすること、

【一】菩提資糧の四處（實・捨・寂・智）所攝說。『十住毘婆沙論』第一の入初地品に「有人言く、是の四功德處、謂はゆる諦・捨・滅・慧なり。諸の如來は此中より生ず、故に名づけて如來の家と爲す」とあり。

【二】慈悲喜捨を明かす。慈と悲の別。

火・風等の微塵數を知り。所有る衆生身の微塵數、國土身の微塵數を知り。諸の衆生の麁身・細身の差別を知り、乃至、亦微塵の合成せる地獄・畜生・餓鬼・阿修羅・天・人等の身を知り。欲・色・無色界の成壞を知り。及び彼の小大無量等の差別を知り。衆生身中の業身・報身・色身を知り。國土身中の小大染淨及び横住・倒住・平住等の方網の差別を知り。業報身の中に差別する名字身を知り。聲聞・獨覺・菩薩身の中に差別する名字身を知り。如來身の中の正覺身・願身・化身・住持身。形色相好莊嚴身・威光身・意念身・福身・法身を知り。智身の中の、若しは善分別、若しは如理思惟、若しは果相應の攝、若しは世・出世、若しは安立三乘、若しは共法・不共法、若しは出世道・非出世道、若しは學・無學を知り。法身の中の平等不動にして世諦の處所に安立する名字、安立する衆生、非衆生法、安立する佛法・聖衆を知り。虛空身の中の無量身・入一切處非身・眞實無邊無色身の差別を知る。是の如き等の身を出生する智を得。又、命自在・心自在・衆具自在・業自在・願自在・信解自在・神通自在　智自在・生自在・法自在を得。是の如き等の十自在を得已るを不思議智者・無量智者・不退智者と爲す。是の如き等の智に八萬四千の行相有り。是れ菩薩の知る所の智波羅蜜なり。是の如く分に隨ひて智波羅蜜を解釋せり。若し具さに演べんと欲せば、唯佛世尊のみ乃ち能く解説せん。

此の六波羅蜜は　　總て菩提の資糧なり
猶ほ虛空の中には　　諸の物を攝め盡すが如し

解釋せし所の如き六波羅蜜の中に、總て一切の菩提資糧を攝むること、譬へば虛空に行住する諸の物の、有識・無識悉く攝めて中に在るが如し。是の如く其の餘聞の資糧等の諸の資糧の、攝めて六波羅蜜の中に在ること、同相にして異ること無し。應に知るべし。

三摩提力とは。憒閙の中に於て遠離行を行ずるに、諸有音聲及び語道の出ずる所、聲刺と爲りて初禪を障礙せず。善く覺觀を行じて二禪を礙えず。愛喜を生じて三禪を礙えず。衆生を成熟し、諸法を攝受すること、未だ曾て捨廢せずして四禪を礙えず。是の如く四種の禪に遊ぶなり。諸禪惡對して破壞すること能はず。諸禪に遊ぶと雖、而かも禪に隨ひて生ぜず。これを菩薩の三摩提力と名づく。

般若力とは。謂はく世・出生法の中の壞すべからざる智なり。生々の中に於て師の敎に由らず。諸の所作の業、工巧明の處。乃至世間の最勝の作し難く忍し難きを。菩薩は皆得て現前す。若しは出世法にて世を救度せんとして、菩薩の智慧は隨順して入り已るに、彼の天・人・阿修羅の衆も破壞すること能はず。これを般若力と名づく。是の如き等の菩薩の七力、已に略して解說せり。若し具さに演べんと欲せば邊際あること無し。此れを菩薩の力波羅蜜と名づく。

〔三三〕已に力波羅蜜を解釋せり。我れ今まさに智波羅蜜を說くべし。此の中、若しは世間に行はるる書・論・印・算數等、及び界論、（謂はく風、黄、痰、癃等の性）方論（謂はく醫方論）の諸の乾痟・癲狂・鬼持等の病を治し、諸の蠱毒を破し。又、戲笑に攝むる所の文章談謔等を作して、歡喜を生ぜしめ。村城・園苑・陂湖・池井・華果・藥物及び林叢等を出生し、金銀・摩尼・琉璃・貝玉・（石白くして貝の如し）珊瑚等の寶性を示現し。日月の薄蝕・星宿・地動・夢怪等の事に入り。諸の身分支節等を建立し相す。禁戒の行處、禪那・神通無量の無色處、及び餘の正覺相應の衆生等を利樂する彼岸を知り、又復た諸の世界の成壞を知り。世界の成るに隨ひ、世界の壞するに隨ひて皆悉く了知し。又、業集るが故に世界成り、業盡くるが故に世界壞することを知り。世界は若干の時成りて住することを知り、世界は若干の時壞して住することを知り。諸の地界・水界・風界・火界、若しは大、若しは小、若しは無量等の差別を知り。極細の微塵を知り。亦、所有る微塵聚集し、微塵分散することを知り。世界中の所有る地の微塵數を知り。是の如く亦水・

【三三】第四、智波羅蜜を明かす。

慢・瞋恚・兇惡等を離れしむるもの有れば、彼れ是の如き神足住持智を得已りて、此住持智を以て住持する所有るものは、意に隨つて皆得。若し大海を以て牛迹と爲さんには、卽ち牛迹と成し。若し牛迹を以て大海と爲さんには、卽ち大海と成し。若し劫燒を以て水聚と爲さんには、卽ち水聚と成し。若し水聚を以て火聚と爲さんには、卽ち火聚と成し。若し火聚を以て風聚と爲さんには、卽ち風聚と成し。若し風聚を以て火聚と爲さんには、卽ち火聚と成す。是の如く若しこの住持を以て、住持する所の下・中・上の法に隨ひて。既に住持し已るに、人の能く震動し、隱沒すること有ること無し。謂はゆる若しは釋、若しは梵、若しは魔、及び餘の世間の同法者たり。佛世尊を除く。衆生の類の中に於て、衆生の、菩薩の住持する所の法に於て震動し、隱沒するものあること無し。住持力を以ての故に、彼の種々勝上の喜踊、尊敬する衆生の爲めに說法す。彼の神足力は高出自在にして、魔煩惱を過ぎて佛の境界に入り諸の衆生に覺らしめ。宿世の善根資糧を聚集するに、魔及び魔身の天等も障礙すること能はず。これを菩薩の神通力と名づく。

信力とは。佛・法・僧及び菩薩の行の中に於て、信解すること一向にして沮壞すべからず。若し惡魔、佛身と作りて來り、何れの法に隨ひて其の信を壞せんと欲するも、菩薩は信解力を以ての故に、彼は菩薩の信力を動かすこと能はざる。これを信力と名づく。

精進力とは。菩薩若し精進を發起して、彼々の善法と相應する時、彼々の處に於て牢固力を得。受行する所に隨ひて若しは天、若しは人、動壞して其れをして中止せしむること能はざる、此を精進力と名づく。

念力とは。彼々法の處に住して其の心安止す。諸の餘の煩惱も散亂すること能はず。念力の持するあるを以ての故に諸の煩惱を破す。彼の諸の煩惱は菩薩の念ずる所を破壞すること能はざる。これを念力と名づく。

象力は一の大香象力に當る。十の大香象力は一の大力士力に當る、十の大力士力は一の半[二六]那羅延力に當る、十の半那羅延力は一の那羅延力に當る、十の那羅延力は一の大那羅延力に當る、十の大那羅延力は一の過百劫菩薩力に當る、十の過百劫菩薩力は一の過百千劫菩薩力に當る、十の過百千劫菩薩力は一の得忍菩薩力に當る、十の得忍菩薩力は一の最後生菩薩力に當る。此の力に住し已りて、菩薩は卽ち生るゝ時に於て能く七歩を行く。十の最後生の菩薩の生るる時の力は、乃ち菩薩の少年の時の力に當る。菩薩此の力に住し已りて、菩提場に趣き等正覺を成ず。正覺を得已りて過百千の功德力を以ての故に、如來正遍知の一種の處非處力を成就す。是の如き等の十力を成就する。此れを諸佛菩薩及び餘の少分衆生の福報生力と名づく。

神通力とは、謂はく[二七]四神足を善修し多作し已りて、此の希有の神通力を以ての故に、諸の衆生等を調伏することを得。彼れ希有の神力を以て、若しは色、若しは力、若しは住持等を顯現す。若し諸の衆生、應にこの色像を以て調伏することを得べき者は、卽ちこの色像を以てす。彼々の衆生の所に於て、或は佛の色像、或は獨覺の色像、或は聲聞の色像、是の如き或は釋・梵の護世、轉輪王等の色像、若しは復た諸の餘の色像、乃至畜生の色像を示現す。衆生を調伏せんが爲の故に是の如き色像を示現す。若し多力・憍慢・瞋恚・兇惡・自高の衆生有りて、應にこの力を以て調伏することを得べき者は、卽ち此力現ず。或は大力士の力、或は四分の那羅延力、或は半那羅延力、或は一那羅延力なり。此の力を以ての故に、須彌山王の高さ十六萬八千踰膳那、寬さ八萬四千[二八]踰闍那なるも、三指を以て擧取し、[二九]菴摩勒果を擧ぐるが如く、他方世界に擲置するも、而かも[三〇]四天王天及び[三一]三十三天等は嬈惱せらるゝことなく、菩薩の力に於ても亦減損せず。又、この三千大千世界は復た寬曠なりと雖、水界より乃至[三二]有頂まで、之を手掌に置き劫を經て住す。諸の神通道に於て是の如き等の力を具足し示現す。若し憍慢・增上慢・瞋恚・兇惡・自高の衆生の、說法にて調伏して、憍慢・增上

【二六】那羅延(Nārāyana)。大力を有する神。

【二七】四神足。第六卷の初め頁二八參照。

【二八】踰闍那(Yojana)。聖王一日の行程で支那の四十里に當るといふ。

【二九】菴摩勒果(Āmra)。mango 樹の果實。長さ四五寸、周り七寸餘あり。六月に黃赤色に成熟する。液汁に富む橙色の果肉に甘酸味がある。

【三〇】四天王天。六欲天の第一。須彌山(Sumeru)の中腹の東方に持國天王、西方に廣目天王、南方に增長天王、北方に多聞天王が住す。

【三一】三十三天。六欲天の第二忉利天(Trāyastriṃśadeva)。須彌山の頂上に在り。

【三二】有頂。無色界の第四處。三界の最高位、絕頂。

に入り、衆生の心に隨ひて示現し、其れをして歡喜せしめん」と。是れ第七の大願なり。「諸の菩薩と同一の心たらんが故に、不共の善根を聚集せんが爲の故に、諸の菩薩と同一に攀緣し、常に菩薩を離れざる平等の爲の故に、自心を發起して如來の威神に入らんが爲の故に、不退を得て神通を行ぜんが爲の故に、諸の世界に遊行せんが爲の故に、諸の大衆の論に影到せんが爲の故に、自身に諸の生處に願入せんが爲の故に、不思議の大乘を具足せんが爲の故に、菩薩行を行ぜんが爲の故に」と。是れ第八の大願なり。「不退轉に昇りて菩薩行を行ぜんが爲めの故に、身・口・意業を空しくせざらんが爲の故に、見る時に即して佛法を決定せしむる故に、一音聲を出す時に即して智慧に入らしむるが爲の故に、信ずる時に即して煩惱を轉ぜしむるが爲の故に、大藥王の如き身を得んが爲めの故に、諸の菩薩行を行ぜんが爲めの故に」と。是れ第九の大願なり。「諸の世界の中に於て正しく阿耨多羅三藐三菩提を覺らんが爲めの故に、一毛道の中及び餘の一毛道の中に於て、皆出生・坐道場・轉法輪・大般涅槃を現ずるが故に、智慧を以て佛の大境界威神に入るが爲めの故に、一切衆生界に於て、其深心の如く、佛の出づる時に開悟すべきものを寂靜を得しめ、而かも示現せんが爲めの故に、正しく一法一切法は悉く涅槃相なりと覺らんが爲めの故に、一音聲を出し諸の衆生をして心に歡喜せしめんが爲めの故に、一大涅槃を現じて而かも行力を斷ぜざらんが爲の故に、大智慧地を現じて諸法を安立せんが爲めの故に、佛境界の法智神通を以て諸の世界に普遍せんが爲の故に」と。是れ第十の大願なり。是の如き等の十大願を大欲し大出生するを首と爲し、此の十大願を滿たし已り、菩薩の阿僧祇百千餘の願を建立して、菩薩の歡喜地に住することを得。此れを願波羅蜜と名づく。

二五　已に願波羅蜜を解釋せり。我、今當に力波羅蜜を說くべし。此中略して說くに、諸の菩薩に七種の力あり。謂く、福報生力・神通力・信力・精進力・念力・三摩提力・般若力なり。福報生力とは、十の小象力の如きは一の龍象力に當る。十の龍象力は一の香象力に當る。十の香

【二五】第三、力波羅蜜（七力）を明かす。

彼の種々の巧方便に依りて　　一切の愛・不愛を捨離す、
此の乘は諸佛の讃歎する所　　百千の功德をもつて而かも莊嚴し
能く世間極淨の信を生ず　　勝妙なる善道を說くを以ての故なり、
緣覺乘・聲聞乘　　及以び天世の諸乘の中に於て
皆、十善を以て而して成熟し　　亦、人乘に於て人を成熟す。

〔二四〕已に巧方便波羅蜜を解釋せり。我、今まさに願波羅蜜を說くべし。諸の菩薩、最初に十大願あり。謂はゆる「諸佛を供養し給侍して餘すこと無からん」と。是れ第一の大願なり。「彼の佛所に於て大正法を持し、正覺を攝受し、普く正敎を護らん」と。是れ第二の大願なり。「諸の世界の中に諸の佛出興し、始め兜率宮に住するより乃至退墮し、胎に入り胎に住し、初めて生れ、出家し、正覺を證し、請はれて法輪を轉じ、大涅槃に入るまで、皆その所に往きて受行し供養し、初めて捨離せざらん」と。是れ第三の大願なり。「諸の菩薩行は曠大にして無量なるも、諸の波羅蜜の所攝を離れず。善淨の諸地より總分・別分・同相・異相・共轉・不共轉等の諸の菩薩行を出生すること、如實に地道に說くが如く、波羅蜜を修治して敎誡し敎授し、授け已りて住持する、是の如き等の心を發起し出生せん」と。是れ第四の大願なり。「無餘の衆生界の有色・無色・有想・無想と、卵生・胎生・濕生・化生と、三界に同じく入り、六趣に共に居り、諸の生れて順ひて去るものは名色の所攝なり。無餘の衆生界を皆悉く成熟して佛法に入らしめ。諸趣を斷除して一切智智に安立せん」と。是れ第五の大願なり。「無餘の諸の世界の曠大無量なる、若しは細、若しは麁、若しは横、若しは倒、若しは平（たひらか）に住する等の、同入し、共居し、順去するもの、十方の分々は猶ほ帝網の如きに、分々に入りて智を以て順行せん」と。是れ第六の大願なり。「一切土卽一土、一土卽一切土にして平等清淨なり。無量の國土を普く皆莊嚴して諸の煩惱を離れ、道を淨めて無量の智相を具足し、衆生充滿して佛の上妙の境界

【二四】第二、願波羅蜜（十大願）を明かす。『十住毘婆沙論』第二、三の釋願品と同意。

流轉の中に於て相應して
此等の苦聚は
諸佛は便ち彼の菩薩を說きて
論の中に若し善く該綜するあるは
工巧等の明及び餘事
戒・財・聞・修・寂・調等
攝し已りて復た常に相續せしむるを
或は女身を現じて男子を化し
或は男身を現じて女人を化し
若しは染境の樂を厭はずして
衆生の門に隨ひて種々に化し
或は無我を信解し
是の人未だ世間法を離れざれば
業及び果に於て信順を生ずるも
彼の苦果を受くる時に當りて
若しは聲聞の出家する者に於ては
或はまた緣覺道に置き
其れをして當に正覺乘を得せしむ
若しは應に觀察して現に果を見
是の如く初より究竟に至るまで

衆生は種々の諸の過惡を受く
衆生の處に於て起す哀愍を障ゆること能はず
一切世間の無礙の悲とす
衆多の別人の作す所の業なり
皆愛語を以て之を授與し
此の功德を以て他を攝化し
勝仙は說きて善道を住すと爲す、
其れをして調伏して敎を受けしめ
其れをして調伏して敎を受けしむ、
其無道を愍みて道に入らしめ
極まれる逼惱の處も亦捨てず。
及び諸法の自性を離るるを知ること有るも
但だ此の如き觀察を作して轉じ
而かも無邊の諸の苦事あり
諸の苦の逼切する所を喜ばず
便ち、安穩なる寂靜處に置き
或は、十種の妙力乘に置き、
或は、寂靜及び天趣を得
其の所作の如く正に安置すべし、
丈夫は難事を皆よく爲す

復た、何等の生趣に隨ひ、何等の行相を以てするも、菩提の爲めの故に、自ら善根を増長し及び衆生を調伏することを得。彼々の生趣、彼々の行の中に於て、此の一切の處に凡て作すべき所の種々方便は諸の大人等の分別して說く所なり、我れ今彼の經中の微滴の分を說かん。若しは已に作せると、今作すとの微少の善を能く多からしめ、多きを能く無量ならしむる、此れを方便と爲す。自ら已れの爲にせず、唯衆生の爲にす、此れを方便と爲す。唯陀那を以て諸の波羅蜜をして滿足せしむ、此れを方便と爲す。是の如く尸羅を以て諸の生處を攝し。羼提を以て身・口・心を莊嚴して菩提の爲にし、毘梨耶を以て精進に安住し。禪那を以て禪を退せず。般若を以て無爲を捨離し。慈を以て爲めに依護と作り、悲を以て流轉を棄てず。喜を以て能く不喜樂の事を忍び。捨を以て諸善を發起し。天眼を以て佛眼を攝取し。天耳を以て佛耳を滿足し。他心智を以て各々の根を知り。宿住の念を以て三世を知ること無礙に、自在通を以て如來の自在通を得。衆生の心に入り、諸の行相を知らんと欲するを以て、已に度して還つて入り、無染にして而かも染し、擔を捨てて更に擔ひ、無量にして量を示し、最勝にして劣を現はし、方便を以ての故に涅槃に相應して而かも流轉に墮在し。涅槃を行ずと雖、畢竟じて寂滅せず。[一九]四魔を現行して而かも諸魔を超過し。[二〇]四諦智に達し及び無生を觀じて而かも[二一]正位に入らず。憒閙を行ずと雖、而も順眠の煩惱を行ぜず。遠離を行ずと雖、而かも身心の盡くるに依らず。三界を行ずと雖、而かも界の中に於て世諦を行ぜす。空を行ずと雖、而かも一切の時に恒に佛法を求め。無爲を行ずと雖、而かも無爲に於て證を作さず。[二二]六通を行ずと雖、而かも[二三]漏を盡さず。聲聞・獨覺の威儀を現ずと雖、而かも佛の法を樂欲することを捨てず。是の如き等の巧方便波羅蜜の中、所有る衆生を教化する方便、彼等の方便は、是れ菩薩の教化の巧方便の住處なること、應に知るべし。此の中、輸盧迦あり。

畜生道の中に諸の苦惱あり　　地獄と餓鬼の生も亦然り

【一九】四魔。煩惱魔・五陰魔・死魔・天魔。衆生を惱害し撓亂するもの。
【二〇】四諦智。苦・集・滅・道の四諦を證知する智。
【二一】正位。十地の第八不動地。八三頁參照。
【二二】六通。五神通に漏盡通を加ふ。
【二三】漏。煩惱の異名。

答ふ、般若波羅蜜とは、前に解釋せしが如く、初の資糧と爲す中に說けり。我、今更に其の相を釋せん。先づ偈に說くが如し。

施・戒・忍・進・定　此の五種の餘の
彼の諸の波羅蜜は　智度の所攝なり。

此の餘に四波羅蜜あり。謂はく巧方便波羅蜜・願波羅蜜・力波羅蜜・智波羅蜜等なり。此の四波羅蜜は皆、[一二]是れ般若波羅蜜の所攝なり。般若波羅蜜とは、佛世尊が菩提樹下に於て、一念相應の智を以て諸法を覺了せしが若き、是れ般若波羅蜜たり。又、是れ無礙相なり、身なきを以ての故なり。無邊相なり。虛空と等しき故なり。無等等相なり。諸法は無所得なる故なり。遠離相たり。畢竟空なる故なり。不可降伏相なり。得べきもの無き故なり。無句相なり、名身なき故なり。無聚合相なり。去來を離るゝ故なり。無因相なり。作者を離るゝ故なり。無生相たり。生あること無き故なり。無去至相なり。流轉を離るる故なり。無散壞相なり。前後際を離るる故なり。無染相なり。取る可らざる故なり。無戲論相なり。諸の戲論を離るゝ故なり。無動相なり。法界の自體なる故なり。無起相なり。分別ならざる故なり。無量相なり。量を離るゝ故なり。無依止相なり。依止あること無き故なり。無汙相なり。出生せざる故なり。不可測相なり。邊際なき故なり。自然相なり。諸法の自性を知る故なり。又般若波羅蜜は、是れ聞慧の相及び正思入なり。[一三]彼の聞慧の相に八十種有り、謂はく樂欲等なり。[一四]正思入に三十二種有り、謂はく[一五]奢摩他に安住する等なり。又般若波羅蜜は、[一六]十六種の宿住等の無明と倶ならず。是の如き等の般若波羅蜜の相は、量に隨ひて已に說けり。若し具さに說かば乃ち無量有り。

[一七]此の般若波羅蜜所攝の方便善巧波羅蜜の中に、[一八]八種の善巧あり。謂はゆる衆善巧・界善巧・入善巧・諦善巧・緣生善巧・三世善巧・諸乘善巧・諸法善巧なり。此の中の善巧波羅蜜は邊際あること無し。又

【一二】般若波羅蜜の無相を明かす。
【一三】聞慧相八十種。般若波羅蜜を聞ける者の行の種々相で欲修行、順心行、畢竟心行、乃至得一切佛法行。『無盡意經』に出づ。
【一四】正思入三十二種。般若を行ずる者の具ふる善入思惟の種別。善入受持定、善入分別慧、乃至善入不捨方便諸禪。『無盡意經』に出づ。
【一五】奢摩他（Samatha）止と譯す。
【一六】十六種云云。眞智慧者の凝滯せざる相の種別。不住無明行識名色六入觸受愛取有生老死乃至不住無明滅至生死滅等。『無盡意經』に出づ。
【一七】四波羅蜜中、第一、方便善巧波羅蜜を明かす。
【一八】八種善巧。眞慧者の具ふる方便の種別。『無盡意經』には第一を諸陰方便とし一々を解釋す。

業思惟忍淨・開胞藏相智淨・攝方便前巧淨・菩提場障礙淨・不著聲聞獨覺淨・安住禪那出生光明淨・佛三摩地不散亂淨・觀自心行淨・知諸衆生各々根如應說法淨、（本に二淨を闕く）彼の十六種の禪那波羅蜜は、此の三十二淨に由るが故に淸淨なることを得て、如來地に入るを得るなり。此の中に輸盧迦あり。

若し彼の十六種　及び三十二淨
禪度と相應すれば　是れ菩提を求むと爲す
禪那の彼岸に到り　善く禪那の業を知る
智者は五神通を　出生して退墮せず
諸の色盡くること有ることなしと　其の實性に通達す
亦、勝れたる天眼を以て　普く諸の色相を見る
淨らかなる天耳を以て　遠き諸の音聲を聞くと雖
智者は通達して知る　聲は言說すべきに非ずと
所有る衆生の心は　其の各々の相を觀ずるも
諸の心は猶ほ幻の如しと　其の自性を了知す
衆生の宿世の住を　實の如くに能く念知す
諸法は過ぎ去ることなしと　亦、その自性を知る
往詣して倶に土を知り　土の莊嚴を具するを見るも
土の相は虛空の如しと　其の實性を了知す
衆生の諸の煩惱は　皆、亂心を以て生ず
是の故に勝れたる智者は　廣く諸の禪定を修す

〔二〕問ふ、禪那波羅蜜を解釋する所は略說すること已に竟ぬ。今應に次第して般若波羅蜜を說くべし。

【二】般若波羅蜜所攝の四波羅蜜を明かす。

佛は菩提樹下に在りし時　　精進の故を以て菩提を覺れり
是の故に精進を根本と爲し　　佛身を得るの因なること前に已に說けり

[七]問ふ、已に略して精進波羅蜜を解釋せり。今應に禪那波羅蜜を說くべし。答ふ、禪那とは[八]四種の禪那あり。謂はく有覺有觀、離生喜樂にして初禪に遊ぶもの。無覺無觀、定生喜樂にして第二禪に遊ぶもの。喜行捨念慧を離れて受樂し、第三禪に遊ぶもの。苦樂捨念を滅して清淨、不苦不樂にして第四禪に遊ぶものなり。此の四禪の中に於て、聲聞・獨覺地を證することを離れ、佛地に迴向し已るを、禪那波羅蜜と名づくることを得。諸の菩薩に[九]十六種の禪那波羅蜜あり。諸の聲聞・獨覺に有ること無き所なり。何ものか十六種なる。謂はく不取實禪・不著味禪・大悲攀緣禪・三摩地迴轉禪・起作神通禪・心堪能禪・諸三摩鉢帝禪・寂靜復寂靜禪・不可動禪・離惡對禪・入智慧禪・隨衆生心行禪・三寶種不斷禪・不退墮禪・一切法自在禪・破散禪なり。是の如き等の十六種、是れを禪那波羅蜜と爲す。不取實禪とは如來を滿足する爲の禪なる故なり。不著味禪とは自ら樂みを貪らざる故なり。大悲攀緣禪とは諸の衆生の煩惱を斷ずる方便を示現するが故なり。三摩地迴轉禪とは欲界に攀緣して緣と爲すが故なり。起作神通禪とは一切衆生の心行を知らんと欲するが故なり。心堪能禪とは心自在智を成就するが故なり。諸三摩鉢帝禪とは諸の色・無色界に勝出するが故なり。寂靜復寂靜禪とは諸の聲聞・獨覺の三摩鉢帝に勝出するが故なり。不可動禪とは後邊を究竟するが故なり。離惡對禪とは諸の熏習相續を害するが故なり。入智慧禪とは諸の世間を出づるが故なり。隨衆生心行禪とは諸の衆生を度するが故なり。三寶種不斷禪とは如來の禪は無盡なるが故なり。不退墮禪とは常に定に入るが故なり。一切法自在禪とは諸の業を滿足するが故なり。（第十六の破散禪は本に闕きて解せず。）又、[一〇]念淨・慧淨・趣淨・慚淨・持心希望淨・迴向菩提淨・根淨・無依淨・不取實淨・起作神通淨・心堪能淨・身遠離淨・內寂靜淨・外不行淨・有所得見淨・無衆生無命無人淨・三界中不住淨・覺分門淨・離翳光明淨・入智慧淨・因果不相違淨・

【七】第六、禪那（Dhyāna定）波羅蜜。
【八】四種の禪那。色界四禪天に於ける根本定。
【九】十六種の禪那波羅蜜。「無盡意經」に出づ。
【一〇】禪那波羅蜜を淨むる三十二淨。

無量の諸佛を見る精進なり。此の諸の精進は大悲より出づ。身・口・意を離るゝが故に、不取・不捨に住するが故に、不擧不下を得るが故に、不生不起を攝するが故なり。是の如き等の三十二法を具足し已れば、精進波羅蜜は當に清淨滿足なるを得べし。此の中亦、聖頌あり。

彼の諸の施等の波羅蜜は　精進の力の成就する所なり
是の故に精進を根本と爲して　諸の菩薩等は佛身を得、
精進の方便によりて菩提を求め　我は精進の勝方便を念ずるに
其の精進を捨離し已るを以て　方便して所作を作すこと能はず
若し唯獨り一の方便あれば　則ち策すること無くして事業を勤作するに
作す所皆是れ精進の作なり　是の故に精進は勝方便なり
心に巧力あるを方便と爲す　此の心は精進より生ず
是の故に諸有る所作の事は　皆、精進を以て根本と爲す
[六]諸の論及以び工巧等　精進を具するが故に彼岸に到る
是の故に諸の所作の中に於て　精進を最も成就する者と爲す
所有る自在及び財物を　精進の人は則ち能く得
是の故に諸有る安樂の事は　皆精進を以て得因と爲す
殊勝なる精進あるを以ての故に　佛は聲聞に於て上首と爲す
是の故に此の精進力を　最も勝因と爲す。餘の行に非ず
勝上なる精進の勇健者は　地々の中に於て同地なりと雖
而も彼は恒に最勝上なるを得　是の故に常に應に精進を起すべし

【六】諸論工巧等。一〇三頁。

卷の第二

[一]問ふ、已に忍波羅蜜を解釋せり。今應に精進波羅蜜を說くべし。答ふ、勇健なる體相、勇健なる作業等、是れを精進と爲す。中に於て諸の菩薩等、初發心より乃至究竟覺場に至るまで、一切の菩提分相應の身・口・意の善業を建立する、此れを精進波羅蜜と名づく。又復若し諸の凡夫及び學・無學の聲聞・獨覺等と共ならざる精進、此れを精進波羅蜜と名づく。精進に三種あり。謂はく身・口・意なり。彼の身・口の精進は、心の精進を以て前行と爲す。略して說くに三種の福事有り。若し身と福事と相應するは、是れ身精進なり。若し口と相應するは、是れ口精進なり。若し意と相應するは、是れ意精進なり。又、若しは自利、若しは利他の善の中に於て身健行するは、是れ身精進なり。口健行するは是れ口精進なり。意健行するは是れ心精進なり。

[二]復た三十二種の菩薩の精進有り。謂はく、三寶の種を斷たざる精進。無量の衆生を成熟する精進。無量の流轉を攝受する精進。無量に供養し給侍する精進。無量の善根を聚集する精進。無量の精進を出生する精進。善說して衆生をして歡喜せしむる精進。一切衆生を安穩ならしむる精進。諸の衆生に隨ひて所作する精進。諸の衆生の中に於て捨を行ずる精進。諸の戒學を受くる精進。忍力をもつて調柔する精進。諸の禪那・三摩提・三摩鉢帝を出生する精進。無著の智慧を滿足する精進。[三]四梵行を成就する精進。[四]五神通を出生する精進。一切佛土の功德を以て己れの佛土を成ずる精進。諸魔を降伏する精進。如法に諸の外論師を降伏する精進。十力・無畏等の佛法を滿足する精進。身・口・意を莊嚴する精進。諸有の所作を得度する精進。諸の煩惱を害する精進。未だ度せざる者を度せしめ、未だ脫せざる者を脫せしめ、未だ穌息せざる者を穌息せしめ、未だ涅槃せざる者を涅槃せしむる精進。[五]百福相の資糧を聚集する精進。一切佛法を攝受する精進。無邊の佛土に遊ぶ精進。

【一】第五、毘梨耶(Viryn 精進)波羅蜜。

【二】三十二種の精進。

【三】四梵行。七六頁の註參照。

【四】五神通。二七頁。

【五】百福相資糧。八五頁。

身も亦我所に非さるは　應に知るべし、彼は忍を得たり
若し我　及び我所の自性を見されば
便ち無生忍を得て　佛子は最も安穩なり

是の如く觀ずる時、若しは內、若しは外の諸法の自性は皆不可得なり。此れを法住持の忍と名づく。若し心の法の中に於て、自性觀を作す時、卽ち是れ無生忍に順ず。此れを略して羼提波羅蜜を說くと名づく。修多羅の中に具に說くが如し。此の中に聖者の頌あり。

怨と親と及び中人とを　悲念すること常に平等なり
瞋の因尙ほ有ること無し　何んぞ衆生を瞋ることを得ん
善を修習して常に慈ならむ　衆生は己れの體に同じく
平等にして二有ること無し　云何んぞ衆生を怒らん
心、常に瞋を捨離し　多く愛喜を生ず
健なる者は旣に無礙なり　云何んぞ世と違せん
諸の衆生の所に於て　常に利益と作らんことを求む
云何んぞ瞋恚を起し　衆生に惡を加ふるを得ん
世間の八法觸るゝも　その心動搖せざること
譬へば口もて山を吹くが如き　應に知るべし、彼は忍を得たり
深心に諸の垢を離れ　礙ゆる事も汙す能はざること
泥の虛空を泥さんとするが如き　應に知るべし、彼は忍を得たり
身に於て愛する所なく　命に於ても亦貪らず
諸の怨も悉く　その相續の志を動かすこと能はず
可愛に非ざる聲に於ても　心を安んずること猶ほ響の如く
諸の言も亦化の如くなれば　忍ぶ心便ち手に在り
五衆[五六]の中に於て　我及び命の相を取らず

【五六】五衆。色・受・想・行・識の五蘊。

と名づく。中に於て[五四]心住持の忍とは、若し罵詈、瞋嫌、呵責、毀謗、挫辱、欺誑等の不愛の語道あり來つて逼惱する時、其の心動かず、亦濁亂すること無き、此れを心住持の忍と名づく。又八種の世法の觸るゝ所、謂く得利、失利、好名、惡名、譏、譽、苦、樂の中にありて、心の高下なく動かざること山の如き、是れを心住持の忍と名づく。又眠に順ずる瞋を斷ずるが故に、殺害心なく、結恨心なく、鬪諍心なく、訴訟心なく、自らを護り、他を護り、衆生の中に於て慈心相應し、悲と共に行じて歡喜の意を起し、恒に捨の心を作す、此等も亦心住持の忍と名づく。

中に於て、[五五]法住持の忍とは、內に於て、外に於て如實に觀察するが故なり。外とは、謂く罵詈、殺害等なり。罵詈は聲と字と和合し、同時にして散ぜざるも、刹那なるを以ての故に、字は空なるが故に、聲は響の如くなるが故に、次第相續の義を說くべからず。此の中に罵詈あること無し。但だ諸の餘の凡夫は虛妄に分別して瞋怒を生ずるも、若し字と聲との自性義の中において不可得ならば、心則ち隨順して相違背せず、平等に忍受す。此れを法住持の忍と名づく。又殺害する者の所に於て、當に是の念を作すべし。「身は害者に非ず。身若し心なければ則ち草木・壁影等の如くなるが故なり。心も亦害者に非ず。心は色に非ず觸礙する所無きを以ての故に、第一義の中に於ては殺害する者無し」と。是の觀を作す時、殺害を見ず。堪へて能く之を忍ぶ。此れを法住持の忍と名づく。內とは、謂はく內法を觀ずる時、是の如き念を作せ。「色は聚沫の如く緣より起るなり。動作なきが故に、自ら生ぜざるが故に、空なるが故に、我・我所を離るゝが故なり。受は泡の如く、想は陽焰の如く、行は芭蕉の如く、識は幻の如く、緣より起るなり。動作なきが故に、自ら生ぜざるが故に、刹那に生滅するが故に、空なるが故に、我・我所を離るるが故なり。中に於て、色は我に非ず。色は我所に非ず。是の如く受・想・行・識も、識は我に非ず、識は我所に非ず。此等の諸法は緣より生ず。若し緣より生ずれば則ち自性無生なり。若し自性無生なれば則ち能く害する者無し」と。

【五四】心住持の忍。

【五五】法住持の忍。

善く敎化の方便を知り已りて　念に隨つて彼に往きて之を利益す
或は布施を以て衆生を攝し　或は愛語を以てその意に入り
或は復た其れに安隱の利を與へ　或は與に事を同じくして其力を助く
或は人中に在りてその主となり　或は天衆に居りて而も自在たり
彼々の方便にて之を引導し　悉く當に白法に安置すべし
實戒を具足する神通の故に　便ち能く大海を乾竭し
世間盡くる時火增盛なるも　刹那の頃に於て悉く能く滅す
世間の種々の惱みを覩するに　惱みて病を生ずるは親しきを離るるに由る
智者に戒通方便あり　世の親依と爲りて勝道を示す

[五二]問ふ、已に尸羅波羅蜜を解釋せり。今應に羼提波羅蜜を說くべし。答ふ、此の中の羼提とは、若しは身、若しは心に諸の苦樂を受くるも、その志堪忍して、高からず下からずして心に染濁無き、此れを略して羼提を說くと名く。若し自在の說は、則ち施設して三と爲す。謂はく身住持、心住持、法住持なり。中に於て[五三]身住持の忍とは、謂はく身に遭ふ所の苦なり。若しは外の有心、無心、不愛の觸より生ずる所の身苦を堪忍して計らざる、此れを身住持の忍と名く。外より生ずる所とは、謂はく食の因緣を以ての故に怖・瞋・癡を起し、及び蚊・虻・蛇・虎・師子等の二足・四足・多足の、諸の有心の物、無量の因緣もて身を逼惱す。或は復た來りて手・足・耳・鼻・頭・目・支節を乞ふに、而も之を割截す。此の惡事に於て心悶亂すること無く、亦動異すること無し。此れを身住持の忍と名く。又暴風・盛日・寒熱・雨雹の擊觸の因緣、諸の無心の物來りて逼惱する時、遍身に苦切にして而も能く安んじて受く。此れも亦忍と名く。又、內身に起る所の界の動く因緣の故に、風・黃・痰・癊及び起りて生ずる所の四百四病は極めて身苦と爲す。逼惱する時に於て能く忍んで計らざるも亦身住持の忍

【五二】第四、羼提(Kṣāntiḥ 忍)波羅蜜。
【五三】身住持の忍。

[五〇]三摩鉢帝盡くるが故に盡き、諸の學・無學の聲聞戒は、涅槃を究竟するが故に盡き、獨覺戒は大悲を闕くが故に盡くるも、菩薩戒は則ち盡くること有る無し。此の戒は能く諸戒を顯明するを以ての故に、種子相續して盡くること無きが故に、菩薩相續して盡くること無きが故に、如來の戒は盡くること無きが故に、此の因緣を以て、菩薩戒を說いて盡くること無しと名づく。諸の菩薩戒は、菩提に迴向するが故に、說いて戒波羅蜜と名く。此の中、輪盧迦あり。

猶ほ父の功力の子を愛するが如く　亦、自身の壽命を愛するが如く
出離の戒を愛すること有るも亦爾り　大心健者の愛する所なり
此の戒は牟尼習近し已りて　欲を解脫し有愛を離る
鳥に似たる凡夫の棄捨する所　智者は常に當に此の戒を愛すべし。
此の戒は自他を利益し　身端嚴にして憂乏を離れしむ
此の世、他の世の勝れたる莊嚴なり　是の戒は智者の當に愛する所なるべし
此の戒は他の力に由らず　不可得に非ず、乞求に非ず
皆、自力に因りて之を得　是の故に上人は此の戒を愛す
財物、國境幷びに土地　自身の肌肉及以び頭を
皆能く之を捨つるも戒を捨てず　彼の勝菩提を淨めんと欲するが爲なり
假使、天より地に墮ち　設令、地より天に昇るとも
離垢無染地を滿さんが爲に　まさに決定して移動せざるべし
若し已に戒の方便を滿足せば　此の時卽ち[五一]第二地を得
旣に離苦清淨地を得ば　是の時心の欲する所を成就せん
若し復た天・人・修羅の世　及び畜生の中の化すべき者は

【五〇】三摩鉢帝(Samāpatti)。前の禪那と共に定のことであるが色界と無色界で兩語を區別した。

【五一】第二地。十地の第二離垢地。

なり、悔ひざる因と爲りて心の熱憂惱を離るゝが故に。又安穩の義なり。能く他世の樂因と爲るが故に。又安靜の義なり。能く止觀を建立するが故に。又寂滅の義なり。涅槃の樂因を得るが故に。又端嚴の義なり、能く莊飾するを以ての故に。又淨潔の義なり、能く惡戒の垢を洗ふが故に。又頭首の義なり、能く衆に入りて怯弱なること無き因と爲るが故に。又讃歎の義なり、能く名稱を生ずるが故なり。[四二]此の戒は是れ身・口・意の善行の轉生する所なり。中に於て殺生、不與取、欲邪行等を遠離する、是の三種は身戒なり。妄語・破壞語・麁惡語・雜戲語等を遠離する、是の四種は口戒なり。貪、瞋、邪見等を遠離する、是の三種は意戒なり。是の如き等の身・口・意の善行の轉生する所の十種の戒は、貪・瞋・癡所生の十種の惡行の與に對治と爲る。彼の十種の惡行を下中上に常に近習するが故に、地獄・畜生、[四三]閻摩の世等に墮す。前に數へし十種の善行戒は、若し覺分と相應せず、下中上に常に近習するが故に、福の上々差別に隨ひて、當に天・人の差別を得べし。若し覺分と相應する十種の善行戒は上々に常に習近し多く作すが故に、當に聲聞地及び菩薩地の中の轉勝差別を得べし。又此の菩薩戒聚に[四四]六十五種の無盡あり。『無盡意經』の中に説くが如し。當に知るべし。又略して説くに二種の戒有り。謂はく[四五]平等種蒔戒・不平等種蒔戒なり。平等種蒔戒とは、此の善の身・口・意の積聚するを以ての故に、生々の中に於て、若しは界、若しは富樂、若しは聲聞・獨覺、若しは相報、若しは淨土、若しは成熟衆生、若しは正遍覺等を種蒔す。彼を皆説いて平等種蒔戒と名く。此れと相違するを、不平等種蒔戒と名く。復た[四六]二種の戒有り。謂はく有作戒、無作戒なり。若し有作の中に於て所作有る者を有作戒と名け、此れと相違するを無作戒と名く。復た[四七]九種の戒有り。凡夫戒・外道五通戒・人戒・欲界天子戒・色界天子戒・無色界天子戒・諸の[四八]學・無學の聲聞戒・獨覺戒　菩薩戒なり。凡夫戒は、生處に入るが故に盡き、人戒は十善業道盡くるが故に盡き、欲界天子戒は福盡くるが故に盡き、色界天子戒は[四九]禪那盡くるが故に盡き、無色界天子界は、

【四二】十善戒を明かす。

【四三】閻摩(Yama)。鬼世界の主の名。

【四四】六十五種戒。現傳の『無盡意經』は六十七戒、異譯の『阿差末經』には六十四戒であるが、『六波羅蜜經』第五は六十五戒を出す。『彌勒所問經論』第四には『無盡意修多羅』の說として戒衆六十六事を擧げ、『十住毘婆沙論』第十六護戒品には『寶頂經』中和合佛法品の無盡意菩薩の說として六十五種尸羅波羅蜜分を引く。

【四五】平等種蒔戒と不平等種蒔戒。

【四六】有作戒と無作戒。

【四七】九種戒の盡と菩薩戒の無盡。『無盡意經』『阿差末經』に出で『十住毘婆沙論』第十六護戒品に引く。

【四八】學・無學、學は四沙門果中の前三果即ち預流果・一來果・不還果。無學は第四阿羅漢果。

【四九】禪那(Dhyāna)。

今、施主の差別を說かん。

愛果を貪らず　悲の故に三輪淨らかなる
正覺は彼の施を說いて　是れ菩提を求むと爲す
我れ已に此の事を作せり　正しく作し、當に亦作さんとするに
若し是の如き捨を作さば　傭賃にして布施に非ず
施の果の增すを貪るが故に　須ふるに隨ひて能く捨つるを
說いて息利の人と爲す　智は施主に非ずと念ふ
增益の果を貪らず　唯、悲心を以て施す
此れを眞の施主と名く　餘は皆これ商販なり
大雲遍く雨すが如く　諸處に等心にて施す
此れを大施主と名く　餘は皆是れ少分の
施及び施の果報なり　哀愍して須ふる者に與ふる
施主は衆人に於て　猶ほ其の父母の如し
施す所の物　受者及び施者を念ぜず
而も常に樂ひて布施する　此れを名けて施主と爲す
若し佛と　菩提と菩薩とを分別せずして
而も菩提の爲に施せば　彼れ當に速に成佛すべし

[40] 問ふ、已に陀那波羅蜜を解釋せり。今應に尸羅波羅蜜を說くべし。答ふ、波羅蜜の義は前に解釋せしが如し。[41] 尸羅の義を今當に說くべし。尸羅を以ての故に說いて尸羅と爲す。尸羅と言ふは謂はく習近なり、此れは是れ體相なり。又本性の義なり、世間に樂戒、苦戒等有るが如し。又清涼の義

【四〇】第三、尸羅(戒)波羅蜜。
【四一】尸羅の釋義。

男女と妻妾と　奴婢及び倉庫と
莊飾せる諸の婇女とを　須ふるに隨ひて皆布施す
所有る諸の寶物と　種々の莊嚴の具と
象・馬・車乘等と　妙なる物盡く之を施す
園林の修道の處と　池井、集會堂と
土田井に雜物と　客舍等とを皆施す
若しは二足四足　若しは復た一洲渚と
村落と國都と　及び王境とを悉く施す
玩好する所の物を施して　悕望する者を利樂し
諸の衆生の依となり　怖るゝ者には無畏を施し
その捨て難き所の　手・足・眼・耳・鼻を施し
亦心と頭とを施し　身を擧げて悉く能く捨つ
布施を修行する時は　常に受者の所に於て
應に福田の想を生じ　亦善眷屬の如くなるべし
布施の諸の果報に　具足する善の聚集は
迴向して自他の　佛及び淨土を成ぜんが爲にす
菩薩の行ふ所の施は　正しく佛體に迴向す
此の菩薩の陀那を　波羅蜜と名づくることを得るも
若しは彼の、若しは此の岸と　亦能く說く者無し
施の果の彼に到るを　說いて施の彼岸と爲すなり

皆智度に由るが故に　波羅蜜の所攝なり

此の中、陀那波羅蜜を第二の菩提資糧と爲す。般若は前に行じたるを以ての故に、菩薩は菩提の爲に而も布施を行ず。是の故に施を第二の資糧と爲す。中に於て他の身意の樂を生ず。因て布施と名く。苦と作る爲には非ず。[三七]彼れに二種有り。謂はく財施と法施なり。財施に亦二種有り。謂はく共識と不共識なり。共識に亦二種有り。謂はく內及び外なり。若し自身の支節を施し、若しは全身を施すは、是を內施と爲す。若し男女、妻妾、二足、四足等を施すは、是れを外施と爲す。不共識に亦二種有り。謂はく可食と不可食なり。此れに多種有り。若しは身內に受用する飯食等の物を施すは、是れを可食と爲す。若し身外に受用する香鬘に攝むる所の金銀・珍寶・衣服・土田・財物・園池・遊戲處等を施すは、是れを不可食と爲す。然も受用すべし。[三八]法施に亦二種あり、謂はく世間と出世間なり、若し法施に因りて、流轉（舊に生死と云ふは正しき翻名に非ざれば、今改めて流轉と爲すなり。已後に諸の流轉と云ふは皆これ此義なり。）の中に於て愛すべき身根境界を出生するは、是れを世間と爲し、若し法施に因る果報の、流轉を越度するは、是れを出世間と爲す。[三九]彼の財施、法施に各二種有り。謂はく有著、無著なり。若しは自身の爲に、若しは資生の爲に、若しは勝果の爲に、相續を悕望して財・法を以て施すは、是れを有著と爲す。若しは一切衆生を利益し安樂ならしめんが爲め、若しは無障礙智の爲めなるは、是れを無著と爲す。其の餘の更に無畏等あるも、亦隨順して財施の中に入る。彼の二種の施の果及び餘氣（謂はく津液なり）は、具に大乘經に說くが如し。此の中、當に略して偈を說くべし。

飯食及び被服は　須ふるに隨ひて皆布施す
亦、花鬘・燈と　末香と音樂とを施す
或は諸の美味と　藥物及び椅枕と
病を養ふに須ふる所と　幷びに醫人と給侍を施す

【三七】所施物の種別。財施の分類。
【三八】法施の分類。
【三九】能施心の種別。

と爲す。

[三二]問ふ、何が故に般若波羅蜜は、亦諸佛の母たるや。答ふ、無障礙智を出生し、及び顯示するを以ての故なり。過去・未來・現在の諸佛は、般若波羅蜜の[三三]阿含に由るが故に、煩惱を已に盡くし、當に盡くすべく、今盡くせり。是の出生を以ての故に、般若波羅蜜を諸佛の母と爲す。無障礙智を顯示すとは、過去・未來・現在の諸佛世尊、無障礙智を顯示することは皆般若波羅蜜の中に顯はすを以て、是の無障礙智を顯示するを以ての故に、諸佛も亦般若波羅蜜を以て母と爲す。此の中、[三四]輸盧迦あり。

大悲と相應する　般若波羅蜜に由りて
無爲の險岸に於て　佛子能く超過して
無等覺に到ることを得て　諸の衆生を利攝す
智度を母と爲すが故に　大人能く是の如し
智度を得るに由るが故に　乃ち佛體を成ずることを得
故に諸佛の母と爲すとは　勝仙の說く所なり

[三五]何が故に此れを般若波羅蜜と名くるや。聲聞・獨覺と共ならざるを以ての故に般若波羅蜜と名く。上に於て更に應に知るべき所なきが故に般若波羅蜜と名く。此の智は一切の彼岸に到るが故に般若波羅蜜と名く。此の般若波羅蜜は餘の能く勝るもの無きが故に般若波羅蜜と名く。三世平等なるが故に般若波羅蜜と名く。虛空無邊平等なるが故に般若波羅蜜と名く。是の如き等の勝れたる因緣は、『般若波羅蜜經』の中に說くが如し、故に般若波羅蜜と名く。

[三六]問ふ、已に略して菩提の初めの資糧を說けり。第二の資糧今應に說くべし。

施・戒・忍・進・定　及び此の五の餘は

【三二】般若が諸佛の母たる所以を明かす。

【三三】阿含（Āgama）。教と譯す。證に對して用ひた場合は方法の意。

【三四】輸盧迦（Śloka）。偈頌をいふ。

【三五】般若波羅蜜の名義を明す。

【三六】第二、陀那（施）波羅蜜。

せらる丶般若は、諸の菩薩を生じて無上菩提を求めしむ。聲聞・獨覺を求め(しめ)ず。是れ佛を生ずる體因なるを以ての故に、般若波羅蜜を菩薩の母と爲す。又五波羅蜜の中に置くが故なり。[二六]冥鉢囉膩波低と言ふが如き也。冥を性と爲し、鉢囉膩波低を誦と爲す。即ち此性相是れを摩多と爲す。[二七]（摩多は翻じて母と爲す。字聲論の中に於て、摩多の字は冝鉢囉膩波低の語の中より出づ。冥は是れ摩多の體性、鉢囉膩波低は是れ摩多の義を誦するなり。鉢囉膩波低は正しく翻じて置くと爲す。故に置くを以て母の義と爲すなり。）譬へば母の子を生むが如し。時に或は床敷に置き、或は地上に置く。般若波羅蜜も亦是の如し。彼の菩提を求むる菩薩を生ずる時、施等の五波羅蜜の中に置く。能く菩提を求むる菩薩を置くを以ての故に、般若波羅蜜を菩薩の母と爲すと說く。又量るを以ての故なり。[二八]茫摩泥と言ふが如き也。茫を性と爲し、摩泥を誦と爲す。即ち此性相是れを摩多と爲す。（字聲論の中に於て、摩多の字は又茫摩泥の語の中より出づ。茫は亦是れ體性。摩泥は是れ其義を誦するなり。摩泥は正しく翻じて量ると爲す。故に量るを以て母の義と爲すなり。）譬へば母の子を生み已りて、時に隨ひて是の如き我子は、此食を以ての故に身增し、此を以ての故に身損減すと籌量するが如く、菩薩も亦是の如し、般若波羅蜜を以て自ら其身を量る。我應に是の如く布施すべし。我應に是の如く持戒すべし等と。是れ自ら量る因緣を以ての故に、般若波羅蜜を說て菩薩の母と爲す。又斟量するを以ての故なり。譬へば物を量るに[二九]鉢邏薩他あり、阿宅迦あり、突嚧拏あり、佉梨底等（此間の合・升・斗・斛の類の如し）ありて斟量するが如く、菩薩も亦是の如し。此れは初發心なり、此れは修行なり、此れは得忍なり等と、斟量する因緣を以ての故に、般若波羅蜜を說て菩薩の母と爲す。又修多羅の中に誦するを以ての故たり。謂はゆる諸經の中に於て母と作るを誦と名く。彼等の經の中に名稱、諸の佛國に遍ねき菩薩あり。[三〇]毘摩羅吉利帝と名く。（舊に維摩詰と云ふは正しからず）[三一]伽陀を說て言く。

般若波羅蜜は　菩薩仁者の母なり
善方便を父と爲す　慈悲を以て女と爲す

と。復た餘經にありても亦是の如く誦す。修多羅を以て量るが故に、般若波羅蜜を說いて菩薩の母

【二六】冝鉢囉膩波底(Meṅ praṇidhāne ?)。me(冥)は Praṇidhāna(置く)の義と譯す。これ次の茫摩泥と共に母(Mātṛ)の衆義を釋出せんとして、Mātā の語原を me 又は Mā とし、文法の釋義によりて「置く」又は「量る」の義ありと見たるもの。

【二七】摩多(Mātā)。

【二八】茫摩泥(Mā māne) mā は māna(量る)の義と譯す。

【二九】鉢邏薩他（Prastha)。突嚧拏の十六分の一。阿宅迦(Āḍhaka)。突嚧拏の四分の一。突嚧拏(Droṇa)。佉梨底(Khārī)。突嚧拏の十六倍。

【三〇】毘摩羅吉利帝(Vimarakīrti)。在家の菩薩。

【三一】伽陀(Gāthā)。偈と譯す。羅什譯の佛道品には「智度菩薩母、方便以爲父、一切衆導師、無不由是生、法喜以爲妻、慈悲心爲女」とあり。

二〇 般若波羅蜜は是れ諸の菩薩の母なるを以ての故に、菩提の初めの資糧と爲す。何を以ての故に、最も勝るゝを以ての故なり。諸の身根の中に眼根は最も勝れ、諸の身分の中に頭を最も勝ると爲すが如く、諸の[二一]波羅蜜の中に般若波羅蜜の最も勝るゝも亦是の如し。般若波羅蜜は最も勝るゝを以ての故に、初めの資糧と爲す。又前行の故なり。諸法の中に信を前行と爲すが如く、諸の波羅蜜の中に般若波羅蜜の前行なることも亦是の如し。彼の陀那を以て若し菩提に迴向せざれば、則ち[二二]陀那波羅蜜に非ず。是の如く[二三]尸羅等を菩提に迴向せざるも、亦尸羅等の波羅蜜に非ず。菩提に迴向するは卽ち是れ般若なり。般若の前行に由るが故に能く迴向す。是れ前行なるを以ての故に、諸の波羅蜜の中に般若波羅蜜を菩提の初めの資糧と爲す。又是の諸の波羅蜜の三輪淨の因體なるが故に。般若波羅蜜を以て諸の波羅蜜の三輪淨の因體と爲す。是の故に般若波羅蜜を菩提の初めの資糧と爲す。三輪淨とは、菩薩、般若波羅蜜の中に於て布施を行ふ時、自身を念ぜず。自身を取ることを離るゝを以ての故に。受者の差別を念ぜず。一切の處の分別を斷つを以ての故に。施果を念ぜず。諸法は不來不出の相なるを以ての故なり。是の如く菩薩は三輪淨の施を得。淨施の如く淨戒等も亦是の如し。此般若波羅蜜はこれ彼の諸の波羅蜜の三輪淨の因體なるを以ての故に、般若波羅蜜を菩提の初めの資糧と爲す。又大果の故なり。般若波羅蜜の大果は諸の波羅蜜に勝れたり。『經』に說くが如し。

菩提心福德　及以び攝受の法
空に於て信解すれば　價の勝るゝこと十六分なり

二四『鞞摩羅經』の中の大果の因緣を、此中に應に說くべし。是の大果を以ての故に、般若波羅蜜を菩提の初めの資糧と爲す。

二五 問ふ。何が故に般若波羅蜜は菩薩の母たり得るや。答ふ。能く生ずるを以ての故なり。方便に攝

【二〇】般若波羅蜜（Prajñāpāramitā）を第一資糧と爲す。
【二一】波羅蜜（Pāramitā）彼岸に到ることを得べき行。
【二二】陀那（Dāna）布施の行。
【二三】尸羅（Śīla）持戒の行。
【二四】鞞摩羅經（Vimalakīrti-sūtra）。維摩經のこと。
【二五】般若を菩薩の母となす所以。

と。是を以ての故に諸の菩薩等を、佛の後に次ぎて皆應に供養すべし。偈に說くが如し。

佛種を紹持する者は　餘の少分の行に勝る
是の故に諸の菩薩を　佛の後に次ぎて供養せよ
慈は虛空と等しく　諸の衆生に普遍す
この故に最勝子を　佛の後に次ぎて供養せよ
諸の衆生の類に於て　大悲すること猶ほ子の如し
この故に此佛子を　佛の後に次ぎて供養せよ
悲心にて衆生を利すること　二無くして虛空に似たり
この故に無畏者を　佛の後に次ぎて供養せよ
一切の時に父の如く　諸の衆生を增長す
この故に諸の菩薩を　佛の後に次ぎて供養せよ
猶ほ地水火の如く　衆生常に受用す
この故に施樂者を　佛の後に次ぎて供養せよ
唯衆生を利せんが爲に　自ら樂因を捨離す
この故に彼の一切を　佛の後に次ぎて供養せよ
佛及び佛の餘は　皆初心より出づ
この故に諸の菩薩を　佛の後に次ぎて供養せよ

[一九]問ふ。尊者已に正に資糧の敎の緣起を說けり、今應に資糧の體を說くべし。答ふ。

旣に菩薩の母たれば　亦諸佛の母たり
般若波羅蜜は　是れ覺の初めの資糧なり

【一九】菩提資糧を明かす中、第一、般若波羅蜜。

心より乃至覺場まで、皆應に供養すべし。[一五]菩薩に七種あり。一に初めて發心す。二に正しく修行す。三に無生忍を得。四に灌頂。五に一生所繫。六に最後の生。七に覺場に詣るなり。此等の菩薩は、諸佛の後に於て次に應に供養すべし。身・口・意及び外物等を以て之を供養すべし。初めて發心すとは、未だ[一七]地を得ざるものなり。正しく修行すとは、乃至七地までなり。無生忍を得るとは、第八地に住するなり。[一八]灌頂とは第十地に住するなり。一生所繫とは、方めて兜率陀に入るなり。最後生とは[一九]兜率陀處に住するなり。覺場に詣るとは、一切智智を受用せんと欲するなり。七種の菩薩の中に於て、初めて發心したる菩薩をも、一切衆生は皆應に禮敬すべし。何に況んや餘の者をや。何を以ての故に、深心寛大の故なり。如來の數量の故なり。初めて發心する菩薩は菩提心を發す時、十方の分に於て滅することなく、諸の佛土に(於て)滅することなく、諸の衆生に(於て)滅することなく、慈を以て遍滿して菩提心を發す。若し未だ度せざる衆生は、我當に之を度すべし。未だ解脫せざる者は、我當に解脫せしむべし。未だ蘇息せざる者は、我當に蘇息せしむべし。未だ寂滅せざる者は、我當に寂滅せしむべし。聲聞に應ずる者は、我當に聲聞乘の中に入れしむべし。獨覺に應ずる者は、我當に獨覺乘の中に入れしむべし。大乘に應ずる者は、我當に大乘の中に入れしむべし。衆生をして悉く寂滅を得しめんと欲す。少分の衆生を寂滅せしむるには非ず。是れ深心寛大なるを以ての故に、一切衆生は皆應に禮敬すべし。何をか如來の數量と爲すや。世尊の說くが如し、「迦葉よ、譬へば新月の如くなるものにも便ち應に禮を作すべし。滿月たるものには非ず。是の如く迦葉よ。若し我を信ずる者は、應當に諸の菩薩等を禮敬すべし。如來たるに非ず。何を以ての故に、菩薩より如來を出だすが故なり」と。又聲聞乘の中にも亦說く。

彼の法を知る者に於て　若しは老いたるも若しは年少きも
應に供養し恭敬すること　梵志の火に事ふるが如くなるべし

【一五】菩薩の七種を明かす。
【一六】地。修道の履踐する所。十地に分つ。一、歡喜地、二、離垢地、三、發光地、四、焔慧地、五、極難勝地、六、現前地、七、遠行地、八、不動地、九、善慧地、十、法雲地。
【一七】灌頂(Abhiseka)。國王即位の時灌頂を行ふ如く菩薩行滿ち佛位に登ることなるが、今は菩薩の行滿をいふ。
【一八】兜率陀(Tusita)　六欲天の第四。八相成道の儀に將に成佛せんとする菩薩が此天に登ることに始まる。

や。答ふ、

佛體に無邊の德あり　　覺の資糧を根と爲す
この故に覺の資糧も　　亦邊際あることなし

「佛體」とは卽ち佛身なり。彼の佛體に無邊の功德を具足するを以ての故に、「佛體に無邊の德あり」と說くなり。[二二]功德とは稱讚すべき義を謂ふ。若し稱讚すべきものは則ち功德と名く。又これ數數を義となす。譬へば數數經書を誦習すれば、彼れを則ち說きて功德を作す者と名く。又これ牢固の義なり。譬へば繩を作るに、或は二を合すを功と爲し、或は三を合すを功と爲すが如し。又これ增長の義なり。譬へば息利の或は二を增すを功と爲し、或は三を增すを功と爲すが如し。又これ依止の義なり。譬へば諸物の各依止を以て功と爲すが如し。是の如く佛體は、戒・定等の無邊の差別する功德の依止と爲るが故に、「佛體に無邊の功德あり」と說くなり。「覺の資糧を根と爲す」とは、彼の菩提の資糧は、佛體の無邊の功德の與に根本と爲るが故なり。根とは建立の義なり。菩提とは智なり。根は卽ち資糧なり。彼の資糧は能く一切智智を建立するを以て、この故に資糧を佛體の根本と爲す。良に佛體に無邊の功德あるに由るに、須らく無邊の功德を以て、彼の佛體を成ずべし。この故に資糧も亦邊際なきなり。

[二三]當に彼の少分を說かんとするに　　佛、菩薩を敬禮すべし
これ諸の菩薩等は　　佛に次ぎて應に供養すべきなり

彼の諸の資糧は無邊にして、而も智は有邊なり。是を以て彼の資糧を說くに、闕くること無きこと能はず。故に「當に彼の少分を說かんとするに、佛、菩薩を敬禮すべし」と言ふなり。問ふ、應に佛を禮すべし。一切衆生の中に最も勝るゝを以ての故なり。[二四]何の義ぞ、此中に亦菩薩を禮するや。答ふ。是れ諸の菩薩等は、佛に次ぎて應に供養すべきものなるが故なり。諸の菩薩等は、初發

【二二】功德の義を明かす。

【二三】佛・菩薩を敬禮供養すべきを明かす。

【二四】菩薩を敬禮供養する所以を明かす。

以て義と爲す。譬へば世間に共に行ふ日は熱を攝り、月は冷を攝るが如し。攝るはこれ持つ義なり。是の如く菩提を持つ法を以て菩提の資糧と爲す。資糧と言ふは卽ちこれ持つの義なり。又、長養を以て義と爲す。譬へば世間の能く千に、或は百に或は十に滿たすに、或は唯自らのみにて滿たすもの、或は自らにて滿たすこと難きものあり。菩提の資糧も亦復た是の如し。菩提を長養するを以て義と爲す。又、因を以て義と爲す。舍、城、車等の因の中に說きて、舍の資糧、城の資糧、車の資糧と言ふが如し。是の如く菩提を生ずる因緣の法の中に於て、說きて菩提の資糧と名く。又、衆分具足を以て義と爲す。譬へば祭祀の分の中の杓、火等の具足するを、名けて、祭祀と爲すが如し。具足せざるものには非ず。亦身分の頭、手、足等の具足するを、名けて身と爲すことを得るが如し。具足せざるものには非ず。施の分も亦是の如し。施す者、施さるゝ物、受る者、迴向すること。此等れ具足するを施の資糧と名く。具足せざるものには非ず。戒等の資糧も亦是の如し。この故に衆分の具足する義はこれ資糧の義なり。是の如く我れ菩提の資糧を說く。この能く滿たすもの、持つもの、長養するもの、菩提の因なるもの、菩提の分の具足するもの、皆其義なり。

〔一〇〕何ものか能く闕くることなく　菩提の諸の資糧を說くや
唯獨り諸佛ありて　別して無邊の覺を得たり

「何ものか能く」とは何ものゝ力かなり。若しは聲聞、若しは菩薩は、少分の覺知にして力能なきが故なり。若し諸の菩提の資糧を闕くることなく、餘すことなく說かんと欲すれば、「唯これ諸佛のみ別して無邊の覺を得たり」とは、無邊の覺と言ふは、謂く少分の覺りに非ざるが故なり。佛、世尊は、無邊の應に知るべき義の中に於て、覺り知ること無礙なるを以て、この故に佛を無邊覺者と名く、又、欲樂及び自の疲苦、斷・常・有・無等の邊見の中に於て、覺りて著せず。所覺無邊なるを以て、この故に佛を無邊覺者と名く。〔一一〕問ふ。何が故に資糧は唯佛のみ能く說きて、餘の人は能はざる

【一〇】能く菩提の資糧を說く者、卽ち佛の無邊覺者なるを明かす。

【一一】佛の無邊功德を明かす。

菩提資糧論

聖者　龍　樹[一]の　本
比丘　自　在[二]の　釋
大隋　南印度の三藏、[三]達磨笈多譯す

卷の第一

今、諸佛の所に於て　　合掌して頂敬す
我、當に敎の如く　　佛菩提の資糧を說くべし

[四]「佛」とは、一切の應に知るべき所の中に於て覺を得ることとなり。應に知るべき所の如くに而も知るが故に。又無智の睡眠の中に於て覺むるが故に。覺とは寤むるを義と爲す。無智の睡りを離るゝを以ての故なり。又諸の[五]釋・梵等は此覺を覺らず。唯これ名聲普遍するのみ。[六]三界は能く覺る所なるが故なり。一切諸佛のみ乃ち此覺を覺れり。一切種遍智は唯佛のみの所知なるを以て、諸の[七]聲聞、獨覺、菩薩に非ず。不共法具足するを以ての故なり。「諸」とは闕くることなきが故なり。謂く過去、未來、現在等なり。「頂」とは上分なるが故なり。「合掌」とは手を攝むるが故なり。「敬」とは向禮するが故なり。「我說く」とは自ら分別するが故なり。「敎の如く」とは彼々の經の中に種々に已に說けり。今も亦かの敎の如く說くが故なり。「佛」とは無智を離るゝが故なり。「菩提」とは[八]一切智智の故なり。[九]「資糧」とは能く菩提を滿たす法なるが故なり。譬へば世間の瓶盈ち、釜盈つる等の如し。盈はこれ滿義なり。是の如く菩提を滿たす法を以て菩提の資糧と爲す。又、持つを

【一】龍樹(Nāgārjuna)の譯。南印度の人。西紀第二世紀の半から第三世紀の半頃まで生存し、大乘佛敎勃興の氣運に乘じて破邪顯正し、多數の著作を出した。
【二】自在。傳記不明、無著時代より後の人なるが如し。
【三】達磨笈多（笈または崛に作る。略して笈多といふ。Dharmagupta)法密と譯す。南印度の人、隋開皇十年(590)支那に來り大業末年(616)まで譯經に從事し武德二年(619)寂す。『大正大藏藏』中其譯に係るもの九部、他と共譯したもの三部を收む。彥琮に『達磨笈多傳』四卷の作ありしも佚す。
【四】佛の義を釋す。
【五】釋・梵　釋は(Śakra)即ち因陀羅(Indra)後に帝釋天といふやうになつた。梵は(Brahma)共に外道の神。
【六】三界。欲界・色界・無色界。迷妄の世界の分類。所證の境。
【七】聲聞等。聲聞(Śrāvaka)獨覺(Pratyeka-buddha)已上小乘の修行者、菩薩(Bodhisattva)は大乘を修行中の者。
【八】一切智智(Sarvajñāna)。一切智中の智。佛所證の眞實極智。
【九】菩提資糧を釋す。

攝なり、開いて十と爲すに、第六は唯無分別智を攝し、後の四は皆是れ後得智の攝なり、世俗を緣するが故に」といふ。自在の第十智波羅蜜の釋は正に世俗を緣する意である。

『法華』の聲聞授記を解して密意授記又は別語授記とすることは、『大智度論』第百卷にも其微意があり、今論第四卷の第四十四偈にも佛の方便より出たものと解してゐるが、今の釋の中に引く諸論師の說中、二說は正に無著の『攝大乘論』卷下(眞諦譯)の偈に「未定性聲聞、及諸餘菩薩、於大乘引攝、定性說一乘」と云ふに一致し、世親の釋には論意に依つて「密義を以て一乘と說く」といふてゐる。自在は此說を用ひて聲聞授記を見たものであらう。此點に於て自在の時代が無著世親已後なるを知る。

本論國譯の豫稿は山下法亮學士の努力に成り、又脚註梵語に就ては荻原雲來博士の提挈に依るものがある。併記して謝意を表す。

昭和七年七月十日

譯者　大野法道　識

沙論』にある。第二巻の願波羅蜜を釋する十大願は、『十住毘婆沙論』第二釋願品を要約したものであり、第三巻第三偈の佛の功德を念ずるを釋する中の五種應知は、同論第十一正遍知の釋たるべく、第二十四偈の釋中、密意授記の意を説く中に出す有る論師の二説は、無著の『攝大乘論』巻下の偈意に同じ、第二十六偈菩薩の父母を釋する中に、『十住毘婆沙論』第一入初地品の第十四偈と同意の偈を引く。第四巻第三十一—三十四偈の三解脱門の修行に關する釋は、本頌と共に『大智度論』第三十六巻の同修行の釋に通ずるものがあり、第三十九偈の釋中、三十二法を以ての故に正定位に入ると云ふは同論第十三略行品に説く三十二の妙法を指すものゝやうであり、第五巻第二十四—三十一偈の三十二相業を釋するものは、本頌と共に同論第八共行品長行に則つたもの、第六巻第三—二十四偈衆多の四種行を生ずる釋は、本頌と共に同論第九、四法品の長行に依つたものである。

四、自在の釋の特色

自在比丘の釋の特異のものとして擧ぐべきは初發心乃至詣道場の七種菩薩説、布施分類説、平等種蒔戒等の二戒説、身住持等の三忍説、五種授記説、般若所攝の四波羅蜜説等を數へる事が出來る。又不動地不退説の如きは本頌に見えないものである。

四波羅蜜を般若所攝とするに就て、方便・願・力・智の四波羅蜜を、本頌の「五種の餘」とある餘の一字に貪縁して釋出したのは、恐らく本頌の意を超過したものであらう。本頌の意は六波羅蜜の中で、般若以外の五波羅蜜を餘といふのであつて、五波羅蜜の外に更に餘のものがあるのではない。然るに自在は他の憑據に依つて四波羅蜜を列擧して委細に釋出したのであるが、其の基くところは蓋し華嚴部の經であらう。六波羅蜜に四波羅蜜を合せたもの、謂はゆる十波羅蜜は華嚴の思想である。卽ち『漸備一切智德經』(竺法護譯)第四に始めて十度無極の名に於て之を列ね、『十住經』(羅什譯)第三には十波羅蜜とし、以下華嚴系の經に繼承してゐるものである。これ蓋し華嚴の常用する十數形式に於て波羅蜜を説いたものであるが、大乘通説の六波羅蜜と如何なる關係に於て見るかに就て、『深密解脱經』(菩提流支譯)第四觀世自在菩薩品の如きは、四波羅蜜に分對して、方便は施・戒・忍の伴、願は精進の伴、力は禪の伴、智は般若の伴とし、『相續解脱經』(求那跋陀羅譯)、『解深密經』(玄奘譯)皆之と同説である。然るに自在比丘は四波羅蜜を悉く般若の所攝とする説である。『成唯識論』第九の如きは『深密』に反して、却て自在の説に一致し、「後の四は第六の所

は經の文義が多く省略されてゐるが、釋は經文を具さに採取してゐる。

三、『十住毘婆沙論』その他との關係

本頌の中、彼の論に通ずるものは左表の如くである。

『菩提資糧論』本頌	『十住毘婆沙論』
第三巻5―10（菩薩の教化）	第十三巻分別二地業道品3―8
第三巻15 16（勤行精進）	第五巻易行品6―7
第三巻17（死、放逸）	第十三巻略行品28
第三巻18―21（二乘地に墮す）	第五巻易行品1―4
第三巻26（菩薩の父母）	第一巻入初地品4
第四巻14（自罪悔過）	第五巻除業品1
第四巻15（説法勸請）	第五巻除業品4
第四巻16（住世勸請）	第五巻除業品5
第四巻17 18（他福隨喜）	第五巻除業品6 7
第四巻19―21（自福回向）	第五巻除業品8―10
第四巻22（回向行儀）	第六巻分別功徳品1
第四巻23（大福成就）	第六巻分別功徳品2
第五巻24―31（三十二相業）	第八巻共行品長行
第六巻3―24（生大智四種行）	第九巻四法品長行

また第四巻第三十一―三十四偈の三解脱門の修行に關するものは、『大智度論』第三十六巻の同修行に關する釋と同意である。

釋と論との關係は、第一巻の戒度の釋に六十五分といふは、具さに『十住毘婆沙論』第十六護戒品に引載されてゐるものである。釋が多量に彼論から取られてゐるのに依れば、是れも亦彼論から來るもののやうに思へるが、彼論には『寶頂經』中和合佛法品（亡佚）の説として出してあり、今の釋は『無盡意經』に説くが如しとあるから、假令彼論に導かれたとしても所引は直接に『無盡意經』から爲されたものと思はれる。但し現存『無盡意經』（『大集經』所收）には六十七戒となつてゐる。此戒分説は一時は教界に重視されたもので、『彌勒所問經論』第四にも引用し『六波羅蜜經』の第五にもこれを受けてゐる。九種戒の盡と菩薩戒の無盡も『十住毘婆

のがある。第一卷第五偈の前半に般若波羅蜜を「旣に菩薩の母たれば亦諸佛の母たり」といふ。これ『維摩經』卷中の佛道品の第一偈に依つたものと見るべく、第四十三偈の「菩薩は煩惱を性とし、是れ涅槃を性とせず、諸の煩惱を燒くに非ず、菩提の種子を生ず」といひ、第四十五偈第一・二句に空と峻崖と深坑とに蓮華生ぜざるをいふは、『維摩經』佛道品の意であり、第四十四偈の「彼の諸の衆生を記するは、此記に因緣あり」とあるは、『法華經』の聲聞授記を指すのである。第六卷の第四十二—四十四偈に「諸の供養に勝過するものを、以て佛世尊に供ふ、彼れの作すは何者か是れなる、謂はゆる法の供養なり」「若し菩薩藏を持し、及び陀羅尼を得て、深法の源底に入る、是れを法の供養と爲す」「應當に義に依るべし、唯雜味を愛すること莫るべし、深法道の中に於て、善く入りて放逸なること莫れ」とあるは、『維摩經』卷下の法供養品に「世尊よ、諸の供養の中に法供養勝れたり……法供養とは諸佛所說の深經なり……菩薩の法藏の所攝なり。陀羅尼の印之れを印して不退轉に至り六度を成就す。分別の義を善くし菩提の法に順ず……義に依つて語に依らざれ、智に依つて識に依らざれ、了義經に依つて不了義經に依らざれ、法に依つて人に依らざれ、法相に隨順して所入無く所歸無し」とあるに合するものである。

釋の中、第一卷では第五偈の釋に般若波羅蜜が諸波羅蜜に勝るゝことを說いて『鞞摩羅經』中大果の因緣を此の中に說くべしといひ更に同經卷中佛道品の般若は母、方便は父、慈悲は女と說く偈を引き。般若の名義を解するに就て委細を『般若波羅蜜經』に讓る。次に戒波羅蜜の釋に「六十五種の無盡は無盡意經に說くが如し」といひ、九種戒の盡と菩薩戒の無盡を說くが、これも『無盡意經』を受けたるものである。定波羅蜜の釋に十六種禪那を列ね、方便波羅蜜の釋に八種善巧を擧げ、四波羅蜜の主體としての般若波羅蜜の釋に、聞慧相八十種、正思入三十二種、十六種無明の語があるが、此等は悉く『無盡意經』の說である。第三卷では第二十四偈の釋の中に、第八不動地不退轉說を立てるに際して、五種の授記を說くが其中、四種は『首楞嚴三昧經』の說であり、第五は蜜意授記で『法華』の舍利弗授記を引く。又第十五偈の第一義捨と勤行精進を明す釋中、『華聚經』の五種不退菩提の因緣を引く。第四卷第四十四・四十五偈の釋は本頌とともに『維摩經』『法華經』に依つたものである。第五卷では第二十八偈の釋に、『不退轉輪經』第四安養國品の五無間業を引く。第六卷第四十二—四十四偈の釋は、本頌と共に『維摩經』法供養品に依つたものである。本頌

修心（第四—二十三偈） 第四偈は勝淨の意具足、第五偈は三業清淨、第六偈は安住正念、第七偈は修善、第八偈は專意不亂、第九—第十二偈は精進、第十三偈は不惜身命、第十四・十五偈は名利に貪著せずして勤行す。第十六偈は食を貪らず嫌はず、第十七は出家の反省、十法思念に『十法經』を引く。第十八偈は魔業を覺知す。第十九偈は卅七助菩提法修習、第二十偈は心の觀察、第二十一偈は善法消長の觀察、第二十二・二十三偈は他を慳嫉せず。**修相**（三十二相業）（第二十四—三十一偈）(3)**種々の菩薩行**（第三十二偈—第六卷四十五偈全部） 第五卷第三十二偈は言行一致、第三十三偈は法・放逸者・支提の擁護、第三十四偈は婇女等を施す、第三十五偈は佛像の造作、六種同喜法の修習、第三十六偈は和上等の供養、法及び人を謗らず、第三十七偈は金寶を教師及び其支提に散じ、所誦を念ず、第三十八偈は所作愼重、第三十九偈は不動の心、第四十偈は出世間言說の喜樂、第四十一偈は五解脫入・十不淨想・八大丈夫覺の修習、第四十二偈は五通の修習、第六卷第一—五偈は順次に四神足、四界・六入・五衆觀、大智を生ずる四種行、菩提心を忘失せざる因、第六—十偈は順次に他家の觀見と世論誦習の注意、菩薩及び法を謗らず、四聖種、他犯を發かず、信佛信法、第十一—十三偈は順次に實語、受苦を業報の來現とす、父母・和尙・阿闍梨の尊敬、第十四—第十六偈は菩薩の四種錯失、第十七偈は頭多行等。第十八偈は四種平等行、第十九・二十偈は四種覺知行、第二十一—二十二偈は四種善知識親近行、四種惡知識遠離行、第二十三・二十四偈は四大藏求得行、第二十五偈は平等利益行、第二十六—二十九偈は順次に善義思惟行、九惱調伏と二十小事棄捨と八懈怠事斷除行、非分の貪を離れ衆生を和合す。空に於て空を得ざる行。第三十・三十一偈は支提供養。第三十二—四十一偈は順次に三寶聞信の喜樂。三世不住の觀。他に好事を與へ自ら苦を受く。福報に擧らず貪窮に下らず。已學未學の衆生を尊重す。持戒・破戒・智・愚の攝益。流轉を怖れず魔を降す、佛土功德を得る願行。衆生受擔行、正觀と大慈悲。第四十二—四十四偈は法供養を明す。第四十五偈は總結。

二、所用の經典

『菩提資糧論』の本頌中、他經に關係あるものとしては、第五卷第十七偈に『十法經』に說くが如しといふ。これ明らかに經名を擧げてゐる唯一のものである。然し經には偈の意に合する文は無くして、唯菩薩の慚愧を說く大要が偈意に通ずるものがあるに過ぎない。また名を出さなくとも他經の說に依つて作られたも

方便及び其利・第十三偈は出世間の第一義捨、第十四偈は世間の名利等の捨、第十五・十六偈は第一義の捨と勤行精進を說く、第十五偈の釋に『華聚經』の五種不退菩提の因緣を擧ぐ。

六　無生忍を得る法。(1)**未得忍菩薩の障礙・死・恐怖**（第十七—二十一偈）第十七偈は放逸、第十八—二十偈は二乘地に入る死と恐怖と畢竟障礙を說く。(2)**不退轉の因緣**（第二十二偈）正しく無生忍を得る法卽ち緣生の觀察、不生滅等の四句を明かす。(3)**無生忍授記・不退轉**（第二十三・二十四偈）緣生を如實に觀じ成就して分別を斷つは無生忍であり、成佛の授記あること、不退轉を得ることを說く。第二十四偈の釋に第八不動地不退說を立て、一偈を引き、『首楞嚴三昧經』の四種授記說を擧げ、更に『法華經』の舍利弗に授記するを密意授記とし、五種授記あるを說く。(4)**菩薩の父母**、（第二十五・二十六偈）第二十五偈は菩薩の父たる諸佛現前三摩提、卽ち般舟三昧を得ん爲めに放逸なるべからざる事を說き、釋に此三摩地に色攀緣・法攀緣・無攀緣の三種の別あるを說く、第二十六偈は此三摩提を父とし大悲と忍を母とするを說き、釋の中に智度を母とし方便を父とすること、及び其所以を說く一偈を引く。

七　菩提を得る百福（第二十七偈）百須彌量の福能く菩提を得るを說く。(1)**得忍菩薩の積福**（第四卷第一—十三偈）第一—九偈は無量福聚の可能、第九偈の釋に三種の隨轉法輪を擧ぐ。第十—十三偈は菩提を把持する手としての福德の行、大悲受苦等を說く。(2)**未得忍菩薩の積福**（第十四—二十三偈）第十四偈は罪惡發露、第十五偈は說法勸請、第十六偈は住世勸請、第十七・十八偈は隨喜、第十九—二十三偈は回向。(3)**福用を護る行**（第二十四—二十八偈）第二十四偈は小菩薩の敬重、第二十五偈は大乘人の過を說かず、第二十六偈は人の菩提心を助長す、第二十七・二十八偈は經非佛說の誡、第二十八偈の釋に『不退轉法輪經』の五無間業を擧ぐ。(4)**修道の勝義**（第二十九—四十五偈）三解脫門（第二十九—三十八偈）幷に其修行の態度、第三十九・四十偈は教化の本願を滿たさゞる間は涅槃を證せず。第四十一偈は流轉を厭ひて而も向ひ、涅槃を信樂して涅槃に背く。第四十二—四十五偈は煩惱を燒き盡くせば菩提の種子生ぜざる故にこれを斷盡せず。中に於て第四十四偈は聲聞授記は佛の善巧方便に過ぎずとし、第四十五偈は正定無爲に沒入する聲聞は燒かれたる種子の如く徹頭徹尾大菩提の種子を生ぜぬとする。

八　衆多の菩薩行。(1)**力を得たる菩薩の行**（第五卷第一—三偈）諸論工巧明を世間利益の爲め出生、願力受生、難化衆生の教化。(2)**未だ力を得ざる菩薩の行**、

更に此意を十二偈に作り又施主の差別を說く八偈を揭ぐ。(3)**戒波羅蜜**(第六偈) 釋は尸羅の意義、十善戒、その下中上上上の種別、『無盡意經』に於ける六十五分標擧、平等種蒔戒・不平等種蒔戒、有作戒・無作戒、凡夫乃至菩薩の九種戒。及びそれらの盡と無盡を說き、戒に關する十二偈を揭ぐ。(4)**忍波羅蜜**(第六偈) 釋は忍の意義、外の有心無心不愛の觸より來る身に受くる苦を忍ぶ身住持、罵詈等の不愛語、八種世法に心惱亂せざる心住持、內外の逼惱を如實に觀察して無自性に達する法住持の分類を述べ、聖者の十偈を出す。(5)**精進波羅蜜**(第六偈) 第二卷は精進波羅蜜の釋から始まる。精進の體、身・口・意の種別、三十二種精進の分類を說き、聖頌九偈を擧ぐ。(6)**定波羅蜜**(第一卷第六偈) 釋は四禪、十六種禪の分類、定波羅蜜を淨むる三十二淨を揭げ、更に八偈を出す。第二卷に於ける一偈は六波羅蜜を菩提の總資糧とするを說く。

三 般若波羅蜜所攝の四波羅蜜(第一卷第六偈再出)釋には方便・願・力・智の四波羅蜜を釋せんとして第六偈を再出し、偈の「五種の餘」とあるに就きて四波羅蜜を說くに先だち般若波羅蜜の無相を說く。(1)**方便善巧波羅蜜**。 釋には八種の善巧を說き衆生敎化の無窮を說き十三偈を揭ぐ。(2)**願波羅蜜**。 釋は諸佛を供養給侍する事無餘等の十大願を說き、(3)**力波羅蜜**。 釋は福報生力・神通力・信力・精進力・念力・三摩提力・般若力を詳說す。(4)**智波羅蜜**。 釋は世間の書・論・印・算數・風黃等の界論、醫方論、文章・談謔、村城・池井の土工、鑛物・天文を了知し、出世間の行業、世界の成壞、業報身・佛身の差別を知るを說く。第二卷に於ける一偈は六波羅蜜を菩提の總資糧とするを說く。

四 有餘師の四處所攝說(第三卷第一偈) 頌は菩提資糧を實處・捨處・寂處・智處の四に攝すべき有餘師の說を出し、釋は六度との相攝、卽ち實處は戒波羅蜜、捨處は布施波羅蜜。寂處は忍波羅蜜と定波羅蜜、智處を般若波羅蜜とし、精進波羅蜜は四處を成就せしむるものとす。

五 四無量。(1)**慈・悲**(第二偈) 頌は慈悲の區別を說き、釋は惡道邪見愚癡に陷れる苦の衆生に對し菩薩は大悲骨髓に徹し依處となりて惡路より解脫せしめ、又慈を以て一切衆生に樂を與へる事を說く。(2)**喜**(第三偈) 頌は佛の功德を念じ其神變を聞いて愛喜受淨するを大喜となすを說き、釋は佛德を念ずる相を詳說し、神通變化を解す。(3)**捨** (第四―十六偈) 第四・五偈は菩薩は衆生を攝受して捨てざること、第六偈は大乘敎化、第七偈は二乘敎化、第八偈は天・人福處の敎化、第九偈は現世利益の敎化、第十偈は無緣の敎化、第十一・十二偈は攝取の

菩提資糧論解題

一、内容梗概

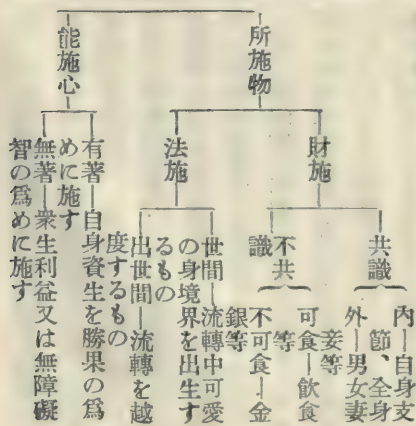
『菩提資糧論』六卷は、龍樹の作と稱する本頌と、自在比丘の長行釋とから成るものであり、頌と釋との會本によつて殆んど等量に六卷に調卷されてゐるが、本頌は第一卷六偈、第二卷一偈、第三卷二十七偈、第四卷四十五偈、第五卷四十二偈、第六卷四十五偈で、總計百六十六偈あり。釋の中に載せられたる偈が九十一と、末尾に自在比丘の回向頌が三偈ある。

内容は菩薩が大菩提を得るための資糧を指示するもので、六波羅蜜、四波羅蜜、四無量を主とし、三十二相業、百福莊嚴その他雜多の行を說いてゐる。全篇を通じて般若波羅蜜の礎地に立つ衆生敎化の熾烈性、善巧方便の積極性が力强く打出されたるを見る。六卷の調卷は目次に示す如く、内容の組織に不相應なものであるから、梗概は專ら事項によつて述べることゝする。

一 菩提資糧の敎の緣起（第一卷第一—四偈）全體は佛、菩薩の歸依供養を演べるものであるが、第一偈は佛への歸敬で、釋は佛と資糧との意義を詳述する。第二・三偈は無邊の覺を得たる佛のみ能く無邊の菩提資糧を說き得ることを明かす。釋は功德の義を詳說す。第四偈は佛菩薩の敬禮で、釋に七種の菩薩（初發心・正修行・無生忍・灌頂・一生所繫・最後生・詣道場）を出し、菩提心の深大を述べる。其中に聲聞乘に於ける知法者供養恭敬の一偈、及び菩薩供養の八偈を引載する。

二 六波羅蜜。(1)般若波羅蜜（第五偈） 般若波羅蜜が佛菩薩の母で、菩提の第一資糧たるを說き、釋には其の義を詳述す。空の礎地に立つ福德の偉大を說く一偈、『維摩經』の菩薩の父母女を說く一偈、及び佛菩薩の母を說く三偈を引載し、般若の勝因緣を『般若波羅蜜經』に讓る。

(2)施波羅蜜（第六偈） 施等の五丼に餘は般若に立つことに依つて波羅蜜と名けらるゝを說き、釋は施について左の如き分類を擧ぐ。

- 所施物
  - 財施
    - 共識
      - 内—自身支節、全身
      - 外—男女妻妾等
    - 不共識
      - 可食—飲食等
      - 不可食—金銀等
  - 法施
    - 世間—流轉中可愛の身境界を出生するもの
    - 出世間—流轉を越度するもの
- 能施心
  - 有著—自身資生を勝果の爲めに施す
  - 無著—衆生利益又は無障礙智の爲めに施す

授記せらる、假ひ人あつて能く[一五]三千大千世界の中に滿ずる衆生を化して十善を行ぜしむるも、人あつて一食の頃に於て正しく此の法を思はんに如かず。前の功德に過ぐること喩となすべからず。

復次に若し、人此の論を受持し、觀察修行し、若し一日一夜せんに所有の功德は無量無邊にして說くことを得べからず。假令十方一切の諸佛、各無量無邊阿僧祇劫に於て、其の功德を歎ずるも亦盡す事能はず。何を以つての故に、謂はく、法性の功德は盡くることあることなきが故に。此の人の功德も亦復是の如く、邊際あることなし。

(b)其れ衆生あつて、此の論の中に於て毀謗して信ぜずば、獲る所の罪報は無量劫を經て、大苦惱を受く。是の故に衆生は但應に仰いで信ずべし。毀謗すべからず。深く自ら害し、亦他人を害して、一切三寶の種を斷絕するを以つて、一切の如來は、皆此の法に依つて涅槃を得るが故に、一切の菩薩は之に因つて、修行して佛智に入ることを得るを以つての故に。

(c)當に知るべし。過去の菩薩は已に此の法に依つて淨信を成ずることを得、現在の菩薩は今此の法に依つて淨信を成ずることを得、未來の菩薩は當に此の法に依つて淨信を成ずることを得べし。是の故に衆生は應に勸めて修學すべし。

(d)諸佛の甚深廣大の義我今分に隨つて總持して說く。此の功德の法性の如くなるを廻して普く一切の衆生界を利せん。

大乘起信論（終）

【一五】三千大千世界。須彌山を中心とせる小世界の一千を中千世界とし、中千世界の一千を三千大千世界と稱す。

(b) 不信受報過。

(c) 過現未菩薩の修學。

(d) 流通分。

ず壞せずと念ず。因緣善惡の業報を念ずと雖も、而も亦卽ち、性不可得なりと念ず。若し止を修すれば、凡夫の世間に住著するを對治し、能く二乘の怯弱の見を捨す。若し、觀を修すれば、二乘の大悲を起さゞるの狹劣の心過を對治し、凡夫の善根を修せざるを遠離す。

此の義を以つての故に、是の止觀門は共に相ひ助成して相ひ捨離せず、若し止觀具らざれば則ち能く菩提の道に入ることなし。

(6)復次に衆生始めて此の法を學し、正信を欲求するも其の心怯弱なり。此の【一三】娑婆世界に住するを以つて、自ら常に諸佛に値つて親承供養すること能はざるを畏れ、信心成就すべきこと難しと謂ひて、意退せんと欲せん事を懼る者は、當に知るべし。如來勝方便ありて信心を攝護す。謂く意を專らにし佛を念ずる因緣を以つて、願に隨つて他方佛土に生ずることを得て、常に佛を見て永く惡道を離る。修多羅に說くが如く、若し人專ら西方極樂世界の【一四】阿彌陀佛を念じて修する所の善根を迴向して、彼の世界に生ぜんと願求せば、卽ち往生することを得。常に佛を見るが故に、終に退することあることなし。若し彼の佛の眞如法身を觀じ、常に勤めて修習すれば畢竟じて生ずることを得。正定に住すが故に。

(勸修利益分)

已に修行信心分を說く、次に勸修利益分を說かん。是の如き摩訶衍は諸佛の祕藏なり。我已に總じて說く。

(a)若し衆生有つて、如來甚深の境界に於て正信を生ずることを得、誹謗を遠離して、大乘の道に入らんと欲せば、當に此の論を持し、思量し、修習し、究竟じて能く無上の道に至るべし。若し人、是の法を聞き已つて怯弱を生ぜざれば、當に知るべし。此の人定んで佛種を紹ぎ、必ず諸佛の爲に

(6) 初學衆生の修法。

【一三】娑婆世界。梵語(Sahā-loka)忍土等と譯す。吾人の居住せる如き三千大千世界をいふ。

【一四】阿彌陀佛。梵語(Amitābha)又は(Amitāyus)無量光又は無量壽と譯す。

(a) 信受德益。

して驕慢を捨て、他人の爲に惱されず。九には未だ定を得ずと雖も、一切時、一切境界處に於て則ち能く煩惱を減損して世間を樂ばず。十には若し三昧を得れば、外緣一切音聲の爲に驚動せられず。

(に)復次に、若し人唯だ止を修すれば、則ち心沈沒し、或は懈怠を起し衆善を樂はず大悲[一二]を遠離す。此の故に觀を修す。

觀を修習する者は、當に一切世間の[一三]有爲の法は久しく停ることを得ることなし、須臾にして變壞す。一切の心行は念念に生滅す。是を以つての故に苦なりと觀ずべし。應に過去所念の諸法は恍忽として夢の如しと觀ずべし。應に現在の所念の諸法は、猶し電光の如しと觀ずべし。應に未來所念の諸法は猶し雲の忽爾として起るが如しと觀ずべし。應に世間一切の有身は悉く皆不淨にして、種種に穢汙し、一として樂ふべきなしと觀ずべし。

是の如く當に念ずべし。一切の衆生は無始の時よりこのかた、皆無明に熏習せらるるに因るが故に、心をして生滅せしむ。已に一切の身心の大苦を受け、現在に卽ち無量の逼迫あり、未來の所苦も亦分齊なし。捨て難く離れ難くして而も覺知せず。衆生是の如し。甚だ愍れむべしとなす。

是の思惟を作して、卽ち應に勇猛に大誓願を立つべし。願くは我心をして分別を離れしむるが故に。十方に遍じて、一切の諸善功德を修行し、その未來を盡して無量の方便を以つて、一切の苦惱の衆生を救拔し、涅槃第一義の樂を得せしめん。

是の如き願を起すを以つての故に、一切時、一切處に於て、所有の衆善は已が堪能するに隨つて修學を捨てず、心に懈怠なし、唯だ坐する時、止を專念するを除く。若し除の一切は、悉く當に應作と不應作とを觀察すべし。

若しは行、若しは住、若しは臥、若しは起、皆應に止觀俱行すべし。

所謂る、諸法の自性不生を念ずと雖も、而も復、卽ち、因緣和合の善惡の業、苦樂等の報、失せ

(に)　止觀竝修。

【一二】大悲。他の苦を救はんとする大いなる心をいふ。

【一三】有爲の法。因緣によりて造作せられたる事物をいふ。

る是れ眞の涅槃なりと說く。或は人をして宿命過去の事を知り、亦未來の事を知り、[一〇七]他心智辯才無礙を得せしめ、能く衆生をして、世間名利の事に貪著せしむ。亦人をして數〻瞋り、數〻喜びて、性に常準なからしめ、或は多慈愛・多睡・多宿・多病をもつて其の心をして懈怠ならしむ。或は卒かに精進を起し、後便ち休廢して、不信を生じて多疑多慮し、或は本の勝行を捨てゝ更に雜業を修す。若しは世事に著して種種に牽纏す。亦能く人をして、諸の三昧の少分の相似を得せしむ。皆是れ外道の所得にして、眞の三昧に非ず。或は復人をして、若しは一日、若しは二日、若しは三日乃至七日定中に住して、自然の香美なる飮食を得て、身心適悅して不飢不渴ならしめ、人をして愛著せしむ。或は人をして食に分齊なく、乍ちに多く乍ちに少くして顏色を變異せしむ。是の義を以つての故に、行者は常に智慧觀察して、此の心をして邪網に墮せしむることなかるべし。當に勤めて正念にして取せず、著せざれば、則ち能く是の諸の業障を遠離すべし。

應に知るべし。外道の所有の三昧は、皆見愛我慢の心を離れず、世間の名利恭敬を貪著するが故に。眞如三昧は、[一〇八]見相に住せず、[一〇九]得相に住せず、乃至定を出でて、亦懈慢なし。所有の煩惱漸漸に微薄なり。若し諸の凡夫此の三昧の法を習はずして、如來種性に入ることを得ること、是の處りあることなし。世間の諸の禪三昧を修して、多く味著を起し、我見に依つて三界に繫屬し、外道と共なるを以て、若し善知識の所護を離るれば、卽ち外道の見を起すが故に。

(は)復次に精勤して專心に此の三昧を修學する者は、現世に當に十種の利益を得べし。云何んが十となす。一には常に十方の諸佛菩薩の爲に護念せらる。二には諸魔惡鬼の爲に能く恐怖せられず、三には九十五種の外道と、鬼神の爲に惑亂せられず。四には甚深の法を誹謗することを遠離し、重罪業障漸漸に微薄なり。五には一切の疑と諸の惡[一一〇]覺觀とを滅す。六には諸々の如來の境界に於て、信、增長することを得。七には憂悔を遠離し、生死の中に於て勇猛不怯なり。八には其の心柔和に

【一〇七】他心智。他人の心に通じ得る智なり。

【一〇八】見相。定中、能見の心相。

【一〇九】得相。定中、所得の境相。

(は) 修學三昧の利益。

【一一〇】覺觀。事理を尋求し、伺案する麤細の心所なり。

故に。

(5)云何んが止觀門を修行するや。言ふ所の止とは、謂はく一切の境界相を止めて、[九九]奢摩他觀に隨順する義の故に。言ふ所の觀とは、謂はく因縁生滅相を分別して[一〇〇]毘鉢舍那觀に隨順する義の故に。云何んが隨順するや。此の二義漸漸に修習して相ひ捨離せざるを以つて雙べて現前するが故に。

(い)若し止を修する者は、靜所に住して端座して意を正しくし、[一〇一]氣息に依らず、[一〇二]形色に依らず、空に依らず、地水火風に依らず、乃至見聞覺知に依らず、一切の諸想、念に隨つて皆除き、亦[一〇三]除想を遣るべし。一切の法は本來無相なるを以つて念念に生ぜず、念念に滅せず、亦常に心外に隨つて境界を念じ、後ち心を以つて心を除くことを得ず。心若し馳散せば即ち當に攝し來つて正念に住すべし。此の正念とは當に知るべし、唯心にして外の境界なし。即ち復此の心も亦自相なし。念念不可得なり。若し坐より起ちて去來進止に施作する所あらば、一切の時に於て常に方便を念じて、隨順觀察すべし。久住淳熟すれば其の心住することを得、心住するを以ての故に、漸漸に猛利にして、[一〇四]眞如三昧に隨順し、得入し、深く煩惱を伏し、信心增長して速かに不退を成ず。唯だ疑惑と不信と、誹謗と重罪業障と、我慢と懈怠とを除く。是の如き等の人は入る事能はざる所なり。

復次に是の三昧に依るが故に即ち法界一相なりと知る。謂はく一切の諸佛の法身と、衆生身とは平等無二なり。即ち[一〇五]一行三昧と名づく。當に知るべし。眞如は是れ三昧の根本なり。若し人修行すれば漸漸に能く無量の三昧を生ず。

(ろ)或は衆生あり。善根の力なく、則ち諸魔外道鬼神の爲に惑亂せらる。若しくは坐中に於て、形を現じて恐怖し、或は端正の男女等の相を現ず。當に唯心を念ずべし。境界則ち滅して、終に惱を爲さず。或は天像菩薩像を現じ、亦如來の像を作す。相好具足し、若しは[一〇六]陀羅尼を說き、若しは布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧を說き、或は平等・空・無相・無願・無怨・無親・無因・無果・畢竟空寂な

---

(5) 止觀門。

【九九】奢摩他。梵語(Śamatha)止と譯す。平等は心を持し、進んで眞如三昧に入らしむる法。

【一〇〇】毘鉢舍那。梵語(Vipaśyanā)觀と譯す差別の諸相を觀察して進んで大悲を起し衆生濟度の方面に向ふ。

(い) 止觀の修行遣方(眞如三昧を學習する方法)。

【一〇一】氣息。數息觀をいふ。

【一〇二】形色。形は形色の骨瑣觀等をいひ、色は顯色の青黃赤白の四相觀をいふ。

【一〇三】除想。上の諸想を除けりと思ふ想。

【一〇四】眞如三昧。眞如の寂靜無相なるを觀じて煩惱虛妄を除く三昧なり。

【一〇五】一行三昧。眞如三昧の心を專らにして眞如の一理を觀ずる邊より名づく。

(ろ) 修三昧の妨碍に處する法。

【一〇六】陀羅尼。梵語(Dhāraṇī)總持等と譯す。

(b)修行に五門あり、能く此の信を成ず。如何んが五となす。一には施門、二には戒門、三には忍門、四には進門、五には止觀門なり。

(1)云何んが施門を修行するや。若し一切の來つて求索する者を見れば、所有の財物は力に隨つて施與す。自ら慳貪を捨つるを以つて、彼をして歡喜せしむ。若し厄難恐怖危逼を見て、己が堪任するに隨つて無畏を施與す。若し衆生の來つて法を求むる者あれば、己が能く解するに隨つて、方便して說いて名利恭敬を貪求すべからず。唯だ、自利利他を念じ、菩提に廻向するが故なり。

(2)云何んが戒門を修行する。所謂る殺さず、盜まず、婬せず、兩舌せず、惡口せず、妄言せず、綺語せず、貪嫉と、欺詐と、諂曲と、瞋恚と、邪見とを遠離するなり。若し出家は煩惱を折伏せんが爲の故に、亦應に憒閙を遠離し、常に寂靜に處して、少欲知足[九七]頭陀等の行を修習し、乃至小罪にも心に怖畏を生じて慚愧し、改悔して、如來所制の禁戒を輕んずることを得ざるべし。當に[九八]譏嫌を護つて、衆生をして妄に過罪を起さしめざるが故に。

(3)云何んが忍門を修行する。所謂る、應に他人の惱すを忍んで、心に報を懷かざるべし。亦當に利衰・毀譽・稱譏苦樂等の法を忍ぶべき故に。

(4)云何んが進門を修行するや。所謂る諸の善事に於て、心懈退せず、志を立つること堅强にして怯弱を遠離し、當に過去久遠より已來、虛しく一切身心の大苦を受けて、利益あることなきを念ずべし。此の故に應に勸めて、諸の功德を修して自利利他速かに衆苦を離るべし。

復次に若し人、信心を修行すと雖も、先世よりこのかた、多く重罪惡業障あるを以つての故に邪魔諸鬼の爲に惱亂せられ、或は世間事務の爲に種種に牽纏せられ、或は病苦の爲に惱さる。是の如き等の衆多の障礙あり。此の故に當に勇猛精進し、晝夜六時に諸佛を禮拜し、誠心に懺悔し、勸請し、隨喜して、菩提に廻向すべし。常に休廢せずんば、諸障を免るることを得ん。善根增長するが

(b)　修行の種類。

(1)　施門。

(2)　戒門。

【九七】　頭陀。梵語(Dhūta)抖擻・洮汰等と譯す。衣・食・住處等の三界煩惱の業報を抖ち擻ふをいふ。

【九八】　譏嫌。譏嫌を護る。他人の譏り嫌ふことを爲さざるをいふ。

(3)　忍門。

(4)　進門。

心に分齊あり。妄りに想念を起して法性に稱はざるを以つての故に決了すること能はず。諸佛如來は見想を離れて遍せざる所なし。心眞實の故に、卽ち是れ諸法の性たり。自體は一切の妄法を顯照す。大智用無量の方便あつて諸の衆生の應に解を得るべき所に隨つて、皆能く種種の法義を開示す。此の故に一切種智と名づくることを得。

又問ふて曰はく、若し諸佛に自然の業ありて、能く一切處に現じて、衆生を利益せば、一切の衆生、若しは其の身を見、若しくは神變を覩、若しは其の說を聞いて利を得ざることなからん。云何んぞ、世間に多く見ること能はざるや。

答へて曰はく、諸佛如來の法身平等に、一切處に遍じて、作意あることなきが故に自然なりと說く。但だ衆生の心に依つて現ず。衆生の心は猶ほ鏡の如し。鏡若し垢あれば、色像現ぜず。是の如く、衆生の心に若し垢あれば法身現ぜざるが故に。

（修行信心分）

已に解釋分を說く、次に修行信心分を說かん。

(a)是の中に、未だ正定聚に入らざる衆生に依るが故に修行信心を說く。

何等の信心、如何んが修行するや。

略して信心を說くに四種あり。云何んが四となす。(1)一には根本を信ずるなり。所謂る眞如の法を樂念するが故に。(2)二には佛は無量功德ありと信ずるなり。常に念じて親近し、供養し、恭敬して、善根を發起し、一切智を願求するが故に。(3)三には法に大利益ありと信ずるなり。常に念じて諸波羅蜜を修行するが故に。(4)四には、僧能く正しく自利利他を修行すと信ずるなり。常に樂つて諸菩薩衆に親近して如實の行を求學するが故に。

(a) 信心の種類。

(1) 根本を信ず。

(2) 佛の無量功德を信ず。

(3) 法の大利益を信ず。

(4) 僧の自利利他を信ず。

(c3)證發心とは、淨心地より乃し菩薩究竟地に至るまで何の境界を證するや。所謂る眞如なり。轉識に依るを以つて、說いて境界となす。而も此の證は境界あることなし。唯だ眞如智を名づけて法身となす。

是の菩薩は一念の頃に於て、能く十方無餘の世界に至つて、諸佛を供養し、轉法輪を請ず、唯だ衆生を開導し利益せんが爲に、文字に依らず。或は地を超へて、速かに正覺を成ずと示す。怯弱の衆生の爲なるを以つての故に。或は我は無量阿僧祇劫に於て、當に佛道を成ずべしと說く、懈慢の衆生の爲なるを以つての故に。能く是の如き無數の方便を示すこと不可思議なり。而も實には菩薩の種性根等しく、發心則ち等しく、所證も亦等しくして、超過の法あることなし。一切の菩薩は皆三阿僧祇劫を經るを以ての故に。但衆生世界同じからず、所見・所聞、根・欲性異るに隨ふ故に、所行を示すことも亦差別あり。

又是の菩薩の發心の相とは、三種の心の微細の相あり。云何んが三となす。一には眞心なり。無分別の故に、二には方便心なり。自然に遍行して、衆生を利益するが故に、三には業識心なり。微細に起滅するが故なり。

又是の菩薩は功德成滿して、[九五]色究竟處に於て、一切世間の最高大の身を示す。謂はく[九六]一念相應の慧を以つて、無明頓に盡くるを一切種智と名づく。自然にして不思議の業あつて、能く十方に現じて衆生を利益す。

問ふて曰はく、虛空無邊なるが故に世界無邊なり。世界無邊なるが故に衆生無邊なり。衆生無邊なるが故に心行の差別も亦復無邊なり。是くの如く境界は分齊すべからず、知り難く解し難し。若し無明斷ぜば心想あることなし。云何んが能く了するを一切種智と名づけんや。

答へて曰はく、一切の境界は本來一心にして想念を離る。衆生妄に境界を見るを以つての故に、

(c3)　證發心。

【九五】色究竟處。色界天の最上處。即ち大自在天をいふ。
【九六】一念相應の慧。方に成佛せんとする時、始覺の慧の本覺の心源に、初めて相應する時の慧をいふ。

からしめ、皆無餘涅槃を究竟せしむ。法性の斷絶なきに隨順するを以つての故に、法性廣大にして、一切の衆生に遍じて平等無二なり。彼此を念ぜず。究竟寂滅の故に。

(5)菩薩是の心を發するが故に、則ち少分法身を見ることを得。法身を見るを以つての故に、其の願力に隨つて、能く八種を現じて衆生を利益す。所謂る[八二]兜率天より退き、胎に入り、胎に住し、胎を出で、出家し、成道し、[八三]法輪を轉じ、涅槃に入るなり。然るに此の菩薩を未だ法身と名けず。其の過去無量世よりこのかた、[八四]有漏の業未だ決斷すること能はざるを以つて、其の所生に隨つて、微苦と相應するも亦業繫に非ず。大願自在力あるを以つての故に。

修多羅の中に或は惡趣に退墮する者ありと說くが如きは、それ實には退に非ず。但だ初學の菩薩未だ[八五]正位に入らずして懈怠する者に恐怖せしめ、彼をして、勇猛ならしめん爲の故に。又是の菩薩は一たび發心して後ち、怯弱を遠離し、畢竟じて二乘地に墮することを畏れず。若し無量無邊[八六]阿僧祇劫に勤苦難行して乃ち涅槃を得と聞くとも亦、怯弱ならず。一切の法は本より已來自ら涅槃なりと信知するを以つての故に。

(c2)解行發心とは當に知るべし。轉た勝なり。是の菩薩は初め正信より已來、[八七]第一阿僧祇劫に於て將に滿ぜんと欲するを以つての故に。

眞如の法の中に於て、深解現前して、所修、相を離る。法性の體は慳貪なきを知るを以つての故に、隨順して[八八]檀波羅蜜を修行す。法性無染にして[八九]五欲の過を離るを知るを以つての故に、隨順して[九〇]尸羅波羅蜜を修行す。法性無苦にして、瞋惱を離るるを知るを以つての故に、隨順して[九一]羼提波羅蜜を修行す。法性は身心の相なく、懈怠を離るるを知るを以つての故に、隨順して[九二]毗梨耶波羅蜜を修行す。法性は常定にして體に亂ることなきを知るを以つての故に、隨順して[九三]禪波羅蜜を修行す。法性は體明にして、無明を離るるを知るを以つての故に、隨順して[九四]般若波羅蜜を修行す。

---

(5) 發心利益。

【八二】兜率天。梵（Tuṣita-deva）上足天、妙足天等と譯す。欲界の第六天なり。

【八三】法輪を轉ず。佛の說法をいふ。

【八四】有漏。煩惱の存するをいふ。

【八五】正位。初住の位をいふ。

【八六】阿僧祇劫。梵語（Asaṃ-khya-kalpa）無數劫と譯す。

(c2) 解行發心を釋す。

【八七】第一阿僧祇劫。初住より初地に至る修行の時期をいふ。

【八八】檀波羅蜜。梵語（Dāna-pāramitā）布施波羅蜜なり。

【八九】五欲。色、聲、香、味、觸の五境、又は色、受、想、行識の五陰に對する欲求をいふ。

【九〇】尸羅波羅蜜。梵語（Śīla-pāramitā）戒波羅蜜なり。

【九一】羼提波羅蜜。梵語（Kṣānti-pāramitā）忍辱波羅蜜なり。

【九二】毘梨耶波羅蜜。梵語（Vīrya-pāramitā）精進波羅蜜なり。

【九三】禪波羅蜜。梵語（Dhyāna-pāramitā）定波羅蜜なり。

【九四】般若波羅蜜。梵語（prajñā-pāramitā）慧波羅蜜なり。

正しく眞如の法を念ずるが故に、二には深心なり。一切諸の善行を集むるを樂ふが故に、三には大悲心なり。一切衆生の苦を拔かんと欲するが故に。

問ふて曰く、[七九]上に法界一相、佛體無二なりと說く。何が故ぞ、唯だ眞如を念ぜずして、復諸の善行を求學する事を假らんや。

(4)答へて曰く、譬へば[八〇]大摩尼寶の體性は明淨なれども而も鑛穢の垢あり。若し人、寶性を念ずと雖も、方便を以つて種々磨治せざれば、終に淨を得ることなきが如し。是の如く衆生の眞如の法も、體性空淨なれども、而も無量煩惱染の垢あり。若し人、眞如を念ずと雖も、方便を以つて種種に熏修せざれば亦淨を得ることなし。垢無量無邊にして一切法に遍ずるを以つての故に、一切の善行を修して以つて對治をなす。若し人、一切の善法を修行すれば自然に眞如の法に歸順するが故に。

略して方便を說くに四種あり。云何んが四となす。

(い)一には行根本方便なり。謂はく、一切の法は自性無生なりと觀じ、妄見を離れて生死に住せず。一切の法因緣和合して業果失せずと觀じ、大悲を起して諸の福德を修し、衆生を攝化して涅槃に住せず、法性無住に隨順するを以つての故に。

(ろ)二には能止方便なり。謂はく慚愧悔過して、能く一切の惡法を止めて增長せしめず。法性の諸過を離るるに隨順するを以つての故に。

(は)三には發起善根增長方便なり。謂はく、勤めて[八一]三寶を供養し禮拜し、諸佛を讚嘆し、隨喜し、勸請す。三寶を愛敬する淳厚の心を以つての故に、信增長するを得て乃ち能く無上の道を志求す。又佛法僧の力に護らるるに依るが故に、能く業障を消して善根退せず、法性の癡障を離るるに隨順するを以つての故に。

(に)四には大願平等方便なり。所謂る發願して未來を盡し、一切の衆生を化度するに、餘あることな

【七九】上に。九頁十三行。

(4) 垢染對治の方便。

【八〇】大摩尼寶。梵語(Mahā-maṇiratna)摩尼は寶の總名。

(い) 行根本方便。

(ろ) 能止の方便。

(は) 發起善根增長方便。

【八一】三寶。佛寶、法寶、僧寶をいふ。

(に) 大願平等方便。

れば心をして生滅して實智に入らさらしむるを以つての故に。

(c)分別發趣道相とは、謂はく、一切の諸佛所證の道に、一切の菩薩發心修行し、趣向する義なるが故に。

略して發心を說くに三種あり。云何んが三となす。一には信成就發心、二には解行發心、三には證發心なり。

(c1) 信成就發心とは、何等の人に依り、何等の行を修し、信成就することを得て、能く發心するに堪へん。

(1)所謂[七五]不定聚の衆生に依るに熏習と善根の力あるが故に、業果報を信じて能く[七六]十善を起し、生死の苦を厭ひ、無上[七七]菩提を欲求し、諸佛に値ふことを得て、親承供養して信心を修行す。一萬劫を經て、信心成就するが故に、諸佛菩薩敎へて發心せしむ。或は大悲を以ての故に能く自ら發心し、或は正法の滅せんと欲するに因り、護法の因緣を以つての故に、能く自ら發心す、是の如く信心成就して、發心を得る者は[七八]正定聚に入つて、畢竟じて退かさるを、如來種中に住して正因相應すと名づく。

(2)若し衆生ありて、善根微少にして、久遠より已來、煩惱深厚なれば、佛に値ひ亦供養することを得と雖も、然も人天の種子を起し、或は二乘の種子を起す。たとひ大乘を求むる者あれども、根は則ち不定にして若くは進み、若しくは退く。或は諸佛を供養すること有れども、未だ一萬劫を經ず。中に於て緣に遇つて亦發心することあり、所謂る佛の色相を見て其の心を發し、或は衆僧を供養するに因つて、其の心を發し、或は二乘の人の敎に因つて發心せしめ、或は他を學んで發心す。

是の如き等の發心は悉く皆不定なり。惡因緣に遇へば、或は便ち退失し、二乘地に墮す。

(3)復次に信成就發心とは何等の心を發すや。略して三種あり。云何んが三となす。一には直心たり。

(c) 分別發趣道相（菩薩の發心修行の道程を述ぶ）。

(c1) 信成就發心。

(1) 何等の人に依る。

【七五】不定聚。十信の位の菩薩の大乘の果を求めんとして、其の心未だ定まらず進退あるをいふ。

【七六】十善。不殺、不盜、不邪淫、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不貪、不瞋、不邪見をいふ。

【七七】菩提。梵語（Bodhi.）覺等と譯す。

【七八】正定聚。十住已上の位の菩薩の決定して不退なるをいふ。

(2) 何等の行を修す。

(3) 何等の心を起す。

るを以つての故に、即ち如來の藏に、色心の法の自相差別有りと謂へり。云何んが對治せん、唯眞如の義に依つて說くを以つての故に、生滅の染の義に因つて示現するを差別と說くが故に。

(4)四には修多羅に、一切世間生死の染法は、皆如來藏に依りてあり、一切の諸法は眞如を離れずと說くを聞いて、解せざるを以つての故に、如來藏の自體に具さに一切世間の生死等の法ありと謂へり。云何んが對治せん。如來藏は本來過恒沙等の諸の淨功德、眞如を離れず、斷ぜず、異らざるの義あるを以つての故に。過恒沙等の煩惱の染法は唯是れ妄有にして、性は本より無なり。無始世よりこのかた、未だ曾て、如來藏と相應せざるを以つての故に。若し如來藏の體に妄法ありて、證會して永く妄を息めしむれば則ち此の處りあることなし。

(5)五には修多羅に、如來藏に依るが故に生死あり。如來藏に依るが故に涅槃を得と說くを聞いて、解せざるを以つての故に、衆生に始ありと謂へり。始を見るを以つての故に。復如來所得の涅槃も、その終盡ありて、還た衆生となると謂へり。云何んが對治せん。如來藏に前際なきを以つての故に、無明の相も亦始めあることなし。若し三界の外に更に衆生ありて始めて起ると說かば、即ち是れ外道經の說なり。又如來藏に後際あることなく、諸佛所得の涅槃も之と相應して、則ち後際なきが故に。

(b2)法我見とは二乘の鈍根に依るが故に、如來は但だ、人無我と說かんが爲に、說、究竟せざるを以て、五陰生滅の法ありと見て、生死を怖畏して妄に涅槃を取る。云何んが對治せん。五陰の法は自性不生なるを以つて、則ち滅あることなし。本來涅槃の故に。

復次に究竟じて妄執を離るれば、當に知るべし、染法淨法皆悉く相待して、自相の說くべきことあることなし。此の故に一切の法は本より已來、色に非ず、心に非ず、智に非ず、識に非ず、有に非ず、無に非ず、畢竟じて不可說相なり。而して言說あるは、當に知るべし。如來善巧の方便は、假りに言說を以つて衆生を引導す。其の旨趣は皆念を離れて眞如に歸せんが爲なり。一切の法を念ず

---

(4) 自性に染ありと執する見。

(5) 有始有終を執するの見。

(b_2) 法我見。

(a3)復次に生滅門より卽ち眞如門に入ることを顯示す。所謂る[七二]五陰を推求するに、色は之れ心とともなり。六塵の境界、畢竟じて無念なり。心に形相なし。十方に之を求むるに終に不可得なるを以てなり。人の迷ふが故に東を謂つて西となせども、方は實に轉ぜざるが如く、衆生も亦爾り。無明の迷の故に心を謂つて、念となせども、心は實に動ぜず。若し能く觀察して、心は無念と知れば、卽ち隨順して眞如門に入ることを得るが故に。

(b)對治邪執とは、一切の邪執は皆我見に依る。若し我を離れば則ち邪執なし、此の我見に二種あり。云何んが二となす。一は人我見、二は法我見なり。

(b1)人我見とは、諸の凡夫に依りて說くに五種あり。云何んが五となす。(1)一には修多羅に、如來の法身は畢竟じて寂寞たること、猶ほ虛空の如しと說くを聞いて、著を破せんが爲と知らざるを以つての故に、卽ち虛空は之れ如來の性なりと謂へり。如何んが對治せん。虛空の相は是れ其の妄法なり。體は無にして不實なり。色に對するを以ての故にあり。之れ可見の相にして心をして生滅せしむ。一切の色法は本來之れ心なるを以つて、實に外色なし、若し色無ければ、則ち虛空の相なきを明す。所謂る一切の境界は唯心にして、妄起するが故にあり、若し心、妄動を離るれば、則ち一切の境界滅す。唯だ一の眞心にして、徧せざる所なし。此れを如來廣大性智究竟の義と謂ふ。虛空の相の如くには非さるが故に。

(2)二には修多羅に、世間の諸法は畢竟じて體空なり。乃至涅槃眞如の法も亦畢竟空なり。本來自ら空にして、一切の相を離れたりと說くを聞いて、著を破せんが爲と知らざるを以つての故に。卽ち眞如涅槃の性は唯是れ其れ空なりと謂へり。云何んが對治せん。眞如法身の自體は不空にして無量の性功德を具足すと明すが故に。

(3)三には修多羅に、如來の藏は增減ある事なく、體は一切功德の法を備ふと說くを聞いて、解せざ

(a3) 現象生滅卽眞如實在の理を明す。

[七二] 五陰。色陰、受陰、想陰、行陰、識陰をいふ。

(b) 對治邪執(謬解の破斥)。

(b1) 人我見(法身如來藏に關する異說)。

(1) 如來を虛空と謂ふの見。

(2) 眞如是れ空と執する見。

(3) 性德妄染に同じと執する見。

一には分別事識に依つて凡夫二乘の心の見る所の者を名づけて應身となす。轉識の現ずるを知らざるを以ての故に、外より來ると見て、色の分齊を取つて盡く知ること能はざるが故に。

二には業識による。謂はく諸の菩薩、初發意より乃至菩薩究竟地の心の所見を名づけて報身となす。身に無量の色あり。色に無量の相あり。相に無量の好あり。所住の依果も亦無量種種の莊嚴あり。示現する所に隨つて、卽ち邊あることなし。窮盡すべからず。分齊の相を離る。その所應に隨つて、常に能く住持して毀せず、失せず、是の如きの功德は、皆諸の波羅蜜等の無漏の行熏[七二]と、及び不思議熏[七三]との成就する所に因つて、無量の樂相を具足するが故に說いて報身となす。

(い)又凡夫の爲に見らるゝ者は是れその麁色なり。六道に隨つて各々見る事同じからず。種々の異類は受樂の相に非ざるが故に說いて應身となす。

(ろ)復次に初發意の菩薩等の所見は、深く眞如の法を信ずるを以ての故に、少分にて見る。彼の色相莊嚴等の事は、來なく、去なく、分齊を離る。唯、心に依りて現じて眞如を離れずと知る。然るに此の菩薩は猶ほ自ら分別して、未だ法身の位に入らざるを以つての故に。若し淨心を得れば、所見微妙にして、其の用轉た勝なり。乃至菩薩地盡くれば之を見ること究竟す。若し業識を離るれば則ち見相なし。諸佛の法身は彼此の色相更に相見ることあることなきを以ての故に。

問ふて曰はく、若し諸佛の法身色相を離れては、云何んぞ能く色相を現ずるや。

(は)答へて曰はく、卽ち此の法身は是れ色の體なるが故に、能く色を現ず。所謂る本より已來色心は不二なり。色性卽ち智なるを以つての故に、色體無形なるを說いて智身と名づく。智性卽ち色なるを以つての故に、說いて法身一切處に徧ずと名づく。所現の色は分齊有ることなく、心に隨つて、能く十方世界、無量の菩薩、無量の報身、無量の莊嚴、各各差別し、皆分齊なくして、而も相妨げざることを示す。此れ心識分別の能く知るに非ず。眞如自在の用の義あるを以つての故に。

【七二】 行熏。了因佛性、緣因佛性等の者熏習なり。
【七三】 不思議熏。正因佛性の本覺に內熏するをいふ。
(い) 應身。
(ろ) 報身。
(は) 法身。

答へて曰はく、實に此の諸の功德の義ありと雖も、而も差別の相なし。等同一味にして唯一眞如なり。此の義云何ん。無分別は分別の相を離るを以て是故に無二なり。

復何の義を以つてか差別を說くことを得るや。業識生滅の相に依つて示すを以つてなり。此れ云何んが示す。一切の法は本來唯心にして、實に念無し、妄心あつて覺せずして、念を起し、諸の境界を見るを以つての故に無明と說く。心性起らざるは卽ち是れ大智慧光明の義あるが故なり。若し心、見を起せば則ち不見の相あり。心性、見を離るれば、卽ち是れ徧照法界の義の故なり。若し心に動あるは眞の識知に非ず。自性あることなし。常に非ず、樂に非ず、我に非ず、淨に非ず、熱惱衰變して則ち自在ならず。乃至具さに過恒沙等の妄染の義あり。此の義に對する故に、心性動なければ、則ち過恒沙等の諸諸の淨功德の相の義示現することあり。若し心に起る事あつて更に前法の念ずべきを見る者は卽ち少くる所あり。是の如きの淨法の無量の功德は、卽ち是れ一心にして更に念ずる所なし。是の故に滿足するを名づけて法身如來の藏となす。

(2)復次に眞如の用とは、所謂る諸佛如來は、本と因地に在りて、大慈悲を起し、諸の波羅蜜[六八]を修し、衆生を攝化す。大誓願を立てゝ盡く等しく衆生界を度脫せんと欲するも亦[六九]劫數を限らず、未來を盡す。一切衆生を取ること己身の如くなるを以ての故に、而も亦衆生の相を取らず、此れ何の義を以てぞ、謂はく實の如く、一切衆生と及び己身と眞如平等にして別異なきことを知るが故に。

是の如く大方便智あるを以つて、無明を除滅して本の法身を見る。自然にして不思議の業、種種の用ありて卽ち眞如と等しく一切處に徧ず。又亦用相の得るべきあることなし。

何を以つての故に、謂はく諸佛如來は唯是れ法身なり。智相の身なり。[七〇]第一義諦なり。[七一]世諦の境界あることなし。施作を離る。但し衆生の見聞して益を得るに隨ふ。故に說いて用と爲す。此の用に二種あり。云何が二となす。

(2) 用大。
【六八】 波羅蜜。梵語(Pāramitā)到彼岸等と譯す。六度等の行によりて涅槃に至るをいふ。
【六九】 劫。梵語(Kalpa)分別時節等と譯す。極めて長き時間の單位。
【七〇】 第一義諦。眞諦とも云ひ、涅槃、眞如、實相等總て深妙の眞理に名く。
【七一】 世諦。世間の事實又は世俗の人の知る道理をいふ。

す。一には增長行緣、二には受道緣なり。

〃(は)平等緣とは、一切の諸佛菩薩皆な一切衆生を度脫せんと願ふこと、自然に熏習して常恒に捨てず[六五]、同體智力を以つての故に、應に見聞すべきに隨つて而も作業を現ず。所謂る衆生は、[六六]三昧に依つて、乃ち平等に諸佛を見ることを得るが故に。

此の體用熏習を分別するに復二種あり。云何んが二となす。一には未相應なり。謂はく凡夫と二乘と初發意の菩薩等は意と意識を以つて熏習し、信力に依るが故に、而して能く修行す。未だ無分別心と、體と相應することを得ざるが故に、未だ自在業の修行と用と相應することを得ざるが故に。

二には已相應なり。謂はく法身の菩薩は無分別心を得て、諸佛の自體と相應し、自在の業を得て、諸佛の智用と相應す。唯法力に依つて自然に修行し、眞如に熏習して無明を滅するが故に。

復次に染法は、無始より已來熏習して斷ぜず、乃至佛を得て後ち則ち斷ずることあり。淨法熏習は則ち斷ずることあることなし。未來を盡す。此の義云何ん。眞如の法は常に熏習するを以つての故に、妄心則ち滅すれば、法身顯現して、用熏習を起す故に、斷ずることあることなし。

(a2)復次に眞如の自體相とは、(1)一切の凡夫・聲聞・緣覺・菩薩・諸佛に增減あることなく、前際より生ずるに非ず、後際に滅するにも非ず。畢竟して常恒なり。

(1)本より已來、自性に一切の功德を滿足す。所謂る自體に大智慧光明の義あるが故に、徧照法界の義の故に、眞實識知の義の故に、自性清淨心の義の故に、[六七]常樂我淨の義の故に、清凉不變自在の義の故に、是の如きの恒沙に過ぎたる、不離・不斷・不異、不思議の佛法を具足す。乃至、滿足して少くる所あることなき義の故に、名づけて如來藏となし、亦如來法身と名づく。

問ふて曰はく、上に眞如は其の體平等にして、一切の相を離ると說く、云何んぞ復、體に是の如きの種種功德ありと說くや。

(は)〃 平等緣。

【六五】同體智力。理と智と同體なる根本智をいふ。

【六六】三昧、梵語(Samādhi)定、正受等と譯す。

(a2) 三大。

(1) 體相二大。

【六七】常樂我淨。涅槃に具ふる四德なり。

厚薄同じからざるが故に。過[六二]恒沙等の上煩惱は無明に依りて起れる差別あり。我見愛染煩惱も無明に依りて起れる差別あり。是の如く一切煩惱は無明に依りて起る所の前後無量の差別あり。唯如來のみ能く知るが故に。

又諸佛の法は因あり、緣あり、因緣具足して、即ち成辦することを得。木中の火性は是れ火の正因なるも、若し人の知ることなく、方便を假らずして、能く自ら木を燒くこと、此の處り有ることなきが如し。衆生も亦爾り、正因熏習の力ありと雖も、若し諸佛、菩薩、[六三]善知識等に値遇し、之れを以つて緣と爲さずして、能く自ら煩惱を斷じ涅槃に入ること、則ち此の處りなし。若し外緣の力ありと雖も、內の淨法未だ熏習の力有らざる者は、又究竟じて生死の苦を厭ひ、涅槃を樂求すること能はず。若し因緣具足すれば、所謂る自ら熏習の力あり、又諸佛菩薩等の爲に、慈悲願護せらるゝが故に、能く厭苦の心を起し、涅槃ありと信じて、善根を修習す。善根を修すること成熟するを以つての故に、則ち諸佛菩薩に値ひ、示教利喜して、乃ち能く進趣して、涅槃の道に向ふ。

(は二)用熏習とは、即ち是れ衆生の外緣の力たり。是の如きの外緣に無量の義あり。略して說くに二種あり云何んが二となす。一は差別緣、二は平等緣なり。

(は)差別緣とは、此の人、諸佛菩薩等に依りて初發意に初めて道を求むる時より、乃し佛を得るに至るまで、中に於て若しくは見、若しくは念ず。或は眷屬・父母・諸親となり、或は給使となり、或は知友となり、或は怨家となり、或は[六四]四攝を起す。乃至一切の所作に無量の行緣あり。大悲を起す熏習の力を以つて、能く衆生をして、善根を增長し、若しくは見、若しくは聞き、利益を得しむるが故に。

此の緣に二種あり、如何んが二となす。一には近緣なり。速かに度することを得る故に、二には遠緣たり。久遠に度することを得るが故に是の近遠の二緣分別するに復二種あり。云何んが二とな

【六二】恒沙。梵語(Gaṅgā-nadī-vālukā) 恒河の沙を以て多數なるに譬ふ。

【六三】善知識。善友の意。

(は二)用熏習。

(は) 差別緣。

【六四】四攝。布施攝、愛語攝、利行攝、同事攝をいふ。

ての故に。二には所起見愛熏習なり。能く分別事識を成就する義を以ての故に。

（は2）云何んが熏習、淨法を起して斷ぜざるや。所謂る眞如の法有るを以つての故に。能く無明に熏習す。熏習の因緣力を以ての故に、則ち妄心をして、生死の苦を厭ひ、涅槃を樂求せしむ。此の妄心に厭求の因緣あるを以ての故に、卽ち眞如に熏習す。

自ら已性を信じ、心妄りに動じて、前境界なしと知つて遠離の法を修す。實の如く前境界なしと知るを以ての故に、種々の方便、隨順の行を起して、取せず、念ぜず、乃至久遠熏習力の故に、無明は則ち滅す。無明滅するを以つての故に、心起る事あることなし。起る事なきを以つての故に、境界隨つて滅す。因緣倶に滅するを以つての故に、心相皆盡くるを、涅槃を得て自然の業を成ずと名づく。

（は6）妄心熏習の義に二種あり、云何んが二となす。（は一）一には分別事識熏習なり、諸々の凡夫二乘の人等に依りて、生死の苦を厭ひ、力の能くする所に隨つて、漸く[六二]無上道に趣向するを以つての故に。（は二）二には意熏習なり。謂はく諸の菩薩は發心勇猛にして、速かに涅槃に、趣くが故に。

（は7）眞如熏習の義に二種あり。云何んが二となす。一には自體相熏習、二には用熏習なり、（は一）自體相熏習とは、無始世よりこのかた無漏の法を具す。備に不思議の業ありて、境界の性と作る。此の二義に依りて恒常に熏習す。熏習力あるを以ての故に、能く衆生をして、生死の苦を厭ひ、涅槃を樂求し、自ら已身に眞如の法ありと信じて、發心修行せしむ。

問ふて曰はく、若し是の如きの義ならば、一切の衆生は悉く眞如をもつて、等しく皆熏習せん。云何んぞ有信・無信、無量・前後の差別あるや。皆應に一時に自ら眞如の法ありと知つて、勤修方便して等しく涅槃に入るべし。

答へて曰はく、眞如は本と一なれども、而も無量無邊の無明あつて、本より已來(このかた)自性差別して、

（は2）淨法熏習。
（は6）妄心熏習。
（は一）分別事識熏習。
【六二】無上道。佛の所得の道をいふ。
（は二）意熏習。
（は7）眞如熏習。
（は一）自體相熏習。

滅するが故に動相隨つて滅す。是れ水滅するに非ず。無明も亦爾り。心體に依りて動ず。若し心體滅せば、則ち衆生斷絶して依止する所なからん。體、滅せざるを以つて、心、相續することを得、唯だ癡滅するが故に心相隨つて滅す。心智の滅するに非ず。

(はc)復次に四種の法熏習の義あるが故に、染法淨法起つて斷絶せず。

云何んが四となす。一には淨法を名づけて眞如となす。二には一切の染因を名づけて無明となす。三には妄心を名づけて業識となす、四には妄境界にして、所謂る六塵なり。

熏習の義とは、世間の衣服には實に香なし。若し人、香を以つて熏習するが故に則ち香氣あるが如し。此も亦是の如し。眞如の淨法は、實には染なし。但だ無明を以つて熏習するが故に則ち染相あり、無明染法は實に淨業なし。但だ眞如を以つて熏習するが故に則ち淨用あり。

(は1)云何んが熏習し、染法を起して斷ぜざるや。所謂る眞如の法に依るを以ての故に無明あり。無明染法の因あるを以つての故に卽ち眞如に熏習す。熏習を以つての故に則ち妄心あり。妄心あるを以つて、卽ち無明に熏習す。眞如の法を了せざる故に、不覺の念起つて妄境界を現ず。妄境界、染法の緣あるを以つての故に、卽ち妄心に熏習して、其れをして念著し、種々の業を造りて、一切の心身等の苦を受けしむ。

(は3)此の妄境界熏習の義に則ち二種あり。云何んが二となす。一には增長念熏習、二には增長取熏習なり。

(は4)妄心熏習の義に則ち二種あり。云何んが二となす。一には業識根本熏習なり。能く阿羅漢[五八]辟支佛[五九]一切の菩薩をして生滅の苦を受けしむる故に、二には增長分別事識熏習なり。能く凡夫に業繫[六〇]の苦を受けしむるが故に。

(は5)無明熏習の義に二種あり。云何んが二となす。一には根本熏習なり。能く業識を成就する義

(はc)　四種法熏習。

(は1)　染法熏習。

(は3)　妄境界熏習。

(は4)　妄心熏習。

【五八】阿羅漢。梵語(Arhat)殺賊等と譯す。

【五九】辟支佛。梵語(Pratyeka-buddha)緣覺等と譯す。

【六〇】業繫。業が繩の如く衆生の身を縛して三界の牢獄に繫ぐをいふ。

(は5)　無明熏習。

一法界を了せざる義とは、信相應地より、觀察學斷して淨心地に入り、分に隨つて離るゝことを得、乃し如來地に至りて、能く究竟じて離るゝが故に。

相應の義と言ふは、謂はく心と念法と異なり、染淨の差別に依りて、知相と[五二]緣相[五三]と同じきが故に。不相應の義とは、謂はく心に卽する不覺にして常に別異なければ、知相、緣相と同じからざるが故に。

又染心の義とは、名づけて煩惱礙[五四]となす。能く眞如根本智を障ゆるが故に。無明の義とは名づけて智礙[五五]と爲す。能く世間の自然業智を障ゆるが故に。

此の義云何ん、染心に依りて能見、能現あり。妄りに境界を取りて、平等の性に違するを以ての故に。一切の法は常に靜にして起相あることなし、無明の不覺妄りに法と違するを以ての故に。世間一切の境界に隨順することを得て種々に知ること能はざるが故に。

(は)復次に生滅の相を分別すとは、二種あり。云何んが二となす。一には麁[五六]なり。心と相應するが故に、二には細[五七]なり。心と相應せざるが故に。

(はa)又麁中の麁は凡夫の境界なり、麁中の細と及び細中の麁とは菩薩の境界なり。細中の細は是れ佛の境界なり。

(はb)此の二種の生滅は無明熏習に依りてあり。所謂る因に依り緣に依る。因に依るとは不覺の義の故に、緣に依るとは妄に境界を作す義の故に。

若し因滅すれば則ち緣滅す。因滅するが故に不相應の心滅し、緣滅するが故に相應の心滅す。

問うて曰く、若し心滅すれば云何んが相續せん。若し相續せば如何んが究竟滅と說くや。

答へて曰く、言ふ所の滅とは唯だ心相の滅なり。心體の滅に非ず。風の水に依りて動相あるが如く、若し水滅せば則ち風相斷絕して、依止する所なからん。水滅せざるを以て風相相續す。唯だ風

【四九】心自在地。第九地の位をいふ。
(ろ[6]) 根本業不相應染。
【五〇】盡る地。究竟地にして第十地の位をいふ。
【五一】如來地。妙覺の位をいふ。
【五二】知相。心王の染法を知る相をいふ。
【五三】緣相。心王の淨法に緣ぜらるる相をいふ。
【五四】煩惱礙。見思の煩惱心神を惱亂し、以て法性の涅槃を障碍するもの。
【五五】智礙。佛の一切智なる菩提を障碍するもの。
(は) 生滅の相(無明染心に由つて惹起されたる一切の現象)。
【五六】麁。麁顯の事象、六道の間に輪轉生死する相。
【五七】細。微細の事象。
(は[a]) 麁細生滅。
(は[b]) 麁細生滅と六染心。

に。

(ろc)復次に意識と言ふは、即ち此れ相續識なり。諸の凡夫の取著轉た深きに依りて、[三九]我、我所を計し、種種に妄りに執し、事に隨つて攀緣し、六塵を分別するを名づけて意識となす。亦、[四〇]分離識とも名づく。又復說いて[四一]分別事識とも名づく。此の識は見愛煩惱に依りて增長する義の故に。

無明熏習に依りて起す所の識は、凡夫の能く知るところに非ず。亦二乘の智慧の覺する所に非ず。謂はく菩薩に依るに、[四二]初の正信に從つて、發心觀察し、若し法身を證すれば、少分知ることを得。乃至菩薩[四三]究竟地に盡く知ること能はず。唯佛のみ窮了す。

何を以つての故に、是の心は、本より已來、自性淸淨なり。而れども無明あり。無明の爲に染せられて、その染心あり。染心ありと雖も常恒不變なり。是の故に此の義は唯、佛のみ能く知る。所謂る、心性は常に無念なるが故に名づけて不變と爲す。

一法界に達せざるを以つての故に、心相應せず。忽然として念起るを名づけて、無明となす。

(ろd)染心には六種あり。云何んが六と爲す。

(ろ1)一には執相應染なり。[四四]二乘の解脫と及び信相應地とに依りて遠離するが故に。

(ろ2)二には不斷相應染なり。信相應地に依りて、方便を修學して、漸漸に能く捨し、[四五]淨心地を得て、究竟じて離するが故に。

(ろ3)三には分別智相應染なり。[四六]具戒地に依りて漸く離れ乃至[四七]無相方便地に究竟じて離するが故に。

(ろ4)四には現色不相應染なり。[四八]色自在地に依りて、能く離るゝが故に。

(ろ5)五には能見心不相應染なり。[四九]心自在地に依りて能く離るゝが故に。

(ろ6)六には根本業不相應染なり。菩薩[五〇]盡る地に依りて、[五一]如來地に入ることを得るとき、能く離るゝが故に。

(ろc) 識(第六識)。

【三九】我我所を計す。己の心は常一主宰なり、己の境界は我の所有なりと妄想するをいふ。

【四〇】分離識。六根によりて別して六塵を取るが故に分離識といふ。

【四一】分別事識。過去、未來、六根、六塵等を分別するが故に分別事識といふ。

【四二】初の正信。十信の位をいふ。

【四三】究竟地。第十地の位をいふ。

(ろd) 六染心。

(ろ1) 執相應染。

【四四】信相應地。三賢の位をいふ。

(ろ2) 不斷相應染。

【四五】淨心地。初地の位をいふ。

(ろ3) 分別智相應染。

【四六】具戒地。第二地の位をいふ。

【四七】無相方便地。第七地の位をいふ。

(ろ4) 現色不相應染。

【四八】色自在地。第八地の位をいふ。

(ろ5) 能見心不相應染。

の差別なるが故に。

(ろ)(ろa)復次に生滅の因緣とは、所謂る衆生は心に依りて意と意識と轉ずるが故に、

此の義云何ん。阿梨耶識に依るを以て無明ありと說く。

(ろb)不覺にして而も起り、能見と能現と、能く境界を取ると、念を起して相續するとの故に、說いて意となす。

此の意に復五種の名あり。云何んが五となす。

(ろ1)一には名づけて業識となす。謂はく無明の力、不覺にして、心動ずるが故に。

(ろ2)二には名づけて轉識となす、動心に依りて、能見の相あるが故に。

(ろ3)三には名づけて現識となす。所謂る能く一切の境界を現ず、猶ほ明鏡の色像を現ずるが如し。現識も亦爾り、其の五塵[三五]に隨うて對至すれば卽ち現じて前後あることなし、一切の時任運に起つて、常に前きに在るを以つての故に、

(ろ4)四には名づけて智識となす。謂はく染淨の法を分別するが故に。

(ろ5)五には名づけて相續識となす。念相應して斷ぜざるを以つての故に過去無量世等の善惡の業を住持して、失せざらしむるが故に。復能く現在未來の苦樂等の報を成熟して差違することなきが故に、能く現在と已經[三六]とのことを忽然として念じ、未來のことを不覺に妄慮せしむ。

是の故に[三七]三界は虛僞にして、唯心の所作なり、心を離れて則ち[三八]六塵の境界なし。

此の義云何ん。一切の法は皆心より起り、妄念より生ずるを以てなり。一切の分別は卽ち自心を分別す。心、心を見ざれば相として得べきなし。當に知るべし。世間一切の境界は、皆衆生の無明と妄心に依りて住持することを得。此の故に一切の法は、鏡中の像の體の得べきこと無きが如し。唯だ心の虛妄なり。心生ずれば則ち種種の法生じ、心滅すれば、則ち種種の法滅するを以つての故

(ろ) 生滅の因緣の義を釋す。因緣、因とは卽ち無明、緣とは卽ち境界にして前揭の三細六麤等の生滅の事象は悉く無明と境界との因緣に由つて發現することを明す。

(ろa) 心(第八識)。

(ろb) 意(第七識)。

(ろ1) 業識。

(ろ2) 轉識。

(ろ3) 現識。

【三五】五塵。五境に同じ、卽ち色聲香味觸の五境をいふ。

(ろ4) 智識。

(ろ5) 相續識。

【三六】已經。過去を云ふ。

【三七】三界。欲界、色界、無色界を云ふ。

【三八】六塵。六境に同じ。五塵に法を加へて六塵と稱す。

(い二)二には能見相なり。動に依るを以つての故に能見あり、動ぜざれば則ち見なし。(い三)三には境界相なり。能見に依るを以つての故に、境界は妄に現ず。見を離れば則ち境界なし。境界の緣あるを以つての故に、復六種の相を生ず。云何んが六となす。

(い一)一には智相なり。境界に依つて心起りて、愛と不愛とを分別するが故に。

(い二)二には相續相なり。智に依るが故に其の苦樂の覺を生ず、心より念を起し、相應して斷ぜざるが故に。

(い三)三には執取相なり。相續に依りて境界を緣念し、苦樂を住持して、心に著を起すが故に。

(い四)四には計名字相なり。妄執に依りて假の名言の相を分別するが故に。

(い五)五には起業相なり。名字に依りて名を尋ね、取著して種々の業を造るが故に。

(い六)六には業繫苦相なり、業に依りて果を受け、自在ならざるを以つての故に。

當に知るべし、無明は能く一切の染法を生ずることを。一切の染法は皆是れ不覺の相なるを以つての故に。

(いc)復次に覺と不覺とに二種の相あり。云何んが二となす。一には同相、二には異相なり。

(い一)同相とは、譬へば種々の瓦器が皆同じく微塵の性相なるが如し。

是の如く無漏と無明との種々の業幻は、皆同じく眞如の性相なり。

是故に修多羅の中に、此の眞如の義に依るが故に、一切の衆生は本來常住にして[三四]涅槃に入ると説く。菩提の法は修すべき相に非ず、作すべき相に非ず、畢竟無得なり。

亦色相の見るべきものなくして、而も色相を見ることあるは、唯是れ隨染業幻の所作なり。是の智は色不空の性には非ず。智相は見るべきことなきを以ての故なり。

(い二)異相とは、種々の瓦器の各々不同なるが如し。是の如く無漏と無明とは、隨染幻の差別、性染

(い二)能見相。

(い三)境界相。

(い一)智相。

(い二)相續相。

(い三)執取相。

(い四)計名字相。

(い五)起業相。

(い六)業繫苦相。

(いc)覺不覺の相。

(い一)同相。

【三四】。涅槃　梵語(Nirvāna)。滅度、寂滅等と譯す。生死等の因果の滅せる狀態をいふ。

(い二)異相。

(い二)[三二]不思議業相とは、智淨に依るを以つて能く一切勝妙の境界を作す。所謂る無量功德の相は常に斷絶なく、衆生の根に隨つて自然に相應じ、種々に現じて利益を得しむるが故に。

(い3)復次に覺の體相とは四種の大義あり。虛空と等しく猶ほ淨鏡の如し。

(い一)云何んが四となす。一には如實空鏡なり。一切の心境界の相を遠離して法の現ずべきなく、覺照の義に非ざるが故に。

(い二)二に因熏習鏡は、謂はく如實不空なり。一切世間の境界は悉く中に於て現じて、不出不入不失不壞、常住の一心なり。一切の法は卽ち眞實の性なるを以つての故に、又一切[三三]染法の染する能はざる所にして、智體動ぜず、無漏を具足して衆生に熏ずるが故に。

(い三)三に法出離鏡は、謂はく不空の法なり。煩惱礙と智礙とを出で、和合の相を離れて、淳淨明なるが故に。

(い四)四には緣熏習鏡なり。謂はく法出離に依るが故に、遍く衆生の心を照して善根を修せしめ、念に隨つて示現するが故に、

(いb)(い1)言ふ所の不覺の義とは、謂はく實の如く眞如の法一なりと知らざるが故に、不覺の心起つて其の念あり。念に自相なければ本覺を離れず、猶ほ迷人の方に依るが故に迷ひ、若し方を離れば則ち迷あることなきが如し。衆生も亦爾り、覺に依るが故に迷ふ。若し覺性を離れば則ち不覺なし。

不覺妄想の心あるを以つての故に、能く名義を知りて爲に眞覺を說く。若し不覺の心を離れば、則ち眞覺の自相の說くべきものなし。

(い2)復次に不覺に依るが故に三種の相を生じ、彼の不覺と相應じて離れず。

(い一)云何んが三となす。一には無明業相なり。不覺に依るを以つての故に心動ずるを、說いて名づけて業となす。覺すれば則ち動ぜず、動ずれば則ち苦あり、果は因を離れざるが故に。

(い二)不思議業相。

【三二】不思議業相。衆生の根類に應じて、種々の利益を得しむる業用の不思議なるをいふ。

(い3)覺の體相。

(い一)如實空鏡。

(い二)因熏習鏡。

【三三】染法。無明と相應して、眞性を染汚する法をいふ。

(い三)法出離鏡。

(い四)緣熏習鏡。

(いb)不覺(無始の無明)。

(い1)根本不覺(無始の無明自體)。

(い2)枝末不覺(無明から引き起されたる妄心)。

(い一)無明業相。

つての故に隨分覺と名づく。菩薩[二六]地盡るが如きは、方便を滿足して一念相應し、心の初起を覺するに心に初相なし。(い四)微細の念を遠離するを以つての故に、心性を見ることを得、心卽ち常住なるを究竟覺と名づく。

是の故に修多羅に、若し衆生あつて、能く無念を觀ずる者は、則ち[二七]佛智に向ふとなすと說くが故に。

又心起るとは初相[二八]の知るべきものあることとなし。而も初相を知ると言ふは、卽ち無念を謂ふなり。是の故に一切衆生を名づけて覺となさず。本よりこのかた、念々相續して未だ曾て念を離れざるを以つての故に、無始の[二九]無明と說く。

若し無念を得れば、則ち心相の生住異滅を知る。無念と等しきを以つての故に而も實には始覺の異あることとなし、四相は俱時にしてあり、皆自立するなく、本來平等同一覺なるを以つての故に。

(い1)復次に本覺を染に隨つて分別するに二種の相を生ず、彼の本覺と相捨離せず。云何んが二となす。一には智淨相、二には不思議業相なり。

(い一)[三〇]智淨相とは、謂はく法力の[三一]熏習に依りて如實に修行し、方便を滿足するが故に、和合識の相を破し、相續心の相を滅して、法身を顯現す。智淳淨なるが故に。此の義云何ん。一切心識の相は皆是れ無明なるを以つてなり。無明の相は覺性を離れざれば、壞すべきに非ず、壞すべからざるにも非ず。大海の水の風に因つて波動するに、水相と風相が相捨離せざるも、而も水は動性に非ざれば、若し風止滅すれば動相は則ち滅し、濕性は壞せざるが如くたるが故に。是くの如く、衆生の自性淸淨心も、無明の風に因りて動かされて、心と無明と俱に形相なく、相捨離せざるも、而も心は動性に非ざれば、若し無明滅すれば相續は則ち滅し、智性は壞せざるが故なり。

九地の位にある菩薩。

【二五】念住。相續相、智相、現相、轉相の四種の住をいふ。

(い三)隨分覺（念の住相を覺す)。

【二六】地盡く。第十地をいふ。

(い四)究竟覺（念の生相を覺す)。

【二七】佛智。法として知らざるなければ一切種智と名け、眞智正しくして、之に過ぐる者なければ無上正智と名く。

【二八】初相。生住異滅の四相の中の生相をいふ。

【二九】無明。智慧の明なきを云ふ。如實に法界眞如の理を了知せざる心的迷妄なり。

(い1)本覺(隨染分別)。

(い一)智淨相。

【三〇】智淨相。不滅の智性をいふ。

【三一】熏習。身口意の三業に現はるる行爲、言語、思想の起るに隨ひて其の氣分を眞如の上に留むるをいふ。

ず、有無俱相にも非ず、一相にも非ず、異相にも非ず、非一相にも非ず非異相にも非ず、一異俱相にも非ず。

(は3)乃至總じて說かば、一切の衆生は妄念あるを以つて、念念に分別するに依りて皆相應せず。故に、說いて空となす。若し妄心を離れば、實に空ずべきものなきが故に。

(はb)言ふ所の不空とは、已に法體空にして妄なきを顯はすが故に、卽ち是の眞心は、常恒不變にして、淨法滿足するが故に不空と名づく。亦相の取るべきものあることなし。離念の境界は唯だ證とのみ相應ずるを以つての故に。

(2)(い)心生滅とは、如來藏に依るが故に生滅の心あり。

所謂る不生不滅と生滅と和合して、一に非ず、異に非ざるを名づけて[二〇]阿梨耶識となす。

此の識に二種の義あり。能く一切の法を攝し、一切の法を生ず。

云何んが二となす。一には覺の義、二には不覺の義なり。

(いa)言ふ所の覺の義とは、謂はく心體は念を離る。離念の相は虛空界に等しくして、遍ぜざる所なく、法界一相にして、卽ち是れ如來の[二一]平等法身なり。(い1)此の法身に依りて說いて[二二]本覺と名づく。何を以つての故に、本覺の義とは、始覺の義に對して說く、始覺は卽ち本覺に同じきを以つてなり。

(い2)[二三]始覺の義とは、本覺に依るが故に而も不覺あり。不覺に依るが故に始覺ありと說く。又心源を覺するを以つての故に究竟覺と名づく。心源を覺せざるが故に究竟覺に非ず。

(い一)此の義は云何ん。凡夫の人の如きは、前念の起惡を覺知するが故に、能く後念を止めて、それをして起らざらしむ。復覺と名づくと雖も卽ち是れ不覺なるが故に。二乘の觀智と、初發意の菩薩等との如きは、念界を覺して念に異相なし、(い二)麁分別執著の相を捨つるを以つての故に相似覺と名づく。[二四]法身の菩薩等の如きは、[二五]念住を覺して念に住相なし。(い三)分別麁念の相を離るゝを以

(は1)眞如は一切の染法と相應せず。

(は2)眞如は有限差別の相を離る。

(は3)空と說く理由。

(はb)如實不空(積極的說明)

(2)生滅門(如來藏心の現象的說明)。

(い)心生滅。

[二〇]阿梨耶識。梵語(Ālaya-Vijñāna).自性淸淨心が無明に附き纏はれてゐる有樣をいふ。卽ち眞妄和合なり。

(いa)覺の義(離念の心體)。

[二一]平等法身。佛の法身たる眞如の理體に差別なきを以て平等といふ。

(い1)本覺。

[二二]本覺。先天的覺知の意。

(い2)始覺。

[二三]始覺。後天的覺知の意。

(い一)不覺(斷惑の智起らざるをいふ)。

(い二)相似覺(念の異相を覺す)。

[二四]法身の菩薩。初地已上

此の二門は相離れざるを以つての故なり。

(1)(い)心眞如とは、即ち是れ[一四]一法界[一五]大總相[一六]法門の體なり。所謂る心性は不生不滅なり。一切の諸法は唯だ妄念に依りて差別あるも、若し妄念を離れば則ち一切境界の相なし。

(ろ)是の故に一切法は本より已來、言說の相を離れ、名字の相を離れ、心緣の相を離れ、畢竟平等にして、變異あることなく、破壞すべからず。唯だ是れ一心なり。故に[一七]眞如と名づく。一切の言說は假名にして實なく、但だ妄念に隨うて、不可得なるを以つての故に。眞如と言ふも、亦相あることなし。

謂はく、言說の極にして、言に因つて言を遣るなり。

此の眞如の體は遣るべきものあることなし。一切の法は悉く皆眞たるを以つての故に。亦立つべきものなし、一切の法は皆同じく如なるを以つての故に。

當に知るべし、一切の法は說くべからず。念ずべからず。故に名づけて眞如とたす。

問うて曰はく、若し是の如き義なれば、諸の衆生等は、云何んが隨順して、而も能く得入せんや。

答へて曰はく、若し一切の法は說くと雖も、能說可說あることなく、念ずと雖も亦能念可念なしと知る。是れを隨順と名づく、若し念を離れば名づけて得入とたす。

(は)復次に眞如とは、言說に依つて分別するに二種の義あり。

云何んが二となす。一には如實空なり、能く究竟して實を顯すを以つての故に。二には如實不空なり。自體あつて[一八]無漏の性功德を具足するを以つての故に。

(はa)言ふ所の空とは、本より已來、一切の[一九]染法は相應せざるが故に。(は1)謂はく一切法の差別の相を離る。虛妄の心念なきを以つての故に。

(は2)當に知るべし、眞如の自性は、有相にも非ず、無相にも非ず、非有相にも非ず、非無相にも非

---

(1)(a1)　二門。

眞如門（如來藏心の實在的證明）。

(い)　心眞如の相。

【一四】　一法界。唯一絕對の實在の眞如が因となつて無漏の聖法を生ずることを云ふ。

【一五】　大總相。一切を該攝する絕大無限の總相の意。

【一六】　法門の體。萬有の實體、一切法の依持の意。

(ろ)　離言眞如。

【一七】　眞如。眞は眞實不易、如は平等一如にして、不生不滅の恒久の實在にして何の差別もなき唯一絕對の普遍の體性の意。

(は)　依言眞如。

【一八】　無漏。漏は煩惱の別名。煩惱なきを云ふ。

(はa)　如實空(消極的說明)

【一九】　染法。無明と相應する法、無明に由て起れる法。

（立　義　分）

已に因緣分を說く。次に立義分を說かん。

(a)摩訶衍とは、總じて說くに二種あり。云何んが二となす。一には法、二には義たり。

(a_1)言ふ所の法とは、謂はく衆生心なり。是の心は則ち一切世間の法と、出世間の法とを攝す。此の心に依つて摩訶衍の義を顯示す。

(1)何を以つての故に、是の心眞如の相は、卽ち摩訶衍の體を示すが故に。(2)是の心生滅因緣の相は、能く摩訶衍の自體相用を示すが故なり。

(a_2)言ふ所の義とは、則ち三種あり。云何んが三となす。

(1)一は體[九]大、謂はく、一切法は眞如平等にして、增減せざるが故に。

(2)二は相[一〇]大、謂はく、[一一]如來藏に無量性功德を具足するが故に。

(3)三は用[一二]大、能く一切世間、出世間の善の因果を生ずるが故に。

(b)一切の諸佛の本所乘の故なり。一切の[一三]菩薩は此の法に乘じて、如來地に到るが故なり。

（解　釋　分）

已に立義分を說く。次に解釋分を說かん。

解釋分に三種あり。云何んが三と爲す。一には顯示正義、二には對治邪執、三には分別發趣道相なり。

(a)顯示正義とは、一心の法に依りて二種の門あり。云何んが二となす。

(a_1)一には心眞如門、二には心生滅門なり。是の二種の門は皆各一切の法を總攝す。此の義云何ん。

（ろ）[4] 大部の論文讀破は困難の爲簡明多義なる論書に依り根本義を解する者。

【八】 總持。佛の敎法、義理等を持して失せざるを云ふ。

(a) 摩訶衍なる根本法に法義二種あり。

(a_1) 摩訶衍の法を顯示す。

(1) 法の心眞如の相は卽ち摩訶衍の體を示す。

(2) 法の心生滅因緣の相は摩訶衍の相用を示す。

(a_2) 摩訶の義を顯示す。

(1) 體大の義。

【九】 體大。眞如が萬有の本體なることをいふ。

(2) 相大の義。

【一〇】 相大。眞如の功能が體の上に具足されてあるを云ふ。

【一一】 如來藏。吾人の心に如來の智、如來の身等が本來具足されてあるをいふ。

(3) 用大の義。

【一二】 用大。眞如の働き、作用をいふ。卽ち一切諸法の善惡の因果を生ずる大作用あるをいふ。

(b) 乘の義を顯示す。

【一三】 菩薩。梵語(Bodhisattva)大道心衆生、大覺有情等と譯す。

(a) 顯示正義（二門三大の解說）。

名利恭敬を求むるに非ざるが故に。

(2)二には[四]如來根本の義を解釋して、諸の衆生をして正解して謬らざらしめんと欲する爲の故に。

(3)三には善根成熟の衆生をして、摩訶衍の法に於て、不退の信に堪任ならしめんが爲の故に。

(4)四には善根微少の衆生をして、信心を修習せしめんが爲の故に。

(5)五には方便を示して惡業障を消し、善く其の心を護りて癡慢を遠離し、邪網を出でしめんが爲の故に。

(6)六には[五]止觀を修習すべきことを示して、凡夫二乘の心過を對治せしめんが爲の故に。

(7)七には專念の方便を示して佛前に生ぜしめ、必定して信心を退せざらしめんが爲の故に。

(8)八には利益を示して修行を勸めんが爲の故に。

是の如き等の因緣あり、所以に論を造る。

(b)問うて曰はく、[六]修多羅の中に具さに此の法有り。何ぞ重ねて說くことを須ひる。

答へて曰はく、修多羅の中に此の法ありと雖も、衆生の根行等しからざると、受解の緣別なるとを以つてなり。

(い)所謂る如來の在世には、衆生は利根にして、能說の人も色心業勝れたり。[七]圓音一たび演ぶるに、異類等しく解了するを以つて、則ち論を須ひざるなり。

(ろ)若し如來の滅後は、(ろ1)或は、衆生能く自力を以つて廣く聞いて解を取る者あり。(ろ2)或は亦、衆生自力を以つて、少しく聞いて多く解する者あり。(ろ3)或は、衆生の自の心力なくして廣論に因つて解を得る者もあり。(ろ4)復、廣論文多を以つて煩と爲し心に[八]總持の文少くして多義を攝するを樂び、能く解を取る者もあり。

是の如く此の論は、如來廣大深法無邊の義を總攝せんと欲する爲の故に應に此の論を說くべし。

---

(2) 特に立義分及び解釋分中の顯示正義、對治邪執の前提として擧ぐ。

【四】 如來。佛の異名。

(3) 解釋分中の分別發趣道相の前提として擧ぐ。

(4)(5)の二理由は修行信心分中の四信、及び五行の中の初四行の前提として擧ぐ。

(6) 五行中止觀門の前提として擧ぐ。

【五】 止觀。止は煩惱を伏し、觀は後にあつて煩惱を斷じ正に眞如を證するなり。

(7) 修行信心分の終りの專念彌陀の敎義の前提として擧ぐ。

(8) 勸修利益分の前提として擧ぐ。

(b) 如來の根本義重說の理由。

【六】 修多羅。梵語（Sûtra）綖又は契經等と譯す。三藏中の經なり。

(い) 佛在世の機類。

【七】 圓音。佛陀說法の言葉。

(ろ) 佛滅後の機類。

(ろ1) 自力で廣く經法を聞きて如來の根本義を解すもの。

(ろ2) 少しく經法を聞きて多義を解する者。

(ろ3) 經文の義を解する能はざる爲大部の論文に依りて佛敎の實義を解する者。

大乘起信論

馬鳴菩薩造る。

梁西印度三藏法師眞諦譯す。

（歸敬序）

盡十方の最勝業の徧知、色無礙自在、救世の大悲者と、及び彼身の體相の法性眞如海、無量の功德藏と如實修行等とに歸命し奉る。衆生をして疑を除き、邪執を捨て、大乘の正信を起して、佛種をして、斷たざらしめんと欲する爲の故なり。

（因緣分）

論じて曰はく、法[一]あり、能く摩訶衍[二]の信根を起す。是の故に應に說くべし。

說くに五分あり、何をか五となす。一には因緣分、二には立義分、三には解釋分、四には修行信心分、五には勸修利益分なり。

初めに因緣分を說かん。

(a)問うて曰はく、何の因緣ありて此の論を造るや。

答へて曰はく、是の因緣に八種あり。

何をか八となす。

(1)一には因緣總相なり、所謂衆生[三]をして、一切の苦を離れ究竟の樂を得しめん爲にして、世間の

註に關する凡例

（　）の符號ある者は文意を註す。何等の符號なき者は字句の解釋。

【一】法。有ゆる事象の要素をいふ。

【二】摩訶衍。梵語（Mahāyāna）大乘の義、此論にては之れを小乘に對する大乘とはせず直ちに根本法の名とす。

(a) 造論の八種因緣。

(1) 總括的に造論の理由を述ぶ。

【三】衆生。有情ともいひ、非情に對す。

- (b₁)人我見
  - (1)如來を虚空と謂ふ見
  - (2)眞如是れ空と執する見
  - (3)性德妄染に同じと執する見
  - (4)自性に染ありと執する見
  - (5)有始有終を執する見
- (b₂)法我見
- (c)分別發趣道相(乘の義を釋す)
  - (c₁)信成就發心
    - (1)何等の人に依る
    - (2)何等の行を修す
    - (3)何等の心を起す
    - (4)垢染對治の方便
      - (い)行根本方便
      - (ろ)能止の方便
      - (は)發起善根增長方便
      - (に)大願平等方便
    - (5)發心の利益
  - (c₂)解行發心
  - (c₃)證發心

四、修行信心

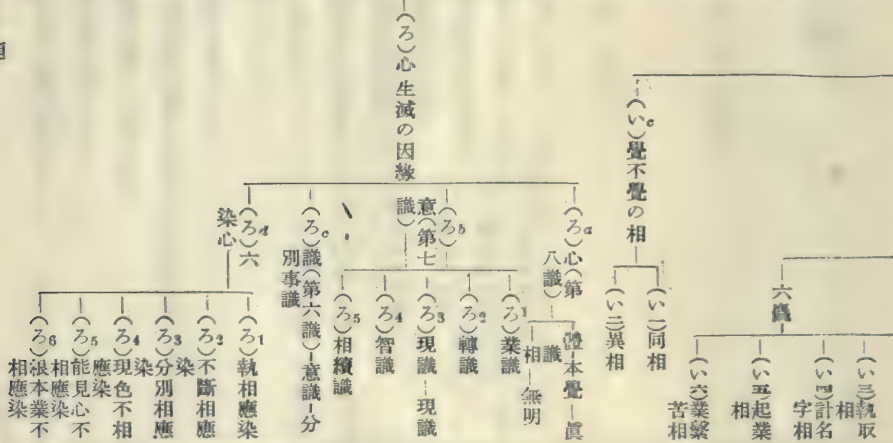
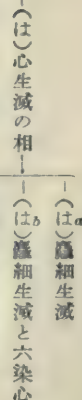
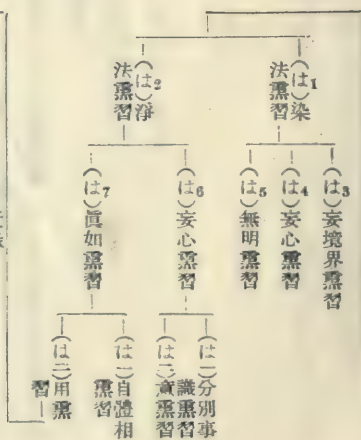
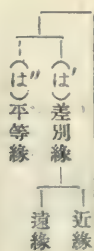
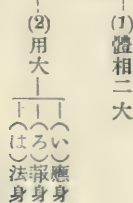
- (a)信心
  - (1)根本を信す
  - (2)佛を信す
  - (3)法を信す
  - (4)僧を信す
- (b)修行
  - (1)施門
  - (2)戒門
  - (3)忍門
  - (4)進門
  - (5)止觀門
    - (い)止觀の修行の遣方
    - (ろ)修三昧の妨礙に處する法
    - (は)修三昧利益
    - (に)止觀並修
  - (6)初學衆生の修法

五、勸修利益分

- (a)信受德益
- (b)不信受報
- (c)過現未菩薩の修學
- (d)流通分

昭和七年三月十日

譯者　望月信亨　識

(2)生滅門
(い)c 覺不覺の相
(い一)同相
(い二)異相
六麤
(い三)執取相
(い四)計名字相
(い五)起業相
(い六)業繫苦相
(ろ)心生滅の因緣
(ろ)a 心(第八識)
體-本覺-眞識
相-無明
(ろ)b 意(第七識)
(ろ)1 業識
(ろ)2 轉識
(ろ)3 現識-現識
(ろ)4 智識
(ろ)5 相續識
(ろ)c 識(第六識)-意識-分別事識
(ろ)d 六染心
(ろ)1 執相應染
(ろ)2 不斷相應染
(ろ)3 分別相應染
(ろ)4 現色不相應染
(ろ)5 能見心不相應染
(ろ)6 根本業不相應染
(は)心生滅の相
(は)a 麤細生滅
(は)b 麤細生滅と六染心
(は)c 四種法熏習
(は)1 染法熏習
(は)3 妄境界熏習
(は)4 妄心熏習
(は)5 無明熏習
(は)2 淨法熏習
(は)6 妄心熏習
(は一)分別事識熏習
(は二)意熏習
(は)7 眞如熏習
(は一)自體相熏習
(は二)用熏習
(は)' 差別緣
近緣
遠緣
(は)'' 平等緣
(n2)三大(大の義を釋す)
(1)體相二大
(2)用大
(い)應身
(ろ)報身
(は)法身
(n3)現象生滅卽眞如實在の理を明す
(b)對治邪執

で、立義、解釋の二分が正しく之れに當り、起信の二字は能信の實踐的教條を示したもので、修行信心分が即ちそれに當るのである。されば此の論は大體に於て理論實踐の二方面を兼ね、解行雙べ運ぶべきことを説いたもので、組織としては先づ殆んど間然する所がないと言つて宜いのである。今其の綱格を表示すれば次の如くである。

一、因緣分

(a)造論の八種因緣 ─(い)佛在世の機類
(b)如來の根本義重説の理由 ─(ろ)佛滅後の機類
　(ろ1)自力で廣く經法を聞きて如來の根本義を解する者
　(ろ2)少しく經法を聞きて多義を解する者
　(ろ3)經に依らず論に依る者
　(ろ4)簡明なる論書に依る者

二、立義分

(a)摩訶衍なる根本法に法義二種あり
(a1)摩訶衍の法を顯示す
　(1)法の心眞如の相は即ち摩訶衍の體を示す
　(2)法の心生滅因緣の相能く摩訶衍の相用を示す
(a2)摩訶衍の義を顯示す
　(1)體大の義
　(2)相大の義
　(3)用大の義
(b)乘の義を顯示す。

三、解釋分

大乘起信論解題

此の大乘起信論一卷は、其の馬鳴菩薩作に就いては佛教學者の間に種々論議のある所であるが、其の作者の何人であるにせよ、之れが或る大論師の苦辛の力作になつたものである事は、萬首萬肯とも言ふべきである。由來佛教は其の極致の所在知り難く、殊に佛陀隨自の說法なる大乘經論の多くは過繁失簡にして瑜中帶瑕の憾みなき者は未だ嘗てなしと言ふも過言でないが、獨り起信論のみあつて繁簡適中し、能く全面に及び、一代佛教を貫通す。故に古今の碩學皆此の論を賞し、又此の論に註する者多數に上り、支那已來百七十餘家、其の卷數無慮一千卷餘と言ふ盛觀である。

扨て此の起信一論の組織結構を略述するに卽ち五篇に分たれてある。卽ち第一篇因緣分、第二篇立義分、第三篇解釋分、第四篇修行信心分、第五篇勸修利益分である。この中因緣分は、此の論を作つた理由を述べたもので、卽ち造論の緣起である。

立義分は、此の論の大綱要領を提示したもので、解釋分は卽ちそれを委しく說き明かしたのである。修行信心分は、立義、解釋の二分で說き顯した理論的教義を信仰し、修行してゆく方法を述べたもので、卽ち實踐的教條である。勸修利益分は其の教義を修學すれば、大なる利益を獲られることを說いて、以て此の論の受持を勸めたのである。斯樣に此論の組織は五篇に分たれてあるが、就中、第一の因緣分は、經でいへば序品に當り、第二已下、第四までの三分は正說の本文、第五の勸修利益分は囑累品に當ると見るべきものである。隨つて序正流通の三段の中では、第一篇が序分、中間の三篇が正宗分、最後の一篇が卽ち流通分に當つてゐる。

五篇の中、旣に第一篇は序分、第五篇は流通分であるとすれば、中間の立義、解釋、及び修行信心の三篇が、卽ち此の論の正宗を述べたものであることは明かである。處が此の三篇の中で、立義、解釋の二篇は、起信一論の綱格たる一心二門三大の說を述べたので、卽ち理論的教義であり、修行信心の一篇は、四信五行の法を說いたもので、卽ち實踐的教條であるから、此の論は、先づ最初に哲學的に理論を組織し、而して後宗教的に實踐の方法を說いたものと見ることが出來る。それが亦此の論の標題にも顯されてある。卽ち大乘起信の四字の中、大乘の二字は、所信の理論的教義を擧げたもの

◇　◇

目次

（本丁）（通頁）

論集部 五

望月信亨
大野法道
平等通昭 譯

國譯一切經

大東出版社藏版